

特別史跡岩橋千塚古墳群
発掘調査・保存整備事業報告書3

－大日山35号墳・前山A13号墳・前山A58号墳発掘調査報告書－

2015年3月

和歌山県教育委員会



1. 大日山 35号墳 填丘整備状況（南東から）



2. 大日山 35号墳東造出 復元埴輪設置状況（北西から）



前山 A13 号墳 前庭部排水溝 蓋石検出状況（西から）



1. 前山 A58 号墳 前方部頂の埴輪列（西から）



2. 前山 A58 号墳 クビレ部における大甕検出状況（南東から）



前山 A58 号填 填輪集合写真

序 文

和歌山県は古墳時代に渡来人によってもたらされた先進技術が華開いた地域の一つです。なかでも、和歌山県北部の紀ノ川河口周辺には、そのことを示す遺跡が多数存在しています。それらの遺跡のうちでも代表的な存在といえるのが岩橋千塚古墳群です。和歌山市東部の岩橋山塊に5世紀初頭前後から7世紀に至るまで、800余基の古墳が連綿と築かれました。この古墳群は、古代氏族である紀氏の奥津城だといわれています。

岩橋千塚古墳群は、明治時代には海外にまで広くその名を知られ、大正7年には「第一期調査」として27基の古墳が調査されています。昭和6年に史蹟に指定され、昭和27年には国の特別史跡に指定されました。古墳群として特別史跡に指定されているのは、岩橋千塚古墳群と宮崎県西都原古墳群の2例しかありません。

昭和46年には特別史跡岩橋千塚古墳群の保存・管理と公開・活用を目的として和歌山県立紀伊風土記の丘が開園しました。その後、開園以来30余年が経過し、古墳の経年劣化による破損等も進行していたため、平成15年度から「紀ノ川縁の歴史回廊事業」の一環として整備事業を開始しました。本年はその第1期となる整備事業の最終年度となります。史跡の保護には保存・活用・整備という3つの柱があり、この柱は整備事業を進めていく上の根幹となります。それら相互の緊密な関係を保つことが重要であり、常にそのことを肝に銘じ事業を推進してまいりました。

本報告書は、平成15年、平成18年、平成20年～26年度の成果をまとめたもので、岩橋千塚古墳群のより一層の保存と活用を図るための指針となるものと考えております。最後に、この調査と整備を経て報告書をまとめるにあたり、関係者の方々に御支援と御協力を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

平成27年3月31日

和歌山県教育委員会
教育長 西下博通

例　　言

- 1 本書は和歌山県教育委員会が実施した和歌山市に所在する特別史跡岩橋千塚古墳群の整備報告書である。
- 2 事業期間は平成 15～26 年度である。整備報告書は分冊にして刊行しており、本書は 3 分冊目にあたる。平成 15～20 年度までの整備事業については、『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 1』（平成 22 年 3 月）、大日山 35 号墳の墳丘部分の発掘調査成果については『大日山 35 号墳発掘調査報告書－特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 2－』（平成 25 年 3 月）としてすでに刊行している。
- 3 当報告書はそのうち大日山 35 号墳の石室部分・前山 A 13 号墳・前山 A 58 号墳の発掘調査及び平成 21～26 年度に実施した整備事業について報告する。
- 4 事業は次の体制で行った。

大日山 35 号墳（石室）

調査主体 和歌山県教育委員会

調査担当 平成 15 年度（発掘調査）財団法人和歌山県文化財センター

技師 藤井幸司

平成 25・26 年度（整理作業）和歌山県立紀伊風土記の丘

学芸員 瀬谷今日子

前山 A 13 号墳

調査主体 和歌山県教育委員会

調査担当 平成 18 年度（発掘調査）財団法人和歌山県文化財センター

文化財専門員 富加見泰彦

平成 20 年度（発掘調査）財団法人和歌山県文化財センター

技師 岩井顕彦

平成 26 年度（整理作業）和歌山県立紀伊風土記の丘

学芸員 仲辻慧大

前山 A 58 号墳

調査主体 和歌山県教育委員会

調査担当 平成 21 年度（発掘調査）財団法人和歌山県文化財センター

技師 岩井顕彦

平成 22 年度（発掘調査）和歌山県立紀伊風土記の丘

学芸員 萩野谷正宏・仲原知之

平成 25・26 年度（整理作業）和歌山県立紀伊風土記の丘

学芸員 瀬谷今日子

整備事業 平成 21～26 年度 和歌山県立紀伊風土記の丘

- 5 本書の執筆分担は下記のとおりであるが、遺構の報告については調査担当者による実績報告を元に加筆・修正して作成した。
- (第Ⅰ部) 第2章 富加見泰彦
(第Ⅰ部) 第5章第1・2・4節、第6章、(第Ⅱ部) 第4章 仲原知之
(第Ⅰ部) 第1章、第3章、第5章第3節、
(第Ⅱ部) 第1章、第3章、第5章 潤谷今日子
(第Ⅰ部) 第3章第4節(3)、第5章第3節(5)、
(第Ⅱ部) 第2章 仲辻慧大
(第Ⅰ部) 第4章 富加見泰彦・仲辻慧大
- 6 調査・整備・報告書刊行にあたり下記の方々と機関からご指導・ご協力を賜った。
- 文化庁、公益財団法人和歌山県文化財センター、公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所、和歌山県工業技術センター、和歌山市教育委員会、奈良大学文学部、有限会社遺物材料研究所
伊藤幸司、魚島純一、内山敏行、小栗明彦、片山健太郎、河内一浩、坂下勝則、清水邦彦、田中由理、塚本敏夫、辻川哲朗、富永里菜、初村武寛、長谷川愛、花坂寿章、藤田浩明、藤敷勝則、松田度、御園生誠子、和田一之輔、養科哲男
- 7 鉄製品の一部は公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所に委託してX線撮影及び保存処理を行った。また、保存処理が未実施の鉄製品のX線撮影は和歌山県工業技術センターの協力を得て実施した。
- 8 本書の編集は潤谷及び仲辻が行った。
- 9 調査・整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料及び出土遺物は県立紀伊風土記の丘が保管している。

凡例

- 1 本報告は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）にもとづき、図示した北方位は断りのないかぎり座標北を示す。
- 2 基準高は、東京湾標準潮位（T.P.）を使用した。
- 3 土器及び調査時の土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』にもとづく。

調査組織

和歌山県教育委員会（平成 21～26 年度）

教育長 山口裕市（平成 21・22 年度） 西下博通（平成 23～26 年度）

生涯学習局長 井上誠（平成 21～23 年度） 喜多英夫（平成 24・25 年度） 楠義隆（平成 26 年度）

文化遺産課（平成 21～26 年度）

文化遺産課長 津井宏之（平成 21～23 年度） 川端真理（平成 24～26 年度）

副課長 吉田政弘（平成 21 年度） 濱口洋（平成 22・23 年度）

松本幸久（平成 24～26 年度）

調査班長 渡谷高秀（平成 21・22 年度） 黒石哲夫（平成 23～26 年度／22 年度主任）

主査 佐々木宏治（平成 22～26） 藤井幸司（平成 24 年度／21～23 年度副主査）

萩野谷正宏（平成 25・26 年度／21 年度副主査）

副主査 高橋智也（平成 21～23 年度） 瀬谷今日子（平成 23・24 年度／21・22 年度技師）

田中元浩（平成 26 年度／24・25 年度技師）

技師 津村かおり（平成 21 年度） 上地舞（平成 25・26 年度）

紀伊風土記の丘（平成 21～26 年度）

館長 高瀬要一（平成 21・22 年度） 水田義一（平成 23～26 年度）

副館長 達本勝（平成 21～23 年度） 中野一三（平成 24 年度／22・23 年度教育企画員（22～24 年度総務課長事務取扱）／21 年度総務課長） 市川浩之（平成 26 年度）

総務課長 大藤久信（平成 24 年度） 井上暉宏（平成 25 年度） 山本康博（平成 26 年度）

主査 井上佳典（平成 21 年度） 大藤久信（平成 24 年度）

副主査 額田誠規（平成 24～26 年度） 志水敦（平成 23～26 年度／22 年度主事）

小畠有利子（平成 26 年度）

主幹 山本高照（平成 22 年度（学芸課長事務取扱）／21 年度学芸課長）

富加見泰彦（平成 23・24 年度学芸課長事務取扱／平成 25・26 年度副主査）

非常勤嘱託 小橋祐子（平成 24～26 年度）

学芸課長 寺本就一（平成 25・26 年度）

学芸員 丹野拓（平成 21 年度） 萩野谷正宏（平成 22～24 年度） 仲原知之（平成 22

～26 年度／21 年度副主査） 藤森寛志（平成 23～26 年度） 瀬谷今日子（平成 25・26 年度） 仲辻慧大（平成 25・26 年度）

本文目次

巻頭カラー写真

第Ⅰ部 発掘調査編

第1章 整備事業の経緯と経過

第1節 整備事業の経緯	1
第2節 整備委員会	2
第3節 整備事業の経過	5
第2章 地理的・歴史的環境	11
第3章 大日山35号墳の発掘調査（石室編）	
第1節 調査に至る経緯と既往の調査	19
第2節 発掘調査・整理作業の経過	20
第3節 調査成果	20
第4節 出土遺物	29
第5節 まとめ	47

第4章 前山A13号墳の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と既往の調査	59
第2節 調査成果	60
第3節 出土遺物	67
第4節 まとめ	69

第5章 前山A58号墳の発掘調査

第1節 発掘調査と整理作業の経過	71
第2節 発掘調査の成果	71
第3節 出土遺物	87
第4節 まとめ	127

第6章 保存整備事業に伴う石室実測

143

第Ⅱ部 保存整備編

第1章 説明板・案内標識の設置

173

第2章 石室保存・公開施設の設置

181

188

第3章 古墳保存修景工事（石室・盗掘坑の埋戻しと墳丘盛土）

192

第4章 大日山35号墳の整備

195

215

223

234

第5章 総括（平成21～26年度整備事業の成果と今後の課題）

235

写真図版

挿図・挿入写真目次

図 1	特別史跡岩橋千塚古墳群の位置	1
図 2	特別史跡岩橋千塚古墳群における古墳分布（S = 1 / 5,000）	3
図 3	発掘調査対象古墳の位置（S = 1 / 6,000）	7
図 4	平成 21・22 年度事業 全体平面図（S = 1 / 10,000）	8
図 5	平成 23・24 年度事業 全体平面図（S = 1 / 10,000）	9
図 6	平成 25・26 年度事業 全体平面図（S = 1 / 10,000）	10
図 7	岩橋千塚古墳群周辺の遺跡分布（S = 1 / 80,000）	13
図 8	花山地区における古墳の分布	15
図 9	井辺前山地区における古墳の分布	16
図 10	岩橋型横穴式石室の模式図	17
図 11	大日山 35 号墳採集の雲珠	19
図 12	大日山 35 号墳の墳丘測量図と横穴式石室の位置（S = 1 / 800）	21
図 13	大日山 35 号墳 石室の地区区分と名称（S = 1 / 60）	22
図 14	大日山 35 号墳 横穴式石室実測図（S = 1 / 40）	23
図 15	大日山 35 号墳 横穴式石室 南側壁実測図（S = 1 / 40）	25
図 16	大日山 35 号墳 横穴式石室 天井石実測図（S = 1 / 40）	26
図 17	大日山 35 号墳 床面堆積土及び排水溝土層断面図（S = 1 / 20、1 / 40）	27
図 18	渓道部東西セクション土層断面図（S = 1 / 20）	28
図 19	大日山 35 号墳出土 装身具 1（S = 1 / 1）	29
図 20	大日山 35 号墳出土 装身具 2（S = 1 / 1）	30
図 21	大日山 35 号墳出土 鉄刀（S = 1 / 2）	31
図 22	大日山 35 号墳出土 鉄鏃 1（S = 1 / 2）	33
図 23	大日山 35 号墳出土 鉄鏃 2・両頭金具（S = 1 / 2）	34
図 24	大日山 35 号墳出土 胡錐金具（S = 1 / 2）	35
図 25	大日山 35 号墳出土 馬具 1（S = 1 / 2）	37
図 26	大日山 35 号墳出土 馬具 2（S = 1 / 2）	38
図 27	大日山 35 号墳出土 馬具 3（S = 1 / 2）	39
図 28	大日山 35 号墳出土 小札 1（S = 1 / 2）	41
図 29	大日山 35 号墳出土 小札 2（S = 1 / 2）	42
図 30	大日山 35 号墳出土 小札 3（S = 1 / 2）	43
図 31	大日山 35 号墳出土 刀子・U字形鋸先・不明鉄製品（S = 1 / 2）	44
図 32	大日山 35 号墳出土 鋼板・不明木製品（S = 1 / 2）	44
図 33	大日山 35 号墳出土 須恵器 1（S = 1 / 4）	45
図 34	大日山 35 号墳出土 須恵器 2（S = 1 / 4）	46
図 35	第一期調査における前山 A 13 号墳の遺構図版（和歌山県 1921 より転載）	59
図 36	前山 A 13 号墳の測量図及び調査区配置（S = 1 / 200）	61
図 37	前山 A 13 号墳 横穴式石室実測図（S = 1 / 40）	63

図 38	前山 A 13 号墳 前庭部調査区平面図・土層断面図 (S = 1 / 40)	64
図 39	前山 A 13 号墳 墳丘外調査区平面図・土層断面図 (S = 1 / 60)	66
図 40	前山 A 13 号墳出土 装身具 (S = 1 / 1)	67
図 41	前山 A 13 号墳出土 須恵器 (S = 1 / 4)	68
図 42	前山 A 13 号墳 排水溝模式図 (S = 1 / 125)	69
図 43	前山 A 58 号墳 測量図 (S = 1 / 200)	72
図 44	前山 A 58 号墳 トレンチ配置と調査グリッド (S = 1 / 200)	73
図 45	前山 A 58 号墳 横穴式石室実測図 (S = 1 / 40)	75
図 46	前山 A 58 号墳 1 トレンチ 平面図及び西壁土層断面図 (S = 1 / 40)	78
図 47	前山 A 58 号墳 2 トレンチ 平面図及び南壁土層断面図 (S = 1 / 40)	79
図 48	前山 A 58 号墳 4・6・7・10・11・3・9 トレンチ 平面図 (S = 1 / 40)	81
図 49	前山 A 58 号墳 4・6・7・10・11・3・9 トレンチ 土層断面図 (S = 1 / 40)	83
図 50	前山 A 58 号墳 樹立埴輪立面・断面図 (S = 1 / 30)	85
図 51	前山 A 58 号墳 樹立埴輪立面図及び須恵器平面・立面図 (S = 1 / 30、1 / 40) ..	86
図 52	前山 A 58 号墳出土 装身具 (S = 1 / 1)	88
図 53	前山 A 58 号墳出土 馬具 (S = 1 / 2)	89
図 54	前山 A 58 号墳出土 鉄刀・鉄鎌 (S = 1 / 2)	90
図 55	前山 A 58 号墳出土 刀子・その他の鉄製品 (S = 1 / 2)	91
図 56	前山 A 58 号墳出土 砥石 (S = 1 / 2)	92
図 57	前山 A 58 号墳出土 馬形埴輪 1 (S = 1 / 6)	93
図 58	前山 A 58 号墳出土 馬形埴輪 2 (S = 1 / 6)	94
図 59	前山 A 58 号墳出土 馬形埴輪 3 (S = 1 / 6)	95
図 60	前山 A 58 号墳出土 馬形埴輪 4 (S = 1 / 6)・部品 (S = 1 / 4)	96
図 61	前山 A 58 号墳出土 人物埴輪 (S = 1 / 4)	98
図 62	前山 A 58 号墳出土 人物埴輪 部品 (S = 1 / 4)	100
図 63	前山 A 58 号墳出土 人物埴輪 部品・底部 (S = 1 / 4)	101
図 64	石見型埴輪 部位名称	102
図 65	前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪 1 (S = 1 / 4)	103
図 66	前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪 2 (S = 1 / 4)	105
図 67	前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪 3 (S = 1 / 4)	107
図 68	前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪 4 (S = 1 / 4)	108
図 69	前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪 5 (S = 1 / 4)	109
図 70	前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪 6 (S = 1 / 4)	111
図 71	前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪 7 (S = 1 / 4)	112
図 72	前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪 8 (S = 1 / 4)	113
図 73	前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪 9 (S = 1 / 4)	115
図 74	前山 A 58 号墳出土 器種不明形象埴輪 (S = 1 / 4)	116
図 75	前山 A 58 号墳出土 断続ナデ技法の突帯をもつ円筒埴輪 (S = 1 / 4)	118
図 76	前山 A 58 号墳出土 円筒埴輪 底部 (S = 1 / 4)	119
図 77	前山 A 58 号墳出土 円筒埴輪 胴部 (S = 1 / 4)	120

図 78	前山 A 58 号墳出土 円筒埴輪 口縁部 (S = 1 / 4)	121
図 79	前山 A 58 号墳出土 朝顔形埴輪 (S = 1 / 4)	122
図 80	前山 A 58 号墳出土 土器類 1 (S = 1 / 4)	124
図 81	前山 A 58 号墳出土 土器類 2 (S = 1 / 4)	126
図 82	前山 A 58 号墳 墳丘復元図 (S = 1 / 200)	127
図 83	石室実測対象古墳の位置	144
図 84	前山 B 72 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	145
図 85	前山 B 120 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	146
図 86	前山 B 125 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	147
図 87	前山 B 136 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	148
図 88	前山 B 241 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	149
図 89	前山 B 240 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	150
図 90	前山 B 175 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	151
図 91	前山 B 174 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	152
図 92	前山 B 176 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	153
図 93	前山 B 172 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	154
図 94	前山 B 170 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	155
図 95	前山 B X 16 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	156
図 96	前山 B 167 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	157
図 97	前山 B 204 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	158
図 98	前山 B 164 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	159
図 99	前山 B X 100 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	160
図 100	前山 B X 101 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	161
図 101	前山 B 160 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	162
図 102	前山 B 201 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	163
図 103	前山 B X 9 号墳盗掘坑 (S = 1 / 40)	164
図 104	前山 B 200 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	165
図 105	前山 B X 10 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	166
図 106	大日山 12 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	167
図 107	大日山 14 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	168
図 108	大日山 15 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	169
図 109	大日山 17 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)	170
図 110	説明版・案内板の設置位置	174
図 111	説明版・案内標識の仕様	177
図 112	陶板の仕様及び見本	178
図 113	案内標識の例	179
図 114	説明板の例 (大日山地区)	180
図 115	前山 A 46 号墳 照明施設設置工事平面図	182
図 116	前山 A 46 号墳 照明施設設置工事縦断図	183
図 117	前山 A 46 号墳 照明工事 電気設備詳細図	184

図 118	将军塚古墳 照明工事平面図	185
図 119	将军塚古墳 照明工事縦断図	186
図 120	将军塚古墳 照明工事電気設備詳細図	187
図 121	前山 A 13 号墳 照明工事平面図	189
図 122	前山 A 13 号墳 照明工事縦断図	190
図 123	前山 A 13 号墳 照明工事 設備詳細図	191
図 124	保存修景対象古墳の位置	194
図 125	伐採木の位置	197
図 126	整備工事平面図	199
図 127	整備工事断面図 1	201
図 128	整備工事断面図 2	203
図 129	整備工事断面図 3	205
図 130	整備工事断面図 4	207
図 131	整備工事断面図 5	209
図 132	整備工事断面図 6	211
図 133	模擬階段・根切板詳細図	213
図 134	1 トレンチ 基壇テラス円筒埴輪・馬形埴輪出土状況 ($S = 1 / 40$)	218
図 135	大日山 35 号墳 東造出 墓輪配列図	219
図 136	大日山 35 号墳 東造出 復元埴輪配置図	220
図 137	大日山 35 号墳 東造出 復元埴輪設置基礎配置図	221
図 138	埴輪レプリカ基礎の仕様	222
図 139	馬形埴輪部材 ($S = 1 / 4$)	223
図 140	家形埴輪レプリカ設計図	225
図 141	翼を広げた鳥形埴輪レプリカ 1 設計図	226
図 142	翼を広げた鳥形埴輪レプリカ 2 設計図	227
図 143	馬形埴輪レプリカ設計図	228
図 144	犬形埴輪レプリカ設計図	229
図 145	力士埴輪レプリカ設計図	230
図 146	蓋形埴輪レプリカ 1 設計図	231
図 147	円筒・朝顔形埴輪レプリカ設計図	232
図 148	須恵器台レプリカ設計図	233
写真 1	整備委員会の様子	2
写真 2	大日山 35 号墳採集の鉄斧	19
写真 3	N E 8 区出土 齒	47
写真 4	地区説明版の設置状況	180

表目次

表 1	大日山 35 号墳石室出土装身具観察表	49
-----	---------------------	----

表 2	大日山 35 号墳石室出土鉄製品観察表	51
表 3	大日山 35 号墳石室出土須恵器観察表	58
表 4	前山 A 13 号墳出土装身具観察表	70
表 5	前山 A 13 号墳出土須恵器観察表	70
表 6	前山 A 58 号墳出土装身具観察表	129
表 7	前山 A 58 号墳出土鉄製品観察表	130
表 8	前山 A 58 号墳出土埴輪観察表	132
表 9	前山 A 58 号墳出土土器類観察表	142
表 10	説明版・案内標識一覧	175
表 11	各年度における修景工事対象古墳一覧	193
表 12	大日山 35 号墳整備工事一覧	196

卷頭写真

- 卷頭写真 1 1 大日山 35 号墳 墳丘整備状況（南東から）
 2 大日山 35 号墳東造出 復元埴輪設置状況（北西から）
- 卷頭写真 2 前山 A 13 号墳 前庭部排水溝 蓋石検出状況（西から）
- 卷頭写真 3 1 前山 A 58 号墳 前方部頂の埴輪列（西から）
 2 前山 A 58 号墳 タビレ部における大甕検出状況（南東から）
- 卷頭写真 4 前山 A 58 号墳 出土埴輪集合写真

図版目次

- 写真図版 1 1 大日山 35 号墳 石室入口付近（北西から）
 2 大日山 35 号墳 玄室調査前（玄門側から）
- 写真図版 2 1 玄室 石棚と奥壁（玄門側から）
 2 玄室 奥壁上部（玄門側から）
 3 玄室 天井石（奥壁側から）
 4 玄室 北側壁（玄門側から）
 5 玄室 南側壁（玄門側から）
- 写真図版 3 1 玄室 玄門部（奥壁側から）
 2 玄室 前壁（奥壁側から）
 3 玄室 天井石（前壁側から）
 4 玄室 袖部南側（北側壁側から）
 5 玄室 袖部北側（南側壁側から）
- 写真図版 4 1 玄室 石棚上部（玄門側から）
 2 玄室 石梁（奥壁側から）
 3 玄室 南西隅下半（奥壁側から）
 4 玄室 北東隅下半（玄門側から）
 5 玄室 北東隅上半（玄門側から）

- 写真図版 5 1 玉石除去後 奥壁側床面（玄門側から）
2 玉石除去後 南側壁床面（奥壁側から）
3 玉石除去後 北側壁床面（奥壁側から）
- 写真図版 6 1 玄室 西セクション土層（東から）
2 玄室 東セクション土層（西から）
3 玄室 東セクション西側排水溝検出状況（西から）
4 玄室 排水溝検出状況（奥壁から）
5 玄室 排水溝・蓋石検出状況（玄門側から）
6 玄室 排水溝検出状況（玄門側から）
7 玄室 排水溝検出状況（北西隅から）
8 玄室 排水溝先端検出状況（東から）
- 写真図版 7 1 玄室 排水溝セクション①（西から）
2 玄室 排水溝セクション②（北から）
3 玄室 排水溝セクション③（南から）
4 玄室 排水溝セクション④（東から）
5 玄室 排水溝・蓋石除去状況（東から）
6 玄室 玄門基石下排水溝状況（東から）
7 玄室 西セクション南半（東から）
8 玄室 西セクション北半（東から）
- 写真図版 8 1. 玄室 排水溝完掘状況（奥壁側から）
2. 玄室 排水溝完掘状況（玄門側から）
- 写真図版 9 1. 漢道部 堀削前（奥壁側から）
2. 漢道部 第2・3層遺物出土状況（東から）
3. 漢道部 第2・3層遺物出土状況（西から）
4. 漢道部 第2・3層遺物出土状況（東から）
5. 漢道部 東西セクション1～3層（北東から）
6. 漢道部 東西セクション1～3層③地区（北から）
7. 漢道部 東西セクション1～3層④地区（北から）
8. 漢道部 東西セクション1・2層⑤地区（北から）
- 写真図版 10 1. 漢道部 東西セクション遠景（東から）
2. 漢道部 東西セクション4層以下②・③地区（北東から）
3. 漢道部 東西セクション4層以下④・⑤地区（北東から）
4. 漢道部 東西セクション4層以下③～⑤地区（北東から）
5. 漢道部 排水溝蓋石検出状況（西から）
6. 漢道部 排水溝蓋石除去状況（西から）
7. 漢道部 南北セクション排水溝完掘（西から）
8. 漢道部 南北セクション排水溝完掘近景（西から）
- 写真図版 11 1. 玄門～漢道部南側壁（玄室から）
2. 玄門～漢道部北側壁（玄室から）
- 写真図版 12 大日山35号墳 石室出土装身具

- 写真図版 13 1. 大日山 35 号墳 石室出土鉄刀
2. 大日山 35 号墳 石室出土鉄鏃 1
- 写真図版 14 1. 大日山 35 号墳 石室出土鉄鏃 2
2. 大日山 35 号墳 石室出土胡鑑
- 写真図版 15 大日山 35 号墳 石室出土馬具 1
- 写真図版 16 大日山 35 号墳 石室出土馬具 2
- 写真図版 17 大日山 35 号墳 石室出土馬具 3
- 写真図版 18 1. 大日山 35 号墳 石室出土小札 1
2. 大日山 35 号墳 石室出土小札 2
- 写真図版 19 1. 大日山 35 号墳 石室出土小札 3
2. 大日山 35 号墳 石室出土 鉄製品 その他
- 写真図版 20 大日山 35 号墳 石室出土須恵器 1
- 写真図版 21 大日山 35 号墳 石室出土須恵器 2
- 写真図版 22 大日山 35 号墳 石室出土須恵器 3
- 写真図版 23 1. 前山 A 13 号墳 調査前 墳丘（南から）
2. 前山 A 13 号墳 調査前 石室前面（西から）
- 写真図版 24 1. 前山 A 13 号墳 調査前 渡道部（西から）
2. 前山 A 13 号墳 調査前 玄室（西から）
- 写真図版 25 1. 玄室奥壁（玄門側から）
2. 玄門部・前壁（奥壁側から）
3. 玄室右側壁（玄門側から）
4. 玄室左側壁（玄門側から）
- 写真図版 26 1. 玄室前道及び渡道部（玄室側から）
2. 玄室前道（渡道部側から）
3. 玄門立石下部（北側）
4. 玄門立石下部（南側）
5. 渡道部 扇石と仕切石（前庭部側から）
6. 転倒した扇石検出状況
- 写真図版 27 1. 前山 A 13 号墳 玄室内排水溝 検出状況（玄門側から）
2. 前山 A 13 号墳 玄室内排水溝 掘削写真（玄門側から）
- 写真図版 28 1. 玄室内排水溝（奥壁側）
2. 玄室内排水溝（奥壁側）細部
3. 玄室内排水溝（玄門側）
4. 玄室内排水溝（玄門側）細部
5. 渡道部仕切石の下を通る排水溝（西から）
6. 渡道部仕切石の下を通る排水溝細部
7. 前庭部排水溝上面検出途中（石室側から）
- 写真図版 29 1. 前庭部排水溝 検出状況（東から）
2. 前庭部排水溝 蓋石検出状況（西から）
3. 前庭部排水溝 蓋石検出状況（東から）

4. 前庭部排水溝 玉石充填状況（東から）
- 写真図版 30 1. 前庭部調査区 北壁土層断面（南から）
2. 前庭部調査区 西端部土層断面（東から）
3. 前庭部調査区 中央部土層断面（西から）
- 写真図版 31 1. 墳丘外調査区 排水溝上面検出状況（東から）
2. 墳丘外調査区 排水溝上面検出状況（南から）
3. 墳丘外調査区 排水溝上面検出状況（西から）
4. 墳丘外調査区 排水溝上面検出状況（上から）
- 写真図版 32 1. 前山A 13号墳 装身具（玉類）
2. 前山A 13号墳 須恵器
- 写真図版 33 1. 前山A 58号墳 墳丘 調査前（東から）
2. 前山A 58号墳 石室 調査前（西から）
- 写真図版 34 1. 玄室 奥壁及び床面（西から）
2. 玄室 玄門及び床面（東から）
- 写真図版 35 1. 玄室 南側壁及び床面（北から）
2. 玄室 北側壁及び床面（南から）
- 写真図版 36 1. 奥壁上部堆積の土層断面（西から）
2. 南側壁上部堆積の土層断面（北から）
3. 北側壁上部堆積の土層断面（南から）
4. 玄門及び上部堆積の土層（東から）
5. 玄室前道及び扉石（東から）
6. 南側壁側床面の土師器出土状況（北から）
7. 玄室前道櫛石 近影（北東から）
- 写真図版 37 1. 6トレンチ 羨道上敷石検出状況（西から）
2. 6トレンチ 羨道上埴輪検出状況（西から）
3. 6トレンチ 全景（西から）
4. 6トレンチ 玄門及び閉塞石（西から）
5. 6トレンチ 南壁土層断面（北西から）
6. 6トレンチ 羨道上堆積土層断面（北から）
- 写真図版 38 1. 1トレンチ 後円部1段目斜面・テラス 全景（北西から）
2. 1トレンチ 後円部1段目テラス及び樹立埴輪（北東から）
3. 1トレンチ 樹立埴輪（北から）
4. 1トレンチ 上半東壁土層断面（北西から）
5. 1トレンチ 2段目斜面裾部（北から）
- 写真図版 39 1. 2トレンチ 後円部1段目裾～2段目斜面（東から）
2. 2トレンチ 後円部1段目テラス（北東から）
3. 2トレンチ 1段目テラス 墳輪列（北から）
4. 2トレンチ 樹立埴輪（東から）
5. 2トレンチ 樹立埴輪（南から）
6. 2トレンチ 南壁土層断面（北から）

7. 2 トレンチ 1段目裾部の地山面（東から）
- 写真図版 40 1. 3 トレンチ 前方部裾～斜面（東から）
2. 3 トレンチ 北壁土層断面（南西から）
3. 3 トレンチ 南壁土層断面（北東から）
4. 4 トレンチ 前方部から後円部をのぞむ（南から）
5. 4 トレンチ 前方部端と隣接古墳の立ちあがり（北から）
6. 4 トレンチ 前方部前端側西壁土層断面（北東から）
- 写真図版 41 1. 3・4・7 トレンチ 前方部頂～後円部斜面（南東から）
2. 4・7 トレンチ 前方部頂（北東から）
3. 4・7 トレンチ 樹立埴輪検出状況（北から）
4. 4 トレンチ 中央西壁土層断面（東から）
- 写真図版 42 1. 4 トレンチ 東埴輪列 1 検出状況（東から）
2. 4 トレンチ 東埴輪列 1 断割り（北西から）
3. 東埴輪列 1 取り上げ後内部土層 1
4. 東埴輪列 1 取り上げ後内部土層 2
5. 4 トレンチ 東埴輪列 2 検出状況（東から）
6. 8 トレンチ 東埴輪列 2 半裁状況（西から）
7. 4 トレンチ 東埴輪列 3 検出状況（東から）
8. 4 トレンチ 東埴輪列 3 基部検出状況（西から）
- 写真図版 43 1. 4 トレンチ 東埴輪列 4 検出状況（西から）
2. 4 トレンチ 東埴輪列 4 基部検出状況（西から）
3. 4 トレンチ 東埴輪列 5 検出状況（西から）
4. 4 トレンチ 東埴輪列 5 基部検出状況（西から）
5. 7 トレンチ 中央埴輪列 1 検出状況（西から）
6. 7 トレンチ 中央埴輪列 1 半裁状況（西から）
7. 7 トレンチ 中央埴輪列 1 及び人物埴輪 検出状況（南から）
8. 7 トレンチ 人物埴輪 脇 検出状況（西から）
- 写真図版 44 1. 7 トレンチ 中央埴輪列 2 検出状況（西から）
2. 7 トレンチ 中央埴輪列 2 半裁状況（西から）
3. 7 トレンチ 西埴輪列 1 検出状況（北から）
4. 7 トレンチ 西埴輪列 1 基部検出状況（北から）
5. 4・7 トレンチ 馬形埴輪 検出状況（北から）
6. 馬形埴輪 検出状況（東から）
7. 馬形埴輪 取り上げ前（東から）
- 写真図版 45 1. 8 トレンチ 全景 前方部西側の樹立埴輪（東から）
2. 8 トレンチ 南壁土層断面（北西から）
- 写真図版 46 1. 8 トレンチ 中央埴輪列 3 検出状況（東から）
2. 8 トレンチ 中央埴輪列 3 半裁状況（東から）
3. 8 トレンチ 西埴輪列 3 検出状況
4. 8 トレンチ 西埴輪列 3 基部確認

5. 8 トレンチ 西埴輪列 4 検出状況（東から）
6. 8 トレンチ 西埴輪列 4 断続ナデ突帯（南から）
7. 8 トレンチ 西埴輪列 5 検出状況（東から）
8. 8 トレンチ 西埴輪列 5 据方検出状況（東から）
- 写真図版 47 1. 10 トレンチ全景 前方部南東端（東から）
2. 10 トレンチ 南壁土層断面（北から）
3. 10 トレンチ 墓輪出土状況（北から）
4. 10 トレンチ 東壁土層断面（西から）
- 写真図版 48 1. 5 トレンチ 全景 前方部西側斜面（西方）
2. 5 トレンチ 西埴輪列 2 検出状況（北から）
3. 5 トレンチ 西埴輪列 2 基部検出状況（西から）
4. 11 トレンチ 後円部 1段目テラス検出状況（西から）
5. 11・5 トレンチ 墳丘西側クビレ部（西から）
6. 11 トレンチ 北壁土層断面（南から）
- 写真図版 49 1. 3 トレンチ 全景 後円部 1段目テラス及び樹立埴輪検出状況（南から）
2. 3 トレンチ 石見型埴輪出土状況 1（西から）
3. 3 トレンチ 石見型埴輪出土状況 2（北から）
4. 3 トレンチ 石見型埴輪出土状況 3（北から）
- 写真図版 50 1. 3 トレンチ 樹立埴輪 後円部⑥検出状況（東から）
2. 3 トレンチ 樹立埴輪 後円部⑥取り上げ写真（南東から）
3. 3 トレンチ 樹立埴輪 後円部⑥検出状況（南から）
4. 3 トレンチ 樹立埴輪 後円部⑥と後円部⑦取り上げ（南から）
5. 3 トレンチ 樹立埴輪 後円部⑧（南から）
6. 3 トレンチ 樹立埴輪 後円部⑧（南から）
7. 3 トレンチ 樹立埴輪 後円部⑧（西から）
- 写真図版 51 1. 9 トレンチ 墳丘東側クビレ部 須恵器甕検出状況 1（南東から）
2. 9 トレンチ 須恵器甕検出状況 2（南から）
3. 9 トレンチ 須恵器甕検出状況 3（南から）
4. 9 トレンチ 須恵器甕検出状況 4（南から）
5. 9 トレンチ 須恵器据付坑半裁（南から）
- 写真図版 52 1. 前山 A 58 号墳全景（南東から）
2. 前山 A 58 号墳全景 前方部頂の埴輪列（西から）
- 写真図版 53 1. 前山 A 58 号墳 出土装身具
2. 前山 A 58 号墳 出土馬具 韶
- 写真図版 54 1. 前山 A 58 号墳 出土馬具 韶
2. 前山 A 58 号墳 出土不明鉄製品
- 写真図版 55 前山 A 58 号墳 出土鐵鑓
- 写真図版 56 1. 前山 A 58 号墳 出土馬形埴輪 左側面
2. 前山 A 58 号墳 出土馬形埴輪 右側面
- 写真図版 57 1. 前山 A 58 号墳 出土馬形埴輪 正面

2. 前山A 58号墳 出土馬形埴輪 背面
3. 前山A 58号墳 出土馬形埴輪 f字形鏡板
- 写真図版 58 1. 前山A 58号墳 馬形埴輪 部品 杏葉
2. 前山A 58号墳 馬形埴輪 部品 各種
- 写真図版 59 前山A 58号墳 人物埴輪 1
- 写真図版 60 前山A 58号墳 人物埴輪 部品
- 写真図版 61 1. 前山A 58号墳 人物埴輪 部品
2. 前山A 58号墳 人物埴輪 部品
- 写真図版 62 1. 前山A 58号墳出土 人物埴輪部品
2. 前山A 58号墳出土 人物埴輪底部
- 写真図版 63 前山A 58号墳 出土石見型埴輪 1
- 写真図版 64 1. 前山A 58号墳 石見形埴輪 2
2. 前山A 58号墳 石見形埴輪 3
- 写真図版 65 前山A 58号墳 石見型埴輪 盾部 1
- 写真図版 66 前山A 58号墳 石見型埴輪 盾部 2
- 写真図版 67 前山A 58号墳 石見型埴輪 盾部 3
- 写真図版 68 前山A 58号墳出土 石見型埴輪(無文) 及び石見型埴輪底部
- 写真図版 69 1. 前山A 58号墳 形象埴輪 不明品
2. 前山A 58号墳 形象埴輪 底部
- 写真図版 70 前山A 58号墳 断続ナデ技法の最下段突帯をもつ円筒埴輪
- 写真図版 71 前山A 58号墳 円筒埴輪 底部
- 写真図版 72 前山A 58号墳 円筒埴輪 胴部
- 写真図版 73 前山A 58号墳 円筒埴輪 口縁部
- 写真図版 74 前山A 58号墳出土 朝顔形埴輪
- 写真図版 75 前山A 58号墳 土器 1
- 写真図版 76 前山A 58号墳 土器 2
- 写真図版 77 前山A 58号墳 土器 3
- 写真図版 78 1. 前山B 72号墳
2. 前山B 120号墳
- 写真図版 79 1. 前山B 125号墳
2. 前山B 136号墳
- 写真図版 80 1. 前山B 241号墳
2. 前山B 241号墳
- 写真図版 81 1. 前山B 240号墳
2. 前山B 240号墳
- 写真図版 82 1. 前山B 175号墳
2. 前山B 175号墳
- 写真図版 83 1. 前山B 174号墳
2. 前山B 174号墳
- 写真図版 84 1. 前山B 176号墳

2. 前山 B 176 号墳
- 写真図版 85 1. 前山 B 172 号墳
2. 前山 B 172 号墳
- 写真図版 86 1. 前山 B 170 号墳
2. 前山 B 170 号墳
- 写真図版 87 1. 前山 B X 16 号墳
2. 前山 B X 16 号墳
- 写真図版 88 1. 前山 B X 16 号墳
2. 前山 B 167 号墳
- 写真図版 89 1. 前山 B 167 号墳
2. 前山 B 167 号墳
- 写真図版 90 1. 前山 B 204 号墳
2. 前山 B 204 号墳
- 写真図版 91 1. 前山 B 164 号墳
2. 前山 B 164 号墳
- 写真図版 92 1. 前山 B X 100 号墳
2. 前山 B X 101 号墳
- 写真図版 93 1. 前山 B 160 号墳
2. 前山 B 160 号墳
- 写真図版 94 1. 前山 B 201 号墳
2. 前山 B X 9 号墳
- 写真図版 95 1. 前山 B 200 号墳
2. 前山 B X 10 号墳
- 写真図版 96 1. 大日山 12 号墳
2. 大日山 14 号墳
- 写真図版 97 1. 大日山 15 号墳
2. 大日山 17 号墳
- 写真図版 98 1. 前山 B 72 号墳 修景完了写真
2. 前山 B 125 号墳 修景完了写真
- 写真図版 99 1. 前山 B 136 号墳 修景完了写真
2. 前山 B 148 号墳 修景完了写真
- 写真図版 100 1. 前山 B 241 号墳 修景完了写真
2. 前山 B 240 号墳 修景完了写真
- 写真図版 101 1. 前山 B 175 号墳 修景完了写真
2. 前山 B 174 号墳 修景完了写真
- 写真図版 102 1. 前山 B 176 号墳 修景完了写真
2. 前山 B 172 号墳 修景完了写真
- 写真図版 103 1. 前山 B 170 号墳 修景完了写真
2. 前山 B X 16 号墳 修景完了写真
- 写真図版 104 1. 前山 B 167 号墳 修景完了写真

2. 前山B 164号墳 修景完了写真
- 写真図版 105 1. 前山BX 100号墳 修景完了写真
2. 前山BX 101号墳 修景完了写真
- 写真図版 106 1. 前山B 160号墳 修景完了写真
2. 前山BX 9号墳 修景完了写真
- 写真図版 107 1. 前山B 200号墳 修景完了写真
2. 前山BX 10号墳 修景完了写真
- 写真図版 108 1. 大日山12号墳 修景完了写真
2. 大日山15号墳 修景完了写真
- 写真図版 109 1. 前山A 17号墳 修景完了写真
2. 前山B 102号墳 修景完了写真
- 写真図版 110 1. 将軍塚古墳 墳頂部へのソーラーパネル設置状況（南東から）
2. 将軍塚古墳 照明施設スイッチ設置状況（渓道部入口から）
- 写真図版 111 1. 将軍塚古墳 石室内 照明施設設置状況（奥壁側から）
2. 将軍塚古墳 石室内 照明施設設置状況（玄門側から）
- 写真図版 112 1. 前山A 13号墳 ソーラーパネル基礎設置工事風景（南から）
2. 前山A 13号墳 ソーラーパネル設置状況（西から）
- 写真図版 113 1. 前山A 13号墳 盜掘坑埋戻し状況（南から）
2. 前山A 13号墳 遮水シート設置状況（東から）
- 写真図版 114 1. 前山A 13号墳 張芝敷設状況（南から）
2. 前山A 13号墳 照明施設・人感センサー設置状況（玄門側から）
- 写真図版 115 1. 前山A 46号墳 墳丘外 ソーラーパネル設置場所（南から）
2. 前山A 46号墳 墳丘外 ソーラーパネル設置状況（北から）
- 写真図版 116 1. 前山A 46号墳 照明施設スイッチ設置状況（南から）
2. 前山A 46号墳 照明施設設置状況（玄門側から）
- 写真図版 117 1. 古墳説明版設置状況（前山A 67号墳北側）
2. 案内標識設置状況 1
3. 案内標識設置状況 2
- 写真図版 118 1. 大日山35号墳 墳丘整備状況（南東から）
2. 大日山35号墳 墳丘整備状況（前方部上から西造出をのぞむ）
- 写真図版 119 1. 大日山35号墳 東造出 復元埴輪等設置状況 1（南東から）
2. 大日山35号墳 東造出 復元埴輪等設置状況 2（北西から）
- 写真図版 120 1. 大日山35号墳 東造出 復元埴輪等設置状況 3（南西から）
2. 大日山35号墳 東造出 復元埴輪等設置状況 4（北西から）
- 写真図版 121 1. 大日山35号墳 東造出 復元埴輪設置状況（東から）
2. 大日山35号墳 東造出 説明版設置状況（西から）
- 写真図版 122 1. 大日山35号墳 墳輪レプリカ製作イベントのようす
2. 大日山35号墳 東造出 墳輪レプリカ製作による設置式のようす（西から）

第 I 部

発掘調査編

第1章 整備事業の経緯と経過

1 整備事業の経緯

和歌山県教育委員会は、平成15年度から和歌山県立紀伊風土記の丘にある特別史跡岩橋千塚古墳群の保存整備事業に着手した。この事業は、古墳群を保存修理ならびに整備することによって、貴重な文化財を後世に伝えるとともに、その価値を広く国民が享受出来るようにすることを目的とするものである。加えて、この事業は和歌山県の「紀ノ川縁の歴史回廊推進事業」の一環として、特別史跡岩橋千塚古墳群を紀ノ川流域の文化遺産を連ねるための重要なポイントとして位置づけることも考慮された。

事業は年度ごとに下記のとおり委員会を設置し、その指導の下に行われた。事務局は紀伊風土記の丘において実施した。

本報告書では、平成15年度に実施した大日山35号墳の石室部分の発掘調査、平成18・20年度に実施した前山A13号墳の発掘調査、平成21・22年度に実施した前山A58号墳の発掘調査及び平成21～26年度に実施した各整備事業の内容を収録した。

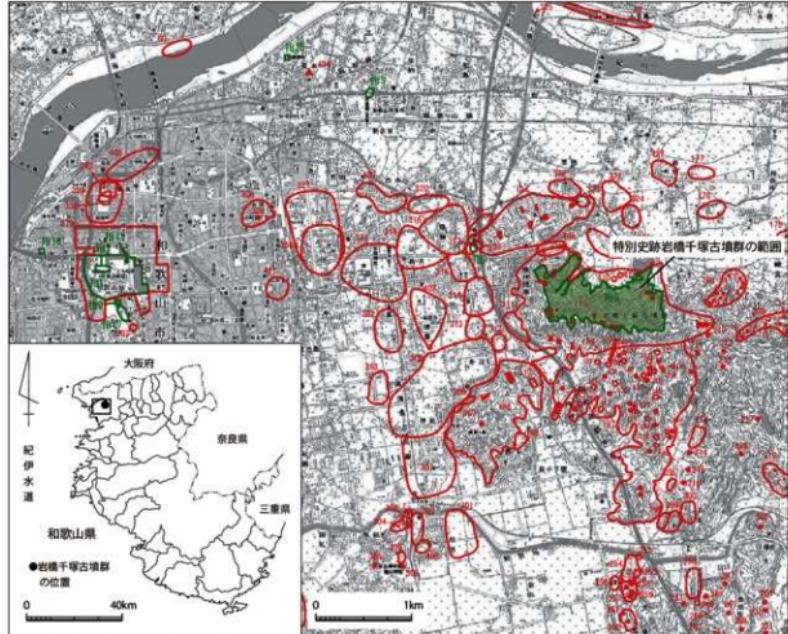


図1 特別史跡岩橋千塚古墳群の位置（和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図に加筆）

2 整備委員会

当整備事業は、整備委員会の指導の下で実施している。整備委員会の開催日と委員の構成は以下のとおりである。

(1) 整備委員会開催日

平成21年度特別史跡岩橋千塚古墳群保存整備委員会

第1回 平成22年1月20日(水)、1月26日(火)

平成22年度特別史跡岩橋千塚古墳群保存整備委員会

第1回 平成22年5月26日(水)

第2回 平成23年2月10日(木)、2月18日(金)、2月22日(火)、3月2日(水)

平成23年度特別史跡岩橋千塚古墳群保存整備委員会

第1回 平成23年6月10日(金)、6月15日(水)

第2回 平成24年1月26日(木)、1月27日(金)、1月31日(火)

平成24年度特別史跡岩橋千塚古墳群保存整備委員会

第1回 平成24年7月27日(金)

第2回 平成25年1月24日(木)、1月31日(木)、2月13日(水)

平成25年度特別史跡岩橋千塚古墳群保存整備委員会

第1回 平成25年6月19日(水)、6月20日(木)、6月26日(水)、6月28日(金)

第2回 平成26年3月1日(土)、3月4日(火)、3月6日(木)、3月11日(火)

平成26年度特別史跡岩橋千塚古墳群保存整備委員会

第1回 平成26年5月22日(木)、5月23日(金)

第2回 平成27年3月8日(日)、3月13日(金)、3月20日(金)

(2) 整備委員

小野健吉 奈良文化財研究所副所長(平成25・26年度) 文化遺産部長(平成21~24年度)

菅谷文則 奈良県立橿原考古学研究所所長(平成21~26年度)

増渕 徹 京都橘大学教授(平成21~26年度)

松木武彦 国立歴史民俗博物館教授(平成25~26年度)

森 郁夫 帝塚山大学客員教授(平成23~25年度) 帝塚山大学名誉教授(平成21・22年度)

和田晴吾 立命館大学特任教授(平成25・26年度) 文学部教授(平成21~24年度)



写真1 整備委員会の様子(左:平成24年度第1回/右:平成26年度第1回)

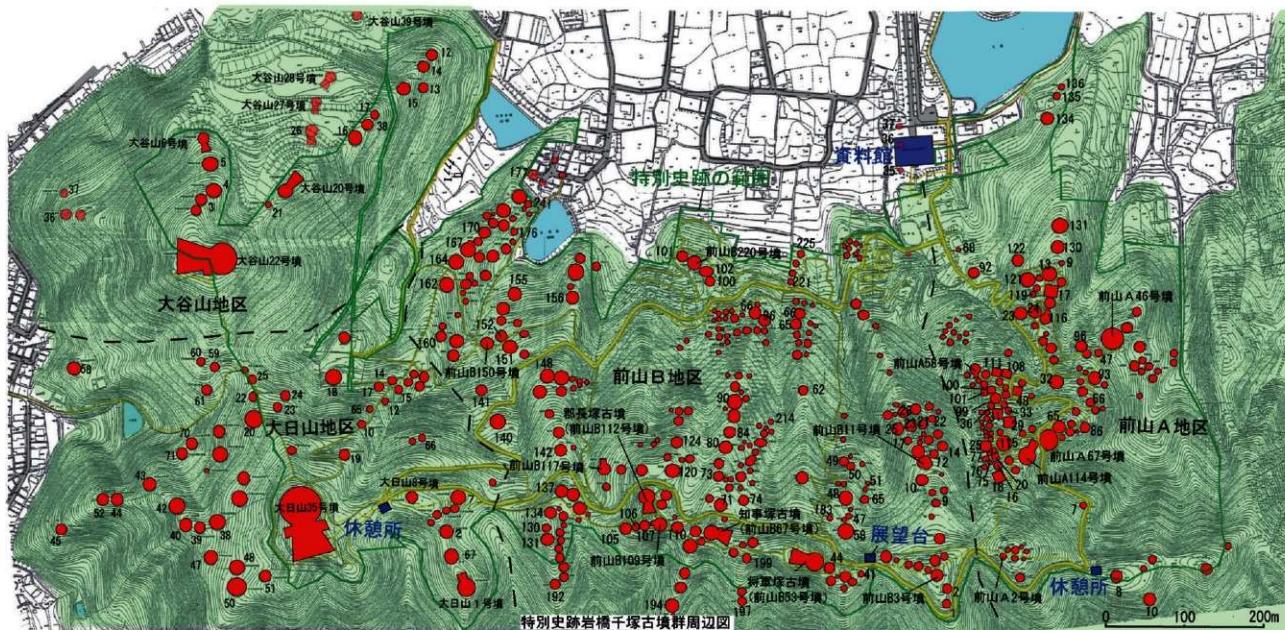


図2 特別史跡岩橋千塚古墳群における古墳分布 ($S = 1 / 5000$)

3 整備事業の経過

(1) 平成 15 年度

発掘調査等支援業務として財団法人和歌山県文化財センターに委託して、大日山 35 号墳の墳丘測量、墳丘調査、後円部横穴式石室の調査、応急遺物整理を実施した。(平成 15 年 4 月 18 日付け文第 56 号で現状変更を申請し、平成 15 年 5 月 23 日付け 15 委庁第 4 の 88 号で許可される。平成 18 年 5 月 17 日付け紀風第 30 号で現状変更終了報告を提出した。)

また、大日山 35 号墳の石室の保存修理をおこない、写真・図面等を焼き付けたセラミック製の説明板を 2 基設置した。

石室の保存修理は、玄室の石棚・両袖部・玄門部を対象にエポキシ樹脂による接着・補填と欠落部の石材を補填し、樹脂部については近似色で着色した。大日山 35 号墳では、墳丘上に生育している危険木を伐採した。

(2) 平成 18 年度

発掘調査等支援業務として財団法人和歌山県文化財センターに委託して、前山 A 13 号墳の横穴式石室の排水機能回復等を目的とした発掘調査を実施した。(平成 17 年 5 月 26 日付け文第 105 号の 2 で現状変更を申請し、平成 17 年 8 月 10 日付け 17 委庁財第 4 の 351 号で許可される。平成 19 年 5 月 30 日付け紀風第 44 号で現状変更終了報告を提出した。)

(3) 平成 20 年度

発掘調査等支援業務として財団法人和歌山県文化財センターに委託して、前山 A 13 号墳周辺の古墳状の隆起部を発掘調査し、墳丘外に延びる排水溝を確認した。(平成 20 年 5 月 28 日付け紀風第 31 号で現状変更を申請し、平成 20 年 7 月 3 日付け 20 委庁財第 4 の 922 号で許可される。平成 21 年 4 月 21 日付け紀風第 15 号で現状変更終了報告を提出した。)

(4) 平成 21 年度

発掘調査等支援業務として財団法人和歌山県文化財センターに委託して前山 A 58 号墳の発掘調査を実施した。調査により石室の形状の確認及び墳丘の一部で円筒埴輪の樹立状況を確認した。(平成 21 年 8 月 27 日付け紀風第 48 号で現状変更を申請し、平成 21 年 9 月 25 日付け 21 委庁財第 4 の 7181 号で許可される。平成 22 年 6 月 15 日付け紀風第 24 号で現状変更終了報告を提出した。)

公開施設設置工事では、公開古墳である前山 A 13 号墳にソーラーパネルを利用した照明施設を設置するための実施設計を行った。また、將軍塚古墳と前山 A 46 号墳にソーラーパネルを利用した照明施設を設置した。

説明板等製作委託業務では、前山 B 地区に説明板 10 基、案内標識 15 基を設置した。

古墳保存修景工事では、前山 B 地区で 11 基の古墳の石室・盃掘坑の埋戻しを行った。

また、前山 A 2 号墳・A 67 号墳などの発掘調査及び整備事業を中心とした平成 15 ~ 20 年度までの整備事業についての報告書を刊行した。(『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 1』平成 22 年 3 月刊行)

(5) 平成 22 年度

前山 A 58 号墳の発掘調査を紀伊風土記の丘が行い、古墳の墳形、構造及び埴輪の樹立状況を把握した。また、大日山 35 号墳出土遺物の整理作業も実施した。(平成 22 年 8 月 5 日付け紀風第 40 号で現状変更を申請し、平成 22 年 9 月 17 日付け 22 受序財第 4 号の 935 で許可される。平成 26 年 11 月 19 日付け紀風第 147 号で現状変更終了報告を提出した。)

古墳保存修景工事では前山 B 地区で 2 基の古墳及び大日山地区の 3 基の古墳の石室・盜掘坑の埋戻しを行った。

公開施設設置工事では、前山 A 13 号墳にソーラーパネル及び照明器具を設置した。

説明板等製作委託業務では、前山 B 地区及び大日山地区に説明板 4 基、案内標識 32 基を設置した。

また、園内の排水設備を整えるため、用水路調査を実施した。

(6) 平成 23 年度

大日山 35 号墳の出土遺物の整理作業を行った。また、整理作業の成果を受けて現地に設置する形象埴輪のレプリカのうち翼を広げた鳥形埴輪 2 点、蓋形埴輪 9 点、家形埴輪 1 点、須恵器大甕 1 点を製作委託した。

古墳保存修景工事では、前山 B 地区で 5 基の古墳の石室・盜掘坑の埋戻しを行った。

説明板等製作委託業務として、説明板 8 基、案内標識 3 基を設置し、既存案内標識 5 基に板面の追加を行った。

(7) 平成 24 年度

大日山 35 号墳墳丘出土遺物の整理作業を行い、報告書を刊行した。『大日山 35 号墳発掘調査報告書－特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 2－』(平成 25 年 3 月刊行)

また、発掘調査の成果にもとづき、大日山 35 号墳に設置する埴輪のレプリカとして、円筒埴輪、朝顔形埴輪を県民参加のもと製作した。

古墳保存修景工事では、前山 B 地区で 3 基、大日山地区で 1 基の古墳の石室・盜掘坑の埋戻しを行った。

また、特別史跡地内の排水路施設整備に伴う、測量・実施設計を行った。

(8) 平成 25 年度

大日山 35 号墳石室出土遺物、前山 A 58 号墳出土遺物の整理作業を実施し、大日山 35 号墳及び前山 A 58 号墳出土の鉄製品の保存処理を委託した。

大日山 35 号墳東造出に設置する埴輪のレプリカのうち、馬形埴輪 1 基、犬形埴輪 1 基、力士埴輪 1 基を製作委託するとともに、県民参加のもと円筒埴輪、朝顔形埴輪、鳥形埴輪を作成した。古墳保存修景工事は前山 A・B 地区でそれぞれ 1 基の古墳の石室・墳丘の埋戻しを行った。

説明板等製作委託業務では地区説明板を大日山地区と前山 A 67 号墳周辺の 2か所に設置した。

また、特別史跡地内の排水路改修計画に基づき、排水路の改修工事を実施した。

(9) 平成 26 年度

大日山 35 号墳東造出において、平成 20 年度から製作した復元埴輪を設置する整備工事を行つ

た。また、復元した埴輪配列についての説明板を設置した。

古墳保存修景工事は前山B地区の2基の古墳で実施した。

排水路整備事業では、特別史跡地内の排水路改修計画に基づき、排水路工事の実施設計を行った。なお、当事業については、全体の工事完了時に別途報告することとする。

また、大日山35号墳石室・前山A13号墳・前山A58号墳の発掘調査及び平成21～26年度までの整備事業について報告書を刊行した。

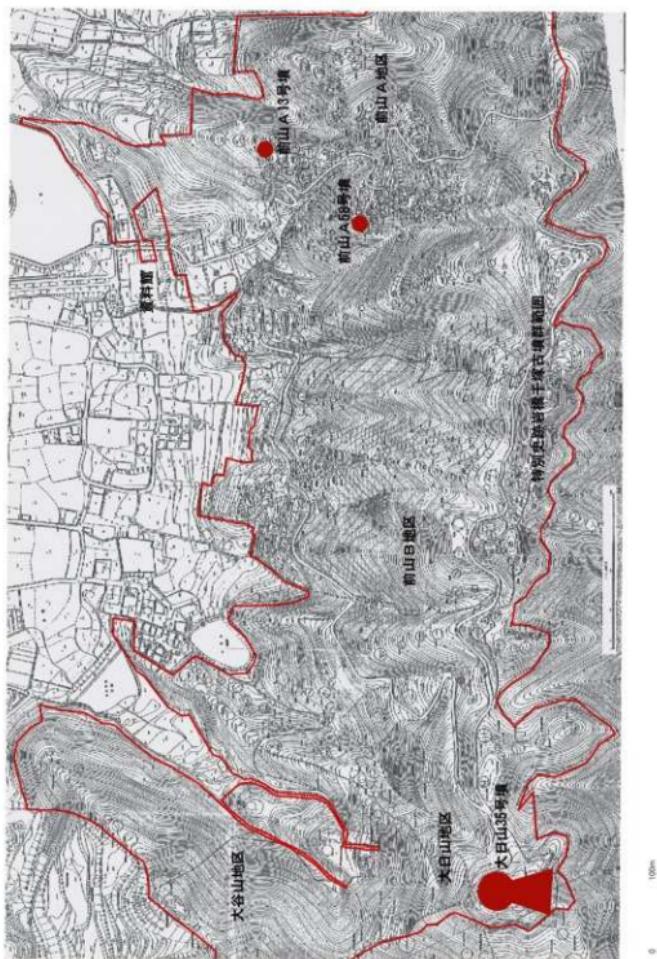
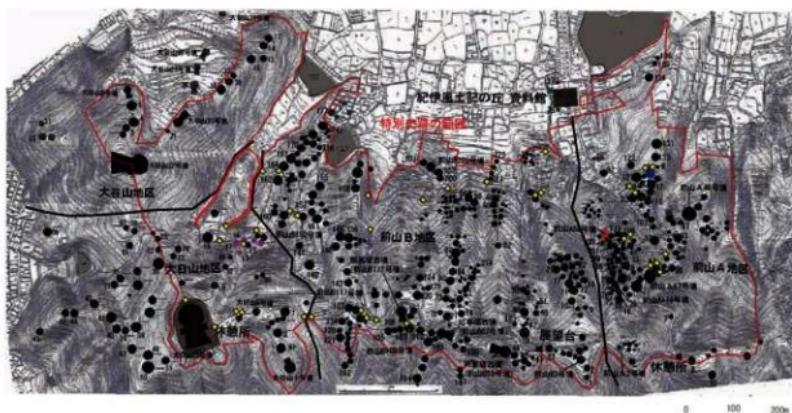


図3 発掘調査対象古墳の位置 (S = 1 / 6,000)



平成21年度事業 全体平面図

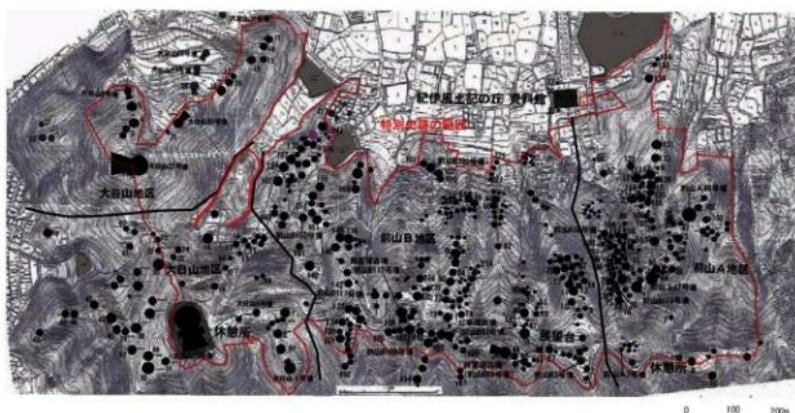


平成22年度事業 全体平面図

図4 平成21・22年度事業 全体平面図 ($S = 1 / 10,000$)



平成23年度事業 全体平面図

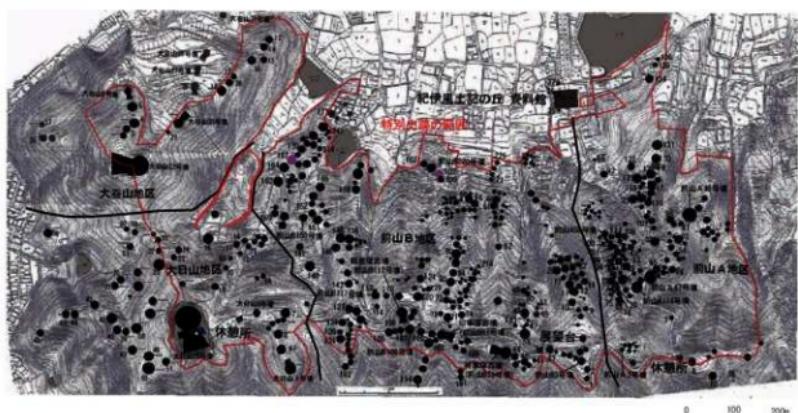


平成24年度事業 全体平面図

図5 平成23・24年度事業 全体平面図 ($S = 1 / 10,000$)



平成25年度事業 全体平面図



平成26年度事業 全体平面図

図 6 平成 25・26 年度事業 全体平面図 ($S = 1 / 10,000$)

第2章 地理的・歴史的環境

古代において紀伊国は「木国」とも表記されたが、和銅6年（713）国郡郷名の好字令によって紀伊国と改められた。木国は、温暖で樹木が繁茂していたことにより名付けられたといわれている。

大台ヶ原にその源を発し、和歌山県北部の和泉山脈と紀伊山地の谷あいを貫いて紀伊水道に注ぐ紀ノ川は全長136kmに及ぶ大河川である。北岸は和泉層群、南岸は三波川系に属する緑泥角閃岩を主体とする結晶片岩によって形成されている。この河谷に沿って列島の外帶と内帶を分ける中央構造線が東西に走り、紀ノ川によって運び出された土砂の沖積作用によって、河口部には紀伊地域では最も肥沃で広大な平野部が形成された。この肥沃な平野部をかつて日下雅義氏は日前宮平野と称した。そこに展開した各時代の遺跡はそれぞれ有機的関連をもって成立していることがこれまでの調査で明らかになっている。以下では、紀ノ川下流域の地理的・歴史的環境について、古墳時代を中心にして各時期ごとに記述する。

旧石器時代 紀ノ川北岸では、和泉山脈山麓にあたる西庄地区遺跡、鳴滝遺跡、南岸では岩橋山塊の西麓の總綱寺谷、旧自然堤防上にあたる頭陀寺からナイフ形石器が採集されている。平野部からの発見はなく、河岸段丘あるいは汀線、島嶼、自然堤防といった場所からの発見である。これらのことから、旧石器時代において紀ノ川河口部は陸地化しておらず、内陸まで海が入り込んでいたことが推測される。

縄文時代 岩橋山塊周辺には鳴神貝塚、岡崎遺跡、吉礼貝塚、繩宜貝塚の4遺跡が存在し、その遺跡の内容から当時の自然環境を知ることができる。鳴神貝塚は、独立丘陵である花山の西緩斜面に展開した遺跡で、近畿で最初に発見され、鳥居龍藏によって調査が行われた貝塚である。土器は中期～晩期のものが多くみられる。貝塚を構成する自然遺物は、ハマグリが多く、ハイガイがこれに続く。近年の調査で、貝塚はさらに西へ延びることが確認され7体の人骨が発見されている。福飯ヶ峯の西麓の微高地に立地する岡崎遺跡は、後期～晩期の時期に営まれた遺跡で、貝塚はハマグリが主体であることから、当遺跡周辺は当時内湾であったことが分かる。吉礼貝塚は岩橋山塊の南麓に位置する。土器は前期～後期に及ぶ。貝塚はハイガイが主体で、ヤマトシジミ、カキ、ハマグリがある。繩宜貝塚は岩橋山塊の北麓にあり、吉礼貝塚とは岩橋山塊を挟んで対峙する位置にある。土器は前期が主体で、形成された貝層は、ハイガイが多くヤマトシジミ、ハマグリ、マガキ、オオシジミがこれに続く。これら4遺跡からうかがえる当時の環境は、鳴神貝塚・岡崎遺跡は淡水系の貝がみられないことから内湾であり、一方、繩宜・吉礼貝塚では淡水・半かん半淡水の貝類が出土することから河口付近に位置していたことが日下雅義氏によって明らかにされている。

弥生時代 紀ノ川を中心とした各河川の堆積作用により、徐々に陸化が拡大していたと考えられるが、前期の段階の遺跡分布は、紀淡海峡に浮かぶ島嶼、紀ノ川右岸では河岸段丘、左岸では岩橋山塊、花山によって保護された日前宮周辺地域に限られている。太田・黒田遺跡は、出水川の自然堤防上の微高地に展開した遺跡であり、紀ノ川河口域で最も古い時期の定住が確認できる遺跡である。福飯ヶ峯西麓に位置する神前遺跡は、貴志川支流の和田川によって形成された自然堤防上の微高地に立地する遺跡であり、弥生時代前期に属するとみられる南北方向の溝が12条検出されたほか、土壙墓、井戸が見つかっている。

独立丘陵の花山周辺では、鳴神貝塚や音浦遺跡から過去の調査で前期の土器が見つかっているものの、居住を示す遺構等は現在のところ発見されていない。この時期の集落は、自然堤防上か山麓のやや高い場所に小規模に営まれたと考えられ、いまだ紀ノ川の沖積作用が進行中であり、不安定な状態であったと推察される。

中期になると、紀ノ川を遡った地点において、宇田森遺跡、北田井遺跡といった拠点集落が展開するが、紀ノ川河口は太田・黒田遺跡以外に目立った動きはなく、紀ノ川の川道が不安定であったことに起因すると考えられる。

後期になると、福飯ヶ峯周辺では、神前遺跡、井辺Ⅰ遺跡、井辺Ⅱ遺跡等が新たに出現する。集落が多く出現する背景にはこの一帯の陸化が急速に進んだことを物語っている。この時期に出現した遺跡は古墳時代前期まで続くものが多く、その生産基盤は基本的に変化がなかったことを示している。

この時期、周辺の丘陵部に滝ヶ峰遺跡、菖蒲谷遺跡等の高地性集落が出現する。岩橋千塚古墳群の山頂に築造された天王塚古墳の墳丘には当該期の土器が含まれ、近隣に同様の集落が営まれていた可能性が高い。紀ノ川を挟んで対岸の和泉山脈南麓には橋谷遺跡が存在し、これら4遺跡は一直線上に配置されていたことが分かる。また、天王塚、橋谷遺跡からは上流の船戸箱山（箱山古墳の墳丘にも弥生時代後期の土器を含む）を眺望することができ、さらに船戸からは堂坂遺跡、船岡山遺跡など、紀ノ川の上流に至るまで障害なく遠望することができることから、互いの通信・連絡網を持っていたと推察される。畿内の南限とされた伊都郡と那賀郡の郡境に位置する船岡山遺跡からは、島の西端、中央部等で狼煙台とも考えられる焼け土の痕跡が見つかっている。紀ノ川水系に通信ネットワークが整備されていたことを物語っている。

古墳時代 秋月遺跡群、鳴神地区遺跡群とも集落はよく分かっていない。額田雅裕氏の地形分類によると日前宮北方には大きく蛇行する旧河道が認められ、一帯は自然堤防であったことが示されている。おそらく、紀ノ川本流あるいは有力な支流の影響で居住地としてはいまだ適していなかつたことがうかがえる。

岩橋山塊北西麓に展開する鳴神地区遺跡群において明瞭に活動が確認できるようになるのは中期以降である。花山丘陵周辺から岩橋周辺にかけて急速な集落の広がりが確認される。それは後述する灌漑施設の設備を含めた大規模な開発によるものと考えられる。6世紀以降、岩橋千塚古墳群における古墳の築造が急激に増加するように、上記のことによって、当地域が北岸地域に比べ優位性を保つことに繋がったとみられる。

具体的に、この地区で行われたであろう開発とはどういうものであったのか。1981年の鳴神地区遺跡の調査でその一端が明らかとなった。音浦遺跡は昭和46・53年の2度にわたる調査で、宮井用水に並行して、「音浦堰」に関連するとみられる大溝（音浦遺跡SD128）が検出された。昭和53年の調査で発見されたSD128は溝の最大幅が約6m、深さ2mをはかり、庄内期～5世紀前半までの3時期の流路が確認できる。したがって掘削は庄内期と考えられ、下層からは木製農具（鋤）が出土している。下流にあたる鳴神V遺跡でも同時期の溝（SD096、SD094、SD097、SD204、SD258）が調査されており、3、4世紀にすでに複数の溝が掘削されていたことが明らかとなった。まさに「音浦堰」が近隣に存在する可能性が高く、分水された状態を示していると考えられる。井辺遺跡群に近い鳴神II遺跡においても古墳時代前期の灌漑用水が岩橋山の裾を南北に流れる新溝用水に沿って見つかっており、早い段階から灌漑用水の整備が進んでいたことがわかる。

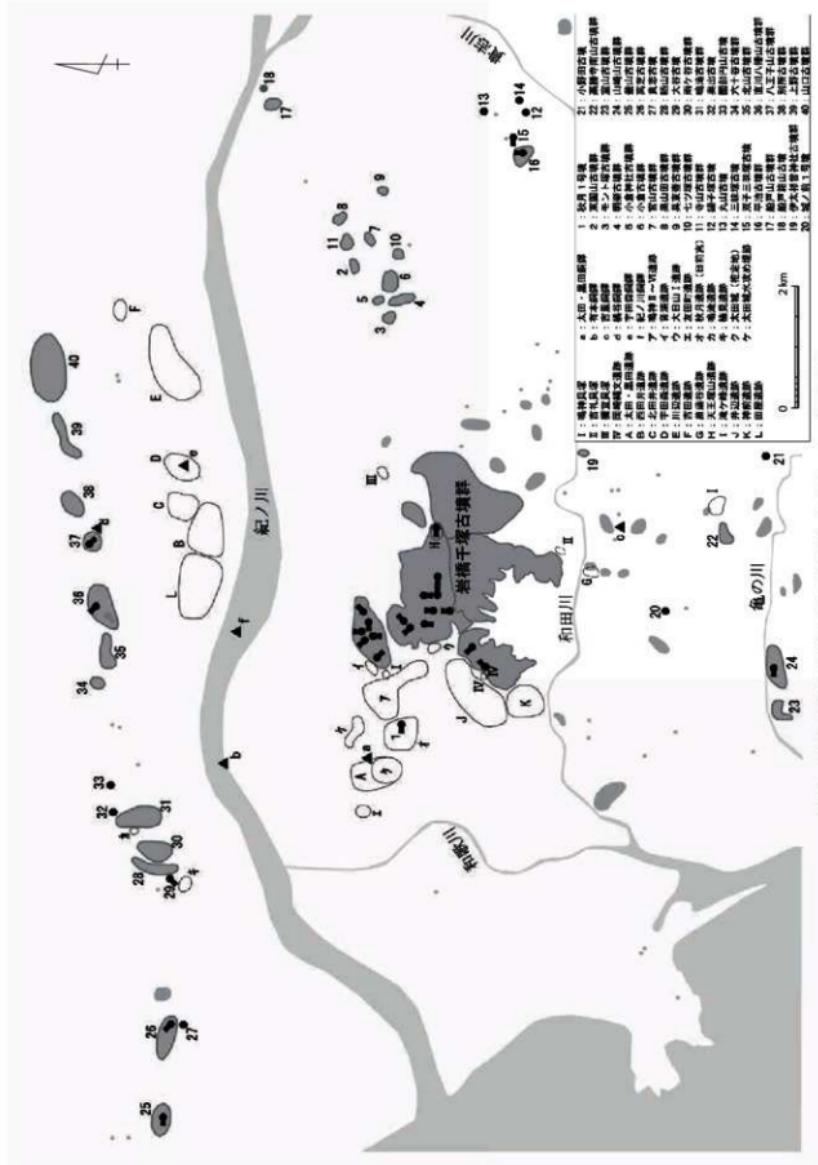


図 7 岩橋千塚古墳群周辺の遺跡分布 ($S = 1 / 80,000$)

先のSD 128は、5世紀前半になって大きく開削されたと考えられる。大規模な灌漑用水の整備は小集団の力のみでは不可能であり、治水・灌漑を十分に行うには、共通の利害関係を持つ共同体を支配する族長クラスの指導によって初めてなされる事業である。灌漑用水の整備は、農業生産力を飛躍的に増大させることは明らかで、当然のことながらその共同体の首長、族長らによって支配管理されるのは自明である。鳴神地区遺跡群に張り巡らされた灌漑用水を背景に、首長が巨大な力を獲得したことは想像に難くない。

鳴神地区遺跡群の音浦遺跡、鳴神V遺跡や秋月遺跡群からは古墳、方形周溝墓、土壙墓、箱式石棺が数多く見つかっており、その総数は28基に及ぶ。これらの墓には、陶質土器・初期須恵器、馬齒が墳墓に供獻されていることが多く、この地の開発事業に渡來系の技術者集団が携わった可能性が高いと考えられる。

音浦遺跡では、灌漑用水以外では5世紀を主体とする堅穴住居跡14棟、掘立柱建物跡8棟、溝18条が見つかっている。昭和46年の調査で発見された掘立柱建物跡102・103は鳴滝遺跡で発見された巨大倉庫群を彷彿とさせる建物で、遺跡の立地環境からはまさに名草堰（音浦堰）を管理した集団の居住地としてふさわしい遺跡である。

5世紀の段階で、拮抗していた紀ノ川北岸と南岸のバランスが崩れ、南岸勢力が優位性を保つようになることが考古学的見地から推察でき、そこにはこの地域の大規模な灌漑用水の存在が大きく関わっていたと思われる。紀ノ川南岸は灌漑施設の整備によって水路が日前宮平野の各地へ網の目のようにはりめぐらされ、経済基盤が安定し、生産力が向上したことは想像に難くない。それらは、6世紀以降の大谷山22号墳、大日山35号墳、天王塚古墳等の大型前方後円墳築造となって結実するのである。岩橋山塊を奥津城として、人々と古墳を築造し続ける基盤がこの水路の整備によって可能になったと考えられる。

岩橋千塚古墳群と紀氏 栄原永達男氏によると、紀氏という呼称は總称であって、「紀直」と「紀朝臣」という二つの系統があつたとされている。その出自について、紀直は、『新撰姓氏録』によると神魂命の五世孫の天道根命、もしくは神魂命の子御食持命を祖とする神別氏族であつて紀ノ川下流の河南地域に広がる日前宮平野に本拠を置き、代々、紀伊国造や名草郡司など要職に就任してきた在地豪族である。

紀朝臣は『新撰姓氏録』に紀角宿禰、もしくは曾孫である武内宿禰、または屋主忍雄武雄心命を祖とする皇別氏族で古くは紀臣と称したとされる。両者は、明確に区別され、決して混同されることなく、紀直については、在地の大豪族であったと推察されるが、中央貴族である紀朝臣の出自については、「平群坐紀氏神社」の存在から大和國平群とする説と紀伊説がある。紀伊説では、紀朝臣が紀伊国内に居住していた史料の存在から無関係とは考えられないこと、大伴、紀朝臣は名草・那賀両郡に分布し『日本書紀』雄略九年五月条にある「汝大伴卿等同國近隣之人」を有力な根拠に紀伊国を紀朝臣の本拠地としている（栄原2004）。

『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』には約1400基の古墳が記載されている。その多くは、紀ノ川河口近くの岩橋山塊に築造されるという偏った分布を示している。紀伊国における最大の古墳群である岩橋千塚古墳群は約800基の古墳からなる古墳群の総称であり、和歌山市東部の丘陵地帯に分布する岩橋前山A・B地区、大日山地区、大谷山地区、花山地区、井辺地区、井辺前山地区、寺内地区、和佐地区、山東地区から構成される。千塚と呼ぶにふさわしい規模を誇る大古墳群である。この古墳群を造営したのが紀氏で、古墳群はいわばその奥津城と考えられている。その動向は、常に紀伊の命運を握り、その存在を無視しては語ることはできない。

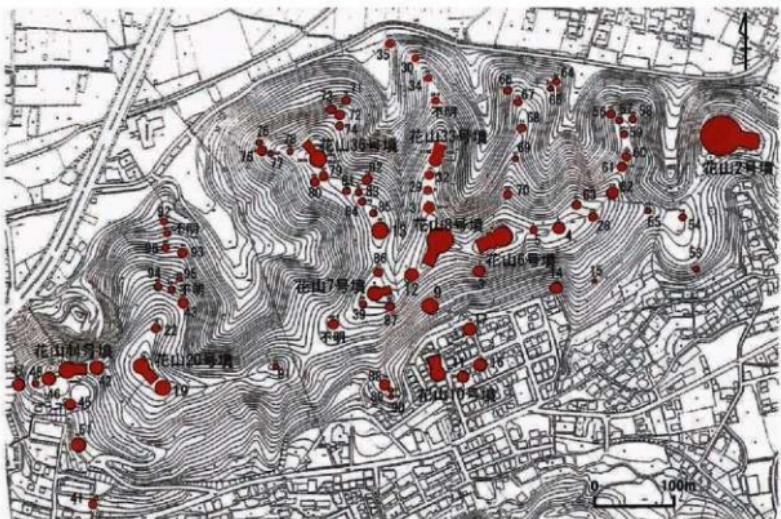


図8 花山地区における古墳の分布（和歌山県立紀伊風土記の丘 2008 より）

古墳の変遷 紀伊における最古の前方後円墳は、和歌山市秋月に所在する秋月1号墳であり、定型化以前の前方後円墳である。日前・国懸神社の旧境内地で紀伊の国造につながる紀直の本願地から発見された古墳である。周辺地域の調査では、4世紀～6世紀にかけて小古墳が15基発見されており、岩橋千塚に先行する紀氏一族の奥津城と考えられる地域である。

秋月1号墳は、墳長26.8m、後円部径15.5m、前方部長11.3m、前方部幅10mを測り、墳丘をめぐる周溝は前方部両端で途切れ、幅3mの陸橋となっている。後円部の中央には、長方形の土壤が存在する。墳丘は削平が著しく、再堆積した土層からは、副葬品の一部とみられるガラス製管玉や小玉、周溝からは小型丸底土器、二重口縁壺が出土し、布留式土器の古相であると考えられる。この段階では、秋月1号墳、鳴神遺跡S X 280が示すように古墳の多くは平野部に築造されたようである。

なお、近年、岩橋山塊の南西に位置する福飯ヶ峯丘陵の裾部にある井辺遺跡において秋月1号墳と同時期の前方後方墳が発見され、その動向は一元的ではないことが分かってきた。福飯ヶ峯丘陵の裾部には井辺遺跡、岡崎遺跡といった古墳時代の集落が展開し『日本書紀』雄略九年の記事に大伴談連とともに登場する紀岡崎来目連の本拠である可能性が高く、紀氏が部族集團の連合体と考えると紀氏を構成する有力部族の奥津城の一つである可能性がある。

4世紀末から5世紀初頭には独立丘陵である花山地区に古墳が築造され始め、平野部と丘陵上の古墳では明らかにその規模、副葬品の内容に大きな格差が生じ、墓域が二分化される。その代表的な古墳が花山8号墳である。花山8号墳は、花山支群の最高所に築造された全長52mの前方後円墳であり後円部、前方部にそれぞれ粘土椁の埋葬施設を持ち、副葬品は滑石製の勾玉を中心として玉類と剣が出土している。花山からは、三角縁神獣鏡が二面、陶質土器壺が1点採集さ

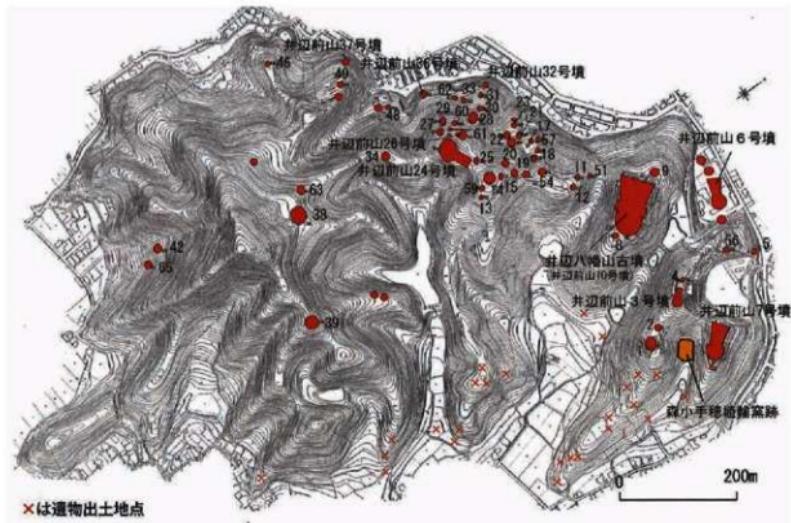


図9 井辺前山地区における古墳の分布（和歌山県立紀伊風土記の丘 2008 より）

れているが、この花山8号墳から出土した可能性がある。花山8号墳にやや遅れて築造されるのが全長30mの前方後円墳・花山44号墳である。副葬品には、玉類、鐵劍、刀子、鐵鎌、ノミ状工具柄などが出土している。

福飯ヶ峯丘陵には全長約60mの前方後円墳・井辺前山24号墳が築造されており、未調査のため時期を特定できないが、前方部はやや柄鏡形に近い形状を示している。分布調査で庄内式期～布留式期と考えられる二重口縁壺の破片が見つかっており、これが24号墳に伴うものとすれば、秋月1号墳に近い時期の古墳である可能性もある。ただし、埋葬施設が粘土郭であれば花山8号墳の時期まで下ると考えられる。いずれにしても、4世紀末から5世紀初頭が紀伊における画期となるであろう。

その後、紀伊においては花山8号墳を凌駕する古墳は5世紀中葉の車駕之古墳まで見当たらないが、首長墳の推移を考える際に無視することができないのが、その信憑性はともかく「日本書紀」に記される「雄略九年（465）三月条「紀伊小弓宿禰大將軍として新羅に進軍。碌の地を陥す。半島で病死、田身輪（大阪府岬町の淡輪）に墳墓を造る」という記述である。淡輪には紀伊の古墳をはるかに凌駕する墳長210mの西陵古墳、墳長180mを誇る淡輪ニサンザイ古墳といった中期の大古墳があり、西小山古墳では、豊富な鐵製品、金銅製眉庇付冑が副葬されている。西陵古墳では、畿内で大王墓に多く用いられる長持形石棺が採用されており、勢力の強さをうかがい知ることができる。鳴滝川と淡輪の番川は和泉山脈の分水嶺を境に南北に分かれて流れる河川であり、両地域間の距離は約10kmとそれほど長くないため、この時期、墓域を淡輪に設けた可能性は否定できない。

紀伊国に最初に横穴式石室が採用されたのは紀ノ川上流に位置する橋本市所在の陵山古墳であ

る。大和、河内との交通の要衝にある古墳で、岩橋千塚と同様に結晶片岩を用いている。内部には朱が塗られ、およそ5世紀中ごろに築造されたと考えられる。

6世紀初めになってそれまで花山丘陵に築造されていた古墳が谷を挟んで大谷山→大日山→前山へと順次その造墓活動の範囲を推移・拡張させていく。その理由は判然としないが、墓域が狭小になったとも考えられる。この時期に横穴式石室が導入されるが、導入にあたっては前方後円墳において採用されている。花山丘陵に築造された花山6号墳（全長67m）、大谷山に築造された大谷山6号墳（全長約25m）、22号墳（全長80m）、27号墳（全長21m）、28号墳（全長25m）といった古墳がそれにあたる。岩橋千塚古墳群における導入期の石室は、羨道が片側に寄った構造であり、平面プランは長方形を呈するのが一般的である。

大日山山頂に築かれた大日山35号墳は全長100mを超える前方後円墳で初期の横穴式石室を埋葬施設に持つ。大谷山22号墳とも合わせ、岩橋千塚古墳群における初期の横穴式石室の石梁は水平に懸架されていることが分かる。両古墳の先後関係については未だ決着をみていないが大谷山→大日山→前山へと古墳築造が推移することを考えれば大谷山22号墳、統いて大日山35号墳が築造されたとも考えることも可能であろう。しかしながら、これらの古墳はごく近い時期に築造されたと考えられる。この時期、福飯ヶ峯には前方後円墳・井辺前山10号墳（井辺八幡山古墳 全長86m）が築造される。花山6号墳、大谷山22号墳、大日山35号墳、天王塚古墳、井辺八幡山古墳といった盟主墳と考えられる古墳がほぼ同時期に築造されるのは、前述したように紀氏が部族連合であったことを如実に物語っているものと考えられる。それぞれ花山丘陵、岩橋山塊、福飯ヶ峯丘陵周辺に播居する紀氏集団の内部で拮抗する力を有する首長が築造したと推察できる。

大谷山22号墳、大日山35号墳にやや遅れて天王塚古墳（全長86m）が岩橋山塊の東方の丘陵に築造される。埋葬施設は横穴式石室でその規模は、全長10.59m、玄室長4.22m、天井の高さ5.9mをはかり、石梁8本を懸架する。平面形より空間を意識した石室を構築し、岩橋型横穴式石室の到達点である。この天王塚古墳以降、各地に岩橋型石室を埋葬施設に用いた古墳が見受けられるようになる。岸俊男氏によって、瀬戸内海の沿岸部には紀氏及びその同族が分布していたことが明らかにされ（岸1963）、この研究を基に紀臣及び同族の分布と岩橋型石室の分布がかなり一致することが河上邦彦氏によって明らかとなっている（河上1977）。

6世紀中ごろから後半にかけて、前山B53号墳（將軍塚）、前山B67号墳（知事塚）、前山B112号墳（郡長塚）等の古墳が岩橋の尾根筋に次々と築造される。井辺前山古墳群には井辺前山6号墳（前方後円墳49m）が築造される。しかし、花山、大谷山、大

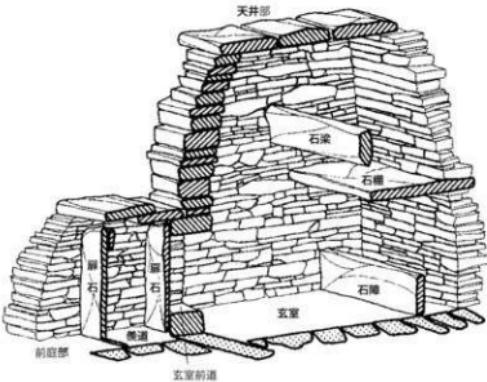


図10 岩橋型横穴式石室の模式図
(紀伊風土記の丘管理事務所 1981に加筆)

日山、井辺前山には前述の古墳を凌駕する古墳は築造されず、6世紀後半の寺内28号墳（全長28.6m）を最後に岩橋千塚古墳群では前方後円墳は姿を消し、以降、前方後円墳は築造されない。その後、岩橋千塚古墳群における首長墳は方墳へと移行する。寺内57号墳の石室規模は天王塚古墳と同規模で、7世紀代の井辺1号墳の石室もそれ以前のものに匹敵する規模を有していることが分かる。

以上が岩橋千塚古墳群における時期的な古墳の推移であるが、最後に、古墳時代の後半を考えるにあたって重要な渡来人についても触れておきたい。5世紀初頭以降、朝鮮半島から製陶や馬匹生産、鍛冶技術など、多くの新来技術をもたらした渡来人であるが、岩橋千塚古墳群周辺においても多数の渡来系遺物が多数しておらず、その関わりが深かったと考えられる。

5世紀末から6世紀初頭に岩橋山塊、花山丘陵に横穴式石室を埋葬施設とする古墳が出現する。初期横穴式石室の花山6号墳からは新羅系の土器が出土し、6世紀中ごろの前山A46号墳からも新羅系の土器が発見されている。6世紀前半の大日山70号墳は鍛冶工具、百濟系の陶質土器を副葬していることから百濟系の韓鍛冶の墓であった可能性が高い。

これらのことから推測すると、5世紀に平野部の大規模開発を担い、鳴神・秋月の平野部に墓地を築造した第一波の技術者集団の大半が伽耶系の人たちであり、岩橋千塚古墳群築造に大きく関与した第二波は新羅系・百濟系の人たちであったのではないかと考えられる。そこには、東アジアを取り巻く大きなうねりがあったものと推察されるが、かれら渡来系の技術者集団を巧みに掌握することによって、紀氏は巨大な勢力を誇るまでになり、5世紀から7世紀に大古墳群を造営し続ける基盤を作り上げたのではないかと考えられる。

参考文献

- 岸俊男 1963『紀氏に関する一試考』『近畿古文化論考』権原考古学研究所編
関西大学文学部考古学研究室 1967『岩橋千塚』
和歌山県教育委員会 1972『近畿自動車道和歌山線埋蔵文化財調査報告』
龜田隆之 1973『日本古代用水史の研究』吉川弘文館
河上邦彦編 1977『平群・三里古墳』奈良県立権原考古学研究所
紀伊風土記の丘管理事務所 1981『岩橋千塚とその周辺』
日下雅義 1979『紀伊灘と吹上浜』『和歌山の研究1』地質・考古編 清文堂
財団法人和歌山県文化財センター 1990『田屋遺跡』
財団法人和歌山県文化財センター 1994『秋月遺跡』
財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1994『鳴神V遺跡発掘調査概要報告書』
財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2000『秋月遺跡第8次発掘調査概報』
柴原永遠男 2004『紀伊古代史研究』思文閣出版
和歌山市立博物館 2002『渡来文化の波－5～6世紀の紀伊国を探る－』
和歌山県教育委員会 1984『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』
和歌山県教育委員会 2000『岩橋千塚周辺古墳緊急確認調査報告書』
和歌山県史編纂委員会 1983『和歌山県史』考古資料
和歌山県史編纂委員会 1993『和歌山県史』原始・古代
和歌山県立紀伊風土記の丘 2008『岩橋千塚』

第3章 大日山35号墳の発掘調査（石室編）

1 調査に至る経緯と既往の調査

大日山35号墳は大日山山頂に位置し、後円部に埋葬施設として西側を開口方向に構築された横穴式石室をもつ。昭和7年(1932)に刊行された『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告第十二輯』の「大日ノ古墳」として報告された項で「山上に奥ノ院というのである。実は発掘せられた古墳すなわち塚穴の中に設けたものであるが、ここへも参拝するものが多い。」と記されている。こうした記述から、石室が古くから開口状態にあり、内部に石仏「大日如来」を祀り、真言宗大日堂の奥院として多くの参拝者が出入りしていた状況がうかがえる。なお、同報告の中では東方隣接地の整地作業中に石室から鏡1、刀身残欠、須恵器高杯、杯1、壙1、盤1、長頸壺2、馬具残欠が出土し、そのときすでに遺物は散失していたと報告されているが、この古墳の位置については現時点では不明となっている。

大日山35号墳からの採集品として伝えられているものは、雲珠(図11)と鉄斧(写真2)がある。雲珠については所在不明であるが同様の環状雲珠が今回の調査においても確認できた。鉄斧は寄贈され県立紀伊風土記の丘で保管している。

大日山35号墳の石室がはじめて調査されたのは、昭和38(1963)年から41年(1966)年に和歌山市教育委員会の委嘱を受けた関西大学による学術調査によってである。この際、墳丘の測量と石室の実測が行われ、実測図が公表されている(関西大学考古学研究室1967)。この調査では発掘調査は実施されず、遺物等は出土していない。

平成元年には石室内の石仏を入口前面の建物基礎跡に安置することとなり、現状変更の手続きを行った。その際、石室開口部の鉄扉を施錠し、以後、紀伊風土記の丘が鍵を管理している。

その後も大日山35号墳については発掘調査が行われなかったため墳丘の構造等については不明な点も多かったが、石室については初期の岩橋型横穴式石室として関心が向けられていた。

平成15年度よりはじまった和歌山県教育委員会による特別史跡岩橋千塚古墳群の整備事業において大日山35号墳の発掘調査が実施されることになり、その際、石室においても整備・公開を行うための基礎資料を得ることを目的に、実測図の作成と床面の発掘調査が行われた。本章で報告を行うのはその調査である。

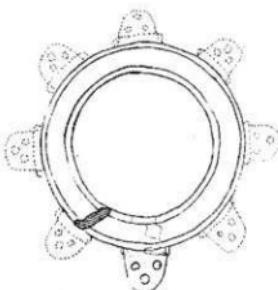


図11 大日山35号墳採集の雲珠
（宮田啓二氏のノートより）と
記載された大野嶽夫氏のファイルより



写真2 大日山35号墳採集の鉄斧

2 発掘調査・整理作業の経過

(1) 発掘調査

大日山 35 号墳の発掘調査は、平成 15 年度に 1 次調査、平成 16 年度に 2 次調査、平成 17 年度に 3 次調査を実施した。このうち石室の調査は、平成 15 年度の 1 次調査で実施し、石室床面及び排水溝の確認、石室の実測図の作成を行った。

1 次調査は和歌山県教育委員会文化遺産課が担当し、現地調査を支援するため財団法人和歌山県文化財センターに発掘調査等支援業務を委託した。なお、石室をのぞく 1 ~ 3 次の調査成果については、平成 24 年度刊行の『大日山 35 号墳発掘調査報告書—特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 2 ー』で報告を行っている。

(2) 整理作業

石室出土遺物の整理作業は、平成 25・26 年度に県立紀伊風土記の丘が整理補助員・整理作業員を直接雇用して行った。

出土鉄製品の X 線撮影は、和歌山県工業技術センターの協力を得た。また、一部の脆弱な遺物については、保存処理を実施した。保存処理事業は、簡易公開調達の結果、財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所が受託し、実施した。

出土装身具のうち、碧玉・滑石製玉類については薦科哲男（有限会社遺物材料研究所）、ガラス小玉については長谷川愛（奈良大学大学院生）の各氏の協力を得て分析を行った。なお、装身具の分析結果については『紀伊風土記の丘研究紀要』第 3 号（平成 27 年 3 月刊行）に掲載した。

3 調査成果

(1) 調査の方法

石室は既存の石室実測図（関西大学考古学研究室 1967）をもとに玄室の中心（0, 0）と奥壁の南北幅の中心を結んだ直線を東西軸として、これと直交する方向を南北軸として設定した。また、東西軸と南北軸を中心に 50cm ごとに地区割り付けを行った。地区割り付けは、東西軸と南北軸に対して北東方向を N E 区、南東方向を S E 区、北西方向を N W 区、南西方向を S W 区とし、各区内で玄室中心（0, 0）点から東西に離れていく順序で 1 ~ 5 を設定し、次に南北方向に離れていく順序で 6 ~ 10, 11 ~ 15 と順次地区名を付与した。なお、石室南北軸は $N - 6^{\circ} 25' 10'' - E$ の方向を示す。また、羨道部は玄室中心（0, 0）点から東西軸上で 2.25 m 西の地点を基点として 50cm 単位で地区を東（玄室側）から地区 1 ~ 5 に分割した。

石室内の床面土壤約 5 m² は、50 cm 四方グリッドで採取し、玄室内で 5 cm メッシュの篩いで床面に敷設されていた玉石や大きな遺物を選別した後、持ち帰った。なお、床面に敷設されていた玉石は調査完了後に玄室床面に再度敷設を行った。

石室各壁面は、清掃後写真撮影を行い、東西軸、南北軸を基準に縮尺 20 分の 1 で玄室奥壁、前壁、両側壁及び天井石の実測図を作成した。その他の一部については、縮尺 10 分の 1 で作図を行っている。

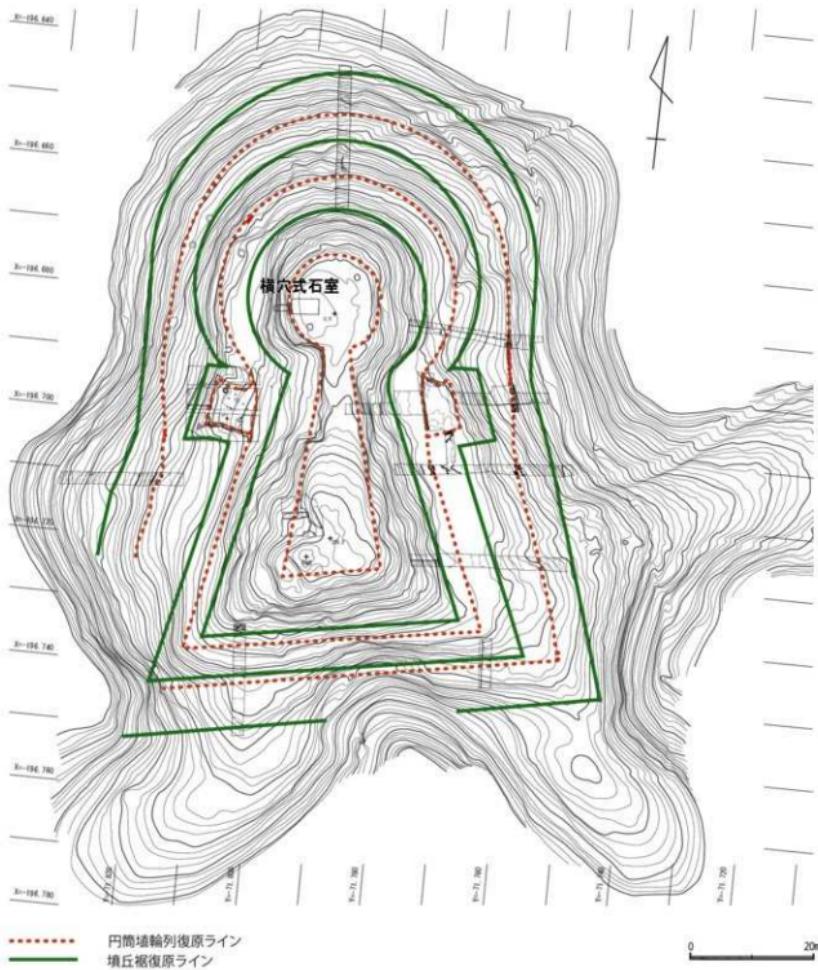


図 12 大日山 35 号墳の墳丘測量図と横穴式石室の位置 ($S = 1 / 800$)

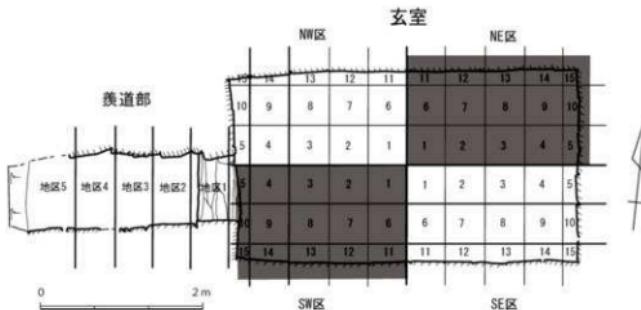


図13 大日山35号墳 石室の地区区分と名称 (S = 1 / 60)

(2) 調査の成果

床面・排水溝 玄室床面は、玉石が敷設されていた。玉石を除去した後、擾乱土である第1～3層の下に床面が確認できた。床面では玄室の南側及び奥壁付近の一部で結晶片岩の岩盤の露出がみられたほか、排水溝を確認した。排水溝は玄室の東西軸からやや南側に東西軸に併行して伸びていて、2箇所で南北に分岐する平面プランをなしていた。排水溝は上面で幅15cm～20cmをはかり、断面形態は玄室中央から奥壁付近でU字形を呈し深さは5cm程度と浅い。玄室中央から前壁付近にかけてはV字形をなして深さ10cmと深度を増す。蓋石は、前壁付近の排水溝上面で幅30cm～40cm幅の2枚の結晶片岩の板石を確認した。また蓋石付近の排水溝内は玉石が充填されていた状況が確認できた。

漢道部においても、中央付近のサブトレーンチ内で玄室前壁付近と同様に結晶片岩の板石を使った蓋石と、上面で幅15cm、深さ10cmのV字の溝及び径1～10cmの玉石が充填されている状況が確認できた。

排水溝の一部は床面の岩盤を整形して造り出しており、側石や底石は見つかっていない。

石室床面は南北の床面の高低差はほとんど認められなかったが、東西の床面では奥壁側が高く前壁側は低くなっている。その高低差は約10cmをはかる。排水溝底面においてはさらに顕著で、その高低差は20cmをはかる。漢道部の排水溝はさらに40cmほど低くなっている。玄室から漢道部へと傾斜をつけて排水していたことがわかる。

石室 石室は関西大学によって測量調査がおこなわれたが、今回の調査においてあらためて実測図を作成した。

石室は玄室・玄室前道・漢道からなる。玄室長4.33m、奥壁幅2.42m、右袖部0.96m、左袖部0.44m、玄門幅0.84m、漢道は参拝道の拡張や壁面コンクリート補修及び鐵扉の設置工事により本来の長さは明確ではないが、漢道左側壁は2.96m、右側壁2.9mである。

玄室は厚み10cm前後、幅30cm前後の結晶片岩の板石を小口積みに利用して持ち送りながら構築している。石積基底部からは、漢道部→左側壁→奥壁→右奥壁の順に石積みされていることがわかる。玄室の床面から天井までの高さは2.85mで、左右の壁の傾斜は奥壁付近での石棚より上で約64度、石棚より下で約70度、床面から80cmまでの高さで左80度と右83度とほぼ等しい。

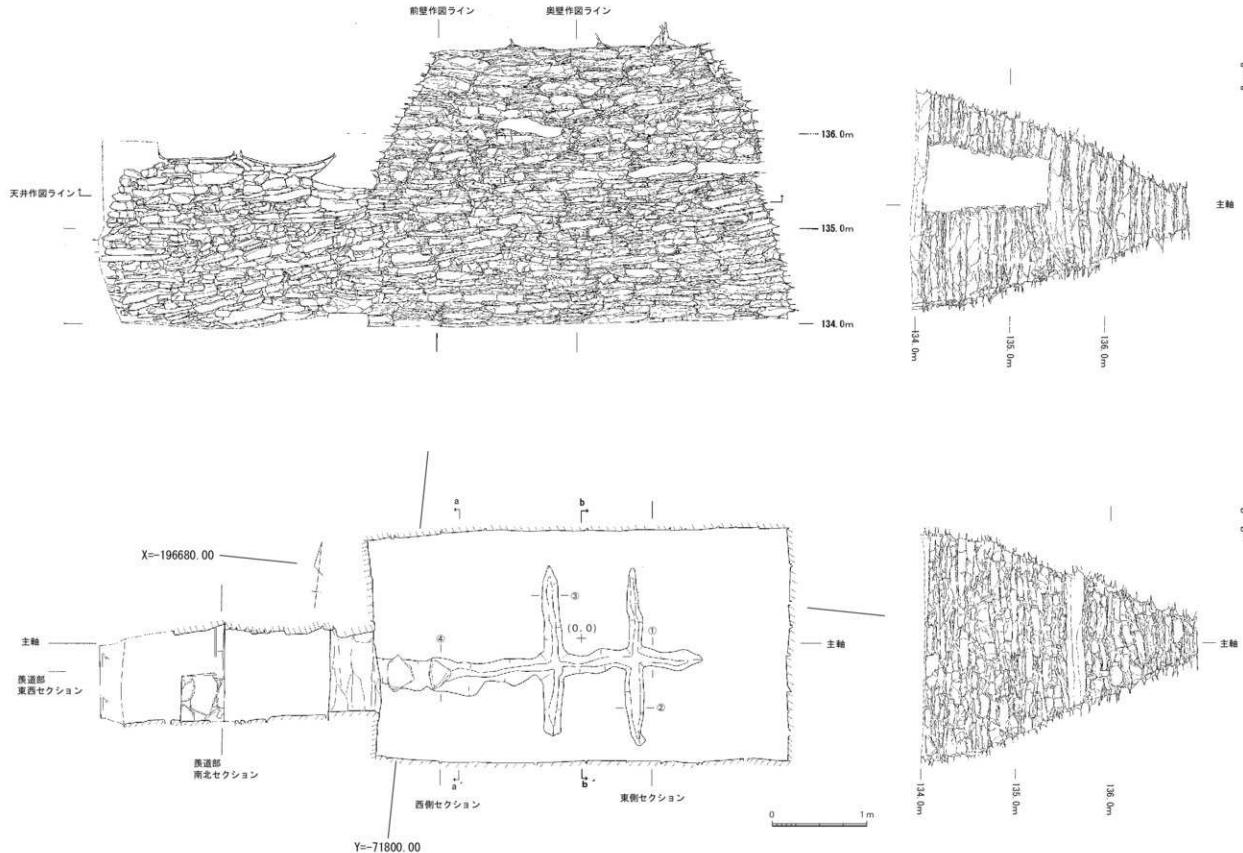


図 14 大日山 35 号墳 横穴式石室実測図 ($S = 1 / 40$)

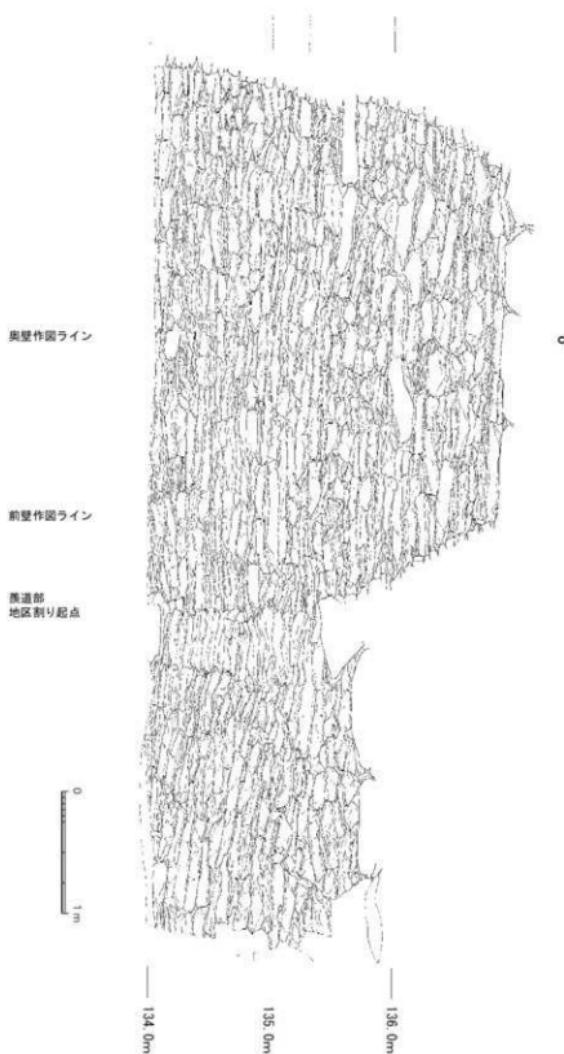


図 15 大日山 35 号墳 横穴式石室 南側壁実測図 ($S = 1 / 40$)

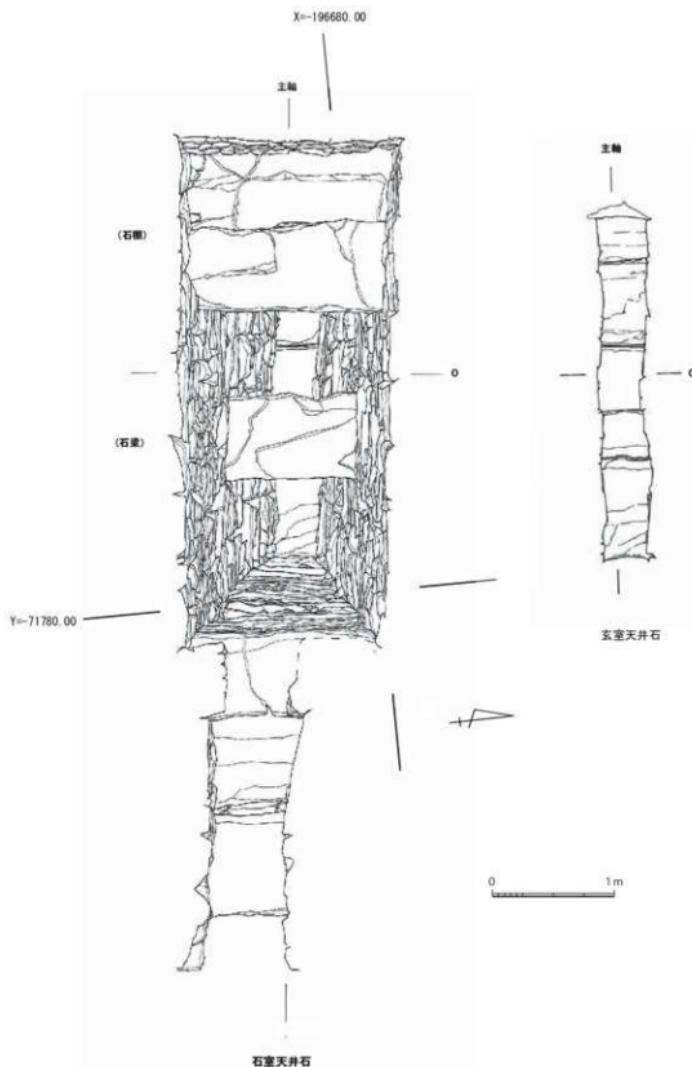


図 16 大日山 35 号墳 横穴式石室 天井石実測図 ($S = 1 / 40$)

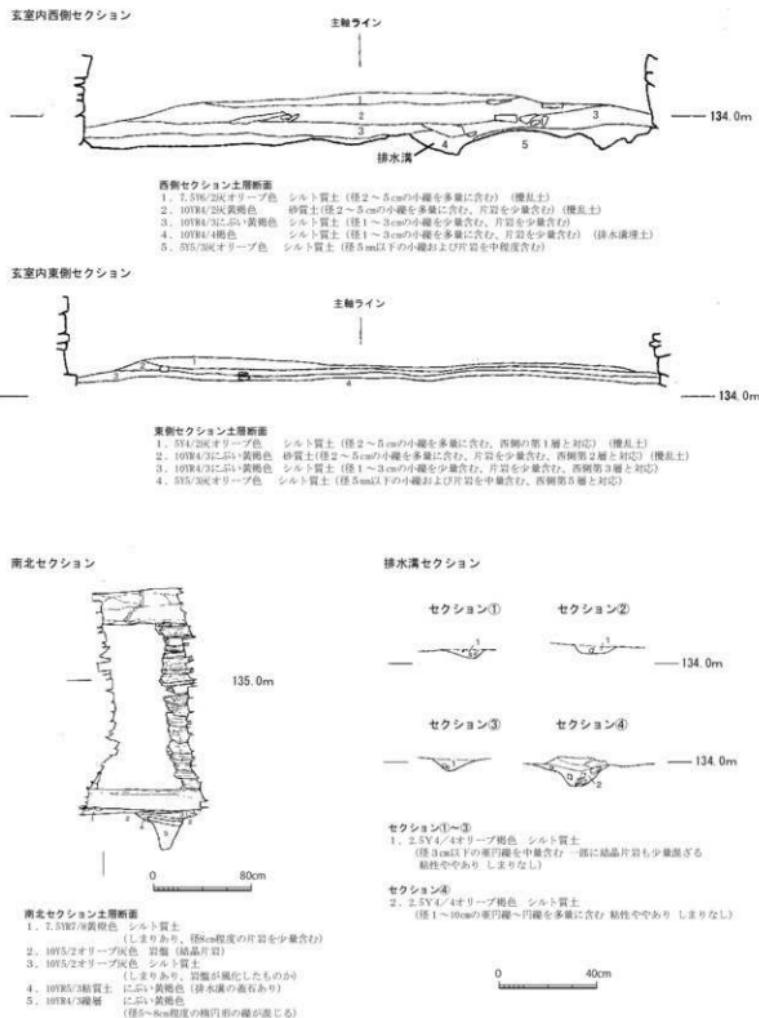


図 17 大日山 35 号墳 床面堆積土及び排水溝土層断面図 (S = 1 / 20, 1 / 40)

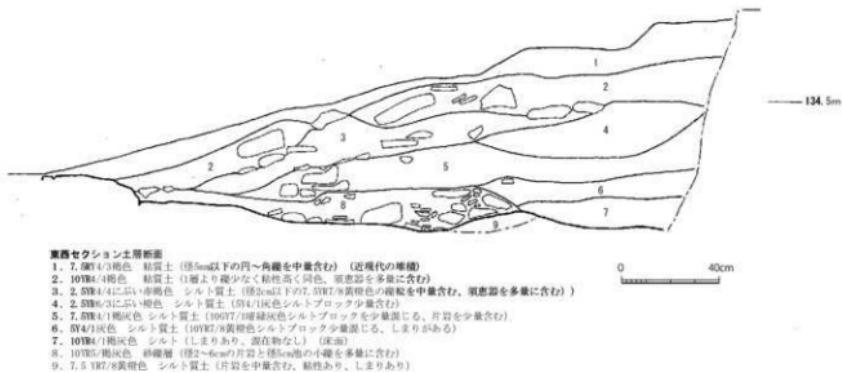


図18 漢道部東西セクション土層断面図 (S = 1 / 20)

い角度で持ち送られている。奥壁の傾斜は石棚より上で約64度、石棚より下で約70度、玄室前壁の持ち送りは約64度である。玄室天井石は4枚、漢道部は天井石が3枚である。

石室は棚及び梁を有している。石棚は玄室奥壁及び側壁に食い込む形で2枚の板石が懸架している。奥壁より一枚目の石棚は、厚さ約13cm、幅70cm以上の板石を床面から1.54mの箇所に水平に食い込ませ、2枚目の石棚は厚さ約12cm、幅約70の板石を一枚目の石棚に接して西側につくりついている。関西大学の調査時には、2枚目の石棚が1枚目の石棚より約10cm高くつくりつけられていたと報告されているが、調査時には段差はほとんど認められなかった。また2枚目石棚の下半部は石材が割れ一部が垂れ下がった状態であったため、調査後垂れ下がった部分の緊縛及び接着の保存修理事業を実施した。

石梁は、石棚と同様に両側壁に食い込むように奥壁より約2.4mの位置に、高さ1.9mの位置に厚み14cm、幅70cmの板石を水平に懸架する。

玄室前道 玄門部幅は0.84m、長さ0.58m、高さ1.3mである。長さ2.3m以上、幅約0.5mの樋石を敷き、その上に両壁を小口積みしている。玄門の床石は、玄室及び漢道部の床面より約10cm程度高いため、玄室及び漢道部との間に段差をもつ。

漢道部 漢道部は多量の土砂が流入していた。第2層及び第3層で攪乱状態の須恵器が多数出土した。床面はしまりのあるシルト層の第7面上面にあたる。床面の標高は134.0m付近で玄室の床面とほぼ同じ高さであった。

遺物 漢道部からは現在の入口から玄門にかけて土壌が堆積し、それを除去する過程で須恵器の器台や高杯が出土地したが、いずれも攪乱状態で原位置を保持するものではなかった。また、玄室及び漢道部の堆積土壌及び排水溝埋土を5mmと2mmメッシュの篩いをかけた結果、昭和30年代の10円硬貨や白磁や染付けなど現代の遺物が多数出土し、石室が古くから開口状態にあり、かなり攪乱された状況であったことが分かる。古墳時代に属するものとしては、須恵器の器台・高杯・壺・装飾付須恵器、銀製梶子玉、銀製空玉、平玉、管玉、ガラス小玉、滑石製白玉、土製丸玉、鉄織、胡蝶、鉄刀、金銅装馬具、小札、鉄製農工具、齒を検出した。排水溝埋土からガラス小玉1点と鉄製品70点が出土したことからも、出土位置が原位置を示すものではないことが分かる。

4 出土遺物

(1) 装身具

装身具は、梶子玉4点、空玉4点、平玉2点、管玉2点、ガラス小玉32点、滑石製白玉20点、土製丸玉5点が出土した。

梶子玉（1～4） 総数4点出土しており、いずれも完形である。銀製で、梶子玉の特徴である突起状の山は8つある。最大長は11.0mm、最大径は10.8mmである。厚さは0.5mm以下で非常に薄く、山部分と谷部分で一定の厚さを保っている。胴部中央には半球状の玉を接合した合わせ目が観察できる。

孔は1.3mm～2.0mmで、外側から内側に穿孔されている。穿孔の際に力がかったのか、上端と下端には面がみとめられ内側にわずかに陥没している。梶子玉の穿孔方向については、内側から外側への穿孔が基本的と指摘されているが（望月2006）、本古墳ではすべて外側から内側へ穿孔されており、製作や入手方法について検討が必要であろう。3の内部には、梶子玉同士をつなぐための銀線が遺存している。

空玉（5～8） 総数は4点、そのうち完形の個体が2点、半球状に分離した個体が2点出土している。いずれも銀製である。最大径10.2mm、高さ9.2～9.6mmである。厚さは0.5mm以下と非常に薄い。2つの半球の合わせ目となる胴部中央は、接合する際に接着剤として使用したと推測される銀蠟によるものか、わずかに厚みが増している。孔は1.2mm～1.5mmで、5は外側から内

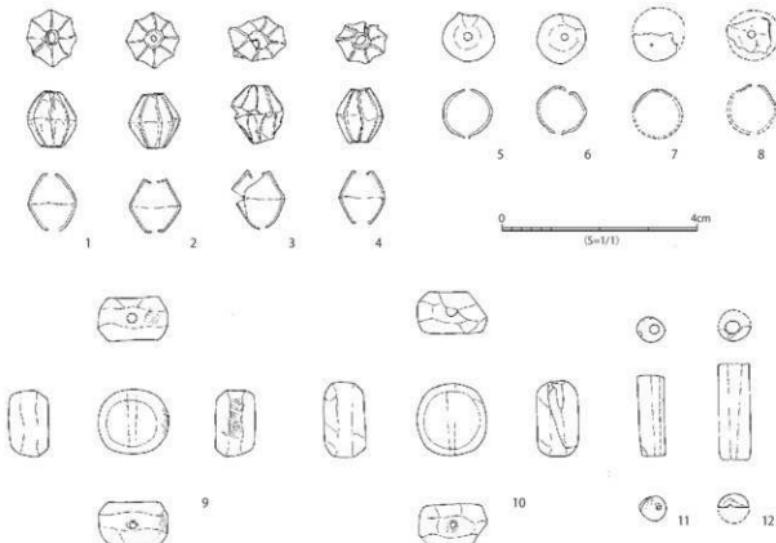


図19 大日山35号墳出土 装身具1 (S=1/1)

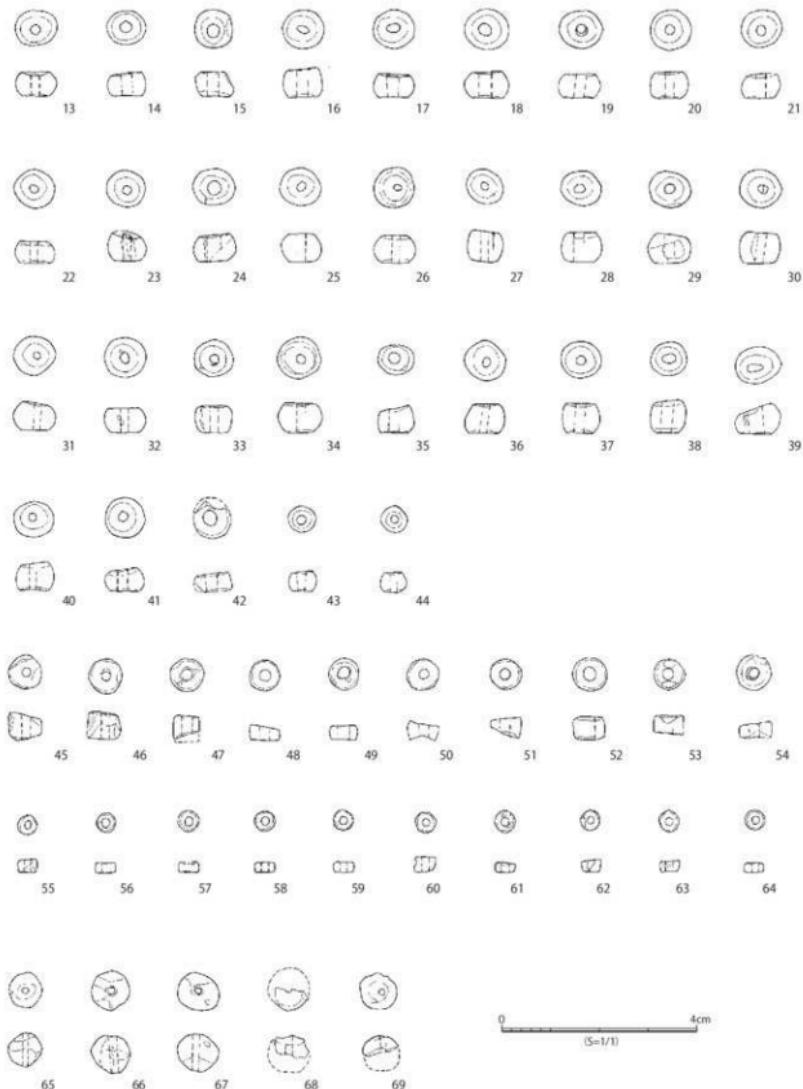


図 20 大日山 35 号墳出土 装身具 2 (S = 1 / 1)

側にむけて穿孔されている。6は上面では外側から内側にむけて穿孔しており、穿孔の際の力がかかったのか上面の孔周辺が内側に陥没している。下面は内側から外側にむけて穿孔している。孔は球の頂点からややずれた位置に穿たれている。

平玉 (9・10) 平玉は2点出土している。いずれも碧玉製である。色調は淡い緑白色を呈する。円盤状をした扁平な玉で、上下面が平坦、側面が丸みをもって作られている。9は最大径14.4mm、厚さ9.0mmで、上面の孔径は2.2mm、下面の孔径は1.3mmである。側面には細かな研磨痕が観察される。10は最大径15.1mm、厚さ8.7mmで、上面の孔径は2.0mm、下面の孔径は1.0mmである。いずれも片面穿孔で、下面の孔周辺がわずかに凹んでいる。

管玉 (11・12) 管玉は2点出土している。いずれも碧玉製である。色調は深緑色を呈する。11は完形で全長16.6mm、径6.0mm、孔径は上面2.5mm、下面0.8mmである。12は半裁されているが、全長19.7mm、径6.6mm、孔径は上面2.7mm、下面1.1mmである。穿孔はいずれも片面穿孔で、穿孔開始面と貫通面との孔径の差は大きい。12は上面中央から穿孔されているが、11は穿孔開始位置が中央からずれている。いずれも両端面には細かな研磨痕が観察される。

ガラス小玉 (13～44) 総数32点出土している。色調は紺色が27点、緑色が1点である。上下に平坦面をもつ球形を呈する。13～42は最大径7.2mm～9.3mm、高さ4.2mm～7.0mm、孔径1.6mm～2.5mmである。孔と平行にのびる気泡が確認できることから、引きのばし法によって製作されたと考える。43は最大径5.7mm、最大長4.3mm、孔径1.5mm～2.2mmでやや小さい。44は、緑色を呈し、最大径6.0mm、高さ4.5mm、孔径1.6mmである。形態は上下に平坦面をもたない球形を呈する。孔と平行してのびる気泡が確認できることから、引きのばし法によって製作されたと考える。成分分析の結果、鉛ガラスであると判明した。

滑石製臼玉 (45～64) 総数20点出土している。45～54は、色調がにぶい黄褐色～にぶい橙色で径6.3mm～7.1mm、孔径1.9mm～2.5mmである。高さは2.0mm～5.5mmとばらつきがみられる。形状は、筒形で上面と下面が平行しないものが多い。55～64は、色調がオリーブ灰色で径3.9mm～4.5mm、高さ2.0mm～3.0mm、孔径1.3mm～1.9mmである。形状はいずれも上面と下面が平行した均整な筒状を呈している。

土製丸玉 (65～69) 総数5点出土し、そのうち3点が完形である。最大径7.5mm～8.7mm、高さ6.9mm～7.5mm、孔径1.1mm～1.3mmである。色調は光沢のある黒色を呈する。土製の焼き物で、表面に煤を付着させて黒色に仕上げている。

(2) 鉄製品

鉄製品は破片で5000点以上出土したが、ほとんどが1cmに満たない小片であった。このうち器種が判明したものについて、種類ごとに記載する。

鉄刀 (70～75) 破片のうち法量のわかる6点を図化した。70は幅1.9cm、現存長3.0cm、厚さ

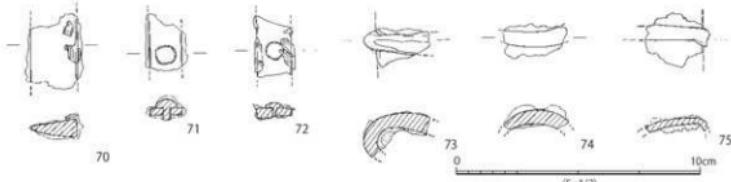


図21 大日山35号墳出土 鉄刀 (S=1/2)

7 mm の片刃である。表面に鞘の一部と思われる木質が付着している。71 は茎部で、幅 8 mm、現存長 2.3 cm、厚さ 3 mm をはかる。断面形は長方形を呈している。中央に目釘の鉢孔が穿たれている。鉢頭の直径は 9 mm である。72 も茎部で、幅 9 mm、現存長 2.5 cm、厚さ 4 mm である。断面形は長方形を呈している。中央に目釘の鉢孔が穿たれている。鉢頭の直径は 8 mm である。表面には、巻き付けられていた樹皮が一部付着している。

73 ~ 75 は、内側に木質と思われる有機質が付着している。鞘口金具の一部と考えられる。

鉄鎌 (76 ~ 174) 鉄鎌片は 500 点以上出土し、そのうち 102 点を図化した。切先の遺存するものは 56 点を数える。

平根系鎌は 1 点のみ確認できた。76 は、身部の平面形態が三角形で、断面形態は両丸造りの平根系鎌である。鎌身部長は 2.7 cm、幅 2.4 cm である。頭部から茎部にかけて撥状に開き、頭部闊で段差が認められる。

77 ~ 131 は長頭鎌である。77 ~ 83 は両刃で身部形態が三角形でわずかに逆刺部が認められる。鎌身部長は 2.6 cm ~ 3.0 cm、幅 1.1 cm である。84 ~ 89 は両刃で平面形態が三角形で逆刺部がない。鎌身部長は 2.2 cm 前後、幅 0.9 ~ 1.3 cm である。90 ~ 93 は両刃で平面形態は三角形で逆刺部の有無は不明である。94 ~ 104 は片刃で逆刺部をもたない。鎌身部の長さは 3.3 cm 前後、刃部の幅は 0.7 cm ~ 0.8 cm である。103 は裏面に木質が付着している。105 ~ 110 は片刃で逆刺部をもつ。鎌身部長は 2.9 cm ~ 3.0 cm、刃幅 0.7 cm ~ 0.8 cm である。111 ~ 131 は片刃で逆刺部の有無は不明である。刃幅は 0.7 cm ~ 0.8 cm である。129 は裏面に木質が付着している。

長頭鎌における両刃と片刃の比率は約 1 : 2 で片刃が優勢である。いずれも切先のみで、全長は不明である。

頭部闊 (132 ~ 173) は 44 点を確認した。いずれも頭部から茎部にかけてやや台形に開き、頭部闊で段差がみられる。頭部闊で棘状に突出するものは確認できない。断面はいずれも長方形である。茎部は矢柄の下に植物纖維を巻きつけた後、矢柄を装着しその上から樹皮を横方向に巻いて固定している。140・144・147・148・154・161・174 は樹皮に赤色の顔料が付着している。

出土した鎌身部と頭部闊片がすべて接合した場合とすべて接合しない場合から鉄鎌の点数を考えると、長頭鎌は最低数で 56 点、最高数で 100 点、平根系鎌は 1 点となる。

両頭金具 (175 ~ 182) 弓の両端につける弓金具と考えられる両頭金具は 8 点出土している。両端が円形で棒状の軸をもち、軸部には木質が付着している。軸部は全長を推定できるもので長さ約 2.6 cm、厚さ 0.3 cm をはかり、断面隅丸方形を呈する。

胡錐 (183 ~ 199) 胡錐金具片は合計 37 点出土し、そのうち 17 点を図化した。全長は不明であるが、幅により幅 1.8 cm、幅 1.4 cm、幅 0.8 cm の 3 種類に分類した。

183 ~ 186 は、幅 1.8 cm、厚さ 0.1 cm の鉄地金銅張金具片である。表面には左右に 1 箇所ずつ鉢孔が穿たれている。183・185 は鉢頭が残存しており、その直径は 0.4 cm で、左右の鉢間隔は 1 cm である。鉢頭には銀装が施されている。裏面には、布及び有機質が認められる。これは金具裏にあてられた布と胡錐本体の革と推測される。

187 ~ 189 は、幅 1.4 cm、厚さ 0.1 cm の鉄地金銅張金具片である。表面には左右に 1 箇所ずつ鉢孔が穿たれている。187・188 は鉢頭が残存しており、その直径は 0.4 cm で、左右の鉢間隔は 0.6 cm である。鉢頭には銀装が施されている。189 は端部が残存しており、端部にむけて台形状にすぼまり端部は直線をなしている。裏面には、布及び有機質が認められる。金具裏にあてられた布は、側端部から 1 mm ほど内側にほぼ金具に沿う形であてられている。

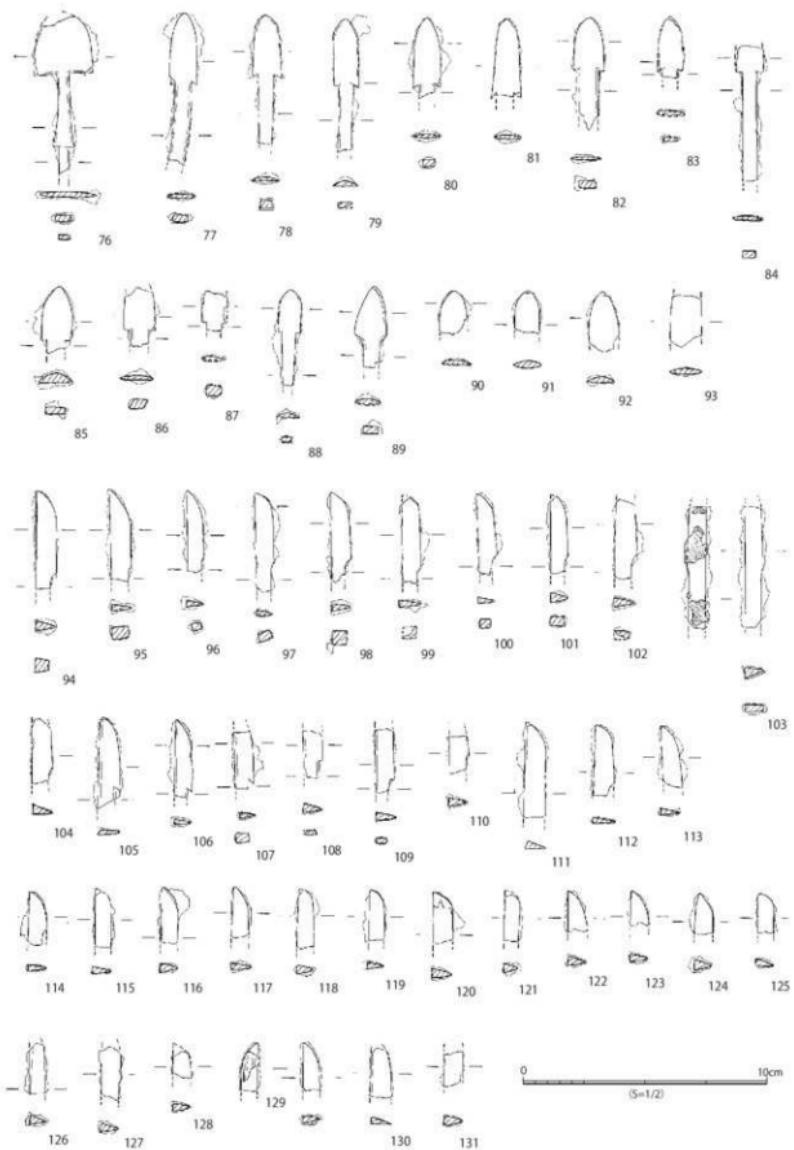


図22 大日山35号墳出土 鉄蔵1 ($S = 1/2$)

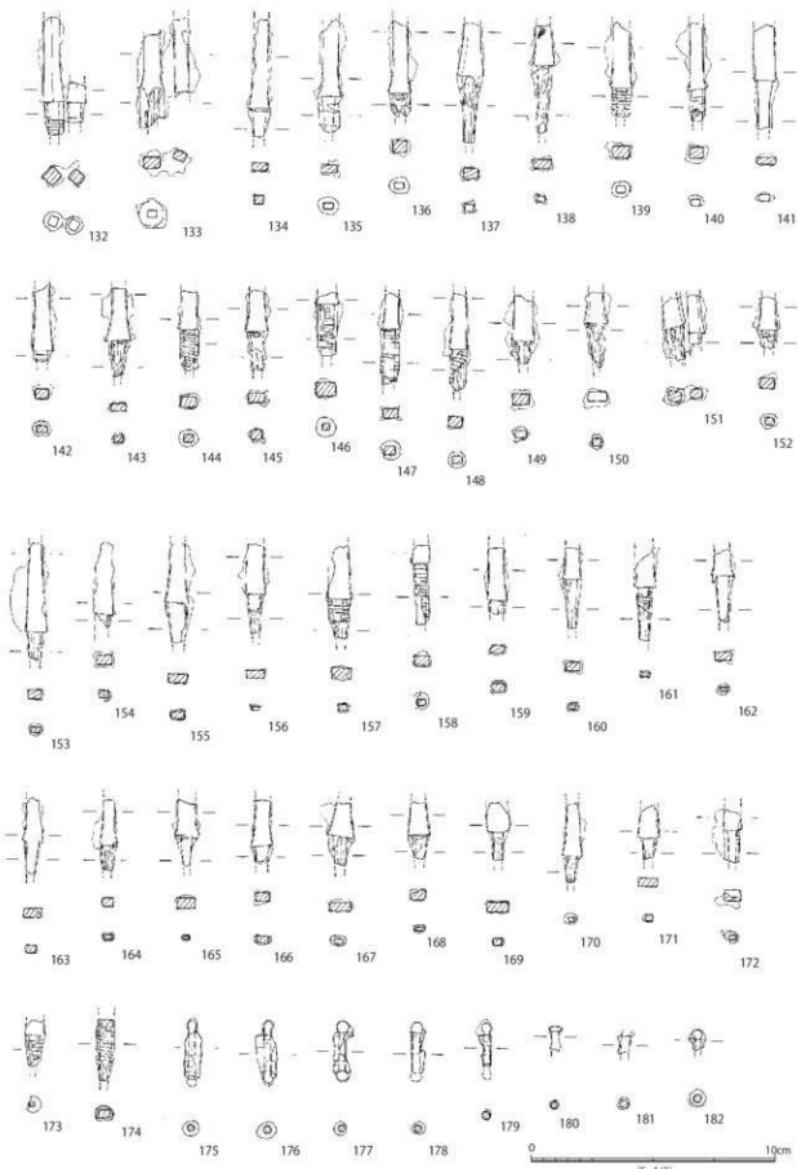


図 23 大日山 35 号墳出土 鉄器 2・両頭金具 ($S = 1 / 2$)

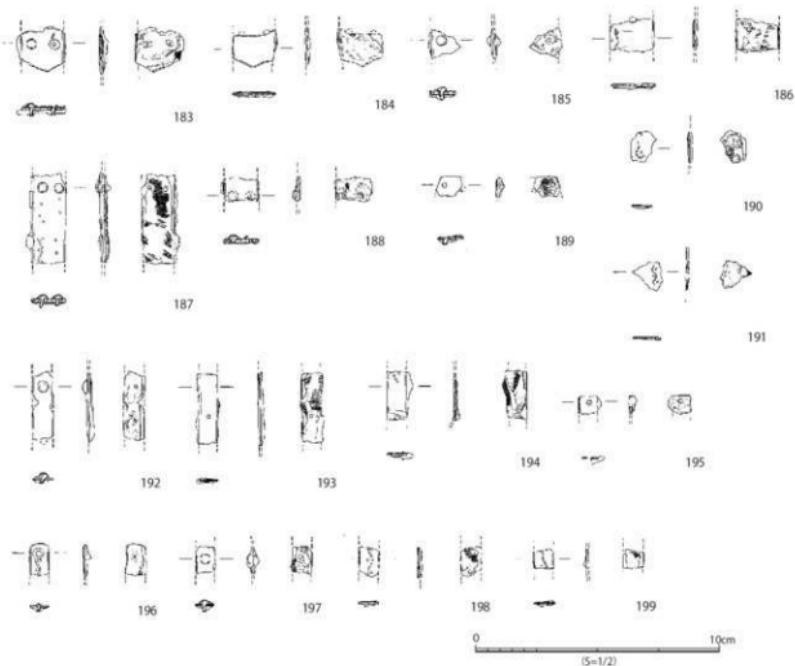


図24 大日山35号墳出土 胡鎌金具 (S = 1/2)

190・191は、現存幅1.2cmの鉄地金銅張金具片で、表面に蹴り彫り又は点打ちによる波状列点文が施されている。列点間の距離は3~4mmで、側端部から2mmの位置にある。現状で確認できていないが、文様は両側部に施されていたと推測される。183~189と形状及び特徴が類似していることから幅1.8cm、又は幅1.4cmのいづれかに属すると考えられる。183~189は表面の鋸や剥離から文様は観察できないが、同様の文様が施されていたと考えられる。

192~199は幅0.8cmの鉄地金銅張金具片である。厚さは上記の2種類と比べて薄く、厚さ0.1cmに満たない。金具中央の1箇所に鉢孔が穿たれている。192・197は鉢頭が残存しており、その直径は0.4cmである。192は鉢が約2.2cm間隔で穿たれている。鉢頭には銀装が施されている。195・196は端部で隅丸方形を呈する。193・196・198・199は、表面に蹴り彫り又は点打ちによる波状列点文がみられる。表面の鋸によって文様が確認できていない他の破片にも、全体に文様が施されていたと推定される。文様は金具片の中央部に施されている。裏面には布及び有機質が認められた。194は金具の端付近でわずかに外側にカーブしている。屈曲点には表面に浅いくぼみがあり、金具片を曲げる際にいた可能性がある。カーブが製作当初からのものであれば、断面形態がΩ形の収納金具である可能性が高い。ただし、今回出土した胡鎌金具片で屈曲がみられたのはこの1点のみで、その他はすべて平らであった。

胡鎌金具は幅で3種類に分類されるが、いずれも鉄地金銅張で鉢頭は銀装を施しており、表面

に同じ文様構成を施している。裏面の布及び有機質の形状も類似していることから、同一の胡錠の部品であると考えられる。194が折り曲げられた可能性があることから、幅0.8cmの金具が収納金具、幅1.4cmと1.8cmの金具が吊り手金具に相当すると推定される。

馬具（200～289）

①雲珠・辻金具（200～217）

200は鉄地金銅張の環状雲珠で、環状部径約7cm、側面形は下縁からわずかに膨らみをもちながらすぼまつっていく。表面には浅い沈線が2条めぐる。脚部は6脚ないし8脚で、資金具と3つの紙を打つ。紙は径0.3cmで、鉢及び資金具は銀装を施している。

環状部の裏面には、有機質が付着している。有機質は、上縁から下縁にかけて細かい筋が認められ、いわゆる貝製雲珠の特徴と似ていることから、環状部には貝が嵌め込まれていたと考えられる。201～207は、200と同一個体であると思われる。環状部裏側には同様に、貝とみられる有機質が付着していた。また、脚部裏側には、革帶の痕跡とおもわれる有機質が認められる。

208～211は、同一個体と考えられる環状辻金具または雲珠である。環状部と脚部は別造りである。脚部は、資金具が1条と中央に鉢を1つ打つ。鉢は径約0.7cmである。環状部の裏側にはわずかに有機質が認められ、特徴から貝製辻金具または貝製雲珠であったと考えられる。また、脚部の裏側には、革帶の痕跡とおもわれる有機質がみとめられる。

212～217は脚部である。215は方形の脚部で、資金具が一条と中央に鉢を穿った孔が1つみとめられる。216は半円形で鉢の痕跡は不明である。217の平面形態は不明であるが、3条の資金具と鉢を穿った孔が1つ認められる。

②資金具（218～226）

資金具は1条のもの（218・223～226）、2条一組で用いるもの（221・222）、3条一組で用いるもの（219・220）がある。

218は銀装である。幅0.2cmで絞杉状の線刻を施している。線刻が確認されたのはこの1点のみである。裏側には革と思われる有機質が認められる。223・224は内側に木質が残存している。

③革帶金具（227～234）

鉄地金銅張で、4隅に鉢を打ち中央が球形に膨らむもの（227・230）と、4つの紙を打つのみのもの（228・231）がある。平面形態はいずれも四角形で、227は幅2.6cm×2.4cm、231は幅1.9cm×2.1cmである。鉢径は0.3～0.4cmである。鋸により銀装を施しているのかは不明である。裏面には、革と思われる有機質が認められる。

234は径約1cmの半球形を呈している。

④吊金具（235～240）

235は幅1.4cmで、立開部に通す箇所は幅0.6cmである。鉢頭が欠損しているが、現状で4箇所の鉢脚を確認した。6は鉄地金銅張である。幅1.2cmで、立開部に通す箇所でも幅が狭くならず1.0cmをはかる。2列に並ぶ3つの鉢と上端中央に1つの穿孔を確認した。裏面には革とみられる有機質が認められる。237～239は遺存状態が悪く鉢を確認することができなかった。240は幅1.1cmで、立開部に通す箇所は0.5cmと狭くなる。

⑤杏葉（241～246）

241は、三葉文を構成する金銅張の縁金具片である。幅0.6cmで、2箇所に鉢を打つ。鉢は径0.3cmで銀装を施している。242・243は梢円形を構成する金銅張縁金具片である。縁金具の幅は0.4～0.6cm、径約0.4cmの鉢を0.8～0.9cm間隔に打っている。銀装を施しているかは不明である。

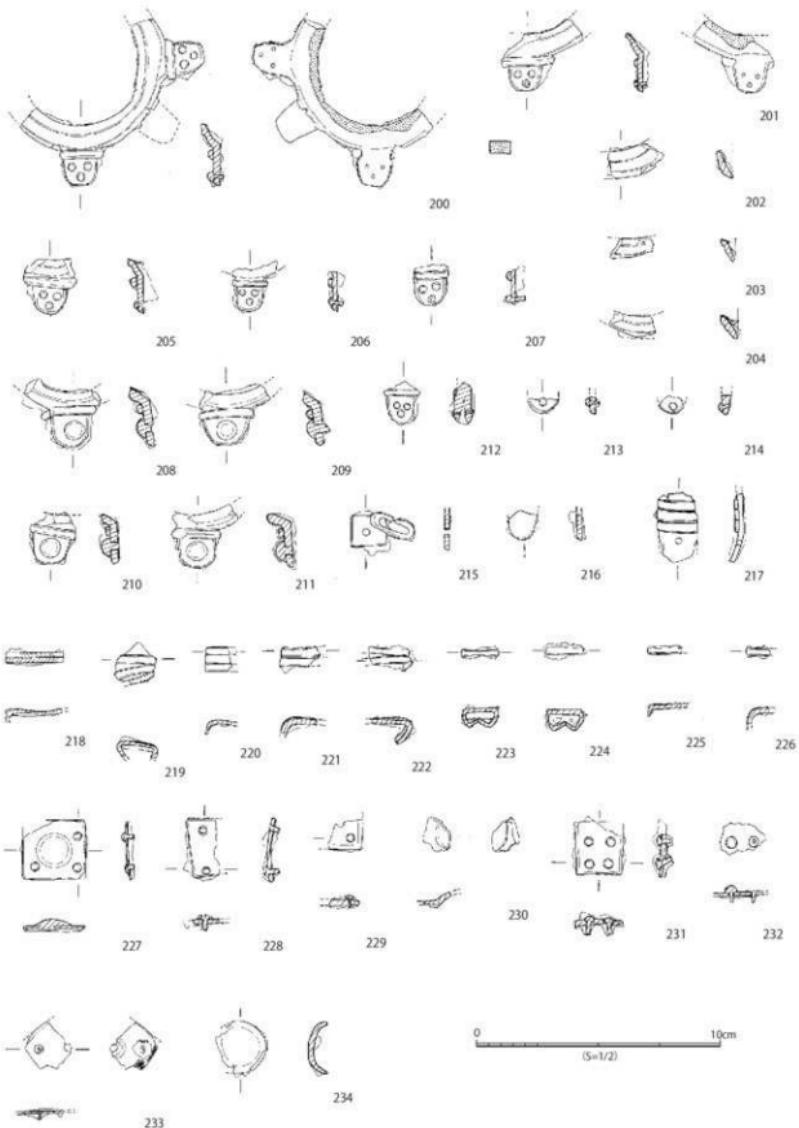
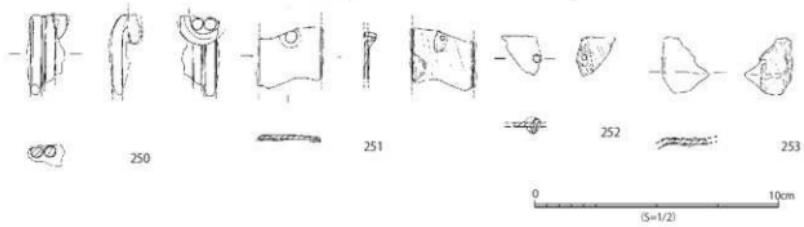
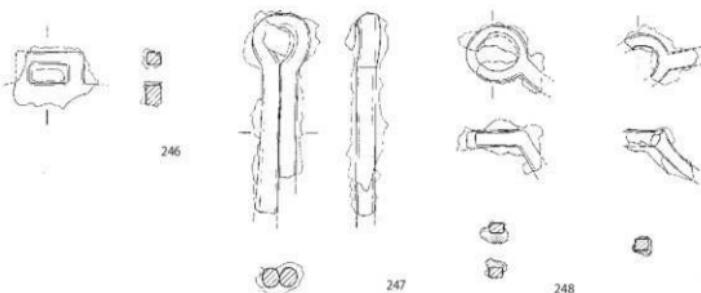
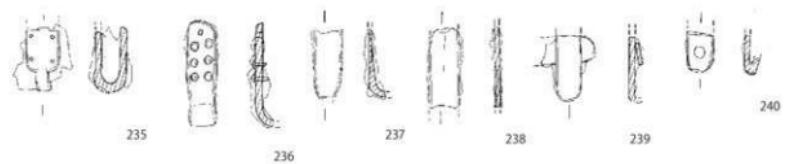


図 25 大日山 35 号墳出土 馬具 1 ($S = 1/2$)



0 10cm
(S=1/2)

図 26 大日山 35 号墳出土 馬具 2 (S = 1 / 2)

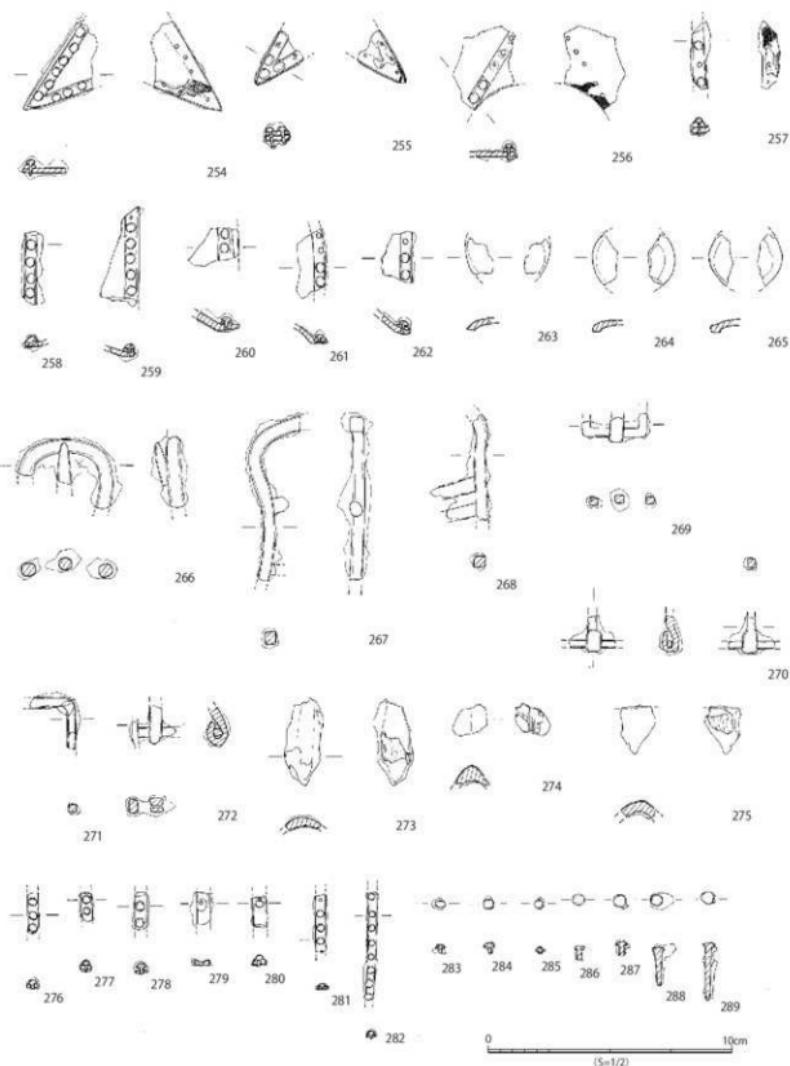


図27 大日山35号墳出土 馬具3 (S = 1/2)

る。243は表面に木質が付着している。244 線金具の一部とみられる。線金具が十字に重なる交点に鉢を1点打つ。245は鉄地金銅張で地板片と思われる。鉢頭は欠損しているが3箇所に鉢脚が残り、その上端付近にわずかに銀装がみられる。表面には線金具がはがれた痕跡が残っている。全体の形状は不明である。246は立開部片で金銅装は確認できなかった。幅2.8cm、高さ1.4cm、孔の幅1.5cm、長さ0.7cmである。杏葉の立開部であるかは不明である。

⑥轡 (247～249)

247は、引手及び銜の一部である。残存長8.2cmをはかる。断面は円形に近い形状を呈す。鉄棒を曲げてつくった環に別の鉄棒が通っている状態で、引手と銜の連結部分であると考える。248・249は引手壺で外径2.3cmと2.4cmの正円形でくの字に折れ曲がる。環の内側には有機物が付着している。形態からみて247と248・249は別の個体であることから、轡は少なくとも2セット存在していたことが推測される。

⑦鎧 (250～253)

250は鎧の吊金具である兵庫鎖の一部とみられる。鉄棒の断面は円形である。

251～253は壺鎧の一部とみられる。幅2.6cmで中央に鉢を打ち、内側には木質が付着している。

⑧鞍金具 (254～265・273～275)

254～262は鞍の穂金具片である。鉄地金銅張で、台板の周間に幅0.45cmの線金具を巡らせ、その上に直径0.4cmの鉢を密に打つ。縁から裏面には布及び木質が付着している。256は片側が弧を描いており、州浜部分にあたると思われる。州浜の下端には線金具を用いていない。

263～265は鞍の座金具である。鉄地金銅張りで、半球状の円形をなす。

273～275は覆輪の一部とみられる。鉄製で山形にカーブした内側に木質が付着している。

273は表面に黒漆と思われる付着物が認められる。覆輪とみられる破片は、図化したもの以外も含めいずれも金銅装は確認できていないことから、金銅装の穂金具が用いられた鞍とは別の鞍に付属すると考えられ、鞍が2セットあったことが推測される。

⑨鉸具 (266～272)

厚さ0.5cmで大型のもの(266～268)と、厚さ0.35cmで小型なもの(269～272)がある。271は内側に木質が付着している。

⑩線金具 (276～282)

276～282は線金具片である。276・277は幅0.5cmの線金具に鉢を0.5cm間隔に打つ。278・279は幅0.5cmの線金具に鉢を0.7cm間隔で打つ。279・280は幅0.6cmで断面が台形の線金具に鉢を打つ。281・282は幅0.4cmで厚さが0.1cmの線金具に約0.5cm間隔で鉢を打つ。鉢はいずれも鉢頭径0.4cmである。

⑪鉢 (283～289)

283～285は鉢頭が径0.4cmで半球状をなす。286は鉢頭が径0.5cmで平坦な面をもつ。287は鉢頭が径0.5cmで、一部に木質が付着する。288は鉢頭が径0.5cmで、長さ1.5cmである。289は鉢頭が径0.5cmで、長さ2.3cmである。脚部に木質が付着する。

小札 (290～333) 小札片とみられる破片は1000点以上出土したがいずれも1cm未満の破片で部位がわかるものは少ない。法量がわかるものや紐や覆輪が観察できるものを中心図化を行った。全長は不明であるが、幅及び孔により①～⑥の6種類に分類した。各類はいずれも、形状が円頭形で下縁は隅切方形をなし、断面形は両端と頭部を裏面側に曲げる「きめだし」と底部を裏面側に曲げる「打ち返し」がゆるやかにみられる。小札を結合するために用いられた紐の素材は

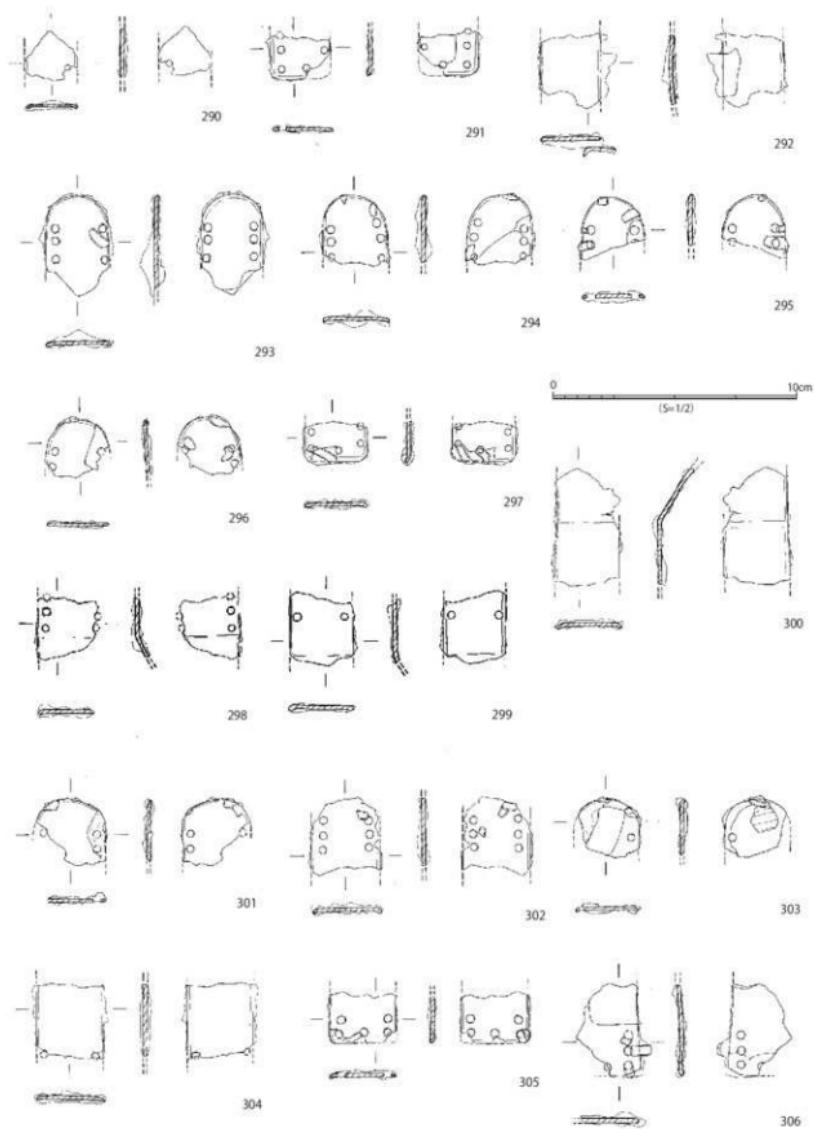


図 28 大日山 35 号墳出土 小札 1 (S = 1 / 2)

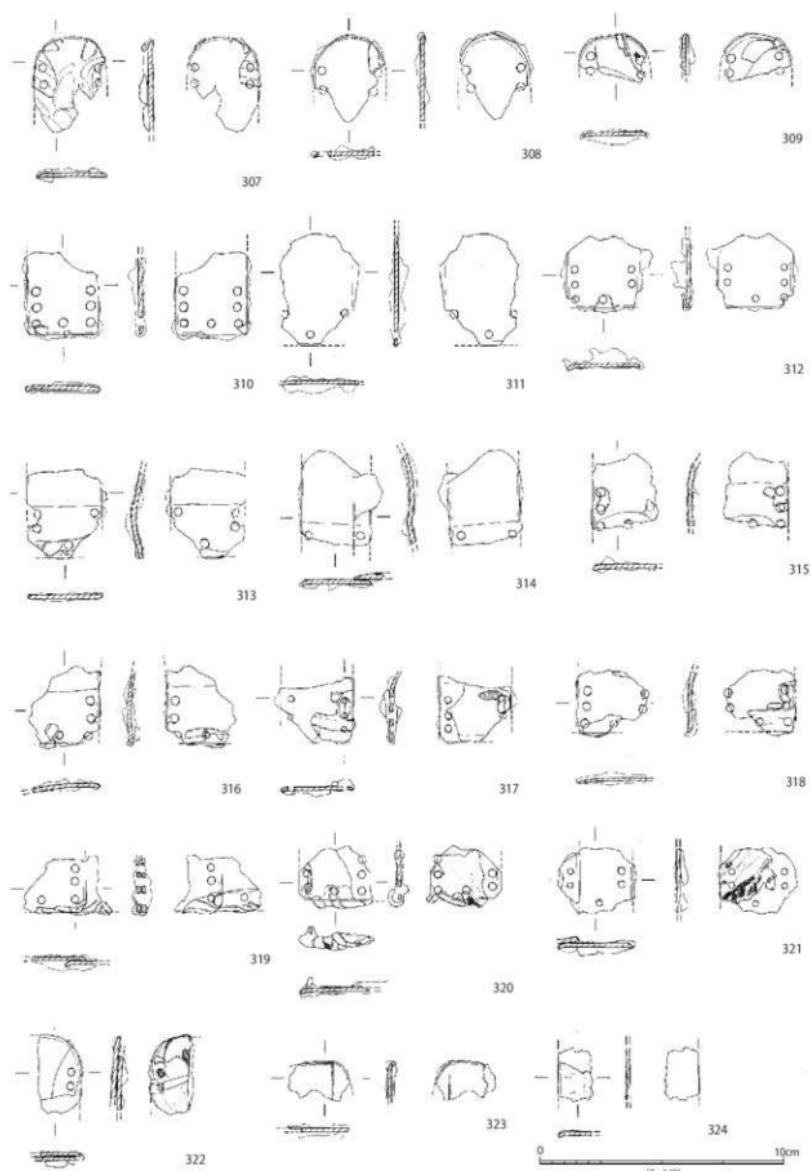


図 29 大日山 35 号墳出土 小札 2 (S = 1 / 2)

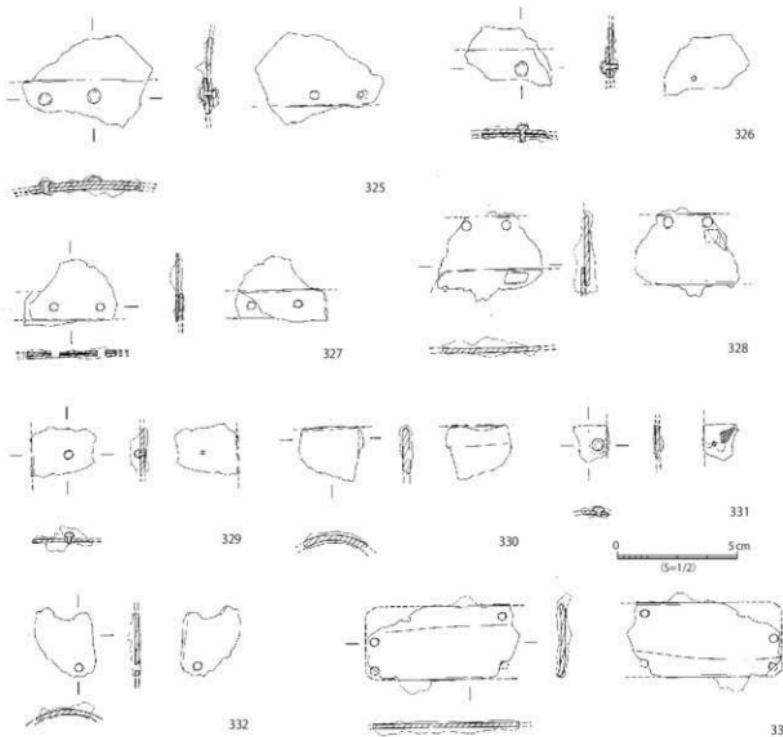


図30 大日山35号墳出土 小札3 (S=1/2)

不明であるが、縫紐、綴紐、下搦紐及び覆輪の痕跡が一部で確認できた。各段の小札を上下方向に連結する技法は確認できなかったが、小札を横方向に連結する際、紐が綴孔を一周半し表面で立取り、裏面で格子状になるように綴っている(315・317・318)。また、各段の小札の下端を横方向に固定する際は、各段の小札の下端をらせん状にくくり連結している(306)。覆輪は小札の端部を皮又は布で覆い、紐でらせん状に綴じ合わせている(297・320)。

小札の重ねは右上重ね(314・320・322)と左上重ね(306・319・321・323)を確認した。

- ① 290は幅2.1cmである。法量がわかる小札片で幅2.1cmのものはこの1点のみであった。
- ② 291・292は幅2.45cmで、下部に綴孔を4個、下搦孔を3個もつ。
- ③ 293~300は幅2.6cmである。上部に縫孔又は綴孔を6個、下部に綴孔を2個、下搦孔を3個もつ。このうち298~300は中央部で屈曲するΩ字形の腰札の可能性が高い。
- ④ 301~312は幅2.8~2.9cmである。上部に縫孔又は綴孔を6個、下部に綴孔を2個又は4個、下搦孔を3個もつ。
- ⑤ 313~318は幅3.0cmである。下部に綴孔4個、下搦孔(覆輪孔)を3個もつ。中央で緩や

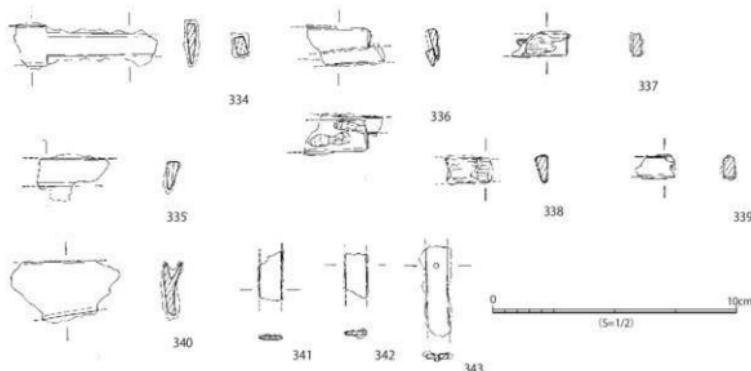


図31 大日山35号墳出土 刀子・U字形鋏先・不明鉄製品 (S = 1 / 2)

かにカーブしている。下端には覆輪とみられる革又は布が付着しており、Ω字形の楕札と推定される。319は覆輪に赤色顔料が付着していた。

⑥ 325～333は銅留青片とみられる。325・326は胴巻板又は腰巻板と地板が銅留された部位である。327・328は紙がなく穿孔のみを確認した。328は紐の痕跡がみられることから、紐で連結していた背の附属部である可能性がある。330～332の部位は不明である。

刀子 (334～339) 334は刀部～茎部である。刀部幅1.6cm、厚さ0.2cmをはかる。刀部闊は両側である。茎部は幅0.8cm、厚さ0.4cmである。335は幅1.2cmである。断面は三角形で表面に木質が付着している。336は2個体が鏽により接着している。1つは茎部端で、幅1.2cm、断面は三角形である。表面に木質が付着している。もう1個体は幅0.6cmで断面三角形を呈する。337は茎部端で幅0.9cm、厚さ0.4cmである。断面は長方形で、表面に木質が付着している。338は茎部で幅1.1cm、厚さ0.4である。断面は三角形で表面には木質が付着している。339は茎部端で、幅0.8cm、厚さ0.4cmである。断面は長方形で表面に木質が付着している。

U字形鋏先 (340) 340はU字形鋏先で、刃幅2.3cmである。

不明鉄製品 (341～343) 341～343は、幅1.0cm、厚さ0.2cmをはかる。裏面にははがれた痕跡がみられる。343は径0.15cmの銅脚を1点打つ。器種は不明である。

銅板 (344・345) 343・345は銅板である。厚さ0.1cmである。表面には波状列点文が打ち出されている。

不明木製品 (346) 不明木製品である。表面には赤色顔料が塗布されている。

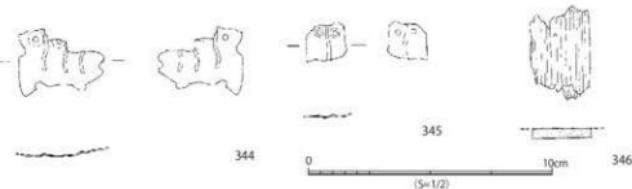


図32 大日山35号墳出土 銅板・不明木製品 (S = 1 / 2)

(3) 須恵器

須恵器は玄室から羨道部の擾乱土中から出土している。器種の内訳は、有蓋高杯・有蓋高杯蓋・高杯脚・壺・器台杯部・器台脚・装飾付須恵器の小壺・動物・環である。

347は有蓋高杯の蓋である。天井部の中央部を欠損し、口径15.9cm、残存高4.8cmである。天井部を沈線によって区画しており、櫛齒状工具による列点文を施している。天井部と口縁部の境の稜は鈍く、口縁端部は面を有する。348・349は有蓋高杯である。348は脚端部を欠損する。口径14.5cm、残存高15.3cm、杯部の受け部径17.6cm、高さ6.0cmである。脚部には長方形の透孔が3方向にあけられている。調整は内外面ともに回転によるナデ調整である。349は脚部を欠損し、口径14.4cm、残存高9.4cm、受け部径16.6cmである。口縁端部は丸みをもつ。

350～355は高杯の脚部である。350は脚端部径12.2cm、残存高10.8cmである。透孔は長方形である。351は脚端部径12.0cm、残存高10.4cmである。透孔は長方形のものが3方向にあけられている。調整は回転ナデ調整である。352は脚端部径13.2cm、残存高8cmである。長方形の透孔を有する。脚端部は丸みをもつ。焼成は良好であり、色調は灰色である。調整は内外面ともに回転ナデである。353は脚端部径14cm、残存高12cmである。にぶい回線によって区画されており、下から2・3段目に波状文及び透孔がある。透孔は上段が長方形、下段が三角形である。脚端部は内湾しており、面をもっている。調整は波状文がある場所以外は回転によるナデ調整が確認できる。焼成は良好であり、色調は灰色である。354は残存高11.3cmである。回線によって少なくとも3段に分けられ、中段に波状文、上段・中段に透孔があけられている。透孔は上段が長方形、中段が三角形であり、ともに3方向である。自然釉が濃く付着している。355は脚端部径9.6cm、残存高11.2cmである。長方形透孔は3方向である。焼成は良好であり、色調は黄灰色である。

356は壺の口縁部の破片である。口径22.4cm、残存高6cmである。口縁部の端部は断面が菱形を呈する。口縁端部付近に波状文がめぐる。焼成は良好である、色調は暗灰黄色の自然釉が濃く付着しており、ほかの個体とは色調の点で異なっている。

357・358は器台の杯部である。357は口径27.2cm、残存高9.6cmである。口縁端部は外湾して開き、端部は広い面を持つ。2条1組のにぶい突線によって区画された文様帶には波状文がめぐっている。突線より下半はタタキによって成形しており、外面に格子タタキ目、内面に同心円状の当て

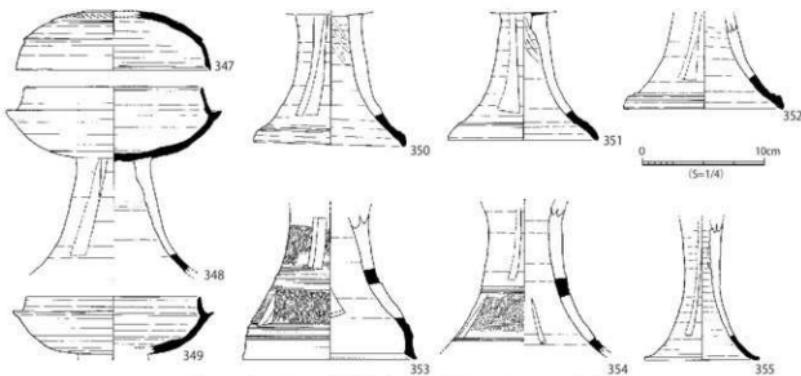


図33 大日山35号墳出土 須恵器1 (S = 1 / 4)

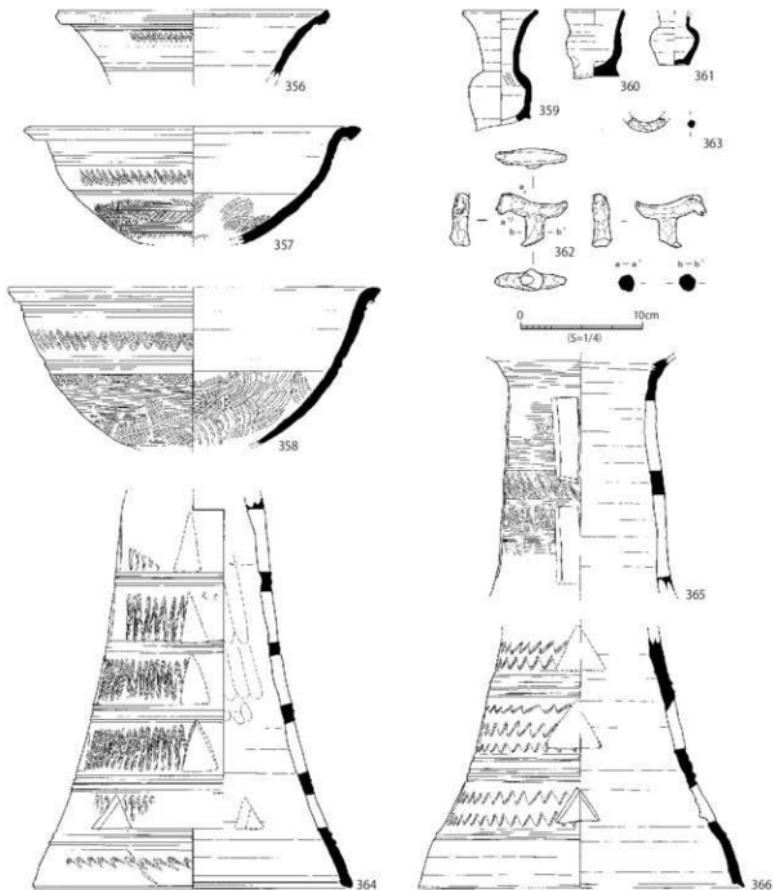


図34 大日山35号墳出土 須恵器2 (S = 1/4)

具痕が確認できる。外面のタタキ目はカキメ調整により一部が消されている。焼成は良好であり、色調は黄灰色である。358は口径30.8cm、残存高12.8cmである。口縁部の直下に突線を有し、端部は丸みをもつ。2条1組のにぶい突線による文様帯があり、その中に波状文がめぐる。下部はタタキ成形であり、外面に格子タタキ目、内面に同心円状の当て具痕がのこる。外面のタタキ目のあとにはカキメが施される。

359～361は装飾付須恵器の小型の壺と考えられる。359は口径6cm、器高10cm、頸部高5cmである。回転によるナデによって成形されているが、本体に接着する箇所に粘土をつぎたしてお

り、平らではない。底には焼成前に孔があけられていたことが判断できる。焼成は良好であり、色調は灰色である。360は口径4.8cm、残存高5.6cmである。口縁部と胴部の屈曲は明瞭ではなく、にぶく突線がめぐる。焼成は良好であり、色調は灰色である。361は残存高4.0cm、胴部の最大径4cmを測る。焼成は良好であり、色調は灰色である。

362は装飾付須恵器の動物像である。残存高4.3cm、体長5.9cm、幅1.4cmを測る。厚さ1.4cmの柱状の脚の上に胴体がある。顔は目と口があるが、口は上半部を欠損している。耳もしくは角の下部が残存している。装飾付須恵器本体との接着部は剥離痕がみられ、体はやや傾く。色調は灰色である。363は装飾付須恵器の装飾の環と考えられる。厚さ8mm、残存長3.2cmである。

364～366は器台の脚部である。364は脚端部径26cm、残存高32.0cmである。2条1組の突線によって6段に区画されており、各段に波状文がある。透孔は下から2～6段目にあけられており、それぞれ三角形透であり、4方向である。365は残存高19.2cmである。長方形の透孔が垂直に2段あいている。外面にはカキメが全体的にめぐっており、その上から波状文が4段確認できる。366は脚端部径26.5cm、残存高20.8cmである。にぶい突線によって少なくとも4段に区画しており、下から2～4段目に波状文がめぐっている。透孔は三角形のものが下から2段目～4段目に4方向あけられている。脚端部は内湾しており、端部はナデによって面を有している。焼成は良好であるが、色調は灰白色を呈する。

(4) その他の遺物

上述の遺物のほか、玄室奥壁N E 8区の排水溝上面清掃時及びNW 7区の第3層から成人の歯がそれぞれ1点出土している。

5まとめ

大日山35号墳の埋葬施設は、墳丘主軸に直交して後円部に築かれた両袖の横穴式石室である。結晶片岩の板石を小口状に積み上げ持ち送り式に構築し、2本の石棚と1本の石梁をもつ。石梁は水平梁である。玄室・玄室前道・羨道からなり、玄室長4.33m、玄室幅2.42m、

玄室高2.85m、玄室前道幅1.36mをはかる。玄室の平面プランは、玄室長が幅の約2倍になる長方形で、羨道部は玄室の主軸より南側につき、右片袖傾向にある。床面は玄室内に玉石が敷設されており、床面下部には排水溝を施している。排水溝は玄室主軸からやや南側に主軸と併行に延び、2箇所で南北に延びる溝へと分岐している。排水溝内は玉石が充填され、結晶片岩の板石を蓋石として用いた。排水溝は玄室奥壁側から羨道部にかけて傾斜をもって設置されていた。ただし、玄室の床面と羨道の床面はほぼ同じ高さであった。

石室にみられる特徴は、初期の岩橋型横穴式石室の特徴に合致するものである。

石室内の出土遺物は、原位置は不明であるが、内容・量とともに豊富であった。

装身具では、銀製梶子玉・銀製空玉・碧玉製平玉・碧玉製管玉・ガラス製小玉・滑石製白玉・土製丸玉が検出された。

鉄製品は、武具では鉄刀・鉄鎌・弓金具・胡錆・小札甲と銛留胄、馬具では、貝製環状雲珠、貝製環状辻金具、革帶金具、三葉文楕円形杏葉・引手、壺鍔、鞍金具（礪金具、鞍金具）、農工具では刀子やU字形鋸先が検出された。馬具はその多くが鉄地金銅張を施すものであった。また、



写真3 NE 8区出土歯

鞍は鉄地金銅張の穢金具を持つものと、鉄製の覆輪を持つものがあり、引手も2種類確認された。このことより2セットの馬具が副葬されていたことが想定される。ただし、これが追葬を示すものであるかは不明である。装身具及び鉄製品の特徴は、古墳時代後期を示すものであった。

須恵器は、有蓋高杯、有蓋高杯蓋、壺、器台、装飾付須恵器の小型壺・動物・環が出土した。その形態的特徴から須恵器型式でいうとMT15～TK10型式期に相当する。

墳丘の出土遺物（埴輪・須恵器）についてはすでに報告済みであるが（『大日山35号墳発掘調査報告書—特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書2-1』）、それらが示す時期的特徴も石室内と一致するものであり、大日山35号墳が6世紀前半に築造されたことを示している。

今回の発掘調査により、大日山35号墳が基壇を含めた全長105mを測る岩橋千塚古墳群内で最大規模の前方後円墳であり、墳丘の東西造出上から質・量ともに豊富な形象埴輪群が出土したことによると加えて、横穴式石室から豊富な副葬品が出土したことは、紀ノ川流域における6世紀前半の首長墳の実態を明らかにし、ひいては岩橋千塚古墳群全体を理解する大きな手がかりとなつた。

この調査成果を活かし、特別史跡岩橋千塚古墳群の保存・活用策を検討していくことは、残された大きな課題として今後も真摯に取り組んでいきたい。

参考文献

- 勝田良太郎 1933「大日ノ古墳」『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告』12
内山敏行 1998「古墳時代の櫛と杏葉の変遷」「黄金に魅せられた倭人たち」島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
内山敏行 2000「保渡田八幡塚古墳の小札甲」『保渡田八幡塚古墳 史跡保渡田古墳群 八幡塚古墳 保存整備事業報告書
調査編』群馬町教育委員会
内山敏行 2013「**④馬具**」「古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年」同成社
大賀克彦 2009「山陰系玉類の基礎的研究」「出雲玉作の特質に関する研究—古代出雲における玉作の研究III」島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
坂本美夫 1985「考古学ライブラリー34 馬具」ニュー・サイエンス社
閑 義則 1986「古墳時代後期鐵鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 古墳文化研究会
杉山秀宏 2003「古墳時代の鉄鏃」『考古資料大觀』第7巻
田辺昭三 1981「陶色古窯址群I」平安学園考古クラブ
土屋隆史 2011「古墳時代における胡錐金具の変遷とその特質—朝鮮半島南部・日本列島出土資料を中心に—」『古文化談義』九州古文化研究会
豊島直博 2003「後期古墳出土铁鏃の地域性と層属性」「文化財と歴史学」独立行政法人文化財研究所 泰良文化財研究所
初村武寛 2011「古墳時代中期における小札甲の変遷」「古代学研究』192 古代学研究会
藤井幸司 2003「大日山35号墳の調査成果」『日本考古学』第19号 日本考古学会
松浦宇宙哲 2005「三葉文櫛円形杏葉の編年と分析—金銅装馬具にみる多元的流通ルートの可能性」『井ノ内稻荷塚古墳の研究』大阪大学稻荷塚古墳発掘調査団
宮代栄一 1996「古墳時代の金属装駒の研究—鉄地金銅装駒を中心に—」『日本考古学』第3号
宮代栄一 1998「金具と雲珠・辻金具の変遷」「黄金に魅せられた倭人たち」島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
宮代栄一 2010「有機質の鉢ないし座を嵌め込んだと考えられる雲珠・辻金具について—古墳時代馬具研究における微細な有機質痕跡の観察方をめぐる一考察」『九州考古学』九州考古学会
水野敏典 2013「**⑤鉄鏃**」「古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年」同成社
望月誠子 2006「(4) 装身具」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』川西市教育委員会
大阪大学稻荷塚古墳発掘調査団 2005「井ノ内稻荷塚古墳の研究」
川西市教育委員会 2006「勝福寺古墳」
関西大学文学部考古学研究室 1967「岩橋千塚」
高槻市立今城古代歴史館 2012「よみがえる古代の焼き一副葬品にみる今城塚古墳の時代—」
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 2010「鉄製武器の流通と初期国家形成」
奈良県立橿原考古学研究所 1993「斑塙 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書」H5
向日市教育委員会 1998「物集車塚」
和歌山県教育委員会 2013「大日山35号墳発掘調査報告書—特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書2-1」

表1 大日山35号墳石室出土装身具観察表

No.	図版番号	種類	材質	最大径 (mm)	最大長 (mm)	上面孔径 (mm)	下面孔径 (mm)	重量 (g)	色調	残存率 (%)	出土位置 (石室内グリッド)	備考
1	図版12	楕子玉	銀製	10.8	11.0	2	2	0.7	銀	100	NE2 /1~3層	突起は8山。
2	図版12	楕子玉	銀製	10.5	10.8	1.3	1.3	0.68	銀	100	NW2 /3層	突起は8山。
3	図版12	楕子玉	銀製	11.2	11.0	1.7	1.3	0.94	銀	100	NE6 /1~3層	突起は8山。 慣れて合わせ目 が開いている。 内部に遊線が残 存。
4	図版12	楕子玉	銀製	9.5	11.0	2.1	3.4	0.62	銀	100	NW12 /1~3層	突起は8山。 慣れてている。
5	図版12	空玉	銀製	10.2	9.2	1.5	1.5	0.67	銀	100	NW4 /2層	
6	図版12	空玉	銀製	10.2	9.6	1.2	0.9	0.79	銀	100	排水溝 /埋土	
7	図版12	空玉	銀製	—	—	—	—	0.15	銀	20	SW10 /1~3層	半球の一部
8	図版12	空玉	銀製	—	—	1.2	—	0.09	銀	40	NE6 /1~3層	半球の一部
9	図版12	平玉	碧玉	14.4	9.0	2.2	1.3	2.63	薄い緑色	100	隧道部3 片面穿孔	
10	図版12	平玉	碧玉	15.1	8.7	2	1	2.57	薄い緑色	80	NW2 /3層	片面穿孔
11	図版12	管玉	碧玉	6	16.6	2.5	0.8	1.11	深緑色	100	SW9 /3層	片面穿孔
12	図版12	管玉	碧玉	6.6	19.7	2.7	1.1	0.68	深緑色	50	SE7 /3層	片面穿孔
13	図版12	小玉	ガラス	8.4	5.5	1.92	1.88	0.56	緑色透明	100	NE9 /1~3層	
14	図版12	小玉	ガラス	7.9	5.5	2.18	1.58	0.48	緑色透明	100	NE7 /1~3層	
15	図版12	小玉	ガラス	8	5.5	2.86	2.85	0.49	緑色透明	100	NE8 /2層	
16	図版12	小玉	ガラス	8.8	6.4	2.17	1.47	0.67	緑色透明	100	NE8 /3層	楕円形の孔
17	図版12	小玉	ガラス	8.6	5.4	2.34	2.05	0.57	緑色透明	100	NE9 /1~3層	楕円形の孔
18	図版12	小玉	ガラス	9.3	5.5	2.2	1.8	0.67	緑色透明	100	NE9 /1~3層	
19	図版12	小玉	ガラス	8.8	5.2	1.6	2	0.69	緑色透明	100	NE9 /1~3層	
20	図版12	小玉	ガラス	8.3	5.7	2.2	1.84	0.53	緑色透明	100	NE9 /1~3層	
21	図版12	小玉	ガラス	8.4	5.0	1.89	2.24	0.48	緑色透明	100	SE2 /3層	
22	図版12	小玉	ガラス	8	4.4	2.21	2.03	0.61	緑色透明	100	SW7 /1~3層	
23	図版12	小玉	ガラス	7.9	6.0	2.21	2.21	0.51	緑色透明	100	SE4 /1~3層	
24	図版12	小玉	ガラス	8.5	5.5	2.86	2.91	0.51	緑色透明	100	SE6 /3層	
25	図版12	小玉	ガラス	8.4	5.6	1.89	1.77	0.55	緑色透明	100	NW4/3層	
26	図版12	小玉	ガラス	8.5	5.7	1.66	1.72	0.61	緑色透明	100	NW7 /1~3層	
27	図版12	小玉	ガラス	7.6	6.6	1.73	1.87	0.54	緑色透明	100	NW8 /1~3層	
28	図版12	小玉	ガラス	8.3	6.0	1.72	1.66	0.54	緑色透明	100	NW14 /1~3層	
29	図版12	小玉	ガラス	8.7	5.5	2.2	2.5	0.54	緑色透明	100	SW9 /3層	
30	図版12	小玉	ガラス	8.4	6.1	2.12	2.19	0.61	緑色透明	100	SW9 /3層	
31	図版12	小玉	ガラス	8.4	5.9	1.68	1.64	0.58	緑色透明	100	SW9 /3層	
32	図版12	小玉	ガラス	8.5	5.2	2.01	1.89	0.58	緑色透明	100	SW9 /3層	
33	図版12	小玉	ガラス	7.9	5.9	1.89	2.01	0.55	緑色透明	100	SW9 /3層	
34	図版12	小玉	ガラス	8.9	6.0	2.04	2.11	0.69	緑色透明	100	SW4 /3層	
35	図版12	小玉	ガラス	7.4	5.8	2.21	1.75	0.44	緑色透明	100	SW7 /1~3層	

No.	図版番号	種類	材質	最大径 (mm)	最大長 (mm)	上面孔 径(mm)	下面孔 径(mm)	重量 (g)	色調	残存 率 (%)	出土位置 (石室内グリッド)	備考
36	図版12	小玉	ガラス	8.3	6.1	2.04	2.11	0.69	緑色透明	100	S88 /1~2層	
37	図版12	小玉	ガラス	7.7	6.6	1.72	1.66	0.63	緑色透明	100	SW10 /1~3層	
38	図版12	小玉	ガラス	7.5	6.7	2.46	2.34	0.55	緑色透明	100	SW10 /1~3層	
39	図版12	小玉	ガラス	9.2	6.7	3.02	1.26	0.62	緑色透明	100	SW10 /1~3層	橢円形の孔
40	図版12	小玉	ガラス	8.4	6.2	1.59	1.97	0.6	緑色透明	100	SW11 /1~3層	
41	図版12	小玉	ガラス	8.4	5.2	1.26	3.02	0.56	緑色透明	100	SW15 /1~3層	
42	図版12	小玉	ガラス	8.5	4.2	2.5	3.22	0.34	緑色透明	80	玄墨 /5層上面	一部欠損
43	図版12	小玉	ガラス	5.7	4.3	1.5	2.3	0.2	緑色透明	100	NE7 /1~3層	
44	図版12	小玉	鈎ガラス	5.9	4.3	1.67	1.6	0.22	緑色	100	不明	
45	図版12	白玉	滑石	7.1	5.5	1.9	1.9	0.42	7.5W6/2K黒 色	100	SW4 /1層	
46	図版12	白玉	滑石	6.9	5.4	1.9	1.9	0.41	7.5W6/3Lに赤 い褐色	100	SW4 /3層	
47	図版12	白玉	滑石	7	4.6	2	—	0.31	2.5W6/1灰白色 ~7.5W6/3Lに赤 い褐色	80	NE7 /1~3層	下端部欠損
48	図版12	白玉	滑石	6.7	3.2	2.2	2.2	0.23	7.5W6/1灰白 色~2W7/4に赤 い褐色	100	渠道地区5 /7~9層	
49	図版12	白玉	滑石	6.7	3.3	2.4	2.4	0.22	10W8E/3K白 色~7.5W7/6橙 色	100	NE6 /3層	
50	図版12	白玉	滑石	6.6	3.8	1.7	—	0.21	10W8E/4Lに赤 い褐色	90	SW1 /3層	
51	図版12	白玉	滑石	6.3	4.6	2	2	0.21	10W8E/2K白 色	100	SW14 /3層	
52	図版12	白玉	滑石	7	5.2	2.5	2.5	0.21	10W8E/1灰白色	100	SE2 /3層	
53	図版12	白玉	滑石	6.6	4.2	2.1	2.1	0.15	2.5W7/2K黒 色	100	SE2 /3層	
54	図版12	白玉	滑石	7	3.5	2.3	2.3	0.15	7.5T7/1灰白色	90	SW6 /3層	
55	図版12	白玉	滑石	4.2	2.5	1.9	1.9	0.06	10W8E/3Lに赤 い褐色	100	SW7 /1~3層	小型
56	図版12	白玉	滑石	3.9	2.3	1.4	1.4	0.04	10W8E/2Lに赤 い褐色	100	NW9 /1~3層	小型
57	図版12	白玉	滑石	4.5	2.2	1.8	1.8	0.06	10W8E/2K黒 色	100	SE7 /1~3層	小型
58	図版12	白玉	滑石	4.1	2.2	1.4	14	0.07	10T7/1灰白色	100	NE2 /2層	小型
59	図版12	白玉	滑石	4.1	2.0	1.6	1.6	0.07	2.5G7E/1オ リーブ灰白色	100	SW1 /1~2層	小型
60	図版12	白玉	滑石	4.2	3.0	1.7	1.7	0.11	2.5W6/1灰白色	90	SW1 /1層	小型
61	図版12	白玉	滑石	4.1	2.0	1.7	1.7	0.06	3G7E/1オリー ブ灰白色	100	SW1 /1層	小型
62	図版12	白玉	滑石	3.9	2.5	1.3	1.3	0.07	2.5W6E/1オ リーブ灰白色	100	SW1 /1層	小型
63	図版12	白玉	滑石	4.1	2.1	1.6	1.6	0.06	2.5G7E/1灰白 色	100	SW1 /1層	小型
64	図版12	白玉	滑石	4.1	2.2	1.7	1.7	0.05	3G7E/1オリー ブ灰白色	100	NE7 /1~3層	小型
65	図版12	丸玉	土製	7.5	7.0	1.1	1.1	0.33	黒色	100	SW4 /3層	
66	図版12	丸玉	土製	8	6.9	1.5	1.5	0.41	黒色	100	NW15 /1~3層	
67	図版12	丸玉	土製	8.7	7.5	1.3	1.3	0.4	黒色	100	SW4 /3層	
68	図版12	丸玉	土製	-	3.5	1.1	-	0.11	黒色	30	NE8 /3層	
69	図版12	丸玉	土製	7.7	4.5	1.1	-	0.17	黒色	25	SW4 /2層	下半部欠損

表2 大日山35号墳石室出土鉄製品観察表

No.	図版番号	器種	法量(いずれも破片のため、完形・破片をとわず現況の法量を記載。)	備考	出土位置(石室内グリッド)
70	図版13	鉄刀	長さ3.1cm、幅1.9cm、厚0.8cm	刃部、表面に木質付着。	NW10
71	図版13	鉄刀	長さ2.4cm、幅1.5cm、厚0.5cm	茎部、中央に頭部径0.85cmの新(目釘?)を1個うつ。	SW9
72	図版13	鉄刀	長さ2.5cm、幅1.4cm、厚0.4cm	茎部、中央に頭部径0.7cmの新(目釘?)を1個うつ。表面に植物纖維を巻き付けた鉄頭おび木質付着あり。	SW9
73	図版13	鉄刀	長さ2.2cm	内側に木質付着。鞘口部か。	玄室排水溝
74	図版13	鉄刀	長さ1.0cm	内側に木質付着。鞘口部か。	SW9
75	図版13	鉄刀	長さ1.7cm	内側に木質付着。鞘口部か。	SW4
76	図版13	鉄鎌	鍔身長2.7cm、幅2.4cm、厚0.2cm 頭部長3.0cm、幅0.6cm、厚0.25cm 茎部長2.2cm、幅0.4cm、厚0.2cm	平根系鎌。鍔身形態は三角形。頭部闊は台形状に広がる。	衛部地区①、N EA、NEB
77	図版13	鉄鎌	鍔身部長3.0cm、幅1.1cm、厚0.2cm 頭部長3.4cm、幅0.6cm、厚0.3cm	両刃。平面三角形で逆部をもつ。丸丸造。	NEI
78	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.6cm、幅0.6cm、厚0.2cm 頭部長2.8cm、幅0.4cm、厚0.2cm	両刃。平面三角形で逆部をもつ。片丸造。	SW13
79	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.8cm、幅1.0cm、厚0.3cm 頭部長2.7cm、幅0.6cm、厚0.2cm	両刃。平面三角形で逆部をもつ。片丸造。	SW4
80	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.7cm、幅1.1cm、厚0.2cm 頭部長0.6cm、幅0.5cm、厚0.3cm	両刃。平面三角形で逆部をもつ。丸丸造。	SE1
81	図版13	鉄鎌	鍔身部長3.1cm、幅1.1cm、厚0.4cm	両刃。平面三角形で逆部をもつ。丸丸造。	NE10
82	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.7cm、幅1.1cm、厚0.35cm 頭部長2.5cm、幅0.7cm、厚0.3cm	両刃。平面三角形で逆部もつ。丸丸造。	SE2
83	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.2cm、幅1.1cm、厚0.2cm 頭部長3.0cm、幅0.6cm、厚0.2cm	鍔身形態、三角形で逆刺部をもつ。丸丸造。	NE7
84	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.6cm、幅1.1cm、厚0.2cm 頭部長4.5cm、幅0.5cm、厚0.2cm	両刃。丸丸造。	SW14
85	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.3cm、幅1.5cm、厚0.3cm 頭部幅0.9cm、厚0.2cm	両刃。片丸造。	SE1
86	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.8cm、幅1.3cm、厚0.2cm 頭部長0.6cm、幅0.6cm、厚0.4cm	両刃。片丸造。	NE7
87	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.4cm、幅0.9cm、厚0.2cm 頭部幅0.7cm	両刃。丸丸造。	衛部地区②
88	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.8cm、幅0.9cm、厚0.2cm 頭部長2.2cm、幅0.6cm、厚0.2cm	両刃。片丸造。	SW14
89	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.0cm、幅1.0cm、厚0.2cm 頭部長1.0cm、幅0.6cm、厚0.3cm	両刃。丸丸造。平面三角形。	SE7
90	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.7cm、幅1.3cm、厚0.3cm	両刃。丸丸造。	SE2
91	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.7cm幅1.1cm、厚0.3cm	両刃。丸丸造。	SW14
92	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.4cm、幅1.1cm、厚0.3cm	両刃。片丸造。	SW8
93	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.2cm、幅1.3cm、厚0.3cm	両刃。丸丸造。	SE6
94	図版13	鉄鎌	鍔身部長3.1cm、幅0.8cm、厚0.4cm 頭部長0.4cm、幅0.6cm、厚0.6cm	片刃。逆刺部なし。	NW2
95	図版13	鉄鎌	鍔身部長3.3cm、幅0.8cm、厚0.25cm	片刃。	衛部地区③
96	図版13	鉄鎌	鍔身部長3.3cm、幅0.7cm、厚0.2cm 頭部長0.4cm、幅0.4cm、厚0.3cm	片刃。逆刺部なし。	NE12
97	図版13	鉄鎌	鍔箕町2.9cm、幅0.6cm、厚0.2cm 頭部長1.0cm、幅0.45cm、厚0.35cm	片刃。逆刺部なし。	SW1
98	図版13	鉄鎌	鍔身部長3.0cm、幅0.7cm、厚0.3cm 頭部長0.4cm、幅0.6cm、厚0.6cm	片刃。逆刺部なし。	SW4
99	図版13	鉄鎌	鍔箕町3.1cm、幅0.7cm、厚0.2cm 頭部長0.4cm、幅0.6cm、厚0.4cm	片刃。逆刺部なし。	SW3
100	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.9cm、幅0.7cm、厚0.2cm 頭部長0.4cm、幅0.4cm、厚0.3cm	片刃。逆刺部なし。	SW4
101	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.5cm、幅0.7cm、厚0.4cm 頭部長0.4cm、幅0.6cm、厚0.4cm	片刃。逆刺部なし。	NW4
102	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.6cm、幅0.9cm、厚0.4cm 頭部長0.5cm、幅0.6cm、厚0.3cm	片刃。逆刺部なし。	NW4
103	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.4cm、幅0.8cm、厚0.4cm 頭部長2.4cm、幅0.8cm、厚0.3cm	片刃。逆刺部なし。表面に木質付着。	Se6, SE6
104	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.6cm、幅0.8cm、厚0.3cm	片刃。	SW8
105	図版13	鉄鎌	鍔身部長3.0cm、幅0.9cm、厚0.2cm	片刃。逆刺部をもつ。	SW10
106	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.9cm、幅0.7cm、厚0.2cm 頭部長0.3cm、幅0.4cm、厚0.2cm	片刃。逆刺部をもつ。	NE2
107	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.2cm、幅0.6cm、厚0.2cm 頭部長0.4cm、幅0.5cm、厚0.4cm	片刃。逆刺部をもつ。	玄室
108	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.2cm、幅0.7cm、厚0.3cm 頭部長0.7cm、幅0.4cm、厚0.2cm	片刃。逆刺部をもつ。	SE12

No.	図版番号	器種	法量（いずれも破片のため、完形・破片をとわず現況の法量を記載。）	備考	出土実置（石室内グリッド）
109	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.1cm、幅0.8cm、厚0.4cm、頭部長0.4cm、幅0.5cm、厚0.3cm。	片刃。	NE7
110	図版13	鉄鎌	鍔身部幅9cm、厚0.4cm。	片刃。	NE1
111	図版13	鉄鎌	鍔身部長3.8cm、幅0.9cm、厚0.3cm。	片刃。	SW6,SE6
112	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.9cm、幅1cm、厚0.2cm。	片刃。	後道部地区③
113	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.6cm、幅0.8cm、厚0.2cm。	片刃。	後道部地区⑤
114	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.4cm、幅0.7cm、厚0.3cm。	片刃。	SW9
115	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.4cm、幅0.7cm、厚0.2cm。	片刃。	SE6
116	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.2cm、幅0.8cm、厚0.4cm。	片刃。	NE13
117	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.1cm、幅0.8cm、厚0.2cm。	片刃。	NEW8
118	図版13	鉄鎌	鍔身部長3.4cm、幅0.8cm、厚0.2cm。	片刃。	NE8
119	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.1cm、幅0.8cm、厚0.2cm、頭部幅0.6cm、厚0.2cm。	片刃。	NE13
120	図版13	鉄鎌	鍔身部長3cm、幅0.7cm、厚0.4cm。	片刃。表面に有核質（第5）付着。	NE2
121	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.8cm、幅0.5cm、厚0.3cm。	片刃。	玄室排水溝
122	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.7cm、幅0.7cm、厚0.4cm。	片刃。	玄室排水溝
123	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.5cm、幅0.7cm、厚0.4cm。	片刃。	NE1
124	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.7cm、幅0.7cm、厚0.4cm。	片刃。	NE1
125	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.6cm、幅0.7cm、厚0.3cm。	片刃。	SE6
126	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.1cm、幅0.7cm、厚0.4cm。	片刃。	NW2
127	図版13	鉄鎌	鍔身部長2cm、幅0.7cm、厚0.3cm。	片刃。	NW8
128	図版13	鉄鎌	鍔身部長1.1cm、幅0.6cm、厚0.3cm。	片刃。	NE8
129	図版13	鉄鎌	鍔身部長2cm、幅0.6cm、厚0.3cm。	片刃。表面に木質付着。	NE2
130	図版13	鉄鎌	鍔身部長2.0cm、幅0.9cm、厚0.2cm。	片刃。	NW8
131	図版13	鉄鎌	鍔身部幅0.8cm、厚0.4cm。	片刃。	玄室排水溝
132	図版14	鉄鎌	①頭部長3.5cm、幅0.6cm、厚0.5cm、 茎部長1.4cm、幅0.4cm、厚0.3cm。 ②頭部長1.9cm、幅0.4cm、厚0.3cm、 茎部長0.9cm、幅0.5cm、厚0.4cm。	2本接着。頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に樹皮を横に巻きつける。	後道部地区④
133	図版14	鉄鎌	頭部長2.2cm、幅0.7cm、厚0.5cm、 茎部長1.1cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	2本接着。頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に樹皮を横に巻きつける。	NW8
134	図版14	鉄鎌	頭部長3.6cm、幅0.7cm、厚0.4cm、 茎部長1.0cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	1トレンド
135	図版14	鉄鎌	頭部長3.2cm、幅0.6cm、厚0.3cm、 茎部長1.5cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	SW3
136	図版14	鉄鎌	頭部長3.1cm、幅0.6cm、厚0.5cm、 茎部長1cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	NW11
137	図版14	鉄鎌	頭部長2.1cm、幅0.6cm、厚0.4cm、 茎部長2.7cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	SW5
138	図版14	鉄鎌	頭部長1.6cm、幅0.8cm、厚0.3cm、 茎部長2.8cm、幅0.5cm、厚0.2cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	NW7
139	図版14	鉄鎌	頭部長2.6cm、幅0.7cm、厚0.4cm、 茎部長1.2cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	後道部地区④
140	図版14	鉄鎌	頭部長2.7cm、幅0.6cm、厚0.5cm、 茎部長1.4cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。樹皮に赤色顔料付着。	後道部地区⑤
141	図版14	鉄鎌	頭部長2.3cm、幅0.8cm、厚0.2cm、 茎部長2cm、幅0.4cm、厚0.2cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。	1トレンド
142	図版14	鉄鎌	頭部長2.7cm、幅0.6cm、厚0.5cm、 茎部長0.4cm、幅0.5cm、厚0.3cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に横まきの樹皮。	SE8
143	図版14	鉄鎌	頭部長2.2cm、幅0.6cm、厚0.3cm、 茎部長1.4cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に横まきの樹皮。	NE7
144	図版14	鉄鎌	頭部長1.6cm、幅0.7cm、厚0.4cm、 茎部長1.7cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	後道部地区③
145	図版14	鉄鎌	頭部長1.7cm、幅0.4cm、厚0.3cm、 茎部長1.6cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に横まきの樹皮。	後道部地区③
146	図版14	鉄鎌	頭部長0.4cm、幅0.8cm、厚0.6cm、 茎部長2.1cm、幅0.3cm、厚0.3cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段をもつ。茎部は木質の上に横まきの樹皮。	SW8
147	図版14	鉄鎌	頭部長1.5cm、幅0.6cm、厚0.4cm、 茎部長2.4cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ茎部。頭部開は台形状に広がり段を持つ。茎部は木質の上に横まきに樹皮を巻き付ける。	後道部地区⑤

No.	図版番号	器種	法量（いざれも破片のため、完形・破片をとわず現時の法量を記載。）	備考	出土位置（石室内地図上記入）
148	図版14	鉄鎌	頭部長2.3cm、幅0.5cm、厚0.4cm、基部長1.7cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段を持つ。基部は木質の上に横まきに樹皮を巻き付ける。樹皮には赤色顔料が付着。	飛道部地区②
149	図版14	鉄鎌	頭部長2.0cm、幅0.5cm、厚0.4cm、基部長0.9cm、幅0.3cm、厚0.3cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	NE6
150	図版14	鉄鎌	頭部長1.3cm、幅0.7cm、厚0.4cm、基部長1.8cm、幅0.5cm、厚0.3cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	NE10
151	図版14	鉄鎌	①頭部長1.2cm、幅0.6cm、厚0.4cm、②頭部長1.5cm、幅0.5cm、厚0.4cm。	2本踏着、頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質上に横まきの樹皮。	飛道部地区③
152	図版14	鉄鎌	頭部長1.4cm、幅0.6cm、厚0.4cm、基部長0.7cm、幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	NE6
153	図版14	鉄鎌	頭部長3.7cm、幅0.6cm、厚0.3cm、基部長1.2cm、幅0.4cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質残存。	SW10
154	図版14	鉄鎌	頭部幅0.7cm、厚0.5cm、基部幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。樹皮に赤色顔料付着。	NE1
155	図版14	鉄鎌	頭部幅0.8cm、厚0.4cm、基部幅0.5cm、厚0.3cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質残存。	SW1
156	図版14	鉄鎌	頭部幅0.8cm、厚0.3cm、基部幅0.3cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質残存。	SE1
157	図版14	鉄鎌	頭部幅0.7cm、厚0.4cm、基部幅0.4cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	NE7
158	図版14	鉄鎌	頭部幅0.7cm、厚0.4cm、基部幅0.4cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	飛道部地区③
159	図版14	鉄鎌	頭部幅0.6cm、厚0.4cm、基部幅0.5cm、厚0.3cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に横まきの樹皮。	飛道部地区④
160	図版14	鉄鎌	頭部幅0.7cm、厚0.4cm、基部幅0.4cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質残存。	SW14
161	図版14	鉄鎌	基部幅0.4cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段を持つ。基部は木質の上に横まきに樹皮をく。樹皮には赤色顔料が付着。	飛道部地区③
162	図版14	鉄鎌	頭部幅0.8cm、厚0.4cm、基部幅0.4cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質残存。	NW8
163	図版14	鉄鎌	基部幅0.4cm、厚0.3cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質残存。	NE2
164	図版14	鉄鎌	頭部幅0.5cm、厚0.4cm、基部幅0.4cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質残存。	SW3
165	図版14	鉄鎌	頭部幅0.8cm、厚0.4cm、基部幅0.3cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	NE1
166	図版14	鉄鎌	頭部幅0.7cm、厚0.3cm、基部幅0.5cm、厚0.3cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	NW8
167	図版14	鉄鎌	頭部幅0.9cm、厚0.4cm、基部幅0.4cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	飛道部
168	図版14	鉄鎌	頭部幅0.7cm、厚0.5cm、基部幅0.3cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	NE2
169	図版14	鉄鎌	頭部幅0.9cm、厚0.5cm、基部幅0.4cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	SE14
170	図版14	鉄鎌	基部幅0.3cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	SE1
171	図版14	鉄鎌	頭部幅0.8cm、厚0.3cm、基部幅0.3cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質残存。	SE1
172	図版14	鉄鎌	頭部幅0.9cm、厚0.6cm、基部幅1.3cm、厚0.5cm、長さ0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段を持つ。	飛道部地区3
173	図版14	鉄鎌	基部幅1.2cm、幅0.2cm、厚0.2cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。	NE7
174	図版14	鉄鎌	基部幅0.6cm、厚0.3cm。	頭部へ基部、頭部闊は台形状に広がり段をもつ。基部は木質の上に樹皮を横向きに巻き付ける。樹皮に赤色顔料付着。	飛道部地区④
175	図版14	両頭金具	長さ2.5cm、幅0.3cm。	片端欠損。木質付着	SW3
176	図版14	両頭金具	長さ2.7cm、幅0.3cm。	木質付着	SW3
177	図版14	両頭金具	長さ2.6cm、幅0.3cm。	木質付着	SW3
178	図版14	両頭金具	長さ2.1cm、幅0.3cm。	片端欠損。木質付着	SW10
179	図版14	両頭金具	長さ1.7cm、幅0.3cm。	片端欠損。木質付着	NW8
180	図版14	両頭金具か	長さ0.9cm、幅0.3cm。	片端欠損。頭平たい。木質付着。	SE6
181	図版14	両頭金具か	長さ0.8cm、幅0.3cm。	片端欠損。頭平たい。木質付着。	SE6
182	図版14	両頭金具	長さ0.8cm、幅0.3cm。	片端欠損。木質付着。	NW12
183	図版14	胡蝶	長さ1.9cm、幅1.8cm、厚0.15cm、紙頭径0.3cm、長さ0.5cm。	金網袋。両端から0.4cmの位置に孔をうつ。裏面に布及び革が付着。	SW9
184	図版14	胡蝶	長さ1.7cm、幅1.8cm、厚0.1cm、紙頭径0.4cm、長さ0.6cm。	金網袋。両端から0.4cmの位置に孔をうつ。裏面に革付着。	SE2
185	図版14	胡蝶	長さ1.3cm、幅1.25cm、厚0.1cm、紙頭径0.4cm、長さ0.6cm。	金網袋。端から0.4cmの位置に孔をうつ。裏面に革付着。	SW8
186	図版14	胡蝶	長さ1.4cm、幅1.8cm、厚0.15cm。	金網袋。中央に穿孔か。裏面に革付着。	SW4
187	図版14	胡蝶	長さ3.7cm、幅1.4cm、厚0.2cm、紙頭径0.4cm、長さ0.6cm。	金網袋。両端から0.4cmの位置に孔を打つ。裏面に布および革が付着。	SW2

No.	図版番号	器種	法量（いずれも破片のため、完形・破片をとわず現状の法量を記載。）	備考	出土位置（箇所内グリッド）
188	図版14	胡錐	長さ1.6cm、幅1.4cm、厚0.15cm、 頭頂径0.4cm、長さ0.3cm。	金鋼製。両端から0.4cmの位置に鉢を打つ。裏面に布および革が付着。	SE4
189	図版14	胡錐	長さ0.8cm、幅1.1cm、厚0.1cm。	金鋼製。端から0.4cmの位置に鉢を打つ。頭頂は欠損。端部5%。	SW7
190	図版14	胡錐	長さ1.3cm、幅1.0cm、厚0.1cm。	金鋼製。表面に波状列点文を施す。裏面に布および革が付着。	SW8
191	図版14	胡錐	長さ1.1cm、幅1.2cm、厚0.1cm。	金鋼製。表面に波状列点文を施す。裏面に革付着。	NW2
192	図版14	胡錐	長さ2.8cm、幅0.8cm、厚0.1cm。 頭頂径0.4cm、長さ0.4cm。	金鋼製。中央に1点鉢をうつ。頭頂幅は2.3cm。裏面に布及び革が付着。	NE7
193	図版14	胡錐	長さ2.9cm、幅0.8cm、厚0.1cm。	金鋼製。中央に1点鉢をうつ。裏面に布付着。	不明
194	図版14	胡錐	長さ2.0cm、幅0.8cm、厚0.1cm。	金鋼製。中央に1点穿孔。端部でわざかにカーブしている。裏面に布付着。	玄室排水溝
195	図版14	胡錐	長さ0.7cm、幅0.8cm、厚0.1cm。	中央に穿孔1箇所。裏面の布が縫を巻き込む。	SW8
196	図版14	胡錐	長さ1.3cm、幅0.8cm、厚0.1cm。 頭頂径0.3cm、長さ0.3cm。	金鋼製。頭部は丸角方形。中央に1点鉢をうつ。裏面に波状列点文を施す。裏面に布及び革付着。	NW1
197	図版14	胡錐	長さ1.1cm、幅0.8cm、厚0.1cm。 頭頂径0.4cm、長さ0.5cm。	金鋼製。中央に1点鉢をうつ。裏面に布および革付着。	SW6
198	図版14	胡錐	長さ1.2cm、幅0.8cm、厚0.1cm。	金鋼製。裏面に布付着。	NW2
199	図版14	胡錐	長さ0.7cm、幅0.8cm、厚0.1cm。	金鋼製。表面に波状列点文を施す。裏面に布付着。	SW5
200	図版15	雪珠	脚部長1.5cm 幅1.4cm、厚0.3cm 頭頂径0.3cm、長さ0.7cm	頭部長1.5cm 幅1.4cm、厚0.3cm 頭頂径0.3cm、長さ0.7cm 200と同一個体か。貝製環状雪珠。金鋼製。脚部は金鋼製に銀装の貴金属と銀装の鉢を3個うつ。	SE5
201	図版15	雪珠	脚部長1.5cm 幅1.2cm 厚0.2cm 頭頂径0.3cm 長さ0.5cm	200と同一個体か。貝製環状雪珠。金鋼製。脚部は金鋼製に銀装の貴金属と銀装の鉢を3個うつ。	NE8
202	図版15	雪珠	厚0.3cm。	200と同一個体か。貝製環状雪珠の環状部。金鋼製。	NW9
203	図版15	雪珠	厚0.2cm。	200と同一個体か。貝製環状雪珠の環状部。金鋼製。	NE2
204	図版15	雪珠	厚0.3cm。	200と同一個体か。貝製環状雪珠の環状部。金鋼製。	NW9
205	図版15	雪珠	脚部長1.6cm 幅1.4cm、厚0.2cm、 頭頂径0.3cm、長さ0.6cm。	200と同一個体か。貝製環状雪珠の脚部。金鋼製に銀装の貴金属と銀装の鉢を3個うつ。	SW4
206	図版15	雪珠	脚部長1.5cm 幅1.2cm 厚0.2cm 頭頂径0.3cm、長さ0.6cm。	200と同一個体か。貝製環状雪珠の脚部。金鋼製に銀装の貴金属と銀装の鉢を3個うつ。	SW4
207	図版15	雪珠	脚部長1.5cm 幅1.2cm 厚0.2cm 頭頂径0.3cm、長さ0.8cm	200と同一個体か。貝製環状雪珠の脚部。金鋼製に銀装の貴金属と銀装の鉢を3個うつ。	SW4
208	図版15	雪珠又は辻金具	脚部長1.6cm 幅1.5cm 厚0.35cm、 頭頂径0.7cm、長さ0.6cm。	環状雪珠又は辻金具。脚部は貴金属と中央に1個の鉢をうつ。	NW2
209	図版15	雪珠又は辻金具	脚部長1.6cm 幅1.8cm 厚0.3cm、 頭頂径0.8cm、長さ0.9cm。	200と同一個体か。環状雪珠又は辻金具。脚部は貴金属と中央に1個の鉢をうつ。	NW2
210	図版15	雪珠又は辻金具	脚部長1.6cm 幅1.6cm 厚0.3cm、 頭頂径0.7cm、長さ0.7cm。	200と同一個体か。環状雪珠又は辻金具。脚部は貴金属と中央に1個の鉢をうつ。	NW2
211	図版15	雪珠又は辻金具	脚部長1.6cm 幅1.6cm 厚0.3cm、 頭頂径0.7cm、長さ0.7cm。	200と同一個体か。環状雪珠又は辻金具。脚部は貴金属と中央に1個の鉢をうつ。	NW2
212	図版15	雪珠又は辻金具	長さ1.7cm、幅1.1cm、厚0.5cm、 頭頂径0.2cm、長さ0.9cm。	金鋼製に銀装の貴金属と銀装の鉢を3個うつ。	義理部地区①
213	図版15	雪珠又は辻金具	長さ0.6cm、幅1.4cm、厚0.2cm、 頭頂径0.3cm、長さ0.7cm。	金鋼製に銀装の鉢をうつ。	義理部地区②
214	図版15	雪珠又は辻金具	長さ0.7cm、幅1.0cm、厚0.2cm、 頭頂径0.3cm、長さ0.3cm。	金鋼製。	SW10
215	図版15	雪珠又は辻金具	長さ1.3cm、幅1.3、厚0.2cm。	方形で中央に0.2cmの穿孔あり。	SW4
216	図版15	雪珠又は辻金具	長さ1.2cm、幅1.0cm、厚0.2cm。	金鋼製か。	SE1
217	図版15	雪珠又は辻金具	長さ2.8cm、幅1.6cm、厚0.2cm。	中央に0.2cmの穿孔あり。3条の貴金属。	SW8
218	図版15	貴金属	幅0.2cm。	銀製。表面に縞杉文の先削を施す。	NW4
219	図版15	貴金属	幅0.3cm	3条1組。	NW12
220	図版15	貴金属	幅0.3cm,	2条1組。	SW1
221	図版15	貴金属	幅0.3cm,	2条1組。	SW8
222	図版15	貴金属	幅0.3cm,	2条1組。	SW1
223	図版15	貴金属	幅0.25cm,	内側に木質付着。	NW14
224	図版15	貴金属	幅0.3cm,	内側に木質付着。	NW8
225	図版15	貴金属	幅0.3cm,	内側にはがれた痕。	義理部地区④
226	図版15	貴金属	幅0.25cm,		SE12
227	図版15	革帶金具	幅2.6×2.4cm、厚0.1cm、 頭頂径0.3cm、長さ0.5cm。	金鋼製。四角形の板の4隅に鉢をうつ。中央は球形にふくらむ。裏面に有機質付着。	NW9

No.	図版 番号	器種	法量（いずれも破片のため、完形・破片をとわざ況の法量を記載。）	備考	出土位置（石室内 グリッド）
228	図版15	革帶金具	幅2.4cm、厚0.2cm。 新頭径0.4cm、長さ0.6cm。	金鋼製。四角形の板の4隅に紙をうつ。	NW9
229	図版15	革帶金具	厚0.3cm、新頭径0.3cm、長さ0.5cm。	四角形板の隅に紙をうつ。	SE1
230	図版15	革帶金具か？	厚0.2cm。	中央で半球形にふくらむ。裏面にはがれた痕跡あり。木質が付着。	SE3
231	図版15	革帶金具	幅1.9×2.1cm、厚0.2cm。 新頭径0.4cm、長さ0.7cm。	四角形の板に紙を4個うつ。	西道部地区③
232	図版15	革帶金具	長さ1.2cm、幅1.8cm、厚0.2cm。 新頭径0.4cm、長さ0.5cm。	紙2箇所。1つは紙頭欠損。	SW4
233	図版15	革帶金具	厚さ0.1cm。	穿孔2箇所。1つは紙脚のこる。裏面に木質付着	SW4
234	図版15	飾金具か？	厚さ0.2cm。	半球形をなす。飾金具。	NW9
235	図版16	吊金具	幅1.4cm、立開部に通す個所の幅0.6cm。	紙痕4箇所。	
236	図版16	吊金具	長さ4.4cm、幅1.2cm、厚0.3cm。 新頭径0.4cm、長さ0.7cm。	金鋼製。1列3個の紙を2列うつ。上端中央に1箇所穿孔あり。	NE8
237	図版16	吊金具	長さ2.65cm、幅1.1cm、厚0.2cm。	紙は確認できず。	SW9
238	図版16	吊金具	長さ3.2cm、幅1.2cm、厚0.2cm。	紙は確認できず。	SW10
239	図版16	吊金具	長さ2.6cm、幅1.1cm、厚さ0.2cm。	紙は確認できず。別個体付着。	SW8
240	図版16	吊金具	長さ1.5cm、幅1.1cm、厚さ0.2cm。	中央に紙の痕跡か。	SE2
241	図版16	杏葉	縁金具幅0.6cm、厚0.5cm、 新頭径0.3cm、長さ0.6cm。	三葉文を構成する縁金具の一部。金鋼製。2箇所に紙をうつ。	SW6
242	図版16	杏葉	縁金具幅0.4~0.6cm、厚0.3cm。 新頭径0.4cm、長さ0.5cm。	金鋼製。縁金具。紙を0.8~0.9mm間隔でうつ。	西道部地区②
243	図版16	杏葉	縁金具幅0.4~0.6cm、厚0.3cm。 新頭径0.3cm、長さ0.5cm。	金鋼製。縁金具。紙を0.8~0.9mm間隔でうつ。表面に木質付着。	SE2
244	図版16	杏葉	縁金具幅0.4cm、 新頭径0.4cm、長さ0.6cm。	縁金具が十字になり交点に紙を1個うつ。裏面にはがれた痕跡。	NW4
245	図版16	杏葉	長さ2.0cm、幅3.3cm、厚0.3cm。 高さ0.7cm。	金鋼製。地板で縁部がやや厚みをもつ。3個の細脚。裏面にはがれた痕跡。	NW6
246	図版16	立開	幅2.8cm、高さ1.4cm。孔部分幅1.5cm、 高さ0.7cm。	縦：横＝1：2。	玄室
247	図版16	引手	厚0.7cm。	一本の棒を曲げて環をくる。環に別個体の棒脚が通る。	NW6
248	図版16	引手	引手蓋直径2.4cm	引手蓋。ぐの字に曲がる。内側に有機質付着。	NW8
249	図版16	引手	引手蓋直徑2.3cm	引手蓋。ぐの字に曲がる。内側に有機質付着。	SW9
250	図版16	兵庫鎖	厚0.4cm。	2本の棒を別の袋に通す。	SE6
251	図版16	鍔	長さ2.6cm、幅2.6cm、厚0.2cm。 新頭径0.4cm。	壹鉗片か。中央に紙を1個うつ。両端はわずかに内側に折れ曲がる。内側に木質付着。	石室
252	図版16	鍔	長さ1.6cm、幅1.5cm、厚0.2cm。 新頭径0.3cm。	壹鉗片か。中央に紙を1個うつ。両端はわずかに内側に折れ曲がる。内側に木質付着。	石室
253	図版16	鍔	長さ2.4cm、幅1.9cm。	壹鉗片か。内側に木質付着。	SW14
254	図版17	鞍金具	縁金具幅4.5mm、厚1mm。 新頭径7mm、長さ7mm	金鋼製。縁金具。地板の上に幅4.5mmの縁金具で周囲をめぐらせ。直径4mmの紙を5mm間隔でうつ。裏面には布が付着。	西道部地区④
255	図版17	鞍金具	縁金具幅4.5mm、厚1mm。 新頭径8mm、長さ8mm。	金鋼製。縁金具。地板の上に幅4.5mmの縁金具で周囲をめぐらせ。直径4mmの紙を5mm間隔でうつ。裏面には布が付着。	SW2
256	図版17	鞍金具	縁金具幅4.5mm、厚1mm。 新頭径4mm、長さ7mm。	金鋼製。縁金具の州浜部分。幅4.5mmの縁金具上に新頭4mmの紙を5mm間隔でうつ。州浜部分の下辺には縁金具をもたない。裏面には布が付着。	西道部地区④
257	図版17	鞍金具	縁金具幅4.5mm、厚1mm。 新頭径4mm、長さ7mm。	金鋼製。縁金具。地板の上に幅4.5mmの縁金具で周囲をめぐらせ。直径4mmの紙を5mm間隔でうつ。裏面には布が付着。	西道部地区⑤
258	図版17	鞍金具	縁金具幅4.5cm、厚0.2cm。 新頭径0.4cm、長さ0.4cm。	金鋼製。縁金具。地板の上に幅5mmの縁金具で周囲をめぐらせ。直径4mmの紙を5mm間隔でうつ。中央にわからってわずかに膨らむ。	西道部地区①
259	図版17	鞍金具	縁金具幅4.5mm、厚1.5mm。 新頭径4mm、長さ5.5mm。	金鋼製。縁金具。地板の上に幅4.5mmの縁金具で周囲をめぐらせ。直径4mmの紙を5mm間隔でうつ。中央にわからってわずかに膨らむ。	西道部地区④
260	図版17	鞍金具	縁金具幅4.5mm、厚1.5mm。 新頭径4mm、長さ5.5mm。	金鋼製。縁金具。地板の上に幅4.5mmの縁金具で周囲をめぐらせ。直径4mmの紙を5mm間隔でうつ。中央にわからってわずかに膨らむ。	西道部地区⑤
261	図版17	鞍金具	縁金具幅4.5mm、厚1.5mm。 新頭径4mm、長さ4.0mm。	金鋼製。縁金具。地板の上に幅4.5mmの縁金具で周囲をめぐらせ。直径4mmの紙を5mm間隔でうつ。中央にわからってわずかに膨らむ。	西道部地区④
262	図版17	鞍金具	縁金具幅4.5mm、厚1.5mm。 新頭径4mm、長さ6.0mm。	金鋼製。縁金具。地板の上に幅4.5mmの縁金具で周囲をめぐらせ。直径4mmの紙を5mm間隔でうつ。中央にわからってわずかに膨らむ。	西道部地区④
263	図版17	鞍金具	厚さ0.2cm。	金鋼製。鞍の座金具か。半球形にふくらむ。裏面にはがれた痕跡あり。不質付着。	NW6
264	図版17	鞍金具	厚0.2cm。	金鋼製。鞍の座金具か。半球形にふくらむ。内側平坦面にはがれた痕跡あり。木質付着。	玄室排水溝
265	図版17	鞍金具	厚0.2cm	金鋼製。鞍の座金具か。半球形にふくらむ。内側平坦面にはがれた痕跡あり。木質付着。	SE1
266	図版17	鉸具	断面幅0.5cm。		SW1

No.	図版番号	器種	法量（いずれも破片のため、実形・破片をとわず現況の法量を記載。）	備考	出土位置（石内グリッド）
267	図版17	鉢具	長さ6.7cm、幅0.45cm、0.5cm。	ゆるやかなS字をえがく。	NW2
268	図版17	鉢具	断面幅0.5cm。		後遺地区⑤
269	図版17	鉢具	断面幅0.35cm。		SW9
270	図版17	鉢具	断面幅0.35cm。		SW12
271	図版17	鉢具	断面0.35cm。	内側に木質付着。	SW8
272	図版17	鉢具	断面0.5×0.3cm。		SW2
273	図版17	轆金具	長さ3.6cm、厚0.4cm	轆輪。表面に黒漆と思われる付着物。内側は木質付着。	NW3
274	図版17	轆金具	厚さ0.6cm。	轆輪。表面に黒漆と思われる付着物。内側は木質付着。	後遺地区④
275	図版17	轆金具	厚さ0.6cm。	轆輪。表面に黒漆と思われる付着物。内側は木質付着。	Iトレチ
276	図版17	轆金具	長さ1.7cm、幅0.4cm、厚0.15cm。 鋸頭径0.4cm、長さ0.4cm。	金綱袋。鋸を4~5mm間隔でうつ。	SE1
277	図版17	轆金具	長さ1.1cm、幅0.4cm、厚さ0.2cm。 鋸頭径0.3cm、長さ0.4cm。	鋸を5mm間隔でうつ。裏面に木質付着。	SW3
278	図版17	轆金具	長さ1.5cm、幅0.45cm、厚0.15cm。 鋸頭径0.4cm、長さ0.4cm。	鋸を7mm間隔でうつ。	SW4
279	図版17	轆金具	長さ1.3cm、幅0.6cm、厚さ0.25cm。	鋸頭欠損。	NW9
280	図版17	轆金具	長さ1.2cm、幅0.65cm、厚さ0.2cm。 鋸頭径0.4cm、長さ0.5cm。	新間隔は27mm以上。	SE2
281	図版17	轆金具	長さ2.4cm、幅0.5cm、厚0.1cm。 鋸頭径0.4cm、長さ0.2cm。	新間隔5mm。轆金具は厚みが薄い。	SW8
282	図版17	轆金具	長さ4.5cm、幅0.4cm、厚0.1cm。 鋸頭径0.3cm、長さ0.3cm。	281と同一器種。新間隔は5~7mm。轆金具の厚みは薄い。	NE8
283	図版17	鋸	鋸頭径0.4cm、長さ0.3cm。	鋸頭が横円形にゆがむ。	後遺地区⑤
284	図版17	鋸	鋸頭径0.5cm、長さ0.4cm。		SW6
285	図版17	鋸	鋸頭0.35cm、長さ0.3cm。	完形。非常に小型。	SW8
286	図版17	鋸	鋸頭径0.4cm、長さ0.7cm。	鋸頭は平ら。	SW4
287	図版17	鋸	鋸頭径0.45cm、長さ0.7cm。		NE7
288	図版17	鋸	鋸頭径0.7cm、長さ1.5cm。	大型。	SW15
289	図版17	鋸	鋸頭径0.4cm、長さ2.2cm。	鋸頭は平ら。木質付着。	SW10
290	図版18	小札	幅2.15cm、厚0.2cm	穿孔1箇所。	NE7
291	図版18	小札	幅2.45cm、厚0.2cm。	下端部に穿孔5箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。下端は表裏側にわざかに折れる。	SW10
292	図版18	小札	幅2.45cm、厚0.2cm。	左上重ね。	NE7
293	図版18	小札	幅2.6cm、厚0.2cm。	穿孔5箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。上端は内側に向かってわずかに折れる。	NW2
294	図版18	小札	幅2.6cm、厚0.2cm。	穿孔5箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。上端は内側に向かってわずかに折れる。	SE2
295	図版18	小札	幅2.6cm、厚0.2cm。	穿孔5箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。上端は内側に向かってわずかに折れる。	玄室
296	図版18	小札	幅2.6cm、厚0.2cm。	穿孔5箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。上端は内側に向かってわずかに折れる。	後遺地区③
297	図版18	小札	幅2.6cm、厚0.2cm。	穿孔5箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。上端は表面側に向かってわずかに折れる。	SE2
298	図版18	小札	幅2.65cm、厚0.2cm。	穿孔5箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。中央で内側に折れる。縦札。	SW13
299	図版18	小札	幅2.6cm、厚0.2cm。	穿孔5箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。中央で内側に折れる。縦札。	後遺地区④
300	図版18	小札	幅2.6cm、厚0.2cm。	穿孔5箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。中央で内側に折れる。縦札。	NW12
301	図版18	小札	幅2.8cm、厚0.2cm。	穿孔3箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。上端には内側に向かってわずかに折れる。革と思われる有機質付着。	NW4
302	図版18	小札	幅2.8cm、厚0.2cm。	穿孔5箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。	後遺地区④
303	図版18	小札	幅2.8cm、厚0.2cm。	穿孔2箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。	後遺地区④
304	図版18	小札	幅2.8cm、厚0.2cm。	穿孔2箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。	SW4
305	図版18	小札	幅2.75cm、厚0.2cm。	専横5箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。下端部に有機質付着。	SW4
306	図版18	小札	幅2.8cm、厚0.2cm。	穿孔5箇所。両端は内側に向かってわずかに折れる。表面に別個体のはがれた筋痕より、左上重ね。縦札。	後遺地区④

No.	図版番号	器種	法量（いずれも破片のため、完形・破片をとわず現況の法量を記載。）	備考	出土位置（石室内グリッド）
307	図版18	小札	幅2.9cm, 厚0.2cm,	穿孔4箇所。両端は内側に向かってわざかに折れる。上端は内側にむかってわざかに折れる。紐残存。	NW6
308	図版18	小札	幅2.9cm, 厚0.2cm,	穿孔4箇所。両端は内側に向かってわざかに折れる。上端は内側にむかってわざかに折れる。紐残存。	NW4
309	図版18	小札	幅2.9cm, 厚0.2cm,	穿孔4箇所。両端は内側に向かってわざかに折れる。上端は内側にむかってわざかに折れる。紐残存。	玄室排水溝
310	図版18	小札	幅2.9cm, 厚0.2cm,	穿孔4箇所。両端は内側に向かってわざかに折れる。下端は表面側にむかってわざかに折れる。紐残存。	NW2
311	図版18	小札	幅2.9cm, 厚0.2cm,	穿孔3箇所。	西道部地K③
312	図版18	小札	幅3.0cm, 厚0.2cm,	穿孔3箇所。両端は内側に向かってわざかに折れる。下端は表面側にむかってわざかに折れる。	SW4
313	図版18	小札	幅3.0cm, 厚0.2cm,	穿孔4箇所。下端より2.2cmの箇所で内側にカーブする。下端に覆輪、最下段脱糸。	西道部地区⑤
314	図版18	小札	幅3.0cm, 厚0.2cm,	穿孔2箇所。中央で内側にカーブする。縦れか。右上重ね。	西道部地区⑤
315	図版18	小札	幅2.7cm, 厚0.2cm	穿孔4箇所。中央で内側にカーブする。縦れか。紐残存。	SW1
316	図版18	小札	幅2.8cm, 厚0.2cm	穿孔4箇所。中央で内側にカーブする。縦れか。紐残存。	SW1
317	図版18	小札	幅3.0cm, 厚0.2cm,	両端は内側に向かってわざかに折れる。穿孔5箇所。中央で内側にカーブする。縦れか。縦および覆輪が残存。	西道部地区⑤
318	図版18	小札	幅2.9cm, 厚0.2cm,	穿孔6箇所。中央で内側にカーブする。縦れか。縦および覆輪が残存。	SW4
319	図版18	小札	幅2.3cm, 厚0.2cm,	両端は内側に向かってわざかに折れる。穿孔4箇所。縦れか。縦および覆輪が残存。裏面には赤色顔料付着。左上重ね。	SW3
320	図版18	小札	幅3.0cm, 厚0.2cm,	両端は内側に向かってわざかに折れる。穿孔6箇所。縦れか。縦および覆輪が残存。左上重ね。	SW13
321	図版18	小札	幅3.1cm, 厚0.2cm,	両端は内側に向かってわざかに折れる。穿孔5箇所。裏面には布付着。左上重ね。	玄室排水溝
322	図版18	小札	幅1.8cm, 厚0.2cm,	端は内側に向かってわざかに折れる。上端は内側に向かってわざかに折れる。穿孔2箇所。縦れか。右上重ね。	SW13
323	図版18	小札	幅2.6cm, 厚0.2cm,	上端は内側に向かってわざかに折れる。縦および革とおもわれる有機質付着。両面に別個体の重なっていた痕跡あり。左上重ね。	SW14
324	図版18	小札？	幅1.4cm, 厚0.2cm,	表面に朱付着。	西道部地K⑤
325	図版19	小札	厚0.2cm,	新宿胃片か。新2箇所。縦で2枚を連結している。内側にむかってゆるやかにカーブする。	西道部地区⑤
326	図版19	小札	厚0.2cm,	新宿胃片か。新1箇所。縦で2枚を連結している。	NE13
327	図版19	小札	厚0.2cm,	新宿胃片か。背2箇所。2枚重なる。	西道部地区⑤
328	図版19	小札	厚0.2cm,	新宿胃片か。穿孔2箇所。縦付着。背の付属部か。2枚重なり縦で連結している。	SW9
329	図版19	小札	厚0.2cm,	新宿胃片か。新1箇所。	西道部地区⑤
330	図版19	小札	厚0.2cm,	新宿胃片か。ゆるやかなカーブをえがく。	西道部地区⑤
331	図版19	小札	厚0.2cm,	新宿胃片か。新1箇所。裏面に布付着。	玄室排水溝
332	図版19	小札	厚0.2cm,	新宿胃片か。穿孔1箇所。緩やかなカーブをえがく。	玄室排水溝
333	図版19	小札	厚0.2cm,	新宿胃片か。穿孔4箇所。たんぶは内側に向かってわざかに折れる。	西道部地区⑤
334	図版19	刀子	厚0.2cm,	刃部～茎部。刃部闊は両開。	7レ、NE7
335	図版19	刀子	長さ2.9cm, 幅1.2cm, 厚0.4cm,	断面三角形。表面に木質残存。	SW9
336	図版19	刀子	①長さ2.6cm, 幅1.2cm, 厚0.3cm. ②長さ2.6cm, 幅0.6cm, 厚0.3cm.	2本接着。茎部か。表面に木質付着。	NW7
337	図版19	刀子	長さ2.3cm, 幅0.9cm, 厚0.4cm,	茎部闊。断面長方形。表面に木質残存。	玄室
338	図版19	刀子	長さ1.9cm, 幅1.1cm, 厚0.4cm,	334と同一個体か。断面形は三角形。表面に木質残存。	SE14
339	図版19	刀子	長さ1.5cm, 幅0.89cm, 厚0.4cm,	茎部闊。断面長方形。表面に木質残存。	NE13
340	図版19	U字形鋏先	幅2.3cm, 長さ4.4cm,		8レンチ
341	図版19	不明鉄製品	長さ2.0cm, 幅1.0cm, 厚0.2cm,	裏面にはがれた痕跡。	NW8
342	図版19	不明鉄製品	長さ1.9cm, 幅1.0cm, 厚0.2cm,	341と同一個体か。裏面にはがれた痕跡。	SW1
343	図版19	不明鉄製品	長さ3.7cm, 幅0.9cm, 厚0.2cm, 鍛錬径0.15cm,	341と同一個体か。中央に新を1個うつ。裏面にはがれた痕跡。	玄室排水溝
344	図版19	鋼板	厚0.1cm,	表面に波状列点文を施す。	SE14
345	図版19	鋼板	厚0.1cm,	360と同一個体か。表面に波状列点文を施す。	SE14
346	図版19	不明木製品	長さ3.7cm, 幅0.9cm, 厚0.2cm, 鍛錬径0.15cm,	表面に赤色顔料塗布。	NW13

表3 大日山35号墳石室出土須恵器観察表

NO.	版番号	器種	法量	形狀	焼成	色調	胎土	調整
347	国版20	有蓋高杯 蓋	口径15.9cm 残存高4.8cm	天井部の中央部を欠損。沈線によつて区画し、櫛唐列点文を施す。残存率は30%。	良好	外面7.5/4/1灰褐色 内面5/5/1灰褐色 断面5/5/1灰褐色	径2mmの白色繊維を1%含む	天井部外面を回転ヘラケズリほかは回転ナダ
348	国版20	有蓋高杯	口径14.5cm 残存高15.3cm 受け部径17.6cm	脚端部を欠損する。杯部の立ち上がりは内側して立ち上がり、面をもつ。脚部には長方形の透孔が3方向にあけられている。残存率は50%。	良好	外面5/5/1灰褐色 内面N/5/1灰褐色 断面2.5/17/8橙褐色	径2mmの白色繊維を2%含む	脚部底面外面を回転ヘラケズリほかは回転ナダ
349	国版20	有蓋高杯	口径14.5cm 残存高9.4cm 受け部径16.6cm	脚部を欠損。口縁端部は丸みをもつ。残存率は30%。	良好	外面5/6/1灰褐色 内面N/7/1灰褐色 断面5/5/1赤褐色	径1~3mmの白色繊維を1%含む	脚部底面外面を回転ヘラケズリほかは回転ナダ
350	国版20	高杯脚部	脚端部径10.8cm 残存高10.8cm	杯部を欠損する。長方形の透孔が3方向にあけられている。残存率は50%。	良好	外面5/6/1灰褐色 内面5/6/1灰褐色 断面5/8/6/6橙褐色	径2mmの白色繊維を2%含む	回転ナダ
351	国版20	高杯脚部	脚端部径12.0cm 残存高10.4cm	杯部を欠損する。長方形の透孔が3方向にあけられている。残存率は50%。	良好	外面7.5/5/1灰褐色 内面7.5/5/1灰褐色 断面5/8/6/6橙褐色	径2mmの白色繊維を1%含む	回転ナダ
352	国版20	高杯脚部	脚端部径13.2cm 残存高8.0cm	杯部と脚部の大部分を欠損する。長方形の透孔は3方向にあけられている。残存率は20%。	良好	外面7.5/5/1灰褐色 内面7.5/5/1灰褐色 断面5/8/6/6橙褐色	径1mm以下の繊維を3%含む	回転ナダ
353	国版20	高杯脚部	脚端部径14.0cm 残存高12.0cm	回転によって区画され、波状文が施されている。透孔は2段3方向。上段は長方形、下段は三角形。残存率50%。	良好	外面5/6/1灰褐色 内面N/6/0灰褐色 断面5/7/1灰白色	径1mm以下の白色繊維を1%含む。1%以下含む	回転ナダ
354	国版21	高杯脚部	残存高11.3cm	回転によって区画され、波状文が施されている。透孔は2段3方向。上段は長方形、下段は三角形。残存率30%。自然積が遺く付着。	良好	外面5/6/1灰褐色 内面7.5/5/1灰褐色 断面5/6/1灰褐色	径3mm以下の小繊維を含む	回転ナダ
355	国版21	高杯脚部	脚端部径9.6cm 残存高11.2cm	杯部と脚部の大部分を欠損する。長方形の透孔は3方向の可能性が高い。残存率は30%。	良好	外面2.5/4/1黄褐色 内面N/6/0灰褐色 断面N/7/1灰白色	径1mm以下の繊維を1%以下含む	回転ナダ
356	国版21	口縁部	口径22.4cm 残存高6.0cm	外側の口縁部底面に波状文を施す。頭部の外面に突起がみぐる。自然積が遺く付着。残存率はロ縁部の30%。	良好	外面2.5/4/2暗灰黄色 内面5/5/1灰褐色 断面10YR8/2灰褐色	径1mm以下の白色繊維を1%含む。1%以下含む	回転ナダ
357	国版21	高杯形 器台 杯部	口径27.2cm 残存高9.6cm	口縁部は広い面をもつ。2条1組の突起によって区画され、波状文がめぐる。残存率は20%。	良好	外面2.5/5/1黄褐色 内面5/6/1灰褐色 断面5R 5/1赤褐色	径2mm以下の白色繊維を2%含む。	杯部下半はタガキ成形のち、カリ目調整。それ以外は回転ナダ調整。
358	国版21	高杯形 器台 杯部	口径30.8cm 残存高12.8cm	口縁部底面直下に突起をもつ。2条1組の突起によって区画され、波状文がめぐる。残存率は40%。外側に輪郭が付着。	良好	外面N3/暗灰色 内面N/6/0灰褐色 断面5Y6/1灰褐色	径1mm以下の白色繊維を1%含む。1%以下含む	杯部下半はタガキ成形のち、カリ目調整。それ以外は回転ナダ調整。
359	国版21	小壺	口径6.0cm 残存高10.0cm	装飾付須恵器の小壺。底部には接着したための粘土あり。底に他成前の穿孔がある。残存率は80%。	良好	外面5/5/1灰褐色 内面5/5/1灰褐色 断面5/5/1灰褐色	径1mmの白色繊維を含む	回転ナダ
360	国版21	小壺	口径4.8cm 残存高5.6cm	装飾付須恵器の小壺。口縁部と脚部を突起で区画する。底部には接着したための粘土。残存率は70%。	良好	外面10V5/1灰褐色 内面10V5/1灰褐色 断面5/8/6/6橙褐色	径1mmの白色繊維を1%含む。	回転ナダ
361	国版21	小壺	残存高4.6cm 脚部径4.0cm	装飾付須恵器の小壺。残存率は20%。	良好	外面N/6/0灰褐色 内面5/4/1暗赤褐色	径1mmの白色繊維を1%含む。	回転ナダ
362	国版21	動物像	残存高4.3cm 体長5.9cm	装飾付須恵器付属の動物物	良好	5/5/1灰褐色 (断面5/8/5/1赤褐色)	径1mmの白色繊維を1%以下含む。	ナダ
363	国版21	罐	残存長3.2cm 厚さ0.8cm	装飾付須恵器の罐。	良好	5/6/1灰褐色 (断面5/5/1灰褐色)	径1mmの白色繊維を1%含む。	ナダ
364	国版22	高杯形 器台脚部	脚端部26.0cm 残存高32.0cm	2条1組の突起によって6段に区画されており、各段に波状文がめぐる。透孔は下から2~6段目にあり、三角形4方向。残存率は30%。	良好	外面N/6/0灰褐色 内面N/6/0灰褐色 断面2.5/18/2赤褐色	径1mm以下の白色繊維を1%含む。	ナダ
365	国版22	高杯形 器台 脚部	残存高19.2cm	長方形の透孔が2段。カキ目がめぐっており、その上から波状文が4段確認できる。残存率は20%。	良好	外面N/6/0灰褐色 内面N/6/0灰褐色 断面N/6/0灰褐色	径2mm以下の白色繊維を2%含む。	内面回転ナダ。外側カキ目調整。
366	国版22	高杯形 器台 脚部	脚端部径26.5cm 残存高20.8cm	突起によって4段に区画され、波状文が2~3段めぐる。透孔は三角形4方向。残存率は20%。	良好	外面N/7/1灰白色 内面N/7/1灰白色 断面10YR8/2灰白色	径1mm以下の白色繊維を1%含む。1%以下含む	回転ナダ

第4章 前山A 13号墳の発掘調査

1 調査に至る経緯と既往の調査

(1) 調査に至る経緯

前山A 13号墳は前山A地区の北側に延びる小尾根上に位置する円墳であり、西に開口し、石棚・石梁を有する横穴式石室を埋葬施設を持つ。大正期の「岩橋千塚古墳群第一期調査」においても調査が行われ、石棚・石梁を持つ古墳の一つとして古くから知られていた。紀伊風土記の丘開園後は公開古墳の一つとして石室は開放されており、資料館からも近いことから、見学者数の多い古墳でもある。

しかし、近年、石室の排水機能が悪化し、墳頂部にあけられた盃掘坑から流入した雨水が常時玄室内に滲水する状態となっていた。そのため、雨水の流入を防ぎ、排水機能を回復させることを目的とした整備が計画され、整備に先立って発掘調査が実施されることになった。発掘調査では、排水溝内に堆積した土砂を取り除くとともに、その構造や全長などの基礎資料を得ることを目的とした。

調査は平成18年度と平成20年度に財団法人和歌山県文化財センターに委託して行い、出土品の整理作業は平成26年度に紀伊風土記の丘が実施した。なお、出土装身具のうち、ガラス小玉については長谷川愛（奈良大学大学院生）の協力を得て科学的分析を行った。装身具の分析結果については『紀伊風土記の丘研究紀要』第3号（平成27年3月刊行）に掲載している。

(2) 既往の調査

大正8（1919）年4月、内務大臣より発布された「史蹟名勝天然記念物保存法」によって、和歌山県は大正9（1920）年12月「和歌山県史蹟名勝天然記念物調査規定」を定め、大正10（1921）年2月より県内の史蹟の調査を行った（和歌山県1921『和歌山県史蹟調査報告第一』）。岩橋千塚古墳群も発掘調査が行われ、この調査は「第一期調査」として位置づけられている。第一期調査では現在の前山A地区の27基が対象となり、前山A 13号墳もその一つとして発掘調査された。

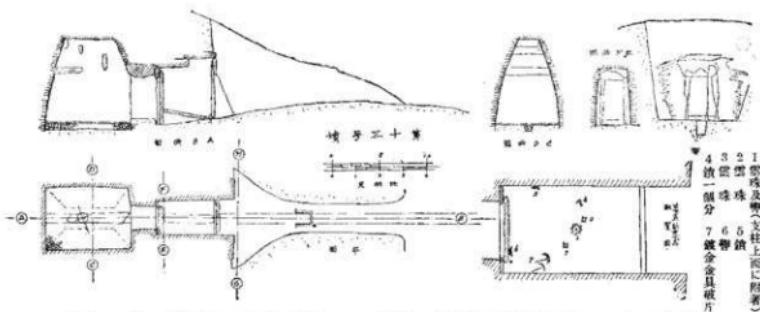


図35 第一期調査における前山A 13号墳の遺構図（和歌山県1921より転載）

第一期調査の報告では、前山A 13号墳は墳丘の高さ約3.6m、直径約15mの円墳で葺石、埴輪を持たないことが記されている。そして、西向きに開口する石室は主室（玄室）、小室（玄室前道）、前室（羨道部）からなり、玄室は長さ2.7m、幅2.1mの長方形で床面中央に幅0.3m、深さ18cmの排水溝が設けられているとされる。遺構図からは、排水溝が石室外に延びることが確認されていたことが分かる。また、玄室の奥壁・側壁は結晶片岩を小口積みして持ち送っているが、奥壁に1枚の石棚、天井近くに2枚の石梁が垂直に懸架されており、これは持ち送りの壁の崩壊を防ぐための「極めて進歩せる構造」と評価している。報告書記載の図面や記述からは羨門部が2枚の立柱と1枚の板石によって閉塞され、玄室前道が1枚の扉石によって閉じられていたことが判断できる。また、玄室前道の扉石には板石を斜めに立てかけ、転倒を防ぐ工夫をしていたことが分かる。

第一期調査における出土遺物は、羨道部から雲珠、轡、鎖、鍍金具破片の出土が報告されている。玄室内はすでに盜掘されていたが、前庭部が調査時まで墳丘内にあり、なおかつ扉石が原位置を保っていたことから、これらの遺物は攪乱を受けずに当初から羨道部に副葬されていたものと評価されている。そのほか、羨門部扉石の下端から鉄槍の破片が発見され、前庭部埋土には須恵器の破片が多数混入していたことが記されているが、これらの資料の所在は現在では不明である。

以上が、第一期調査の調査成果であるが、大正期において、すでに玄室内及び玄室外の排水溝の一部が発掘調査によって検出され、掘削されていたことが判断できる。

2 調査成果

（1）調査の方法

発掘調査に先立ち、縮尺100分の1で測量図を作成した。発掘調査では調査区を石室部（玄室～羨門）、前庭部、墳丘外の3か所に分けて設定し、それぞれ石室調査区、前庭部調査区、墳丘外調査区として報告を行う。調査の実施年度は平成18年度と平成20年度であり、平成18年度は石室調査区及び前庭部調査区を、平成20年度は墳丘外調査区を対象とした。

平成18年度の調査では、石室調査区において排水溝の検出を行うとともに、玄室の奥壁・前壁・南側壁、羨道部の南壁の実測図を作成した。前庭部でも排水溝の掘方上面を検出したあと、暗渠構造の把握のため、2か所において断ち割りを実施した。

平成20年度の調査では、墳丘外に延びる排水溝の長さを確認するため、また、墳丘前面にみられる隆起が古墳であるかどうかを検証するために十字のトレンチを設けた。以下、その調査成果を項目ごとに記述していく。

（2）測量調査の成果

前山A 13号墳は主稜線から北に延びる小尾根に築造された古墳で、墳丘測量図からは径18mの円墳であると判断できる。墳頂と墳頂の高低差は測点によって異なるが、石室開口部側から測った場合は約4mとなり、腰高の古墳である。墳頂付近には盜掘坑が2か所確認でき、このうち東側のものは大正期の第一期調査においても報告されており、玄室奥壁上部にまで達していた。

また、測量図からは石室開口部前面の等高線が西に張り出していることがみてとれ、古墳であ

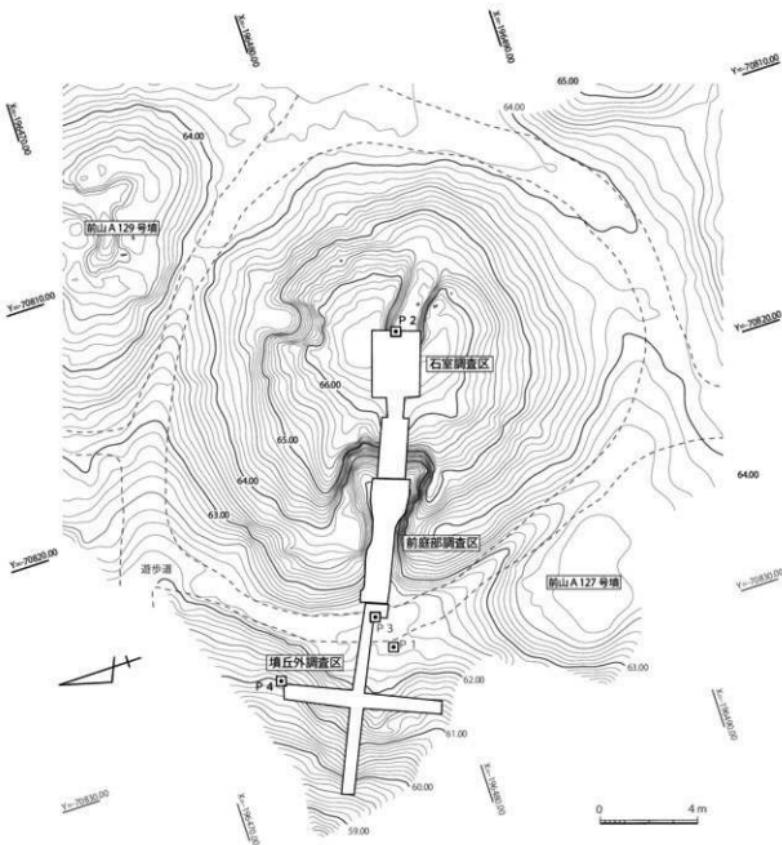


図36 前山A 13号墳の測量図及び調査区配置 ($S = 1 / 200$)

る可能性も考えられたが、墳丘外調査区の項においても後述するように、これは大正期の調査時に断ち割られた墳丘の土砂が搔き出されて形成されたものと判断した。

(3) 石室調査区

前山A 13号墳の埋葬施設は西向きに開口した横穴式石室であり、玄室・玄室前道・羨道部からなる。結晶片岩の板石を積み上げ、玄室上部には石棚及び石梁を懸架する岩橋型横穴式石室である。玄室長2.67m、玄室前道長0.84m、羨道部長2.5mであり、全長6.01mを測る。石室の主軸は65度西に偏している。以下、石室の各部についてその特徴を記す。

玄室 玄室は岩盤を掘りこみ、結晶片岩を小口積みに持ち送りながら構築している。玄室長が

2.67 m であるのに対し、玄室幅は 2.07 m と長方形を呈し、床面から天井までの高さは 2.8 m を測る。左右の側壁は床面から 78 度の角度で内傾し、ほぼ直線的に持ち送る。奥壁は側壁同様、78 度の角度で直線的に持ち送るが、石棚より上部では 70 度前後の傾斜となる。床面の標高はほぼ水平であり、61.8 m である。玄門は緩やかにカーブを描き、85 度程度の傾斜で持ち送る。石室は全体的に穹窿状を呈するため天井部は長さ 1.5 m、幅 0.66 m と床面に比べて狭小となる。

石室を構成する結晶片岩の積み方は、基底部に厚さ 15cm 前後、長さ 30 ~ 50cm の板石を隙間なく平積みし、2 段目以降、基底部と同程度の石材を水平に小口積みし、その隙間を小割りした石材で間断なく埋めていく。奥壁は床面から石棚までは小口積みでそれより上は平積みである。前壁は玄門上に厚さ 38cm の一枚岩（樋石）を水平に懸架し、その上部に厚さ 10 ~ 15cm の板石 6 枚を平積みしている。

石棚は床面奥側から 1.7 m の高さで両側壁に食い込む形で懸架している。厚さ 20 ~ 30cm、奥壁から石棚前端までの幅が 93cm を測る一枚岩を使用している。石梁は 2 枚あり、玄室上部の両側壁に食い込むように懸架される。奥壁寄りの梁は石棚先端の上部 30cm にあり、もう 1 枚は前道寄りに 60cm 離れた位置に懸架されている。いずれも垂直梁である。

玄室前道 玄室前道は下部に長さ 2 m 以上、幅 0.7 m、厚さ 27cm の樋石を敷き、その上に両壁を小口積みしている。玄門幅は下部で 0.65 m、上部で 0.6 m とほぼ垂直に積み上げ、樋石と樋石との間の高さは 1.27 m である。玄室前道と羨道の境にあたる玄門には樋石の外側に仕切りのための板石を羨道に直行して垂直に据え、左右には化粧柱石が側壁に食い込むように立てられている。玄室とは高低差があり、玄室前道側が 27cm 高い。

羨道 羨道は玄室前道より、樋石 1 段分低くなっている。羨道部の側壁もやや持ち送りしており、天井石は二枚架けられている。羨門側には、玄室前道との境と同様に仕切りのための板石を両側壁に食い込んで据えている。その仕切り石の間の羨道床面には、大正時代の調査時に玄門部を開塞していたと考えられる扉石が横たわっていたが、調査では取り除かず現地に残している。

排水溝 玄室内では、玄室を縦に二分するように中央に敷設されており、玄室奥壁際では幅 20cm、深さ 15cm、玄門寄りでは幅 30cm、深さ 15cm を測る。玄室の排水溝に伴う蓋石、側板石は大半が取り除かれていたが、一部が残存していた。現存する状況から構築方法は、箱掘りをしたのち、溝壁に結晶片岩の板石を当て、玉砂利を充填し蓋石を被せていたと判断できる。玄室での排水溝はほぼ水平に構築されており、底における標高は 61.7 m である。

玄室前道における排水溝は樋石の下を潜り、羨門側へと延びていると考えられる。

羨道部においては、中心部に横たわる扉石が置かれていたため、当該部分での排水溝の確認は行えていないが、羨門側仕切り石より西側において、長さ 20cm、幅 30 cm の範囲で掘削を行い、排水溝の蓋石を検出した。このことから、羨道部においても玄室と同様の構造であったと推察される。

遺物 石室調査区における出土遺物は、玄室内に堆積していた土砂及び玉砂利の洗浄を行ったところ、水晶製切子玉 1 点、ガラス小玉 25 点を検出した。

(4) 前部調査区

石室の入口部分から、園路までの間の前部において設定した調査区である。羨門側壁の端からの調査区西端までの長さは 5.1 m である。本来は埋葬後に埋戻されて墳丘内であった部分であるが、大正期の調査において断ち割られた結果、現在のように開口したと考えられる。

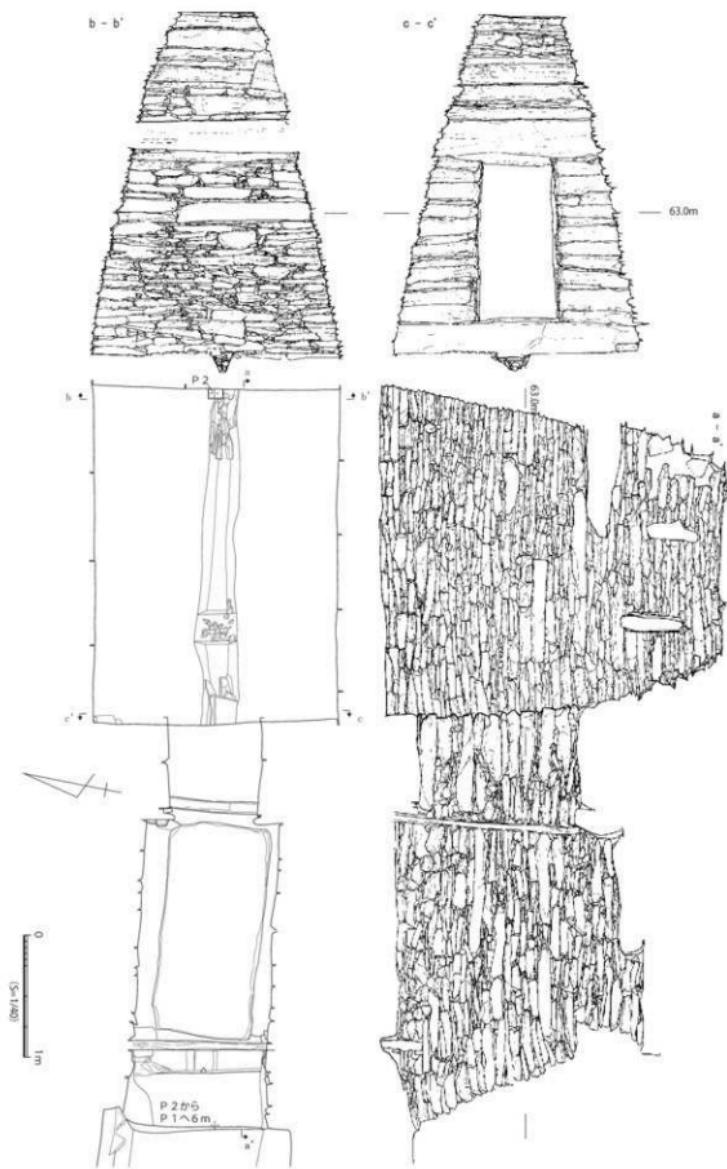


図37 前山A 13号墳 横穴式石室実測図 ($S = 1 / 40$)

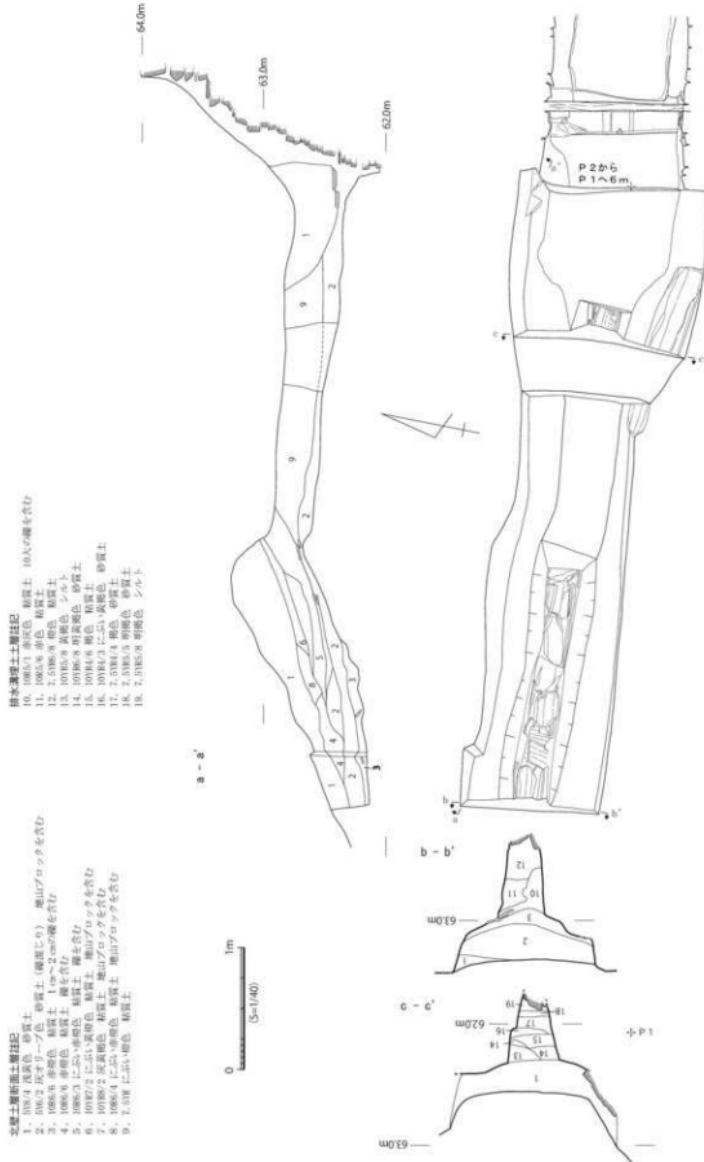


図 38 前山 A 13 号墳 前庭部調査区平面図・土層断面図 (S = 1 / 40)

前庭部調査区では大正期以降に堆積した層（図 38－1層）及び前庭部埋土と考えられる層（図38－2～9層）の掘削を行い、排水溝上面の検出を行った。その結果、上端の幅42cm～52cmの排水溝が検出され、調査区の西側へと延びることが確認できた。また、排水溝の構造を把握するため、調査区の中央部と西側において断ち割りを行った。中央部の断ち割り部では、深さ40cm～50cm、西側では50cm～60cmで蓋石を検出し、石室調査区よりも排水溝の掘削が深かったことが分かった。また、蓋石検出面での標高は、調査区中央部では61.9mであるが、調査区西端では61.4mとなり、石室の入口付近から排水溝の標高が徐々に減じていることが判断できる。なお、西側断ち割り部の一部において蓋石より下部の断ち割りを行ったところ、玄室と同様、溝の側壁に結晶片岩の板石をあて、玉砂利を充填し、蓋石を被せていることを確認した。ただし、排水溝の断面形はV字形となり、玄室における箱堀りとは異なったあり方をしている。

前庭部調査区からの出土遺物としては、大正期以降の堆積土から須恵器の破片が数点見つかっている。

（5）墳丘外調査区

平成18年度の調査において確認された、古墳の西側へと延びる排水溝の検出と、石室入口の西側にある隆起が古墳であるかを判断するために設定した調査区である。当調査区は排水溝の主軸に沿って設定した東西方向の東西トレンチとそれに中央付近で直交する南北トレンチからなり、形状は十字状となる。

基本層序 墳丘外調査区における基本層序は第1層は表土で、腐食を多量に含む灰白色シルトからなる（土層番号8）。

第2層は園路造成土及び造成後に形成された土層で、園路に使用された円礫やバラスを含んでいる。土層番号4～6、9、12、13、30。

第3層は大正時代の調査による堆土及び園路造成以前に形成されたと推定される土層である。色調や含有物の違いから、おおよそ4層に細分される。

第3a層：片岩片を含むことが多い。土層番号11、14～18。

第3b層：赤みが強い。土層番号19、23～25。

第3c層：褐色のマンガン粒混じりの粘質シルトブロックを含む。土層番号20～22、26。

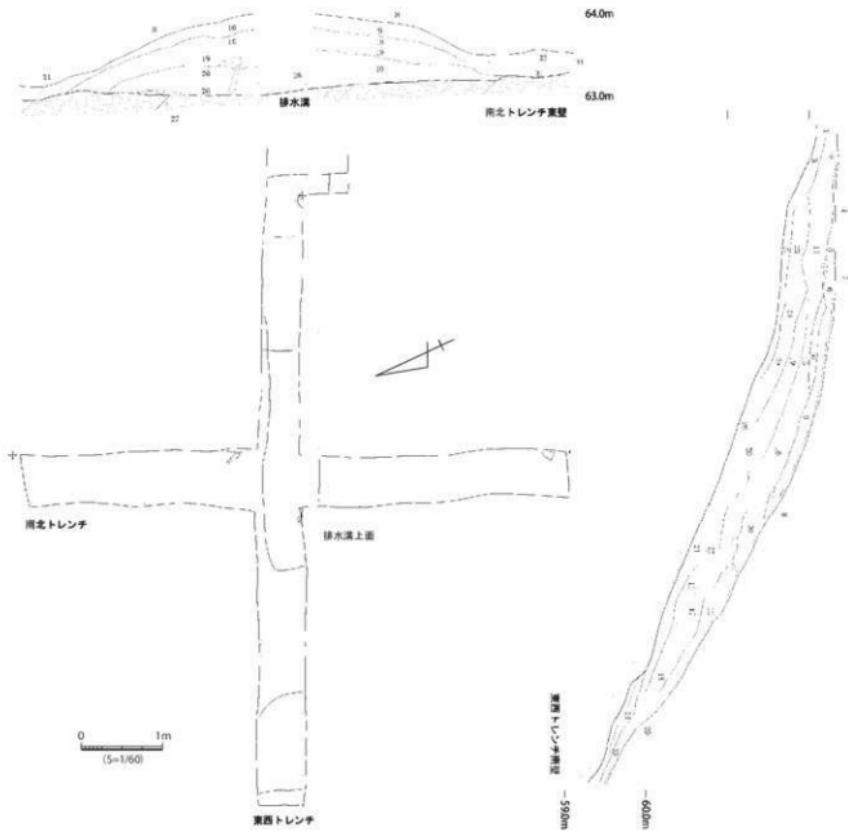
第3d層：石室入り口内に堆積する。なお、東西トレンチの南壁ほぼ中央で、直線的で不自然な土質の変化部分が存在したが、北壁や直交する南北トレンチの断面ではこの変化が確認できず、成因は不明である。

第4層は大正時代以前に形成されたとみられる土層である。土層番号3、27。

東西トレンチ 平成18年度の前庭部調査区と隣接する部分では、墳丘盛土の可能性のある立ち上がりを確認したほか、排水溝掘方を検出した。遺構面は、トレンチ東端から約1mまでは、ゆるやかなカーブを描いて下がっており、その西側には、長さ約1.4mの平坦な面がある。

排水溝の上面はトレンチ東端から西側へ3.2mの地点まで検出され、一部、南北トレンチ南側にかかる。排水溝は、先ずぼまりの形状となっている。埋土は、平坦部分より西では風化礫を大量に含んでおり、東側では地山とほぼ同質で粘質を帯びている。ボーリングによる探査で、排水溝先端から東へ20～40cmの部分で、検出面より10～20cm下に石が存在することが確認された。一方、平坦部では、検出面より約40cm下でも石が確認できなかった。

墳丘外調査区における排水溝は遺構保護のため、断割りは実施していないが、調査の結果、玄



填丘外調査区土層注記

1. T.51W4/8 淡褐色 シルト質土 = 填丘盛土
2. 51W4/4 淡褐色 シルト質土 (砂混じり)= 填丘盛土
3. 51W4/2 淡オリーブ色 シルト質土 (砂混じり)= 填丘盛土
4. T.51W7/8 黄褐色 シルト質土 = 園路造成土
5. 51W7/6 棕褐色 シルト質土 (砂混じり) = バラスを多量に含む。= 園路造成土
6. 51W7/6 棕褐色 シルト質土 (砂混じり) = バラスを多量に含む。= 園路造成土
7. 51W7/6 棕褐色 シルト質土 (ワラを含む。)= 園路造成土
8. 10W4/1 灰白色 (腐食を多量に含む。)= 表土
9. T.51W4/4 褐色 シルト質土 (腐食を多量に含む。= 現代遺物を含む。)
10. T.51W4/4 棕褐色 シルト質土
11. 10W3/6 黄褐色 シルト質土 (風化した片岩片を含む。)
12. T.51W7/6 棕褐色 シルト質土 (粗砂混じり、凹穂をわざかに含む。)
13. T.51W6/6 棕褐色 シルト質土 (凹穂をわざかに含む。)
14. T.51W7/8 黄褐色 シルト質土 (粗を多量に含む。)
15. 51W5/8 明赤褐色 シルト質土 (風化した片岩片を含む。)
16. 10W3/6 黄褐色 シルト質土 (風化した片岩片を多量に含む。)
17. T.51W5/6 明褐色 シルト質土

18. 10W6/8 棕褐色 シルト質土
19. 51W5/8 明赤褐色 シルト質土 (風化した片岩片を含む。)
20. T.51W5/8 明褐色 シルト質土 (風化した片岩片を含む。シルトブロックを含む。)
21. T.51W5/6 明赤褐色 シルト質土 (シルトブロックを多量に含む。)
22. 10W6/6 黄褐色 シルト質土 (風化した片岩片を含む。シルトブロックを含む。)
23. 51W5/8 明赤褐色 シルト質土
24. 10W6/6 棕褐色 シルト質土
25. 10W5/6 黄褐色 シルト質土 (軽鉛。風化した片岩片を多量に含む。)
26. 10W3/6 棕褐色 シルト質土 (シルトブロックを少量含む。)
27. 10W3/6 黄褐色 シルト質土
28. T.51W7/8 黄褐色 シルト質土
29. 51W6/8 棕褐色 シルト質土 (風化礫を多量に含む。)
30. 10W5/6 黄褐色 シルト質土 (風化礫を含む。)
31. T.51W7/6 棕褐色 シルト質土 (微砂混じり。)
32. 51W5/6 黄褐色 シルト質土 (シルトブロックを少量含む。)
33. 10W4/1 棕灰色 シルト質土 (糞食を大量に含む。凹穂を含む。)
34. T.51W5/8 棕褐色 シルト質土 (微砂混じり。シルトブロックを含む。)

図 39 前山 A 13 号墳 填丘外調査区平面図・土層断面図 (S = 1 / 60)

室から延びる排水溝が墳丘外の谷側に向かって全長 14.4 m にわたって敷設されていたことが判明した。また、排水溝は石室部分ではほぼ水平に敷設されているが、羨門付近から約 8 ~ 9 度の角度で傾斜して下がっていることも新たに分かった。

南北トレーニング 南北トレーニングの中心部には、第 1 層～第 3 層が厚く堆積している。地山は、南から北に向かって緩やかに傾いているが、これは、自然地形の傾きを反映しているものとみられる。

これらのことから、東西トレーニングにおける土層の堆積状況も含めて考えて、古墳西側でみられた等高線の張り出しが古墳ではなく、二次的な土砂の堆積であると判断できる。さらに、これらの堆積は大正期における前山 A 13 号墳の調査時に石室前面の墳丘を掘削した際に引き出された結果によるものであることが分かった。

遺物の出土状況 墳丘外調査区における出土遺物は、東西トレーニングでは、西端から 4 m の地点までの第 3 b 層、第 3 c 層から出土している。前庭部の端では、土層番号 2 の下部、土層番号 3 の上部から出土している。長径 15 cm ほどの比較的大きな破片も出土しているが、大半は小片で、甕とみられるものが大半を占める。

3 出土遺物

装身具は玄室内に堆積していた土砂を簡いにかけることにより検出した。水晶製切子玉 1 点(図 40-1)、ガラス小玉 25 点(図 40-2~26)がある。羨道部、前庭部の堆積土からは須恵器が出土している。

(1) 装身具

水晶製切子玉 水晶製切子玉は穿孔面を上面として、上面の最大長 11 mm、下面の最大長 9 mm、中央部の厚さ 15 mm、高さ 17 mm である。孔径は上面で 4 mm、下面で 2 mm である。穿孔方法は片面穿孔である。

ガラス玉 ガラス玉は直径 3 mm ~ 5 mm の範囲におさまる。孔径は 0.5 mm ~ 2 mm である。厚さは 2 mm ~ 4 mm である。色調は 2 ~ 16 は緑色、17 ~ 21 は青色、22 ~ 25 は黄色、26 は薄青色を呈している。

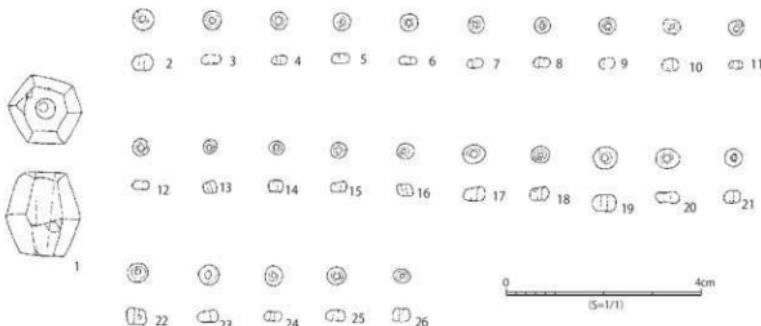


図 40 前山 A 13 号墳出土 装身具 (S = 1 / 1)

(2) 須恵器

須恵器は前部調査区と墳丘外調査区から出土した。

27～30は蓋の破片である。27はつまみを有する蓋である。残存高2.4cm、つまみの直径2.7cmである。つまみはナデ調整であり、天井部外面には回転によるヘラケズリがみとめられる。28は回線によって天井部と口縁部を画する蓋である。残存高2.2cmである。内外面の調整はナデであり、天井部外面に回転ヘラケズリの痕跡がある。29は蓋の口縁部である。直径11.8cm、残存高2.0cmである。内外面の調整は回転ナデによる。30は蓋の口縁部の破片である。口径14.8cm、残存高0.9cmである。調整は内外面ともに回転ナデにより、口縁端部はつまみ下部につまみ出している。

31～34は壺である。31は胴部から肩部にかけ、回線を境に屈曲しており、長頸壺と考えられる。残存高2.4cm、胴部径14.5cmである。調整は内外面ともに回転によるナデである。32は胴部の破片である。外面にタタキ目、内面に同心円状の當て具痕がみとめられる。33は口縁部の破片である。直径18.7cm、残存高5.1cmである。調整は回転ナデである。口縁端部の処理は上方へつまむようにしている。焼成は良好であり、色調は灰色である。34は33と同一個体と考えられる肩部である。外面に平行タタキ目、内面に當て具痕が確認できる。

35・36は大型壺の胴部破片である。33は長径8.5cm、厚さ1cmである。内面に同心円状の當て具痕、外面に格子タタキ目がある。焼成は不良であり、色調は灰白色である。丸みが強く、胴部中央付近の破片と考えられる。36は長径17.5cm、厚さ1cmである。内面に同心円状の當て具痕、外面に格子タタキ目がある。焼成は良好で色調は灰色を呈する。

これらの須恵器は残存状況が良くないものの、杯蓋(29)や長頸壺の肩部(31)から6世紀の後葉であることがうかがえる。また、後出する型式的特徴を示す蓋(30)も出土しており、追葬の可能性も予想されるが、古墳の築造年代は6世紀後葉であったと考えられる。

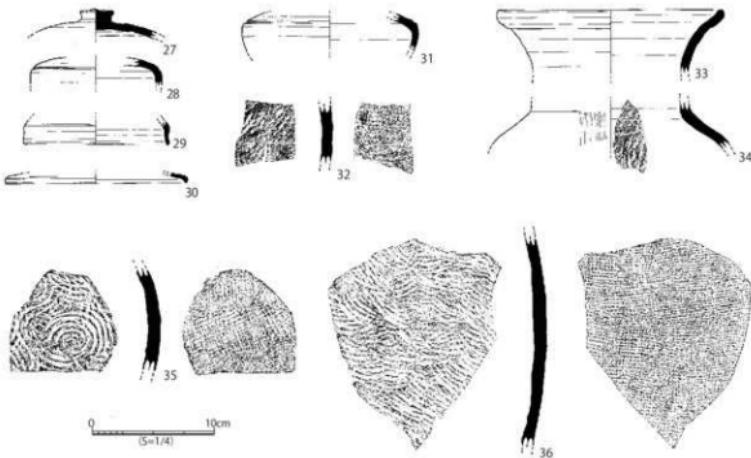


図41 前山A 13号墳出土 須恵器 (S = 1 / 4)

4まとめ

平成18年度の調査では、前山A 13号墳は墳径18m、高さ4mの円墳であり、石室の規模は、玄室が長さ2.67m、幅2.07m、高さ2.8m、玄室前道が長さ27cm、幅65cm、高さ1.27m、羨道長2.5mであることが分かった。石室は結晶片岩の板石を78度の角度でほぼ直線的に持ち送っており、奥壁に石棚が1枚、上部に垂直の石梁2枚を懸架する。玄室前道と羨門部には扉石による閉塞のためにそれぞれ1枚の仕切り石を設けており、完成された岩橋型横穴式石室の型式と言えるだろう。

また、玄室の中央には、主軸方向に幅30cm、深さ15cmの排水溝が地山を掘削して敷設されており、この排水溝は玄室前道基石の下を潜り、羨道部・前庭部を経て墳丘外に延びていることが判明した。石室内においては、ほぼ水平に敷設されていたが、前庭部に至ると徐々に標高が下がっていくことも明らかとなつた。

平成20年度の調査では、石室入口西側の墳丘外に調査区を設け、排水溝の先端部の上面を検出し、玄室奥壁から延びる排水溝の全長が14.4mであることが分かった。また、古墳西側で確認された墳丘状の隆起は土層の堆積状況から判断すると、古墳を示すものではなく、大正期の調査以降に掻き出された土が堆積した結果であることも明らかとなつた。なお、隆起の下層にあたる第3c層のシルトブロックには、湿润な環境で形成されるマンガン粒が混じっていることから、当時から、前山A 13号墳やその周辺は水がたまりやすい環境にあったことを示唆している。

今回の調査において、玄室内堆積土からは装身具の水晶製切子玉、ガラス小玉が検出され、石室外の各調査区からは須恵器の破片が出土した。いずれも、原位置を示すものではなく、盗掘によって攪乱されたものと考えられる。大正期の調査において羨道部から出土したような金属製品を確認することはできなかつたが、出土している須恵器からは、当古墳の築造年代が6世紀後葉であることが分かつた。

以上が前山A 13号墳における発掘調査の成果であり、今回の調査で得られた基礎情報をもとに、当古墳の整備を行っていきたい。

参考文献

和歌山県1921『和歌山縣史蹟調査報告第一』

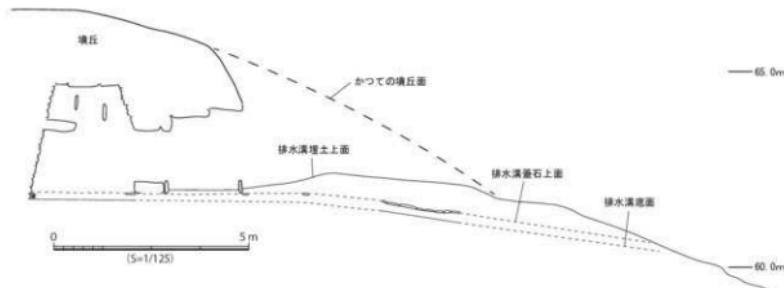


図42 前山A 13号墳 排水溝模式図 (S = 1 / 125)

第5章 前山A 58号墳の発掘調査

1 発掘調査と整理作業の経過

(1) 調査に至る経緯

前山A 58号墳は、和歌山県立紀伊風土記の丘園内の前山A地区西部に所在し、周辺には横穴式石室を埋葬施設とする前山A 99号墳や、堅穴式石室をもつ前山A 111号墳、箱式石棺をもつ前山A 100号墳などが分布しており、周辺は石室の見学が可能な公開古墳地区として整備されている。

前山A 58号墳は、従前より2基の円墳（前山A 58号墳及び前山A X 18号墳）と認識されてきたが、測量図の検討及び現地踏査の結果からは前方後円墳である可能性も指摘されていた。また、西向きに開口する横穴式石室の玄門部は片袖傾向が著しく、型式学的に岩橋千塚古墳群に横穴式石室が導入された初期段階のものと考えられたが、こうした6世紀前半に属する古墳は当該地区においては少数であり、岩橋千塚古墳群における横穴式石室導入時の築造動向を検討するうえで重要である。さらに、墳丘上からは以前より埴輪片が採集されており、埴輪をもつ小型古墳としても注目されていた。

加えて、石室は過去の盗掘によって天井石や上方約3分の1を占めると推定される持ち送り部分が既に除去されており、残存する石室の壁面のうち南・北・西壁は比較的安定した状態を保っているが、奥壁については上部が土圧により内側に孕んでおり、崩壊の危険が懸念された。

上記のような理由から、当古墳が整備・公開の対象となり、墳形の確認や埴輪の具体的な把握など、整備にあたっての基礎資料を得ることを目的として、発掘調査を平成21・22年度に実施した。調査は、平成21年度に発掘調査等支援業務として財団法人和歌山県文化財センターと委託契約を締結して第1次調査を行い、平成22年度に和歌山県立紀伊風土記の丘が第2次調査を行った。

(2) 整理作業

出土品の整理作業は、平成25・26年度に和歌山県立紀伊風土記の丘が直接整理補助員・整理作業員を雇用して行った。出土鉄製品のX線撮影は、和歌山県工業技術センターの協力を得た。また、一部の脆弱な遺物については、保存処理を実施した。保存処理事業は、簡易公開調達の結果、公益財團法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所が受託した。

出土装身具のうち、ガラス類については長谷川愛（奈良大学大学院生）の協力を得て分析を行い、その分析結果については『紀伊風土記の丘研究紀要』第3号（平成27年3月刊行）に掲載した。

2 発掘調査の成果

(1) 調査の方法

発掘調査は整備委員会の指導のもと、和歌山県立紀伊風土記の丘が実施した。

第1次調査では、墳丘の測量調査及び石室と墳丘の発掘調査を実施した。発掘調査では、石室構造の把握と墳形の確定を目的として、玄室のほか、各所に1～6トレンチを設けて掘削を行った。その結果、当該調査では石室の構造が明らかとなつたが、墳丘が当初の想定よりも大きいことが判明した。また、

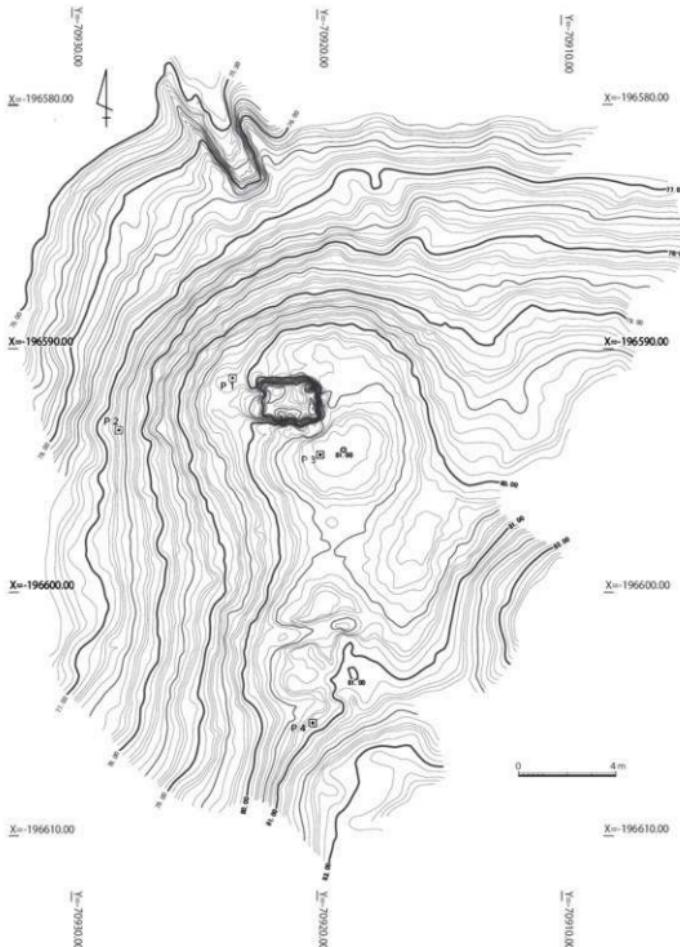


図 43 前山A 58号墳 測量図 ($S = 1/200$)

一部のトレンチにおいて円筒埴輪が樹立された状況が確認された。そのため、古墳の全長の把握や前方後円墳の是非、後円部及び前方部の埴輪の樹立状況の確認を目的として第2次調査を実施した。第2次調査では、トレンチの拡張を行うとともに、新たに7~11トレンチを設けた。トレンチの位置と第1・2次ごとの調査範囲は図44に示すとおりである。その結果、前山A 58号墳が墳長19.6mの前方後円墳であることが判明した。調査区ごとの調査成果の詳細については以下に記述する。

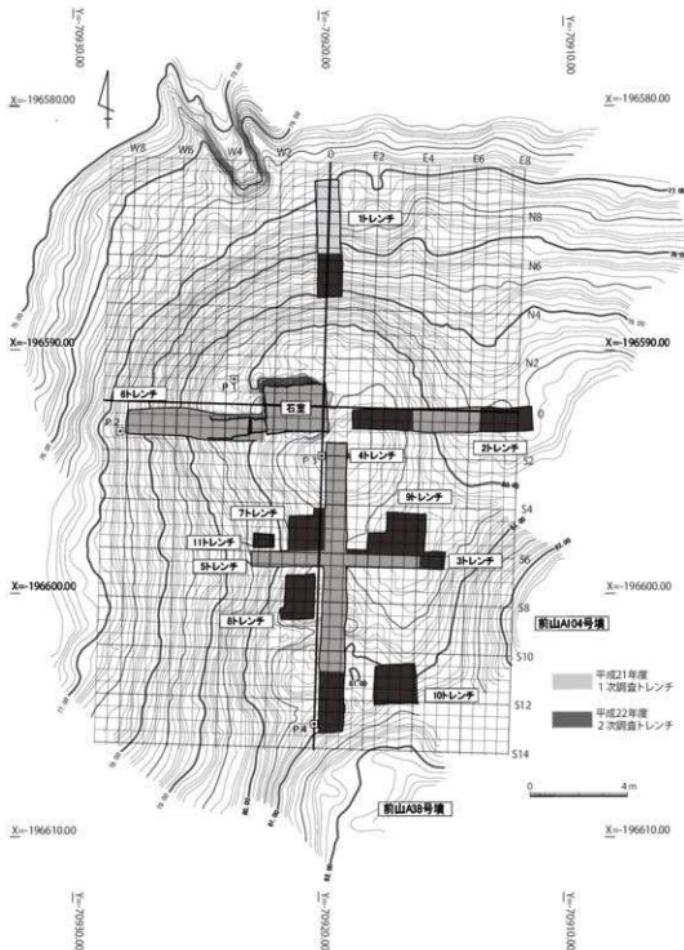


図44 前山A 58号墳 トレンチ配置と調査グリッド (S = 1 / 200)

調査においては、トレンチの掘削後に墳丘等の遺構検出を行い、写真撮影、平面図・土層断面図等の記録を作成した。また、墳丘や地山の堆積状況の確認等を目的として、必要最小限の範囲で断ち割りを行っている。

なお、第2次調査に際しては、墳丘の後円部と前方部を通る主軸ラインと、これと直行するラインを石室付近に任意に設定し、これを基点として1mメッシュを設定した。遺物の取り上げに際してはさら

に 50cm ごとに細分した区画を基準とした。

また、2 次調査では、基本土層として以下のように分層を行っている。

1 層：表土層で、笹を主体とする植物の根及び腐植土より構成される層（1-1 層）と、1-1 層の土壤化が進行した土層（1-2 層）に細分される。

2 層：古墳の墳丘上に堆積した流土である。自然堆積とみられるが、4 トレンチ南部で確認される土層は盗掘による擾乱に起因する人為堆積土である可能性が高い。トレンチごとに細分を行った。

3 層：墳丘の盛土と判断される土層である。トレンチごとに細分を行った。

4 層：遺物を包含せず自然堆積の地山と判断される土層と、地山下に堆積する岩盤である。

（2）石室・6 トレンチ

後円部中央部に横穴式石室があり、西向きに羨道部をもつ。調査前にはすでに天井石及び石室上部は持ち去られ、羨道部は埋まっていたが、玄室内の壁面は土砂の流入も少なく視認できる状態であった。石室部分に石室トレンチ、羨道部に 6 トレンチを設定し、両トレンチとともに第 1 次調査において調査を行った。

玄室は長さ 2.5m、幅 1.9m の長方形であり、壁面は高さ約 1.5m 残存していた。石室の天井が現在よりもさらに上方にあったことを考えると、後円部頂は大きく削平されていると推測される。石室は玄門部が奥壁から見て左側に寄っており、片袖式のようにも見えるが、幅 0.1m ほどの袖部があり、片袖式ではなく片袖傾向の強い石室といえる。

石室内は下部に堆積していた土砂を掘削して、床面まで掘り下げた。ただし、断ち割り調査など下層の確認をおこなっていないため、検出した床面は最終床面であるかは確定していない。

床面では、主軸に直交する方向に 3 分割された埋葬範囲が確認された。奥壁側には板石を立て並べた石隙の一部が残されていた。石隙の規模は長軸 1.7m、短軸 0.8m であり、床面には玉石が敷設されていたことが確認できた。また、玄室中央のやや羨道部寄りの南半には板石が立てられた状態で検出されたが、この板石が石隙の一部になるのか、あるいは玄室を区画するための石材であったのかは判断が難しいが、細かい玉石が敷かれている状況が確認できたため、この部分が埋葬部分であった可能性は高いと考えられる。この板石より羨道部側にも埋葬されていた可能性もあるが、埋葬を示すものは確認できなかった。以上のように、玄室床面は 3 分割されており、少なくとも 2 体の埋葬があったことがうかがわれる。

奥壁・両側壁はそれほど大きくない石材を使用しているが、前壁は比較的大きな石材を使用している。玄室前道は長さ 0.4m、幅 0.5m で、南側壁・北側壁とともに 1 石分の石材を積んで構築されている。玄室前道の床面には大きな石材を置いて 1 段分高くしている。玄室前道の前面（羨道部側）には大きな結晶片岩の扉石が立てられており、閉塞されたままの状態である。扉石の羨道部側には扉石を支えるように結晶片岩の板石を斜めに立てかけている。立てかけられた石材を取り外して下部を掘削調査していくため、羨道部の検出面が最終床面であるかどうか判断できなかった。また、扉石から 1m ほど西側の地点の床面には石材が敷かれたような状態で検出できたので、この地点に羨道部の閉塞があった可能性がある。羨道部はゆるやかに南側に振っている。羨道部は幅 0.7m で、長さ 1.7m まで確認できるが、それより前面では壁面の石材は残されていない。この付近から床面のレベルが下がっていくことから、羨道部はそれほど長く続いていなかった可能性がある。扉石から 3.2m 地点でも床面に石材が確認でき、これより西側はさらにレベルが下がっていく。

なお、断ち割りなどを実施するなどした排水溝の確認調査はおこなっていない。

- 6トレンチ 北壁断面**
1. 31/4明黄色 シルト ササの根を多量に含む
 2. 31/5明黄色 シルト 細粒～中粒の風化した片岩を少額含む 帯輪軸を少額含む
 3. 7. 03/5. 0明黄色 シルト 細粒～中粒の風化した片岩を含む
 4. 10/5. 6黄褐色 シルト 細粒～5mmの片岩を含む
 5. 2. 3明黄色 シルト 細粒～中粒の風化した片岩を含む
 6. 10/3. 4オーブル色 シルト 竹の根を多量に含む
 7. 2. 3明黄色 黄褐色 シルト
 8. 3/3. 6明黄色 シルト
 9. 10/3. 4オーブル色 シルト 細粒～中粒の風化した片岩を含む
 10. 10/3. 6明黄色 シルト 細粒～5mm以上の風化した片岩を含む
 11. 7. 2. 3明黄色 シルト 細粒～5mm以上の風化した片岩を含む
 12. 10/3. 6明黄色 シルト 細粒～5mm以上の風化した片岩を含む
 13. 3/4. 4明黄色 シルト 細粒～5mmの風化した片岩を含む
 14. 3/4. 4明黄色 シルト 細粒～5mmの風化した片岩を含む
 15. 2. 3明黄色 シルト
 16. 3/3. 4明黄色 シルト
 17. 3/3. 4明黄色 シルト
 18. 3/3. 4明黄色 シルト
 19. 3/4. 4明黄色 シルト 細粒～5mm以上の風化した片岩を含む
 20. 3/3. 4明黄色 粘土まじりシルト
 21. 3/3. 4明黄色 シルト
 22. 10/3. 6明黄色 シルト
 23. 10/3. 6明黄色 黄褐色まじりシルト
 24. 3/3. 4明黄色 シルト
 25. 2. 3明黄色 シルト
- 風化した片岩、粘土を含む

- 支室北壁断面**
1. 2. 3/4. 6オーブル色 シルト ササの根を多量に含む
 2. 2. 3/4. 6明黄色 シルト 細粒～5mmの片岩を含む
 3. 10/3. 6. 0明黄色 シルト
 4. 10/3. 6. 0黄褐色 シルト
 5. 2. 3明黄色 シルト
 6. 3/3. 4明黄色 黄褐色 シルト
 7. 2. 3明黄色 黄褐色 植物砂 細粒砂 細粒～5cmの片岩を含む
 8. 2. 3明黄色 黄褐色 シルト 帯輪軸を含む

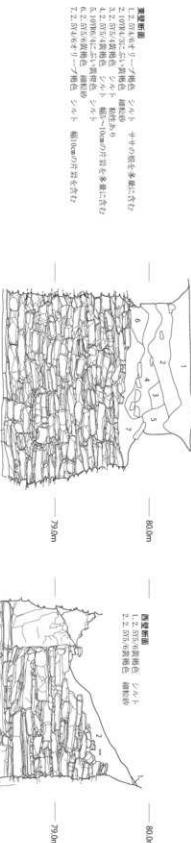
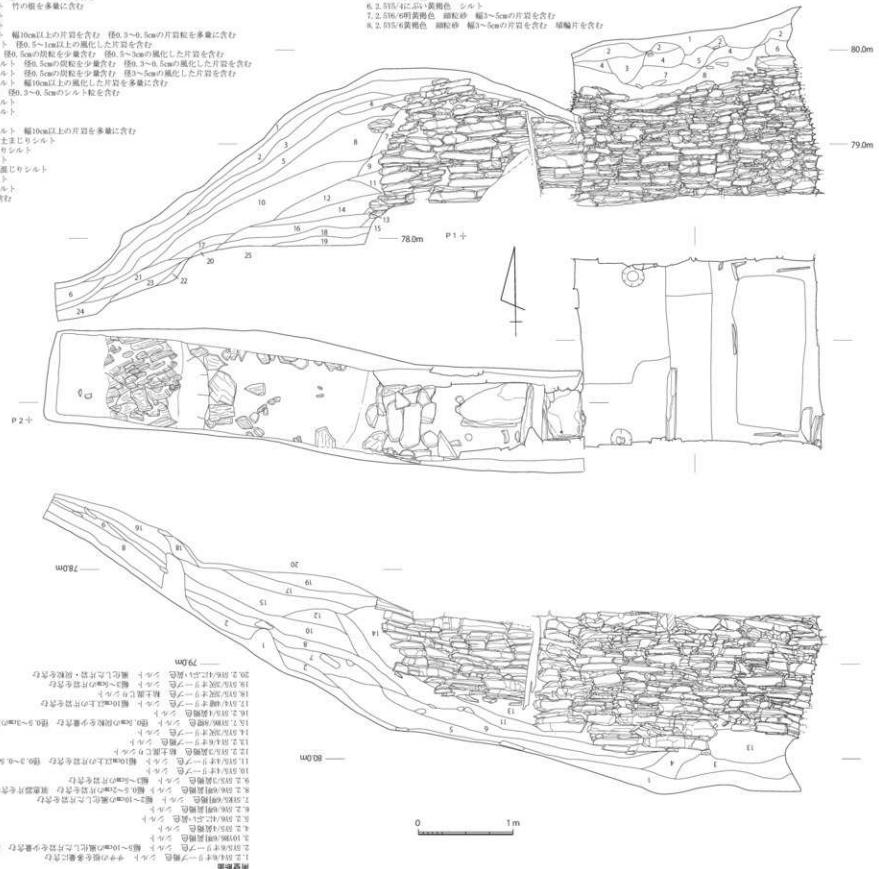


図 45 前山A 58号墳 横穴式石室実測図 (S = 1 / 40)

玄室床面の羨道部側の南側壁に接して小型の土師器壺が出土した。この土師器壺は本来置かれていた位置であった可能性があるが、この他には玄室内では良好な出土状況を示す遺物は確認できなかった。玄室の出土遺物の大半は、篠によって堆積土の中から地区別に取り上げたものである。

(3) 1 トレンチ

後円部北側の様相を把握するために設定したトレンチである。第1次調査では墳裾と推定される傾斜変換線を確認した。第2次調査では1段目テラスの確認を目的として、第1次調査トレンチ（幅1m、長3.2m）を南へ1.5m拡張した。その結果、1・2層直下で盛土と判断される3層を検出した。3層はトレンチ南端より0.4m～1.3mの範囲で傾斜変換線に画された平坦面を形成しており、墳丘テラスと認識できる。平坦面の標高は78.4～78.5m、幅は約1.0mであり、石室床面の標高78.5mに近接する。平坦面以南の斜面は、傾斜変換線を境に急な傾斜をもち立ち上がる。盛土には結晶片岩の礫を多量に包含し、礫の一部は面を揃えた状態で検出され、盛土構築時に意図的に敷かれたものである可能性が高い。また、テラスの北端付近では円筒埴輪2個体が検出された。

(4) 2 トレンチ

後円部東側に設定したトレンチである。第1次調査では墳丘斜面を確認し、斜面下の平坦部で円筒埴輪列を検出した。第2次調査では第1次調査トレンチ（幅1m、長3m）を、墳裾及びテラスの確認を目的として東へ2.3m拡張し、また、後円部の盛土堆積状況の確認のために西側に2.5m拡張した。

トレンチ東側拡張部では、東端付近では地山とみられる4層を確認した。トレンチ東端より1mで墳裾と判断される傾斜変換線を確認し、墳裾から西側へ立ち上がる墳丘斜面及び、墳丘テラスとみられる平坦面を確認し、墳丘は盛土3層により構築されていると判断した。平坦面の標高は79.2m、幅は約1.6mであり、円筒埴輪3個体は、平坦面のほぼ中央に南北方向に配列されていた。

トレンチ西側拡張部では、盛土3層が検出された。3層は結晶片岩の礫を多量に包含する土石混合層と、礫を含まない黄褐色土層が互層に堆積する状況が確認された。

(5) 3・9 トレンチ

3トレンチは墳丘東側のくびれ部に設定したトレンチである。第1次調査では墳丘東側の墳丘斜面を確認したが、くびれ部や墳裾、隣接する前山A104号墳との構築関係が不明であった。そのため、第2次調査では、第1次調査トレンチ（幅0.5m、長2.9m）を幅0.2m、長1.1m東に拡張した。当トレンチでは、埴輪を包含する土層を土層2層と認識して掘削を行なったが、その後の調査所見から、当初2層と認識した土層の一部がA58号墳墳丘盛土3層であると判断された。したがって、A58号墳の墳丘盛土には本来は周辺に位置する古墳に帰属する埴輪片を包含することが分かった。トレンチ東半では地山4層が西側へ傾斜しており、前山A58号墳構築時に4層上に盛土3層を施しているものとみられる。なお、3トレンチでは前山A104号墳の墳丘を検出することができなかつたことから、当該古墳の墳丘斜面はより東側に存在するものと推定される。

9トレンチは、くびれ部の検出目的として設定した幅1.5m×長1.5mのトレンチであり、その後西南部分を拡張した。墳丘外側の平坦部から墳丘斜面に至る傾斜変換線が確認され、後円部から前方部にかけて湾曲するラインを把握したことから、当該地点がくびれ部に相当するものと判断される。

また、3層上面において、1・2トレンチから続く後円部の墳丘テラスと推定される平坦面を確認し、上面で円筒埴輪を3個体確認した。このうち中央の円筒部付近では石見型埴輪の上部が横倒しの状況で

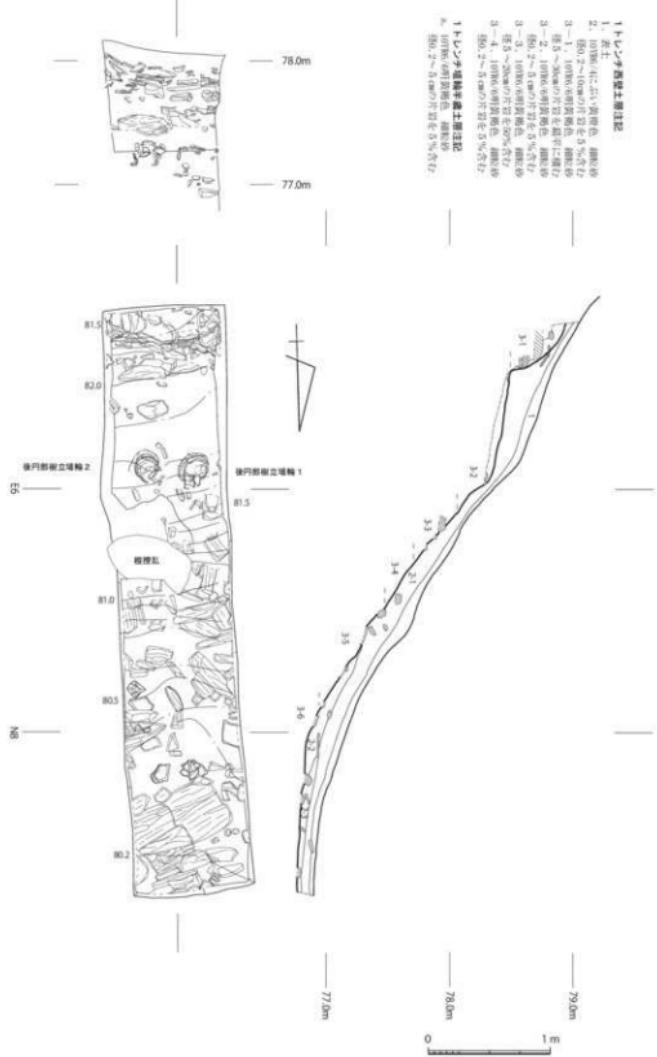


図46 前山A 58号墳 1トレンチ 平面図及び西壁土層断面図 (S = 1 / 40)

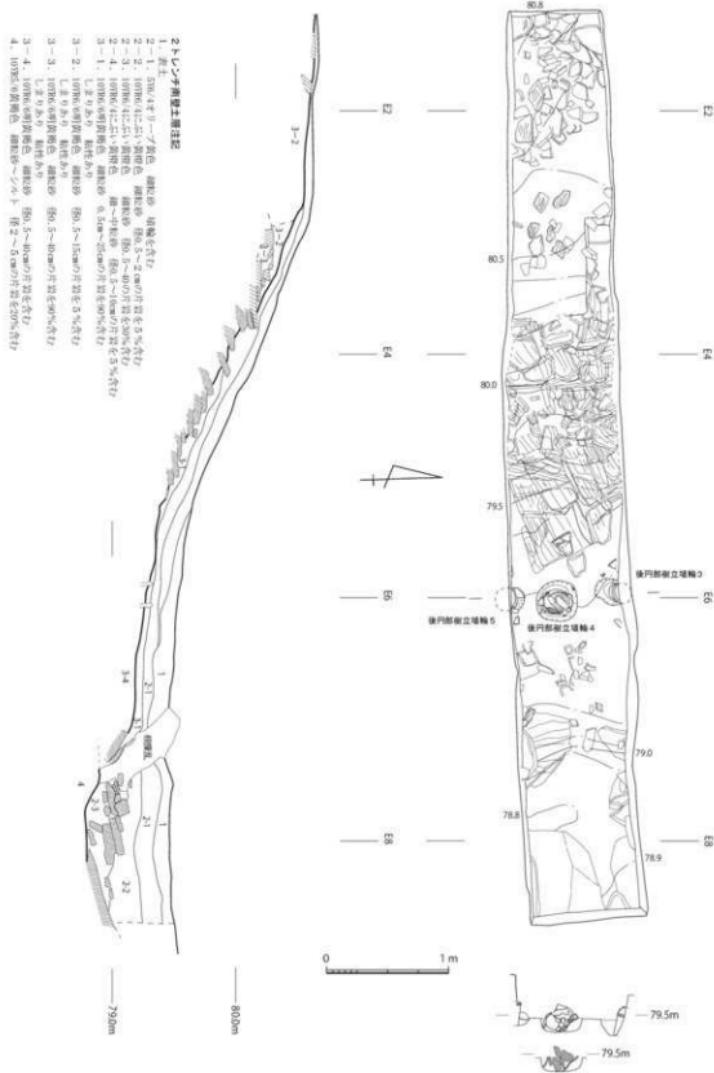


図 47 前山 A 58 号墳 2 トレンチ 平面図及び南壁土層断面図 (S = 1 / 40)

検出されたが、その後の整理作業において中央の円筒部と接合したため、墳丘テラス上の円筒埴輪列に石見型埴輪が組み込まれて樹立されていたことが分かった。さらに、堆積していた石見型埴輪の破片を取り上げたあと、下部から須恵器大甕の破片が多数検出された。堆積状況を図化しながら取り上げた結果、この大甕が墳丘面上に据えられていたことが判明した。なお、須恵器破片に混じって人物埴輪の頭部が出土したが、原位置ではなく、大甕が破損したあとに上方より転がってきたものと考えられる。

(6) 4トレンチ

第1次調査では、4トレンチは前方部上に南北幅1m、長9.4mに設定した。その結果、前方部と考えられる平坦面に南北方向に並ぶ円筒埴輪列等や馬形埴輪を確認した。しかし、調査区内では前方部の墳裾は確認されず、さらに南側に墳端が位置する可能性が考えられた。そのため、第2次調査では、墳裾の確認を目的として南へ2.5m拡張した。また、樹立埴輪の基部を確認するため、掘方の断ち割りを行い、一部の埴輪については、埴輪内に堆積した土層を確認したうえで取り上げを行った。

拡張部においては、2層が厚く堆積しており、2層下で盛土3層及び4層の軟質岩盤を確認した。軟質岩盤4層はトレンチ南端より約1.4mで傾斜変換線が確認され、北側の前方部墳頂平坦面へ向かって立ち上がるところから、前方部の南端の墳裾と推定される。

また、南端より約0.5mにおいても4層が南側へ立ち上がる東西方向の傾斜変換線が確認され、前山A38号墳の墳丘と認識される。したがって、軟質岩盤を削り出すことにより、両古墳の墳裾が整形され、その上に盛り土を施して墳丘が構築されているものと考えられる。

(7) 7・8トレンチ

第1次調査において、前方部上と考えられる墳頂平坦面において多数樹立埴輪が残存していることが想定されたため、その範囲と樹立状況を確認するために設定した。

7トレンチは、5トレンチの北側に当初1.1m×1.3mの範囲を設定したが、その後、4トレンチ側に拡張した。7トレンチでは、前方部墳頂平坦面の西側の円筒埴輪列に帰属する円筒埴輪1個体のほか、形象埴輪の台部と推定される円筒部1個体及び、馬形埴輪脚部が原位置で確認された。

8トレンチは、5トレンチ南側に、当初1.1m×1.3mの範囲を設定したが、その後、南側へ0.5m拡張した。8トレンチでは、前方部西側の埴輪列に帰属する円筒埴輪3個体と、形象埴輪の台部と推定される円筒部1個体を確認した。

以上の円筒埴輪の配列から、第1次調査において調査を行った5トレンチで確認された円筒埴輪についても、前方部墳頂平坦面の西側の円筒埴輪列を構成するものと考えられる。

(8) 5トレンチ

5トレンチは墳丘西側に設定したトレンチであり、上部において墳丘平坦面、西部にかけて墳丘斜面を検出した。墳丘平坦面上には樹立された円筒埴輪が見つかり、斜面下部においては墳裾とみられる傾斜変換線が確認された。

(9) 10トレンチ

第2次調査において、前方部コーナーの検出を目的として設定した1.8m×1.8mのトレンチである。2層下に軟質岩盤である4層を確認した。4層は、トレンチの北西部が高まりをもつ形状に削り出されており、明瞭な傾斜変換線を確認できることから前方部東側コーナーと判断した。また、トレンチ南



図 48 前山A 58号墳 4・6・7・10・11・3・9トレンチ 平面図 (S = 1 / 40)

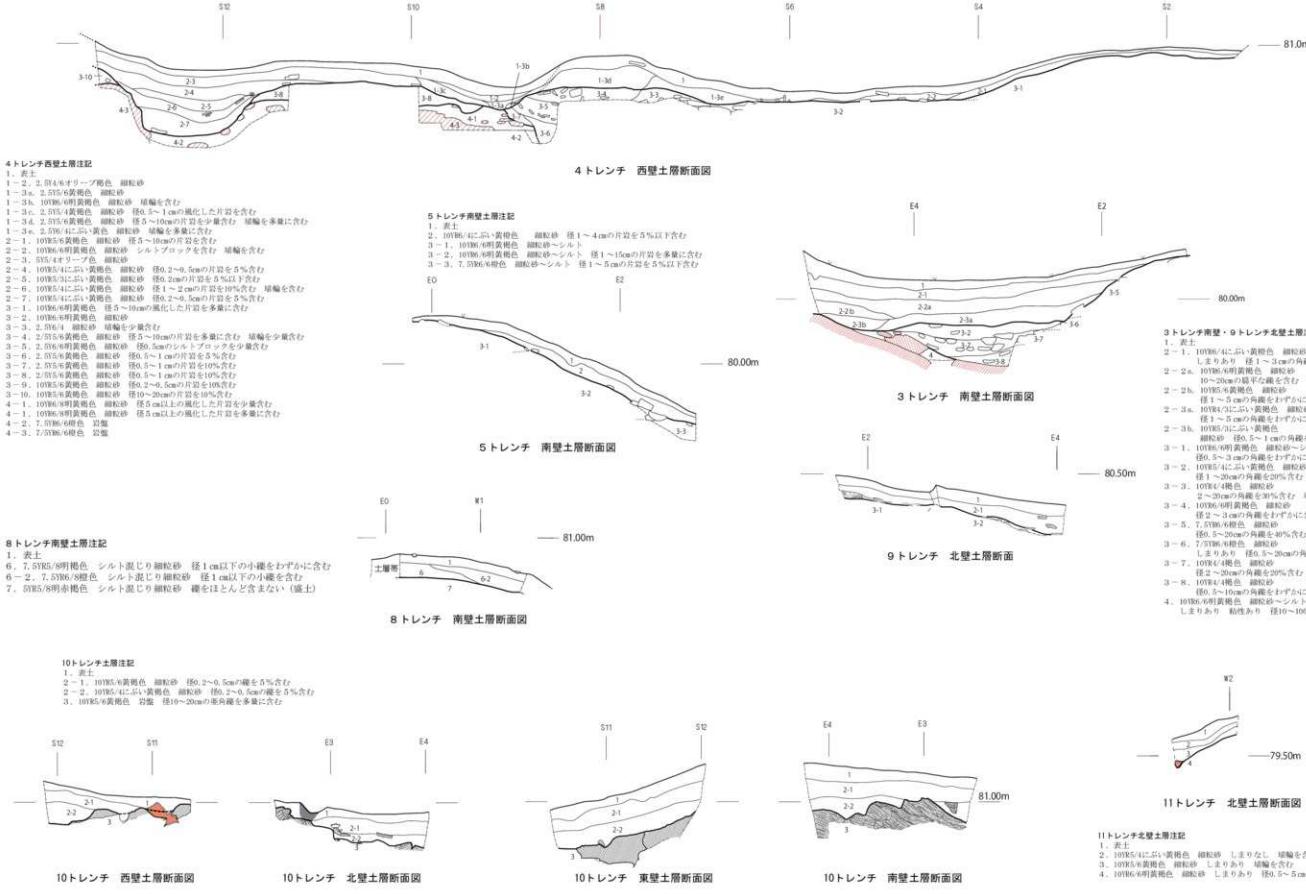
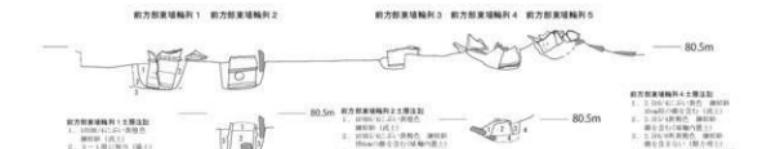


図 49 前山 A 58 号墳 4・6・7・10・11・3・9 トレンチ 土層断面図 (S = 1 / 40)

4 トレンチ 前方部東埴輪列立面図 a - a'

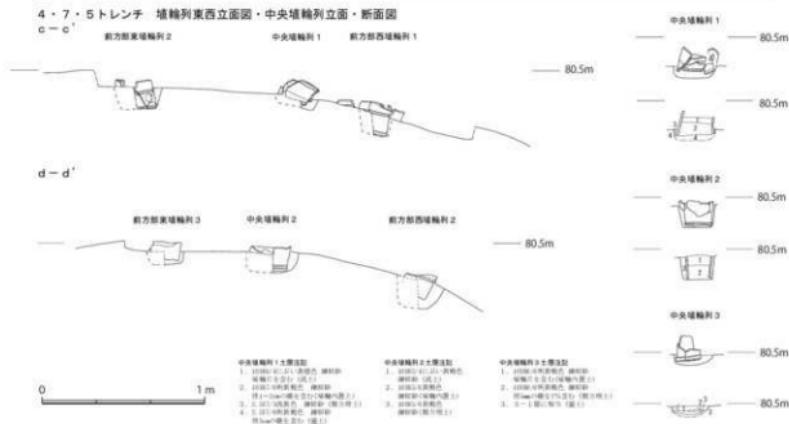


5・7・8 トレンチ 前方部西埴輪列立面図 b - b'

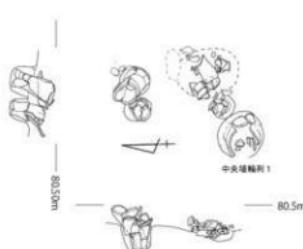


4・7・5 トレンチ 塩輪列東西立面図・中央埴輪列立面・断面図

c - c'



7 トレンチ 馬形埴輪平面・立面図



11 トレンチ 円筒埴輪平面・立面図

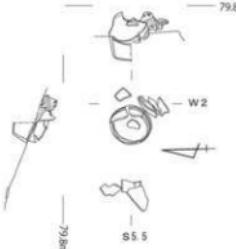


図 50 前山 A 58 号墳 樹立埴輪立面。断面図 (S = 1 / 30)

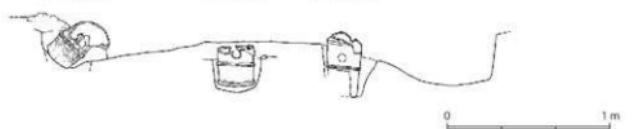
側においても東西方向の傾斜変換線を確認され、以南は強い傾斜をもち立ち上がっており、同様に岩盤を削りだして整形された前山A 38号墳の墳頂及び墳丘斜面と判断される。

(10) 11トレンチ

後円部の西側のくびれ部付近の埴輪の検出を目的として設定した $0.6\text{ m} \times 0.7\text{ m}$ トレンチである。後円部の墳丘テラスと推定される盛土3層を検出し、円筒埴輪1個体を原位置で確認した。

3・9トレンチ 樹立埴輪立面図 e-e'

後円形側立埴輪6 後円形側立埴輪7 後円形側立埴輪6 — 80.5m



3・9トレンチ 須恵器裏平面・立面図

須恵器裏株出面1

須恵器裏株出面2

— 80.5m

須恵器裏株出面3

須恵器裏株付坑



図 51 前山A 58号墳 樹立埴輪立面図及び須恵器平面・立面図 ($S = 1 / 30, 1 / 40$)

3 出土遺物

(1) 装身具

装身具はすべて石室内から出土した。ガラス小玉が35点、滑石製白玉が4点、土製丸玉が15点である。

ガラス小玉(1～35) 総数35点出土した。色調は、緑色が28点、青色が4点、淡青色が3点である。最大径2.08～4.18mm、高さ1.4～2.69mm、孔径0.77～1.66mmほどの大きさがある。1～5は、最大径が胴部中央付近にあり全体に球形を呈している。開孔部の形状が荒れて内部に気泡が散在していることから鋳型によって製作された可能性が高い。6～35は、端面と胴部の径に大きな差がなく、上面と下面が平行しない形を呈し、孔と平行して伸びる気泡が確認できることから棒状にガラスを巻き付けてから引き伸ばした後細かく切断してつくる「引き伸ばし法」によって製作されたと考える。

滑石製白玉(36～39) 総数4点出土した。色調は、青灰色が3点(36～38)、明緑灰色が1点(39)である。最大径6.3～6.7mm、高さ2.2～2.7mm、孔径3.0～4.3mmほどの大きさがある。上面と下面是平行ではなく、胴部中央でわずかに稜線をなして最大径を測る。胴部は、高さわずか2mmのなかに、上方向から胴部中央方向への研磨と、下方向から胴部中央方向への研磨が観察できる。

土製丸玉(40～54) 総数15点出土し、うち11点が完形である。最大径7.1～9.1mm、高さ4.9～7.4mm、孔径1.6～1.9mmである。土製の焼きもので、表面に煤を付着させることで黒色に仕上げている。

(2) 鉄製品

馬具(55～57) 55・56は、鉄製環状鏡板付轡である。轡は衡・鏡板・引手から構成され、左右の鏡板を衡によって連結させている。引手の鏡板との取り付け部は欠損している。

衡は、二連式で復元長は17.4cm、右側9.0cm、左側8.4cmである。断面は隅丸方形を呈する。右側の衡は衡先環の向きが90°異なるが、左側の衡先環の向きは同方向である。卿金は右側が外径2.3cm、左側が外径1.7cmで、衡先環は右側が外径2.8cm、左側が外径2.5cmである。右側の卿金及び衡先環はそれぞれに正円形をなし、衡先環の頂点で環を閉じるように製作されている。

一方、左側の衡の構造は、一本の鉄棒の両端を曲げて環を作っている。卿金は一重の環をつくり、衡先環は卿金に対して180度異なる方向に二重の環を作っている。右側の衡と比べて太さにむらがある。

引手は引手壺が外径2.3mmの正円形で、くの字に折れ曲がる。引手先は左右とも取り付け部が欠損しており形態は不明である。

鏡板は台形の立聞部を持つ環状の鏡板である。右側の鏡板は環状部の一部を欠損する。環状部は長径8.3cm、短径7.0cm、厚さ0.65cmの楕円形を呈する。立聞部は幅2.0cm、高さ1.5cm、厚さ0.35cmで、台形を呈する。立聞部には長軸0.6cm、短軸0.45cmの長方形の立聞穴が開けられている。左側の鏡板は、立聞部を持たず、一本の棒材を二重に巻き付けて環状部を構成している。環状部は直径8.3cmの円形で厚さ0.8cmである。断面は隅丸方形を呈する。棒材の両端部は内側に折り曲げているが、銷が厚く巻きつけ等は確認できなかった。

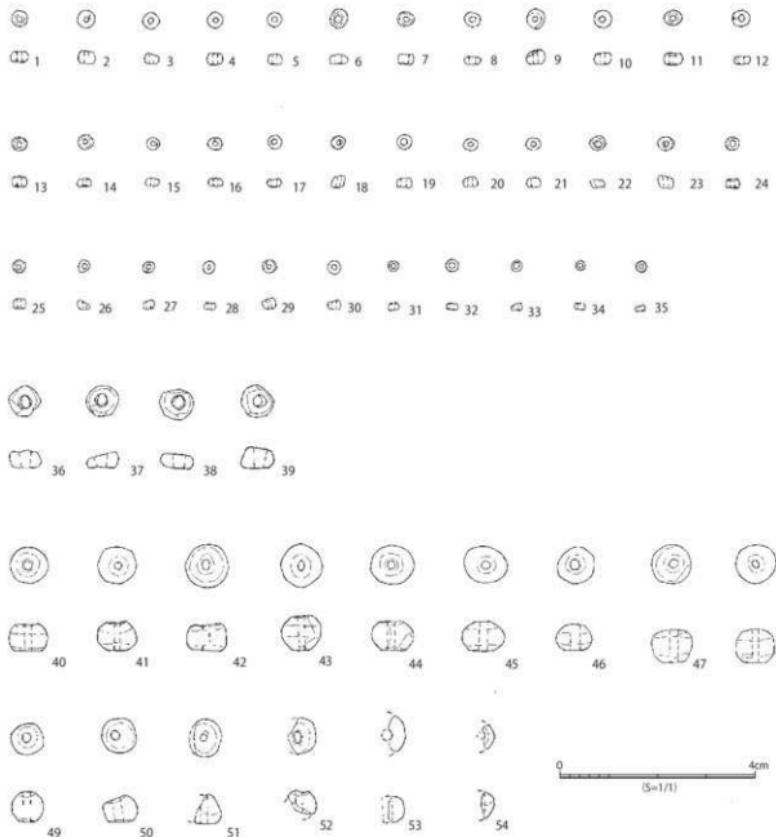


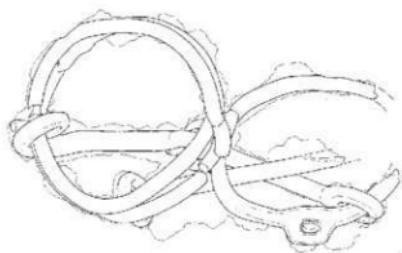
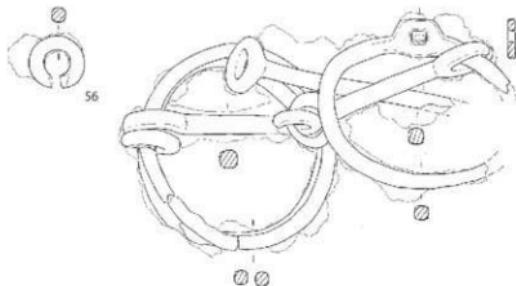
図52 前山A 58号墳出土 装身具 (S=1/1)

また、鉄棒のねじり等も確認できない。左側の鏡板は右側の鏡板と形態が異なり、つくりも粗雑な印象を受ける。当初の鏡板が使用中になんらかの事情で破損し、その後応急的に作り直したものであると推測される。強度を増すためか棒材を二重に巻き付けて環をつくり、衡先環で2本とも巻き付けている。衡の啞金や衡先環が左右で作り方が異なる点も、鏡板に合わせて付け替えられたことによるものと推測される。

56は引手壺で、外径2.3mmで正円形を呈する。55の轡の左側の引手壺であると考えられる。

57は環状雲珠の鉢部と考えられる。厚さ0.6cm、幅4.1cm、高さ2.1cmである。

鉄刀 (58～68) 鉄刀片は20点以上出土し、そのうち法量のわかる11点を図化した。いずれも



55

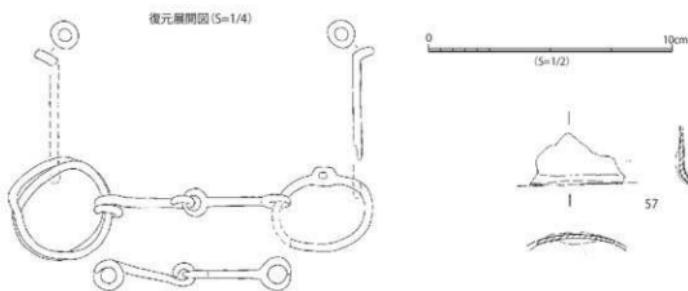


図53 前山A 58号墳出土 馬具 (S = 1 / 2)

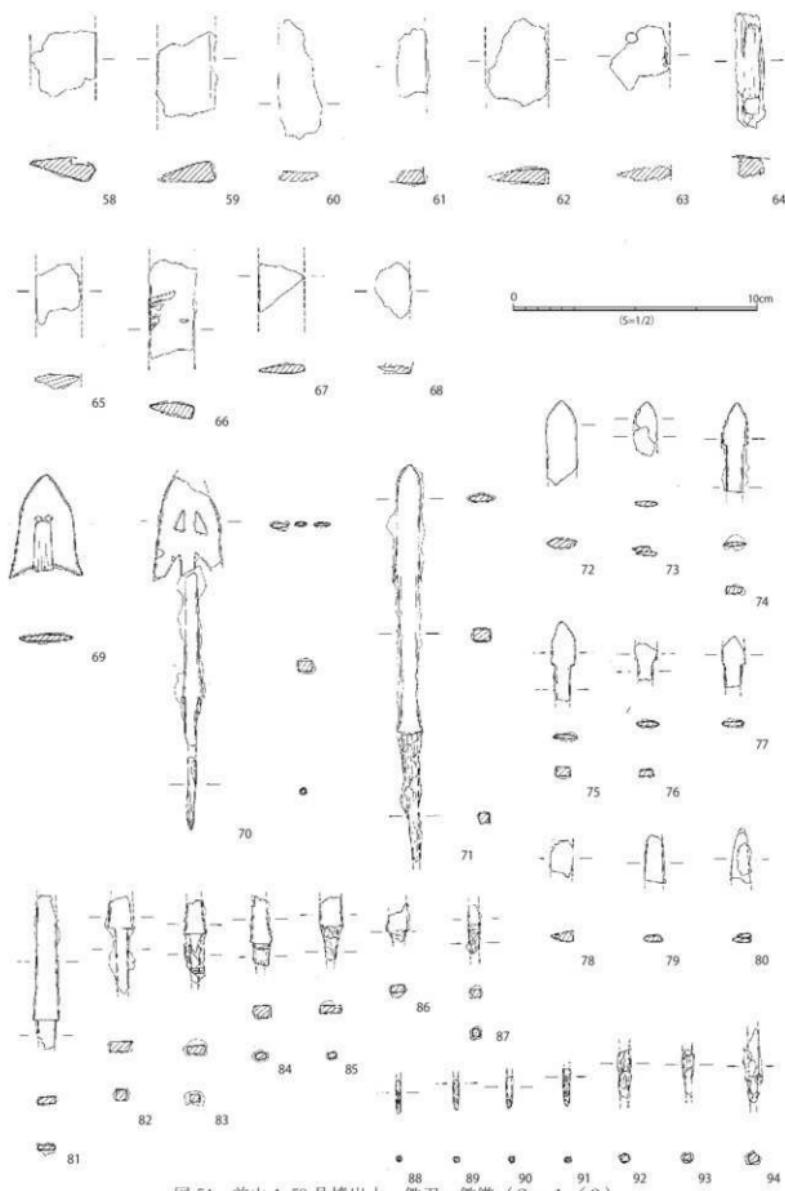


図 54 前山 A 58 号墳出土 鉄刀・鐵鎌 (S = 1 / 2)

破片のため全長は不明である。58・62は刀部幅2.7cm、59は刀部幅2.4cmである。刀部には木質の付着しているものがあり、鞘を伴っていた可能性がある。63は茎部で、中央に目釘穴と思われる径約0.4cmの孔を持つ。

65～68は、断面形は三角形をなすが、表面に植物繊維を巻き付けていることや、刀部と比べて厚みがなく幅がいずれも1.9cmと狭いことから茎部と判断した。

鉄鎌 (69～94) 鉄鎌は破片が43点出土し、そのうち26点を図化した。切先の遺存するものは12点を数える。

69・70は平根系鎌である。69は鎌身長3.15cmである。平面形態が三角形で、中央に2mmの円形の透し孔を2点穿っている。透し孔の下部に幅0.6cm、長さ2.0cmの木質が両面に遺存している。鎌身部分を矢柄に直接挟んで装着する無茎式である。70は鎌身長4.15cm、頸部長5.6cm、茎部長5.6cmである。身部形態は三角形で、中央に三角形の透し孔を2点穿っている。頸部から茎部にかけて撥状に広がる。茎部には木質が遺存している。

71～77は柳葉形で、身部断面が片丸造りで鎌身が長く関部に逆刺が認められるもの(71・72)と身部断面が両刃造で鎌身が短く直角関を持つもの(74～77)、と不明瞭なもの(73)がある。

71は、全長16.3cm、鎌身部4.8cm、頸部長6.4cm、茎部長5.35cmである。頸部の断面形は長方形で、身部関は撥状に広がり茎部との間に段差をもつ。茎部の断面は長方形で木質が遺存している。

78～80は片刃の鉄鎌もしくは刀子の刃先である。全体を復元できる個体は確認できない。

81～94は頸部～茎部片である。頸部はいずれも断面が長方形で、身部関は撥状に広がり茎部との間にわずかな段差が認められる。茎部は矢柄を固定するために繊維質の植物を巻き付けた後、矢柄に差し込みその上から樹皮を横方向に巻いて仕上げている。断面は、正方形～長方形を呈する。

刀子 (95～97) 3点出土しているがいずれも破片で全長は不明である。95・96は刀部～茎部で刀部関が残る。95は刀部幅が1.5cmで断面は三角形、茎部は幅0.6cmで断面は隅丸方形、関は両関で台形を呈する。茎部には柄の一部と考えられる木質が遺存する。96は刀部幅1.3cmで断面は三角形、茎部は幅0.9cmで断面は隅丸方形で、片方のみ関を作る。97は茎部端で、幅0.9cmで断面は長方形を呈し、表面に繊維質を巻き付けている。

その他の鉄製品 (98～103) 98～100は、表面に木質が付着している。遺存している部分の断面に角をもつ。工具類の茎部の可能性が高い。101は表面に布が付着しているが、器種は不明である。102は残存幅4.0cm、厚さ0.4cmの破片で、器種は不明である。103は鉗である。鉗頭径0.8cm、長さ0.5cmである。

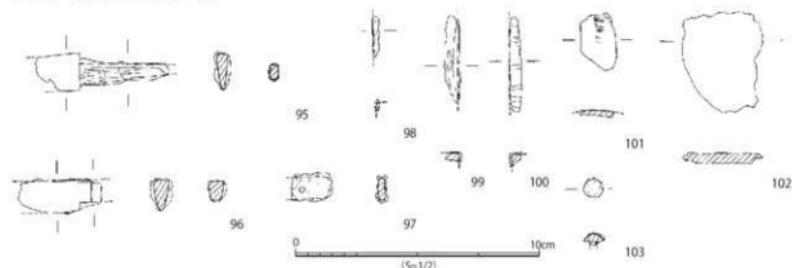


図55 前山A 58号墳出土 刀子・その他の鉄製品 (S = 1 / 2)

(3) 石器

砥石 (276) 横穴式石室玄室内で砥石が1点出土している。砂岩製で、一部欠損しているが、残存長7.6cm、幅3.3cm、厚さ1.9cmを有する。両面に鉄器による使用痕が認められる。

(4) 墳輪

馬形埴輪 馬形埴輪(104)は前方部上の埴輪列に囲まれた空間から出土した。4本の脚部のうち後足は墳丘上の原位置に樹立された状態で検出され、前脚も原位置に破片と壠方が検出された。復元については、接合関係と検出された脚部の位置をもとに位置を決めた。組み上げる際には、破片同士で接合箇所があるもののみを組み上げ、接合箇所がないものは使用せずに形状のみを参考とした。前脚と頭部から首部にかけて遺存状態が悪い部分については他事例を参考にして後補し、完形に復元した。なお、尻尾の形状も推定である。

馬装は面繫、胸繫、尻繫からなる。面繫は残存する破片にある痕跡から1.5cmの粘土帯が貼り付けられていたとみられ、その先端にはf字鏡板(107)を付ける。f字鏡板(107)は円形の粘土粒を貼り付け鉢を表現し、それらを1条のヘラ描き沈線で結んでいる。面繫は粘土帯のはがれた痕跡からたてがみと鞍の前輪が接するとところまで伸びていることがわかる。

胸繫の形状は不明であるが、首部にヘラ描きにより馬鐸(104・115)が表現されている。馬鐸の下半部は二股に分かれる形を表現している。上半部の意匠は不明である。

尻繫は背中の中央の径2.5cmの穿孔を中心に展開するものと、鞍の後輪から尻尾の後を直接回る2本があり、幅1.5cmの粘土帯で表現している。粘土帯にはヘラ描きによる1条の沈線が両側面に沿って施されている。背中中央の穿孔の周辺には粘土帯のはがれた痕跡があることから、ここに雲珠(109・111)が貼り付けていたと思われる。雲珠(109・111)は環状部径4.5cmで、中空の半球形の鉢形を表現し、脚部には0.9cmの粘土帯を付帯して貴金属を表現している。

杏葉(105・112)は、雲珠につながらない尻繫に取り付いて、胴部やや後方の位置に配置されている。全長12cmで剣菱形を呈し、鏡板と同様に直径0.9cmの円形の粘土粒を貼り付け、それらを1条のヘラ描き沈線でつないでいる。裏側には直径1.0cmの円形の突起が2個はりつけられており、馬本体の左後脚上部の尻部側面にはこれに対応する1.1cmの穿孔とくぼみが2箇所施されている。杏葉はこの孔に突起をはめ込む形で馬本体に貼り付けられていたと推測される。杏葉の形態は馬の取り付け部の形状に沿う形で、ゆるやかに内側にカーブしている。杏葉が取り付けられた位置には、多くの事例で透孔が設けられているが、この個体では杏葉をこの位置に配置したためか透孔は杏葉より約10cm頭部よりの胴部に施されている。

鞍は前輪と後輪は相似形で、後輪がやや大きくなっている。胴部に対してやや後方気味に傾いている。馬本体を製作した後に鞍を貼り付けている。鞍の側片は立ち上がり上縁部で面を持たずして収束する。鞍の表裏には文様は施されず、後輪で鞍金具(106)が2点貼り付けられ、尻繫とつながっている。

障泥は馬の胴体に幅22cm、長さ7cmの板を貼り付けており、前方は馬の前脚後方に当っている。

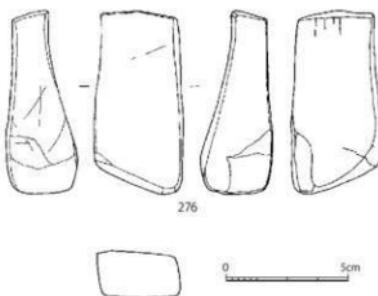


図56 前山A 58号墳出土 砥石 (S=1/2)

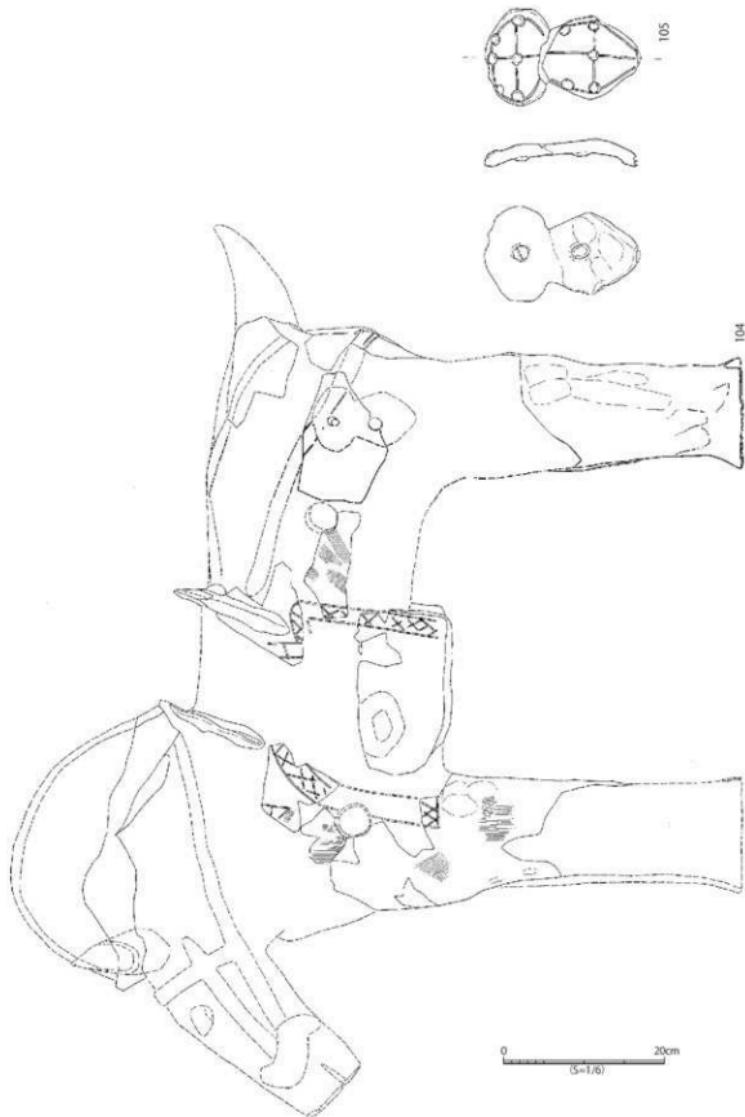


図 57 前山A 58号墳出土 馬形埴輪1 (S = 1 / 6)

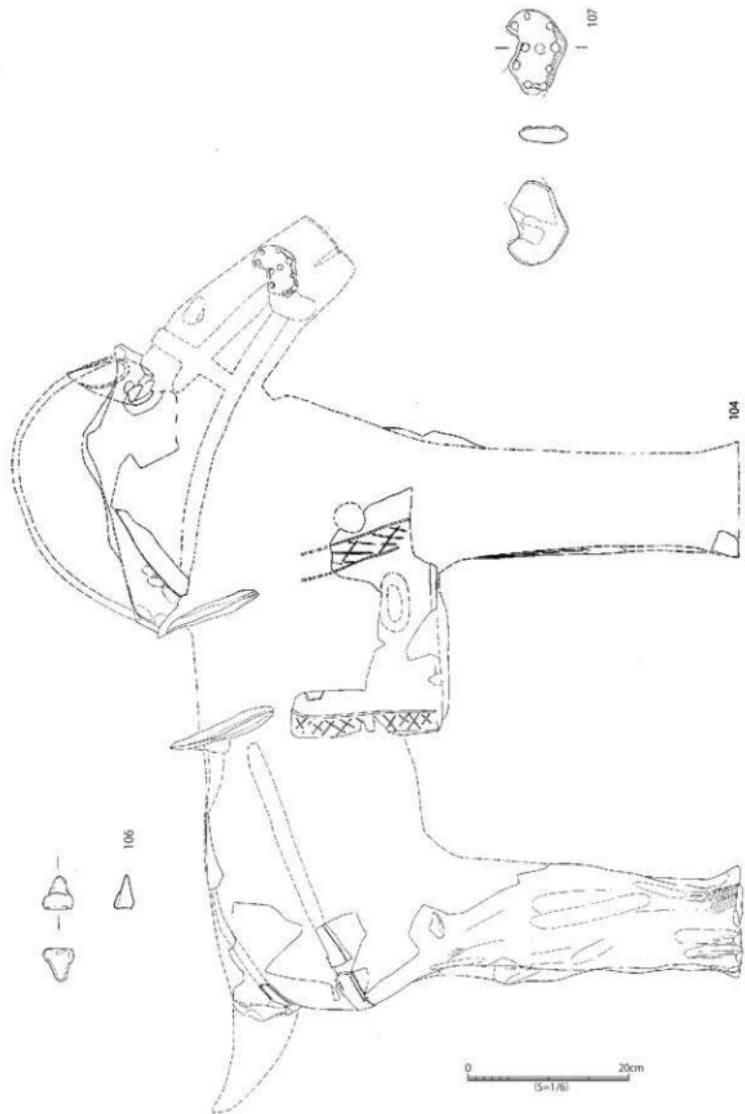


図 58 前山 A 58 号墳出土 馬形埴輪 2 (S = 1 / 6)

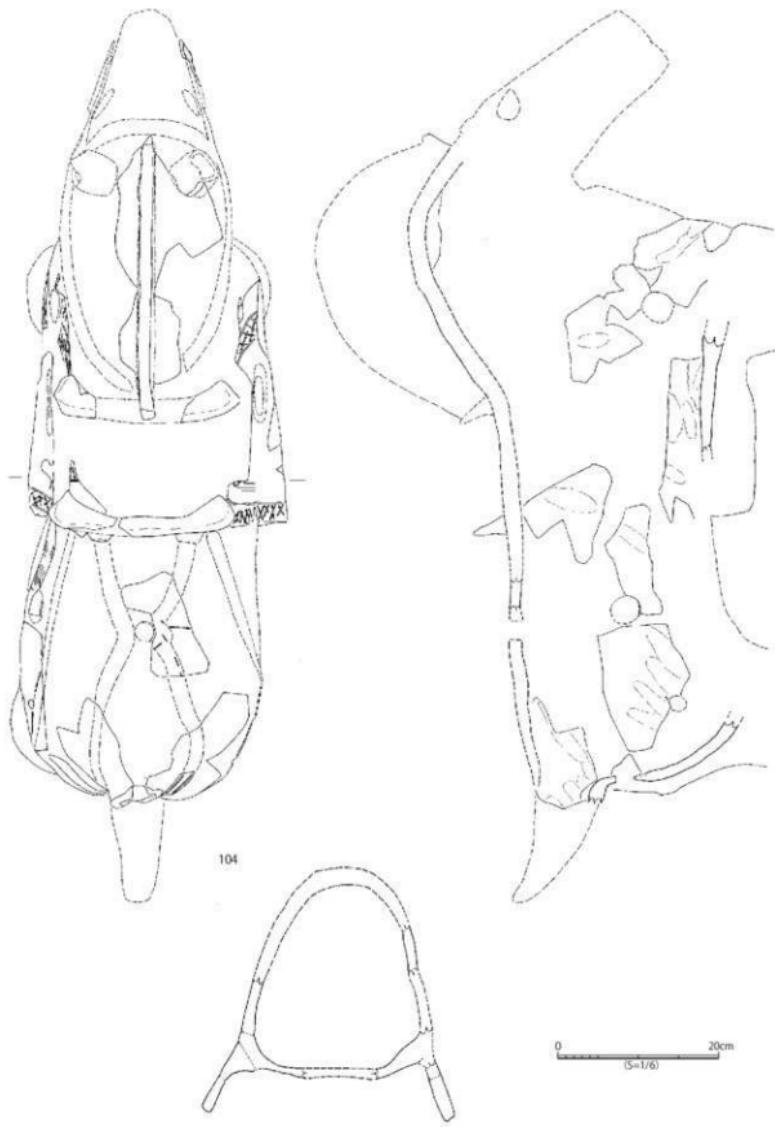


図 59 前山A 58号墳出土 馬形埴輪3 (S = 1 / 6)

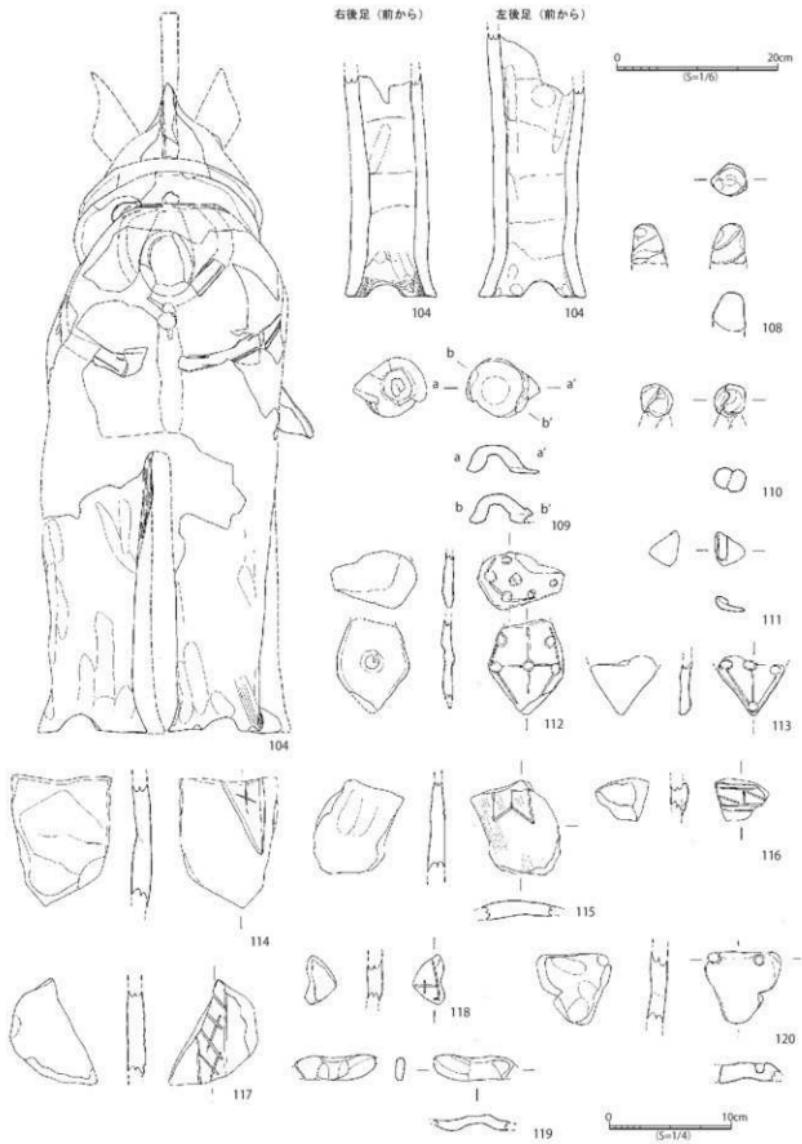


図 60 前山 A 58 号墳出土 馬形埴輪 4 (S = 1 / 6)・部品 (S = 1 / 4)

板と前脚の接着部に幅4cm四方の大きさの粘土がはがれた痕跡があり、接着の補強部品にあたると考えられる。また左側の板の裏側に幅1.5cmの突帯が板及び胴体に直交する形で貼り付けられており、板部を補強している。右側の板でも同様の箇所に粘土がはがれた痕があり、板を補強していたと考えられる。障泥はヘラ描きによって区画を表現している。区画の文様は平行する2本の線の間に2方向の斜線により表現されている。また左右の障泥の前方寄りの位置に、直径6cmの橢円形状に粘土のはがれた痕跡があり、ここに鑑が表現されていたと思われる。

脚は前脚が下端部の破片のみであったが後脚が下端から付け根まで残存しており、高さ38cmをはかる。幅4～5cmの粘土帯を巻き上げている。内面はナデ調整、外面はナデ後下端部と付け根付近でタテハケを施す。高さ4cm付近から下端にかけて台形状に広がり、後方下端部に幅約5cm、高さ2cmの半球形の透孔をもち跡を表現している。後脚左側は下端で径13cm、右側で径11cmをはかり、左脚が太い。また、左脚は下端から高さ25cm付近で膨らむ形状を呈する一方、右足はほぼ垂直に付け根にのびる形状を呈する。また右脚下端部のみで内側にヨコハケを施している。

脚部をつくった後、前後各2本ずつを股間で固定し、その後胴部を渡している。胴部はほぼ水平である。

尻部は脚から幅4～5cmの粘土帯を積み上げ、脚部付け根から3～4cm後方に張り出す形に成形され、股間から尻尾にかけてナデによりくぼみをつくっている。尻尾は欠損しているが、胴部との接合箇所は中空であった。尻尾から3cm下に径2.2cmの透孔が施されている。

頭部はたてがみ付近をのぞきほとんど破片が残っていなかった。たてがみは頭部に貼り付けている。たてがみは鞍の前輪に接して収束している。後方外縁部は、右側に折り曲げ上端に1.5cmの面を持つ。105・107はたてがみまたは胸繫を収束したものと思われる。

人物埴輪 前方部上の埴輪に囲まれた範囲において、馬形埴輪の前に樹立する形象埴輪の基部を3基確認した。前山A58号墳で出土した形象埴輪のうち、石見型埴輪は後円部及び前方部埴輪列に樹立していたことから、人物埴輪は前方部上の空間に並べられていたと思われる。ただし石室玄室内から人物の美豆良（131・133）が出土していることから、後円部上にも人物埴輪が樹立されていた可能性がある。

121は男子人物である。後円部東くびれ部付近の3トレンチで須恵器の大甕の上に頭部のみ転落した状態で出土した。

頭部は径10.7cmで冠帽はかぶらず頭頂部に幅1.7cmで深さ0.5～0.7cmの凹みをもち分け目を表現している。また、額から水平に後頭部にまわる2条1組の沈線と額から側頭部をまわり後頭部へと収束する2条1組の沈線が施されている。左右側辺には美豆良がはがれた痕跡があり、後頭部にも垂髪のはがれた痕跡がある。

顔面は両目、口を切り込む。鼻は粘土を貼り付けてつくりだし、籠状工具で長さ0.5～0.6cmの切れ込みを2箇所いれて鼻孔を表現している。両目の周辺には籠状の工具によって施文がなされている。

首から胴部にかけては着衣または結紐を表現したと思われる2条1括の施文が籠状工具によつて施されている。また、左胸上部付近では、径約1.0cmの穿孔が斜め下方向に認められる。

内面は、4.5cmの粘土帯を巻き上げた後指オサエ及びナデ調整を施す。成形の最後は頭頂部で外面から粘土板を貼り閉塞している。

122は男子人物頭部である。前方部端の10トレンチより出土した。頭部径11.5cm。冠帽はか

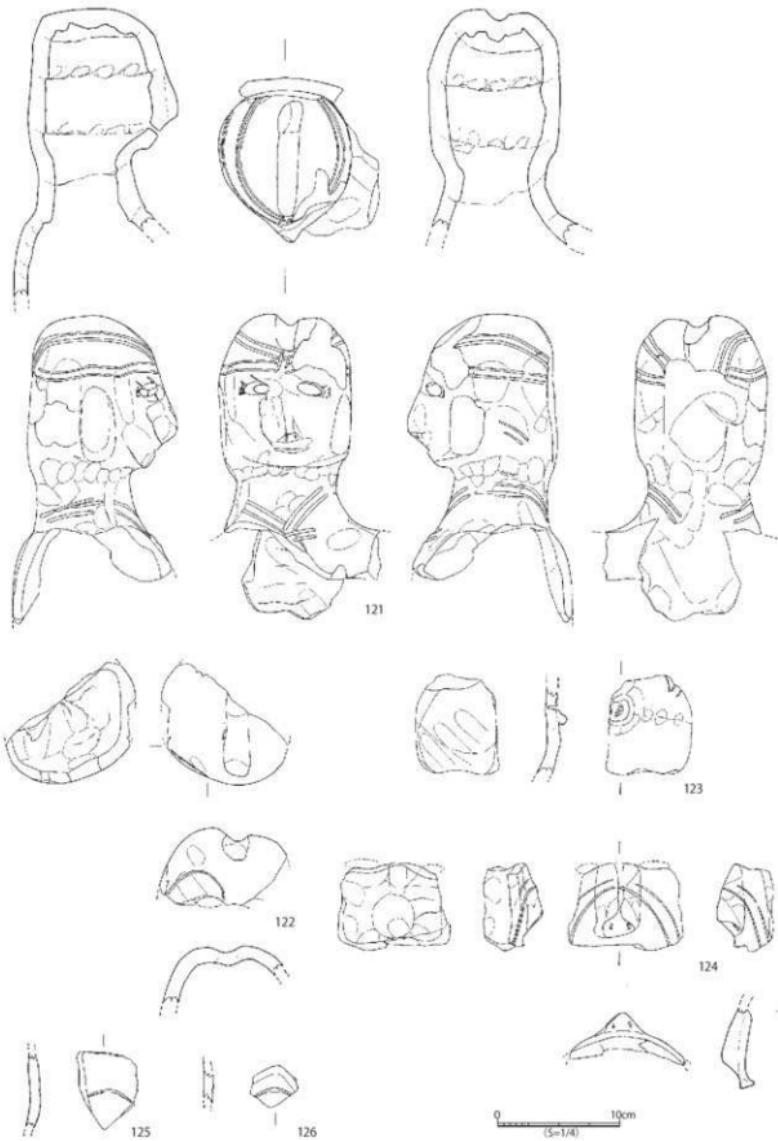


図 61 前山A 58号墳出土 人物埴輪 (S = 1 / 4)

ぶらず頭頂部に幅1.8～2.2cm、深さ0.5cmの凹みをもち分け目を表現している。顔面は両目を切り込み、目の上2cmの位置に範状工具により一状の沈線でアーチを描く。

123は人物顔面・耳部分である。耳朶は、径2.8cmの円形もしくはD字形の粘土板を頭部と併行に貼り付けている。耳孔は籠又は刀子で刺突した後捻り、平面で分銅形を呈する。耳から左上部に沈線が3本ありそのうち2本は2条一括の沈線である。

124は人物顔面である。鼻部分は粘土を貼り付け成形し、工具を刺突して鼻孔を表現している。口は切り込みによる。鼻から左右の頬にかけて2条の沈線をアーチ状に施して刺青を表現している。

125・126は人物顔面額部分と思われる。1条の沈線でアーチ状に線刻している。沈線は断面がV字状をなす。

127～133は美豆良である。粘土を棒状に成形した後、頭部に貼り付けている。132は上部に別の粘土紐が貼り付けられており、紐巻きを表現している。133は上部に別の粘土紐が貼り付けられていた痕跡がみられる。

134～137は、人物腕である。134は中空で、上腕部にあたると思われる。135は中実で断面はソケット状を呈する。左手先で先端は親指が造りだされているほか4本の指が線刻によって表現されている。手首部分は粘土がはがれた痕跡が幅1cmで手首を一周しており、装飾が貼り付けられていたことがわかる。掌にも幅1.3cmの粘土がはがれた痕跡がある。136は中実で断面はソケット状を呈する。左手先で掌に2.5cm×4.0cmの杯をもつことから、巫女の手と思われる。手首には装飾と思われる痕跡がみられる。137は中空である。138は人物足先と思われる。小型で、足裏と思われる箇所で粘土がはがれた痕跡があることから、何かに貼り付いていたと考えられる。

139～141は胸部にあたる。139は突帯を貼り付けている。円形の透孔の一部が残存している。140は円筒状を呈し、上部に円形の透孔の一部を残し、貼り付けた突帯を巡らせ、突帯の下から外側に広がる形状を呈する。着衣の形状を表現していると思われる。

142～148は人物胴部の破片と思われる。胎土が類似しており、同一個体の可能性がある。

149～151は人物埴輪の基部である。人物埴輪の基部は後述する石見型埴輪の基部と形状で同じ特徴を有しており、破片から人物埴輪と石見型埴輪の区別をすることはできなかった。そこで、出土位置から人物埴輪の樹立が推定される前方部上の埴輪列に囲まれた空間から原位置で出土した中央埴輪列①、中央埴輪列②、中央埴輪列③を人物埴輪の基部として報告する。

149は馬形埴輪の南側前方から出土した中央埴輪列①の基部である。底部径20.8cmで台形状にすぼまる。底部端から1cmの位置に突帯をめぐらせる。突帯の断面は台形を呈し、突帯間隔は14cmをはかる。1段目に径5.0cmの透孔を対向方向に2孔配置する。外面はタテハケ、内面はナデによる調整を施す。粘土紐接合痕は外傾接合で、倒立技法を用いて製作されたとみられる。150は中央埴輪列②の基部である。底部径24.5cm、現存長43cmで台形状を呈する。底部端から1cmの位置と、その上に2本の突帯を巡らせる。突帯の断面は台形で、底部付近の第1突帯～第2突帯間が13.5～14cm、第2突帯～第3突帯間は12.5cmである。1段目及び2段目に径5cmの円形の透孔を1段に2孔対向方向に直交させて配置する。3段目上端部で粘土がはがれた痕跡がある。外形の調整は摩滅が激しく不明である。内面はナデ調整をおこなっている。粘土紐接合痕は外傾接合で、倒立技法を用いて製作されたとみられる。151は中央埴輪列③の基部である。底部径23cmで台形状を呈する。底部端から1cmの位置に突帯を巡らせる。突帯の断面はゆるや

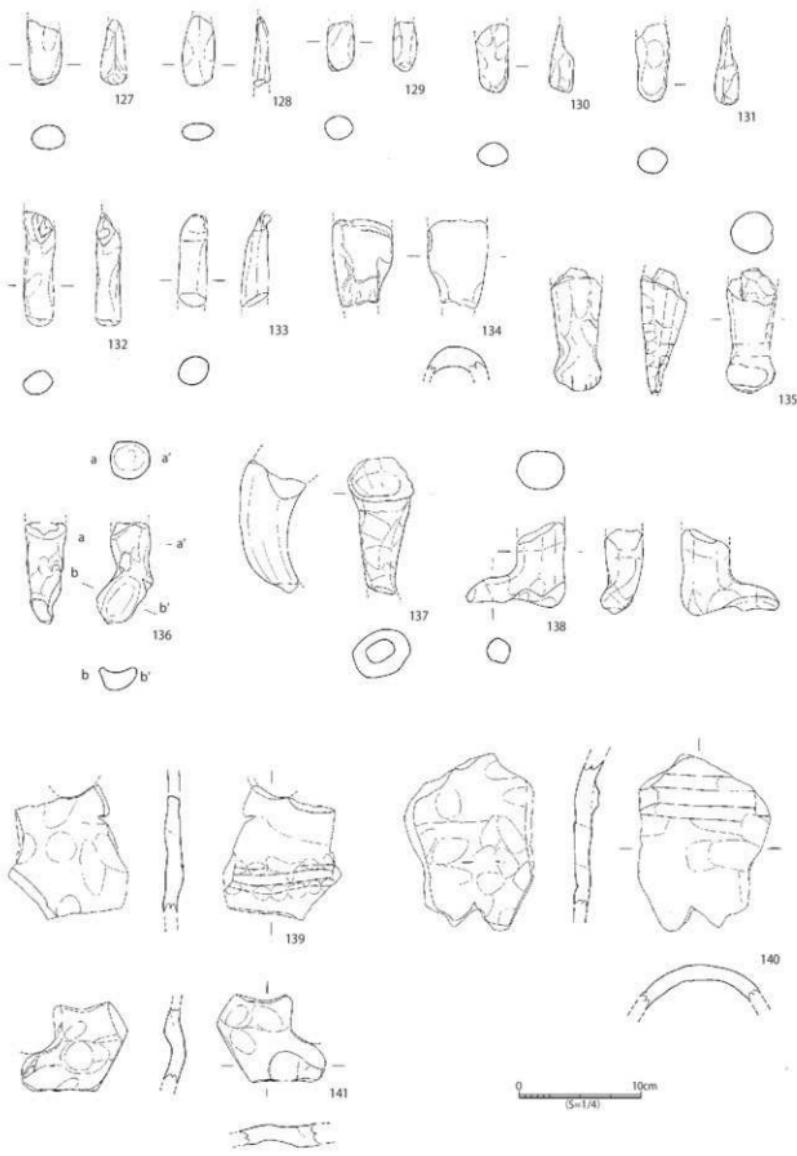


图 62 前山 A 58 号出土 人物埴輪 部品 (S = 1 / 4)

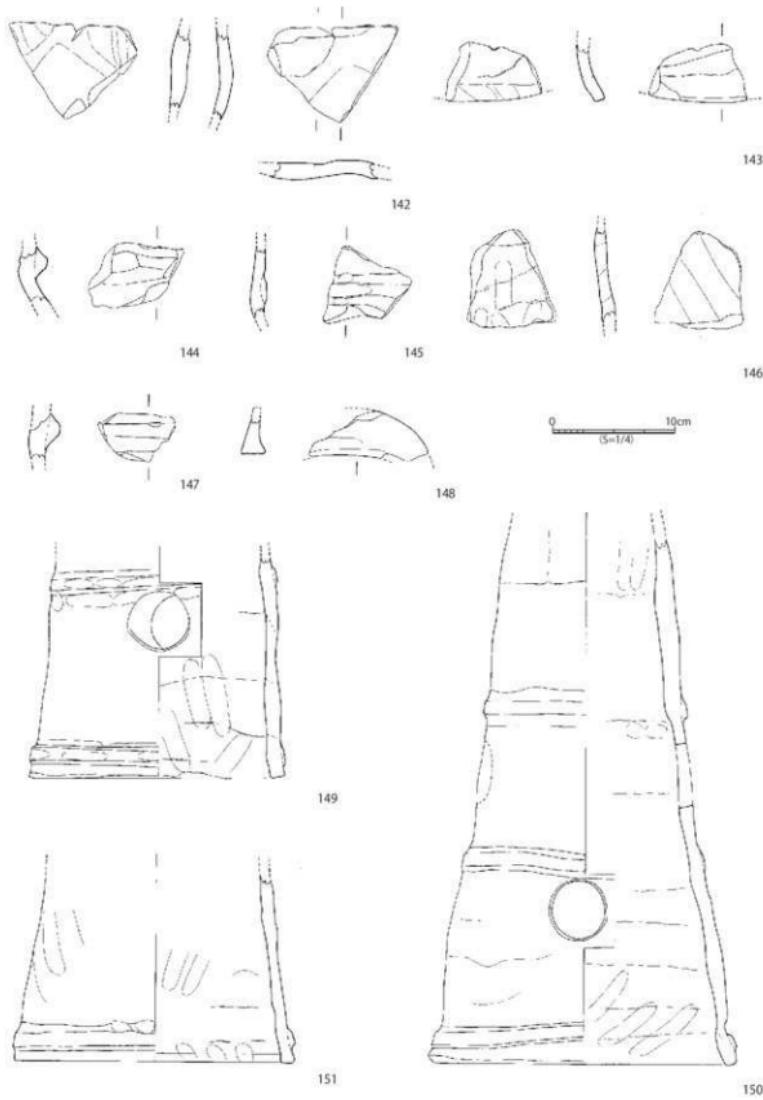


図 63 前山 A 58 号墳出土 人物埴輪 部品・底部 (S = 1 / 4)

かなM字～台形状を呈する。胎土は5mm以下の砂粒を多量に含み、にぶい黄褐色を呈する。同様の特徴の胎土をもつ破片は出土した全ての埴輪片の中でも123(人物耳)・124(人物顔)・131(美豆良)・136(杯をもつ左手)・138(足)・142～147(胴部)及び中央埴輪列③の基部片とみられる破片のみであることから、いずれかの人物の基部に該当すると思われる。

以上の破片の頭部及び顔面部・美豆良・腕・基部の数により、古墳に樹立していた人物埴輪は最小でも5基存在していたことが推定される。

石見型埴輪 石見型埴輪の破片は多数出土している。そのうち全長を復元できたものは1点(152)、基部から形象部までを復元できたものが1点(153)ある。基部については、先述した人物埴輪の基部と破片状態では区別できなかったため、後円部及び前方部埴輪列上に原位置で出土した基部を石見型埴輪の基部として報告することとした。その他の同様の特徴を有する基部については、形象基部として後述することとする。

152は東くびれ部の9トレンチにおいて後円部テラス上の円筒埴輪列内の後円部樹立埴輪⑦の位置に基部が樹立した状態で出土した。全長127.6cm、形象部長77.7cmである。円筒埴輪の左右及び上部に粘土板を貼り付けヒレ付円筒状を呈する。形象部は上辺にU字形のえぐりをもち、その上に一对の角状突起をもつ。側片の切り込みはない。形象部背面上方には板補強用の粘土帯が貼り付けられている。形象部の文様は線刻によって4分割され、上・下段面を退化した幾何学模様、上・下段帶を鋸歯文、中央帶には横方向の直線を施す。下段帶及び下段面では文様がかなり退化している。施文はすべて3条一括の沈線である。また、形象部は表面上方から背面下方へと筒状工具により穿孔されている。基部は、底部径24.5cm、底部端に接して突帶を巡らせ、その約12cm上方に2本目の突帶、さらに約11cm上方に3本目の突帶を巡らせており、1段目には透孔をもたず、2段目に正面と対面方向に2個一対の円形の透孔を配置している。調整は外形は摩滅が著しく不明であるが、内面はナデを施し、形象部円筒部分は表面に斜め方向に強いナデが残る。基部の粘土紐は外額接合であることから、倒立技法により製作されたと思われる。底部端から高さ44.5cmの位置で板状工具によ

り押さえられた痕があり、倒立した基部と形象部の円筒を接合した痕跡と考えられる。

153は、前方部上の埴輪列の東埴輪列④にあたり、底部が原位置で出土した。現存長54.5cmである。形象部は下段面のみが残存する。下段面の端部は切り欠いている。タテハケ調整の後、3条一括の沈線で退化した幾何学紋様を描いていた。基部は復元底部径28cmをはかり、底部端に接して突帶を巡らせ、その約11cm上方に2本目、その約12cm上方に3本目の突帶を巡らせており、1段目に正面と対面方向

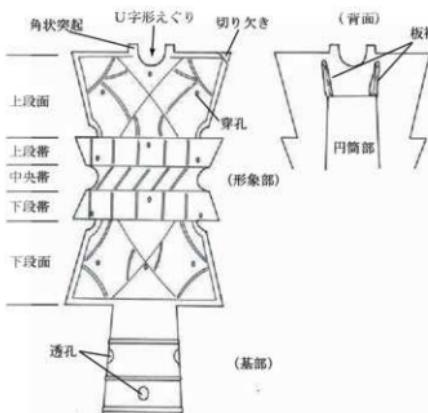


図64 石見型埴輪 部位名称

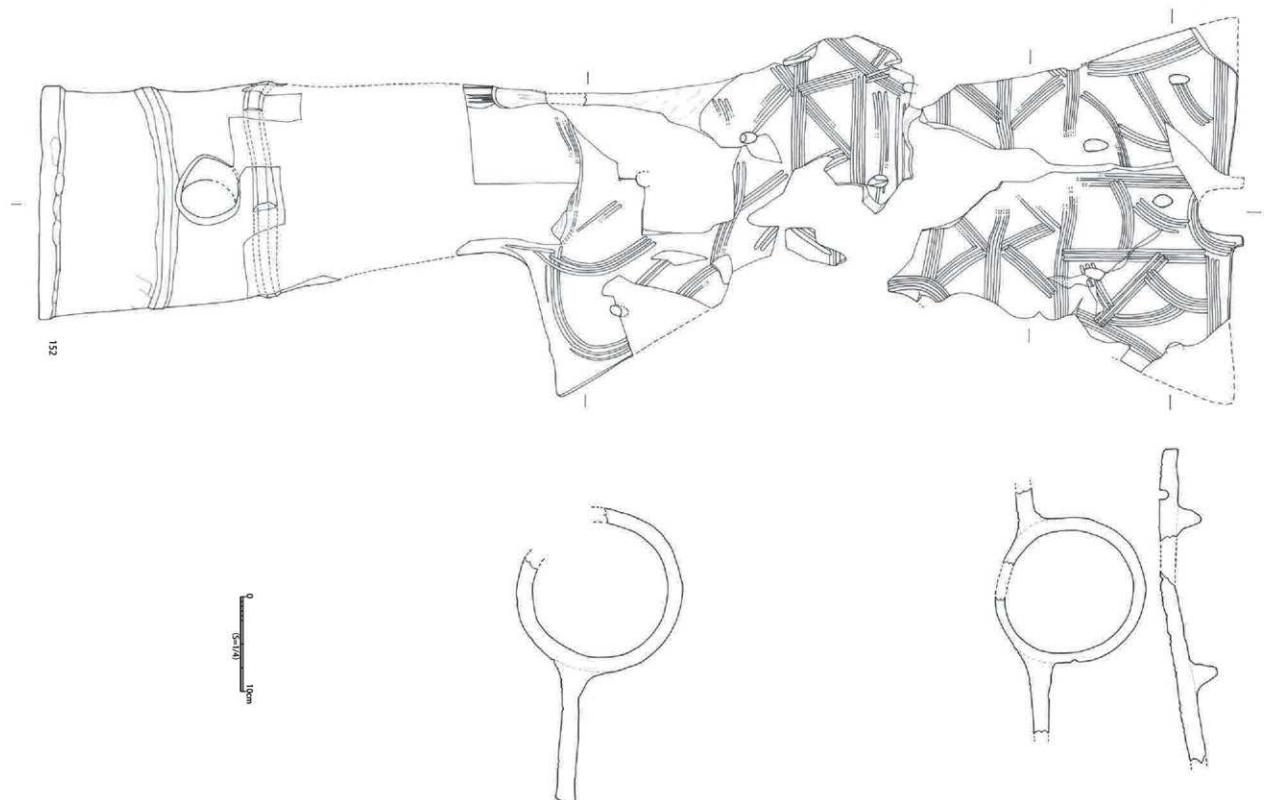


図65 前山A 58号墳出土 石見型埴輪1 (S = 1 / 4)

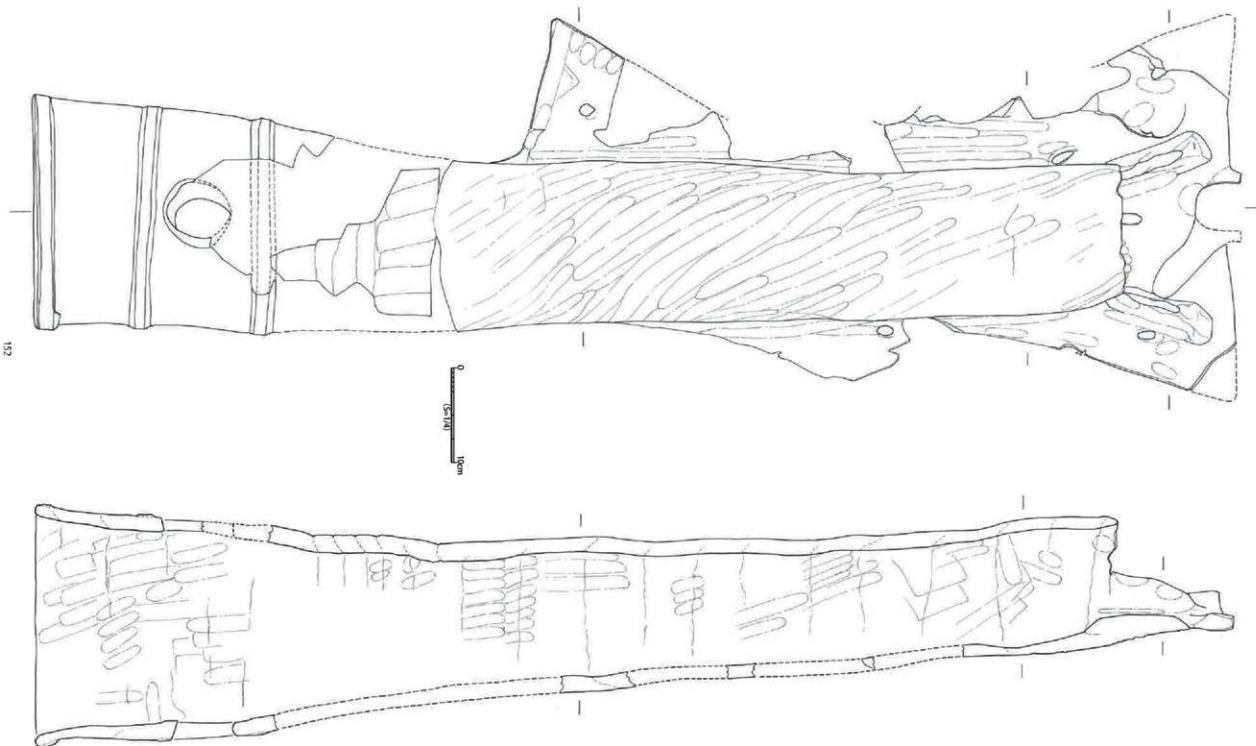
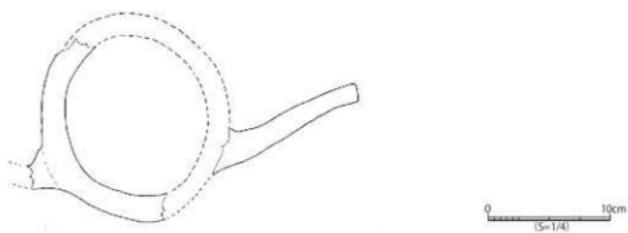
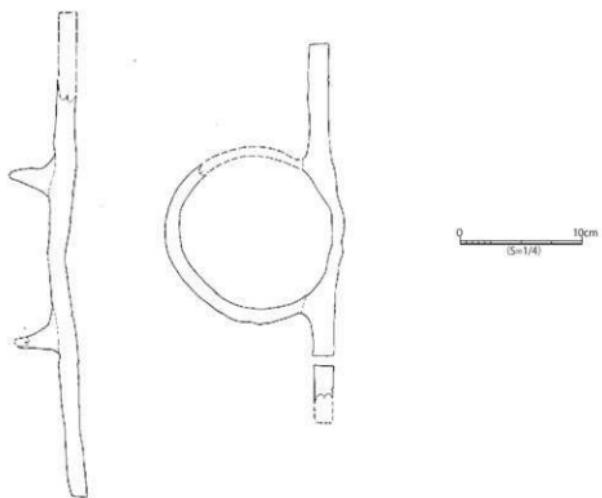


図66 前山A 58号墳出土 石見型埴輪2 (S = 1 / 4)



153

図67 前山A 58号墳出土 石見型埴輪3 (S=1/4)



154

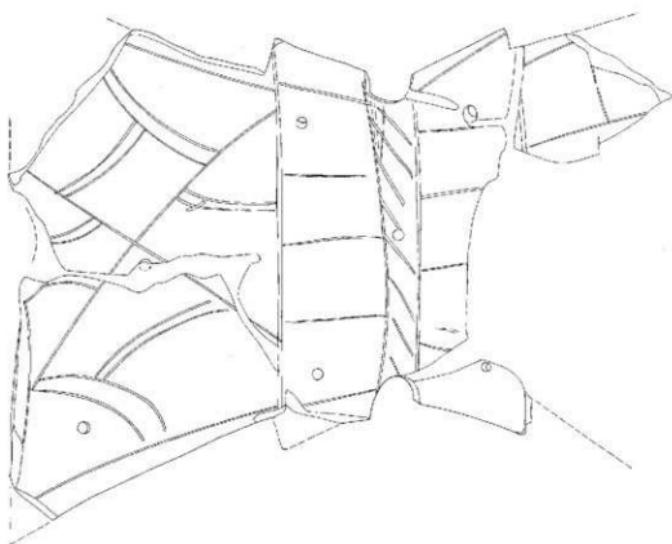


図 68 前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪 4 (S = 1 / 4)

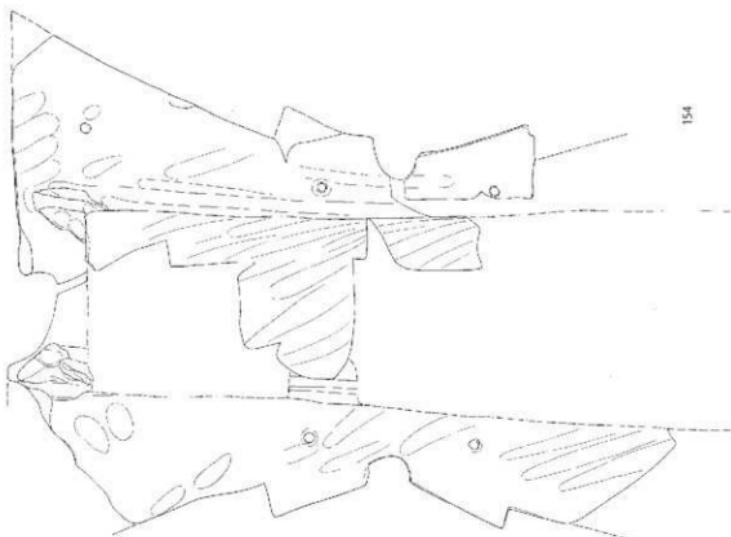
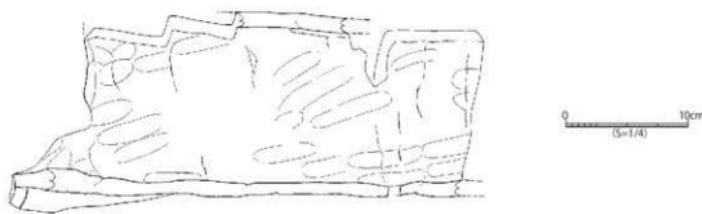


図 69 前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪 5 (S = 1/4)

に2個一対の円形の透孔、2段目に1段目と直交する方向に2個1対の透孔を配置している。調整は外面はタテハケ、内面はナデを施している。底部端から高さ35cm付近で板状工具で押さえた痕跡があり、倒立技法で成形した基部と形象部の円筒の接合した痕跡と考えられる。

154は形象部の破片である。残存長54cmである。上辺にU字形のえぐりをもち、背面上方には板補強用の粘土帯が貼り付けられている。文様は線刻によって4分割され、上段面は斜交軸で分割した中に2条の弧文を描き、上・下段帶は縦方向、中央帶は斜方向の1条沈線を施している。施文方法及び施文工具は他の石見型埴輪と異なる。また、形象部には表面上方から背面下方へと筒状工具により穿孔されている。調整は外面、内面ともにナデを施している。

155は形象部上辺の破片である。U字形のえぐりと角状突起をもつ。施文は3条一括の沈線によってなされている。表面上方から背面下方へと筒状工具により穿孔されている。

156は形象部上辺で、U字形のえぐりと角状突起をもつ。施文は3条一括の沈線を施す。

157は形象部上段面の左側の破片で、U字状えぐりの一部が確認できた。また、背面に板補強用の粘土帯が貼り付けられている。ヨコハケを施した後、3条一括の沈線で施文している。また、表面上方から背面下方へと筒状工具により穿孔されている。

159は形象部上段部右側である。ヨコハケを施した後、3条一括の沈線で施文している。表面上方から背面下方へと筒状工具により穿孔されている。

160は形象部上段面の破片で、ヨコハケの後、3条一括の沈線で施文している。

161は形象部上段面左側の破片で、背面に板補強用の粘土帯を持ち、表面上方から背面下方へと筒状工具により穿孔されている。斜め方向のハケの後、3条一括の沈線で施文している。

162は形象部上段面左側の破片である。背面に円筒にとりつく板補強用の粘土帯がある。表面の摩滅が著しく調整は不明であるが、3条一括の沈線で施文している。

163は形象部の破片である。円筒部には板を貼り付ける際に接着を強化する目的でつけられた工具による多数の線条痕がみられる。文様は沈線による明確な分割はみられないが、横方向の1条の沈線が3本みられる。この沈線が文様であるか、施文のための割付線であるのかは不明であるが、同様の線刻は164～166でみられ、いずれも形象部の中央付近に施されている。外面はタテハケの後、3条一括の沈線を施文しているが、断面形態より施文工具は横方向の沈線とは異なる工具であると思われる。表面上方から背面下方へと筒状工具により穿孔されている。

164は形象部破片である。摩滅が著しいが、横方向の1条の沈線と、3条一括の沈線による施文がみられる。表面上方から背面下方へと筒状工具により穿孔されている。

165は形象部破片である。外面はハケ調整の後、横方向の1条の沈線を施し、その後3条一括の沈線により施文している。

166は形象部下段面である。摩滅が著しいが横方向の1条の沈線と3条一括の沈線による施文がみられる。施文は横方向の沈線より上方で横方向の直線、沈線より下方は弧文をえがく。円筒部側面にはヒレ状の板を貼り付けた痕跡が認められるが、163のような工具による線条痕はみられない。下端部には板と円筒部を取り付ける際の補強用の粘土が貼り付けられている。

167は形象部破片である。文様から上段面にあたると思われる。外面はタテハケの後、3条一括の沈線により施文される。また、表面上方から背面下方へと筒状工具により穿孔されている。円筒部側面にはヒレ状の板が剥離した箇所に、工具による縦方向及び横方向の線条痕がみられる。

168は形象部上段帶部分である。側辺の半球状のえぐりは中央帶に該当する。えぐりの上端付

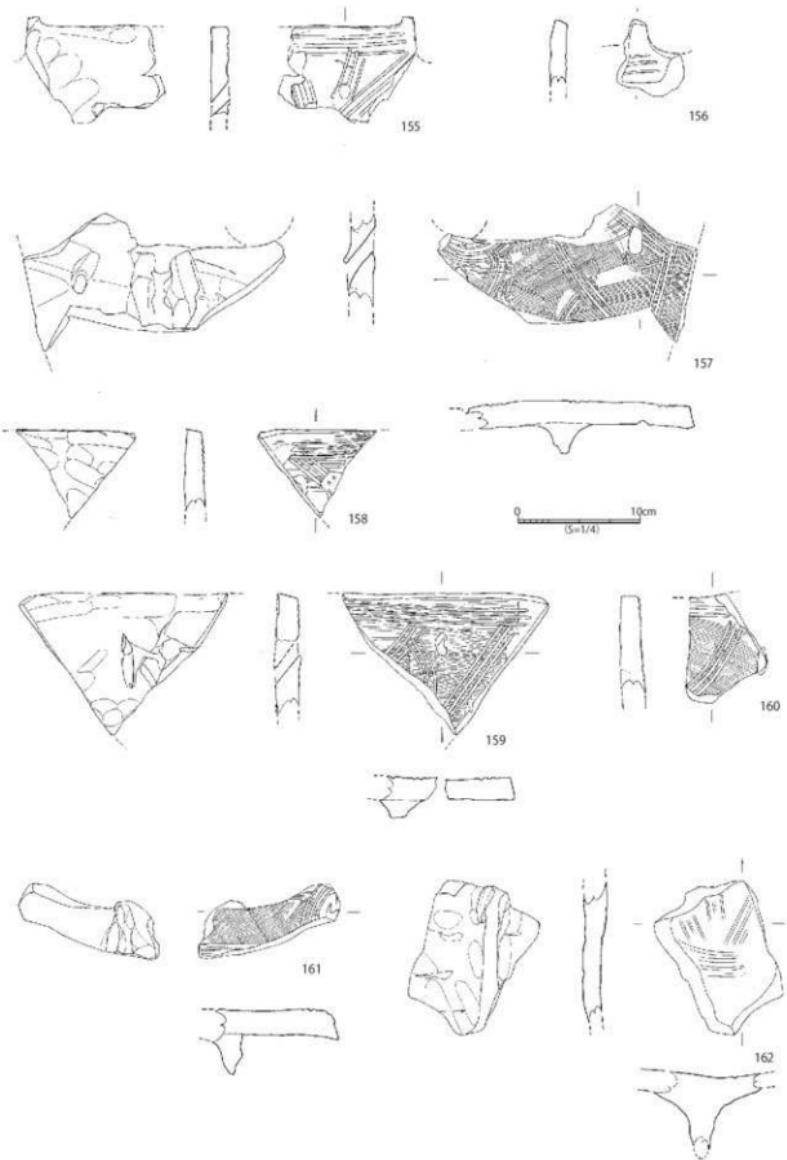


図 70 前山A 58号墳出土 石見型埴輪6 (S = 1/4)

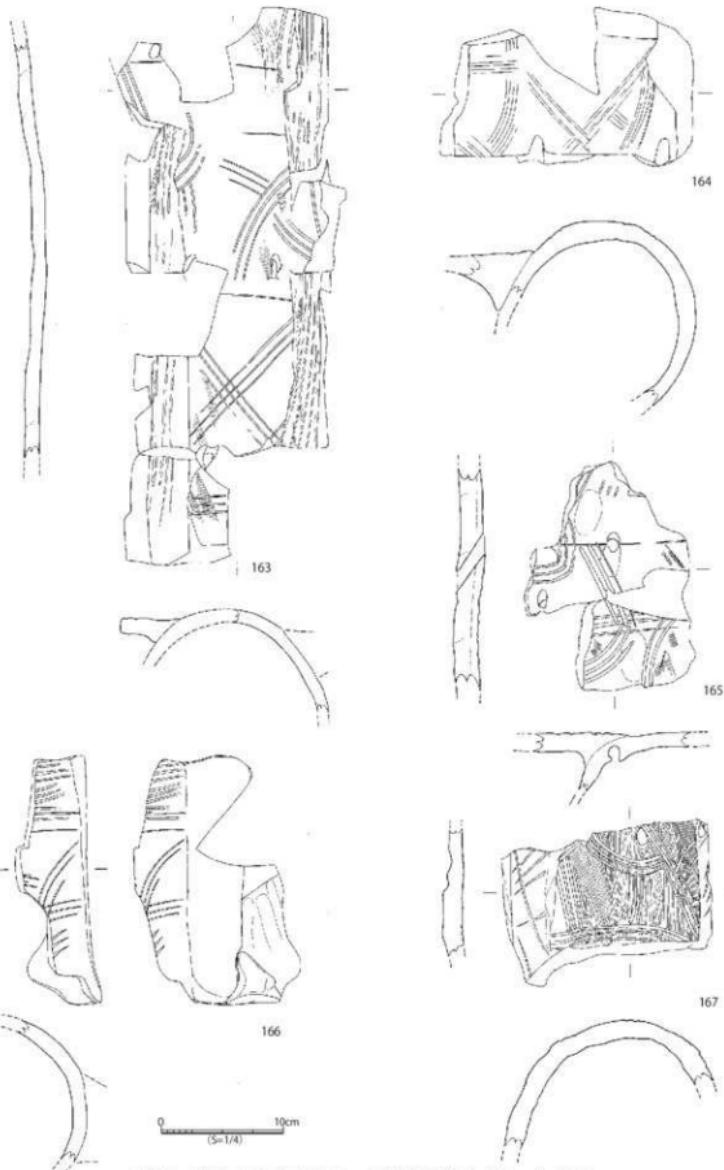


図 71 前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪 7 (S = 1 / 4)

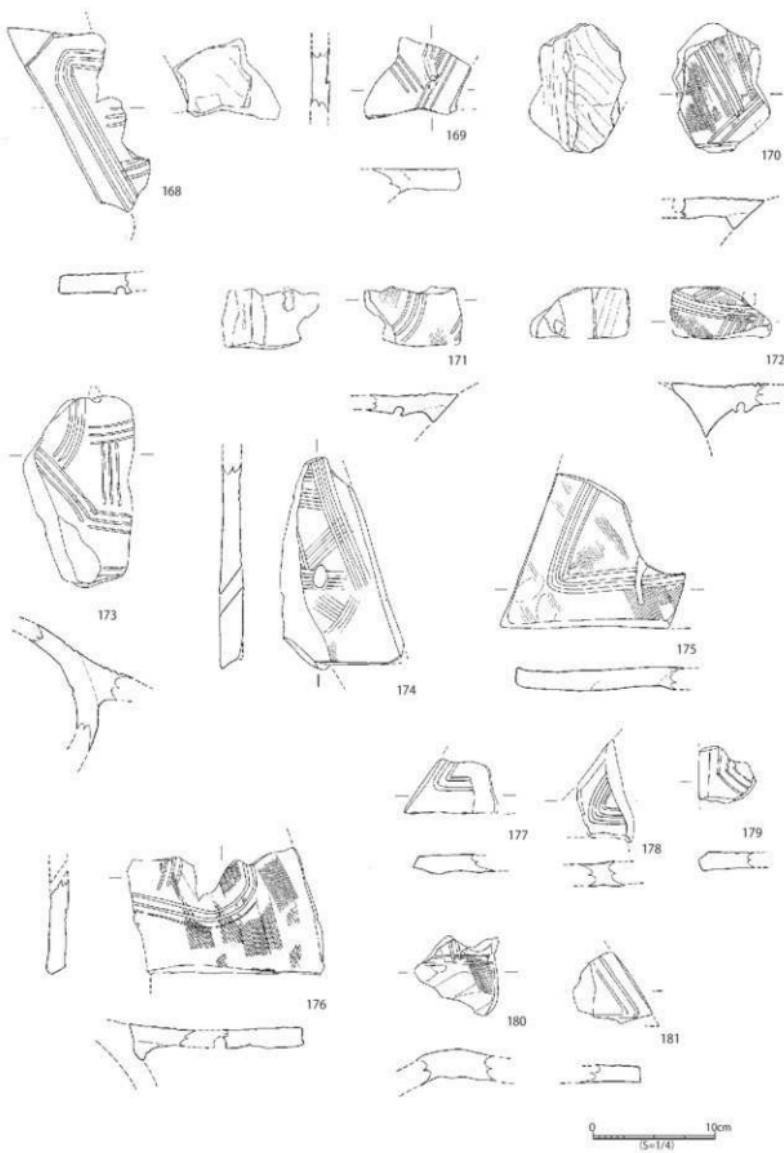


図72 前山A 58号墳出土 石見型埴輪8 (S = 1 / 4)

近に横方向の1条の沈線を施し、その後に3条一括の沈線により施文する。沈線は横方向の1条の沈線をこえて下方に続いている。また、表面上方から背面下方へと筒状工具により穿孔されている。

169～172は形象部ヒレ状の板の破片である。穿孔の方向から上下を判断した結果、169～171は円筒の右側、172は円筒の左側に貼り付けられていたことがわかる。施文はいずれも3条一括の沈線である。170～172はタテハケ調整が施されている。

173は形象部下方左側である。ヒレ状の板と円筒部の取り付き箇所の補強のためと思われる粘土が貼り付けられている。

174は左側下段帯にあたり、153と同一個体と考えられる。

175～181は下段面端部で、175及び177～179が右端、176及び181が左端、80は形象円筒部の下辺にあたる。180・181は2条一括の沈線、175・176・178・179は3条一括、177は2条又は3条一括の沈線で施文している。

182は形象部下段面である。上辺に1条の沈線を施しており、全体で3段構成をなすと考えられる。外面にハケ調整を施し、表面上方から背面下方への穿孔をもつ。全体を分割する1条の沈線以外に施文はない。

183は形象部破片である。表面上方から背面下方への穿孔がなされていることから形象部の表面であると判断した。他の個体と比べて穿孔の進入角度が浅い。外面は強いナデ調整が施され、文様はない。石見型埴輪と判断した破片の中で、無文の個体は182・183の2点のみであった。

184～187は樹立状況から石見型埴輪と判断した基部である。184は後円部1トレンチで後円部テラス上の埴輪列に樹立していた後円部②の基部である。底部径23cm、底部端より1cm上方に突帶を巡らせ、1段目に円形の透孔を対向方向に配置する。摩滅が著しく調整は不明であるが、粘土紐を外傾接合しており、倒立技法により成形したと思われる。185は前方部上の埴輪列の東埴輪列②の基部である。底部径23cm、底部端より1cm上方に突帶を巡らせ、約13cmの間隔で2本目の突帶を巡らせている。透孔は1段目と2段目にそれぞれ2個設け、1段目と2段目では直交する位置に配置している。外面はナデ調整を施している。186・187は同一個体とみられる。前方部上の埴輪列の西埴輪列⑤の基部である。底部径21.4cm、底部端から上方1cmの位置に突帶を巡らせる。透孔は1段目と2段目にそれぞれ2個設け、1段目と2段目では直交する位置に配置している。

以上のように、出土した石見型埴輪はいずれも形象部の上辺にU字形のえぐりと角状突起を持ち、背面に板補強用の粘土帯を貼り付けている。施文方法は、全体を4分割し、3条一括の沈線で施文する個体と2条一括の沈線で施文する個体(180・181)、1条または2条の沈線で施文する個体(154)、全体を3分割し、無文の個体(182・183)が認められた。基部には3条の突帶が巡るが、1段目の突帶が底部端に接する個体(152・153)と底部端から約1cm上に巡る個体(184～187)がある。透孔は152のみ2段目に2個一対の円形の透孔を設け、その他の個体では1段目と2段目の直交する位置に2個一対の円形の透孔を設ける。胎土は色調が橙色を呈し、結晶片岩及び白色の礫を多く含む胎土の一群と、色調が灰黄褐色を呈し、結晶片岩を含まない胎土を持つ一群(須恵質)に分けられる。比率は橙色の一群が多いが、2群の間で形態や施文方法等の差はみられない。

成形は、基部を普通円筒と同様に製作した後反転し、形象部の円筒部分を積み上げ側面及び上端部に板を貼り付け、背面上部に粘土帯を貼り付けて補強している。表面は外面調整を施した後、

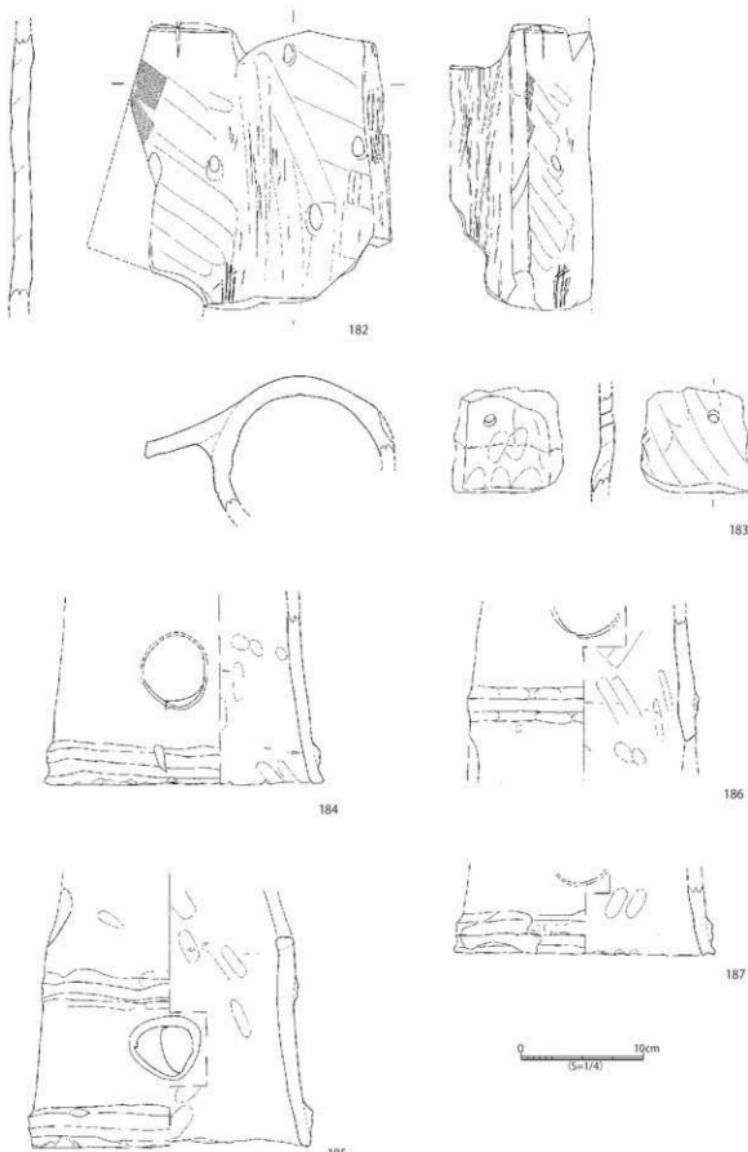


図73 前山A 58号墳出土 石見型埴輪9 (S = 1 / 4)

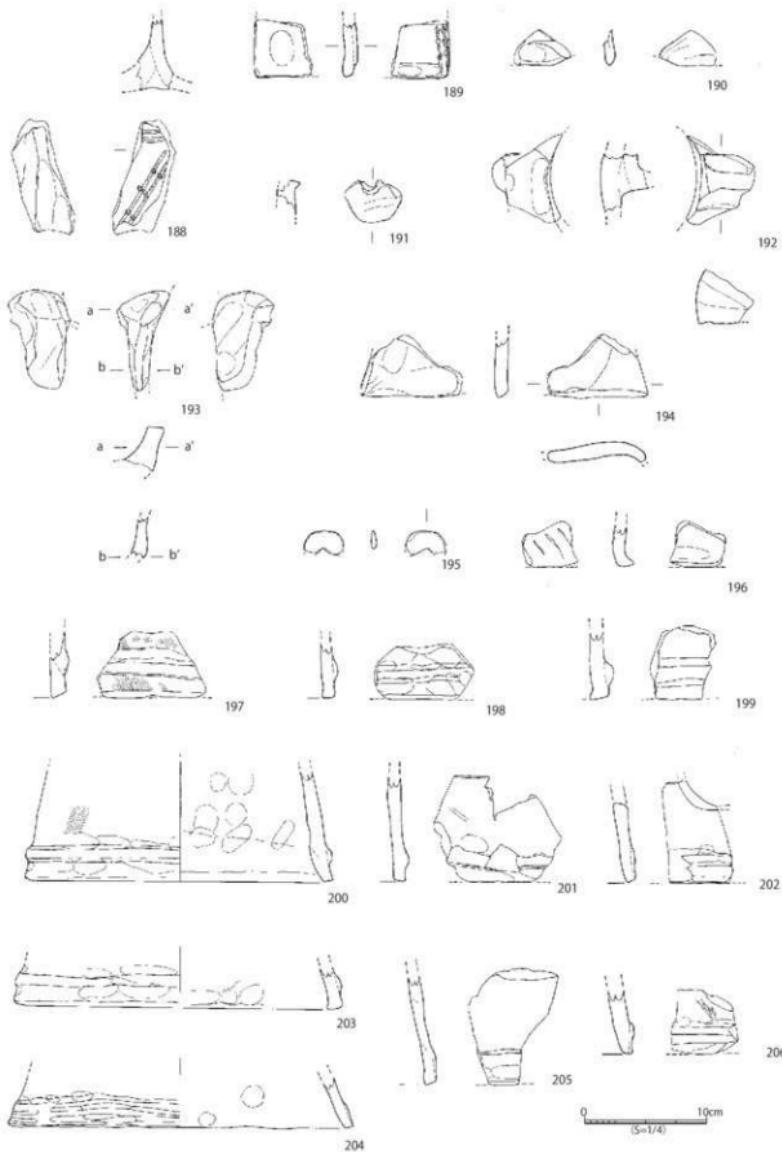


図 74 前山 A 58 号墳出土 器種不明形象埴輪 ($S = 1 / 4$)

施している。

器種不明形象埴輪 188～204は器種不明の形象埴輪片である。188は、盾状の形状をなす器種の円筒部と板部の取り付く部分で、表面部には2条一括の沈線と2個一括の刺突文が施されている。189は板状の破片で裏面に剥離した痕跡があることから、なにかに貼り付けられていたことがわかる。外面には2条一括の沈線と2個一括の刺突文が施されている。今回の調査で出土した全ての埴輪片の中で、刺突文が施された個体はこの2点のみであった。190は粘土を折り曲げて端部をつくり出している。191は裏面に剥離した痕跡がみられ、上方に穿孔が確認できる。192は筒状のものに貼り付いていた痕跡がみられる。193は筒状の個体の一部であり、上方で開いている。透孔の一部が認められる。馬の脚から胴体へと取り付く箇所である可能性が高い。194はゆるやかに波打つ形状を呈している。195は裏面に剥離した痕跡がある。196は下端部がL字状に曲がる。裏面は貼り付けのための線条痕がみられる。

197～204は形象基部である。底部端に接して突帯が巡る個体（202・204・205・206）と底部端から上方約1cmの位置に突帯が巡る個体（197～201・203）がある。人物埴輪の基部は確認された3基はすべて底部端から1cm上方に突帯を巡らせていましたが、石見型埴輪の基部においては突帯の位置が底部端に接するもの（152・153）と底部端から1cm上方に巡るもの（184～187）の両者が認められるため、197～204の基部の底部片がいずれの器種に対応するものであるかは不明である。

円筒埴輪 普通円筒は全長が復元できるものが2点（207・208）でいずれも3条4段である。器形は基底部から口縁部に向かってやや開き気味に立ち上がる。透孔はすべて円形で、2段目と3段目に2孔1対を段ごとに方向を直交させながら穿孔している。

①法量

普通円筒のうち完全に復元できる207は器高43cm、208は器高45.4cmである。各個体の基底部高は11～19cmとばらつきが大きいが、口縁部高は8～12cm前後のものが多い。また突帯間隔は10～12cm前後のものが主体で、底径は16～17cm前後で、口径は24cm前後と大きさを揃えている。

②調整

外面は突帯貼付後の二次調整は認められず、一次調整にタテハケ及びナナメ方向のハケを施す。ナナメハケは左上がりが主体である。ハケメは11～12／cmの単位である。

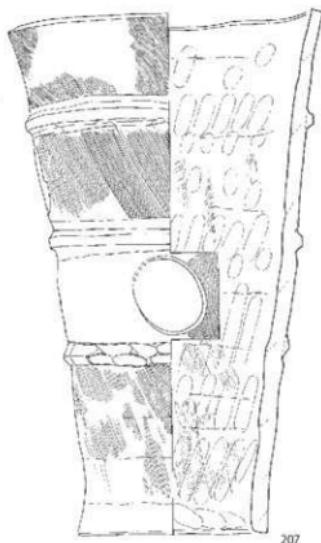
内面は、指オサエ及びナデを施す。内面のナデ調整は、口縁部付近では横方向、口縁部以下では縱方向が主体である。

③基底部調整

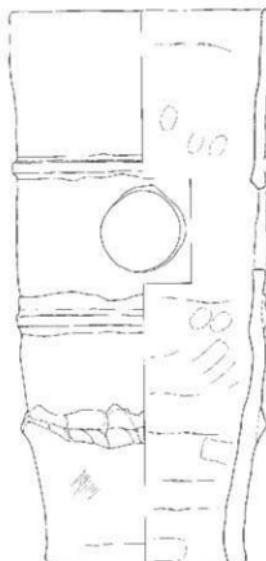
基底部調整を行わず基底が肥大化しているもの（207・221・223）と、板押さえ、またはナデを施すものがみられる。209・215・216は倒立して板状工具で押されたとみられる痕跡が外面にみられるとともに、器壁が薄くなり、基底部先端が尖っている。207・212・214・217・219も倒立して端部処理を施している。出土した埴輪のほとんどで基底部調整をおこなっている。

④突帯

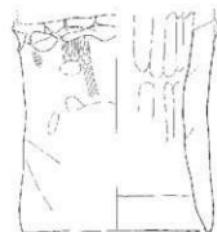
1段目の突帯に2本の指で粘土を断続的にナデつけたいわゆる断続ナデ技法がみられる個体と（207～213）、貼り付け後にヨコナデを施す個体（214・217・218・219）が見られる。断続ナデは水平から左上方向に強くナデつけていて、207ではナデつけた周辺の器壁が内側にくぼんでいる。2段目・3段目の突帯には断続ナデはみられないが、強いヨコナデにより器壁が内側にくぼんで



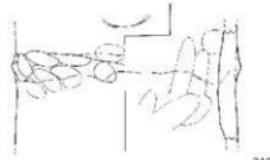
207



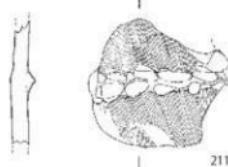
208



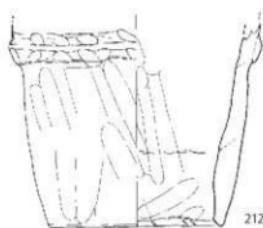
209



210



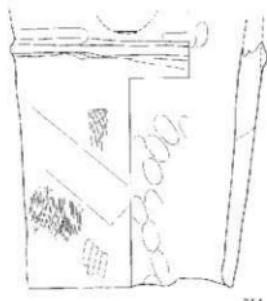
211



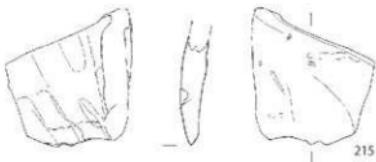
212

0
(5=1/4) 10cm

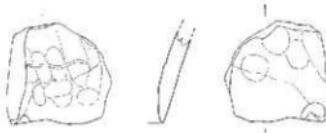
図 75 前山 A 58 号墳出土 断続ナデ技法の突帯をもつ円筒埴輪 (S = 1 / 4)



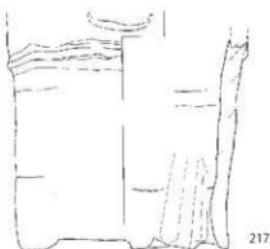
214



215



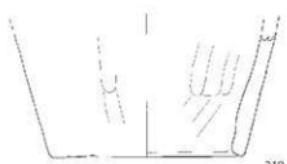
216



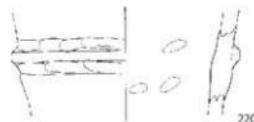
217



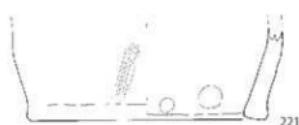
218



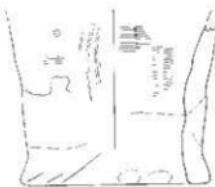
219



220



221



222



223

0
(5=1/4) 10cm

図 76 前山 A 58 号墳出土 円筒埴輪 底部 (S = 1 / 4)

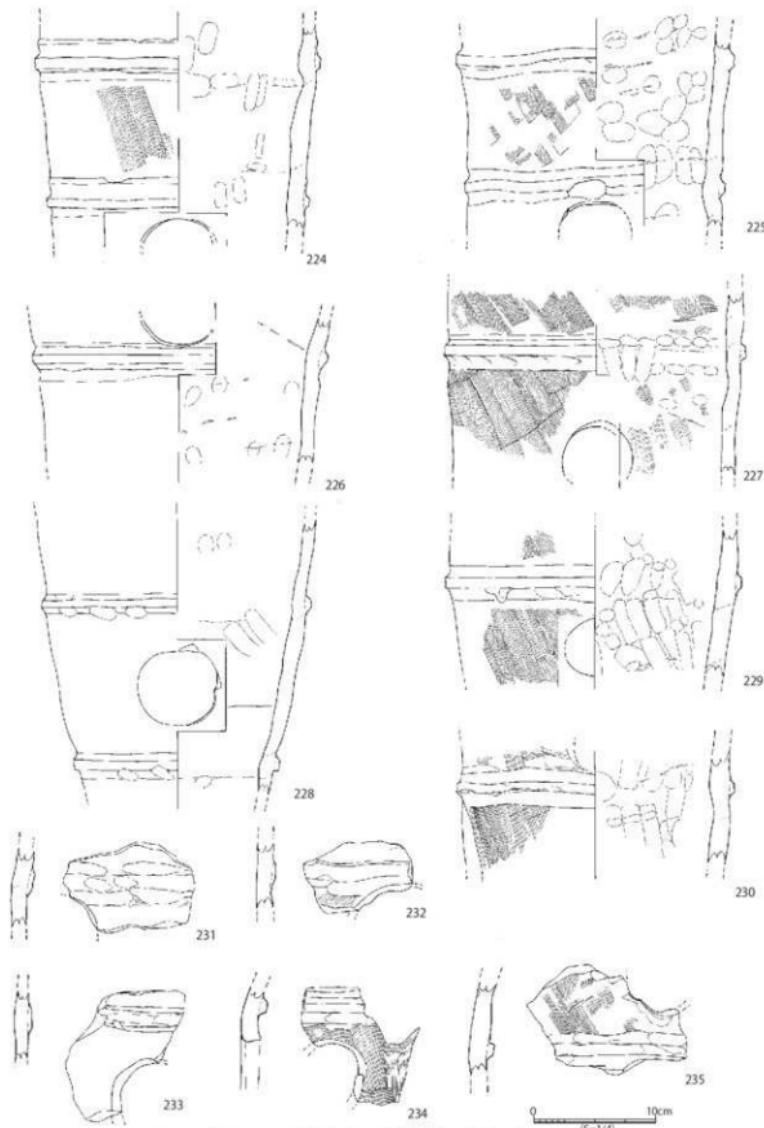


図77 前山A 58号墳出土 円筒埴輪 胸部 (S = 1 / 4)

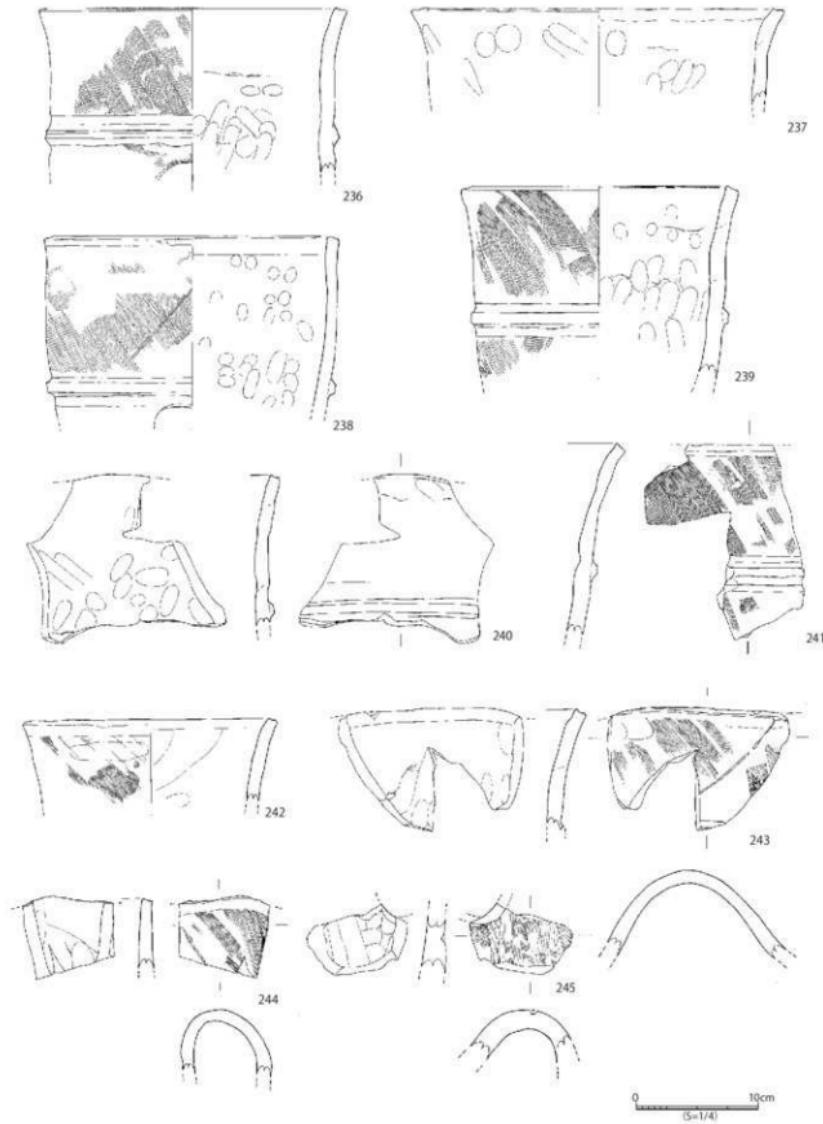


図 78 前山A 58号墳出土 円筒埴輪 口縁部 (S = 1 / 4)

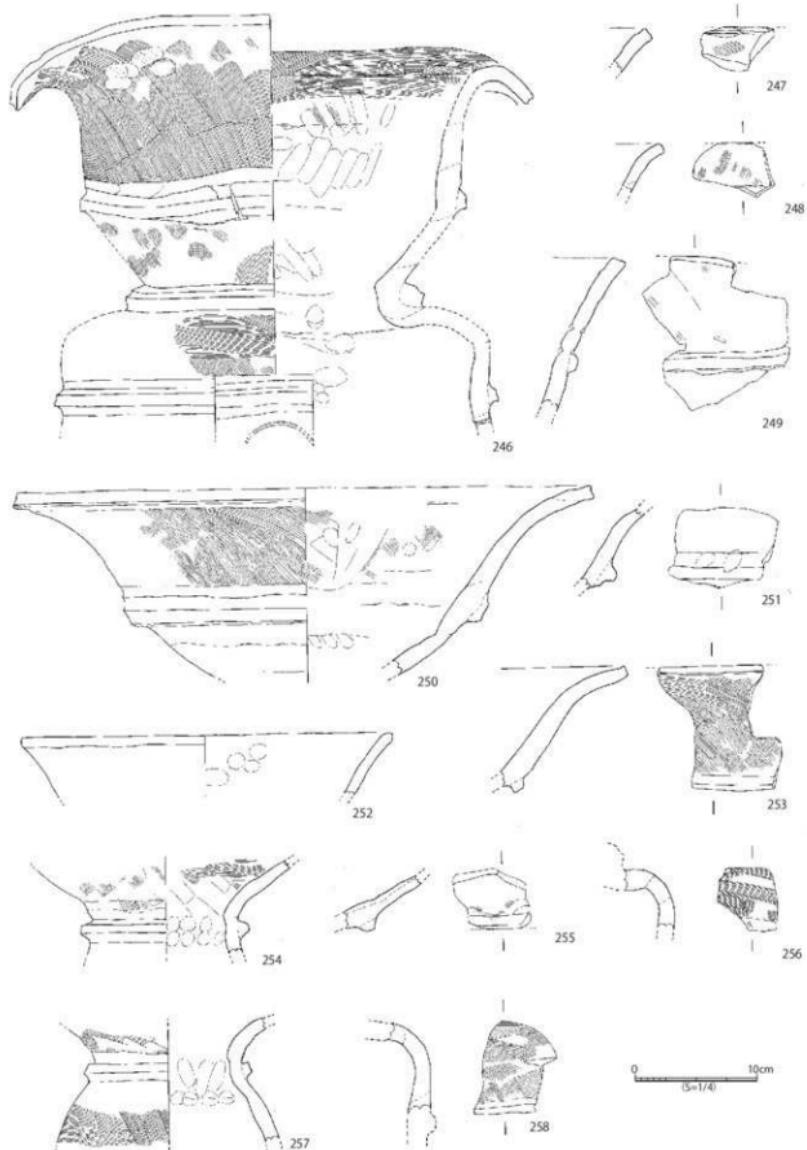


図 79 前山 A 58 号墳出土 朝顔形埴輪 (S = 1 / 4)

いる個体もみられる。突帯の断面は、台形状を呈するものとM字状を呈するものがあり、同一個体内では同じ形状を呈する。台形状の突帯とM字状の突帯の比率は同程度である。なお、突帯間隔を設定するための刺突や沈線は確認できない。ヨコナデを施す個体は全長が復元できるものではなく、断続ナデをもつ個体との差異はわからない。

⑤透孔

2段目及び段目に2孔1対を段ごとに方向を直交させながら穿孔している。すべて円形である。穿孔は右回りに切開し、その起点と終点に差が生じて段差をもつもの（228・234・235）みられる。

⑥口縁部

口縁部はすべて単純に外反して立ち上がる形状を呈する。端部はヨコナデを施す。

⑦胎土

色調が橙色を呈し、結晶片岩及び白色の礫を多く含む胎土の一群と、色調が灰黄褐色を呈し結晶片岩を含まない胎土をもつ一群（須恵質）に分けられる。比率は橙色の一群が多く、2群の間で形態や法量、技法の差はみられない。

⑧焼成

良好で黒斑をもたない窯窯焼成によるものであるが、243～246のように焼けひずみによって大きくゆがんでいるものもある。焼けひずみはすべて須恵質のものである。

⑨ヘラ記号

207・236・238・241・243において口縁部外面に右上がりの直線状のヘラ記号がみられる。

朝顔形埴輪 朝顔形埴輪で全長を復元できたものではなく、口縁部と頭部のみを確認した。口縁部は246で口径42.4cm、250で口径47.2cmに復元できる。外面調整はナナメハケ、内面調整にヨコハケを施す。頭部突帯は断面M字で高さをもつ。頭部は246は大型で普通円筒より大きい。254・257は破片からの復元であるが普通円筒と同じかやや小型である。頭部の調整は外面がナナメハケ及びヨコハケで、内面は指オサエである。

（5）土器類

須恵器は個体別に杯蓋が5点、杯身が2点、台付蓋の蓋が1点、小型壺が2点、甌の口縁部が1点、甌もしくは壺の底部が1点、中型甌が1点、大型甌が1点出土している。土師器は小型壺が1点出土している。

259～263は杯蓋である。259は6トレンチの表土下流土層から出土した。260・261は羨道部床面上の閉塞石付近から出土した。262・263は玄室内への流入土中から出土した。

259は口径13.7cm、高さ4.7cmを測り、天井部は平たく、稜が鈍く突出する。口縁部は内湾して伸び、2.4cmである。口縁端部は面を持っている。焼成は良好であり、色調は灰色である。天井部の3分の2ほどを回転によるヘラケズリを行っており、それより下部は回転ナデによる調整を行っている。ヘラケズリの方向から、ロクロの回転方向が右方向であったことが分かる。残存状態は良好である。260は口径13.7cm、高さ4.6cmであり、形状は天井部が丸みを呈する。天井部と口縁部の境はにぶい凹線がめぐる。口縁部は外反して開き、高さ1.8cmである。口縁端部は面を持つ。焼成は良好で色調は灰色を呈する。天井部の3分の1の範囲に回転ヘラケズリが施され、それ以外は回転ナデにより調整が行われている。ヘラケズリの際の砂粒の移動方向から、ロクロの回転方向が左方向だったことが分かる。261は口径14.0cm、高さ4.5cmである。天井部は

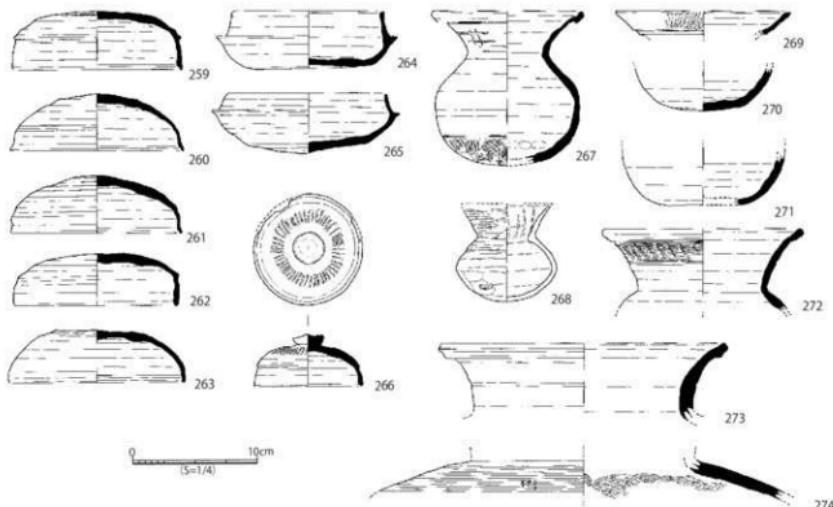


図 80 前山A 58号墳出土 土器類1 (S = 1/4)

丸く、口縁部が外反して端部に面を持ち 260 と似ている。焼成は良好で、灰色である。天井部の 2 分の 1 ほどを回転によるヘラケズリを行い、それより下は回転ナデによる調整である。262 は口径 13.1cm、高さ 4.2cm を測り、天井部は平たく、口縁部は垂直気味に下がる。端部は丸みを呈する。天井部と口縁部の境は鈍い突線がめぐる。天井部の 2 分の 1 の範囲を回転ヘラケズリし、それより下部は回転ナデである。焼成は良好であり、色調は灰色である。ケズリの際に動いた砂粒から、ロクロの回転方向は右方向だと分かる。263 は口径 14.0cm、高さ 4.2cm を測り、天井部は天井部から口縁部にかけて丸みを帯びながら内湾する。口縁部は短く 0.9cm であり、天井部と口縁部の境は明瞭ではなくなっている。口縁端部はナデによってつまみ出している。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。

264・265 は杯身である。264 は 6 トレンチの流土から、265 は漢道の床面上から出土した。264 は口径 12.2cm、器高 5.1cm、受け部径 14.6cm である。底部は平底であり、口縁部の垂直気味に立ち上がり、高さは 2.1cm である。口縁端部はナデにより面を有する。底部外面の 3 分の 1 の範囲に回転ヘラケズリが施されており、それ以外は内外面ともに回転によるナデ調整である。製作時のロクロの回転方向は右方向であると考えられる。焼成は良好であり、灰白色を呈する。265 は口径 12.8cm、器高 4.8cm を測る。口縁部は内傾して立ち上がり、高さは 1.5cm である。口縁端部は丸くナデしている。底部外面は 3 分の 1 を回転ヘラケズリし、丸みを帯びる。底部から口縁部にかけては回転ナデ調整である。ロクロの回転方向は左方向である。焼成は良好であり、色調は灰色である。

266 は台付壺の蓋と考えられ、天井部につまみが付されている。口径 8.8cm、天井部までの高さ 3.3cm、つまみを含めた器高は 4.2cm である。口縁部は内湾し、端部にはナデによる面が確認できる。天井部と口縁部の間にはぶい稜がめぐる。天井部は 3 分の 2 以上を回転ヘラケズリのの

ち櫛齒状工具の先端によって列点文が施されている。口縁部の外面及び内面は回転によるナデ調整である。焼成は良好であり、色調は灰色である。

267は小型の壺であり、石室内の流入土から出土した。口径は12.0cm、残存する高さ12.3cmである。底部をタタキによって成形しているほかは回転ナデ調整による。口縁端部は玉縁状に作り出されている。タタキ目は格子タタキであり、内面には無文の凹凸が確認できる。頸部の外面にはヘラ状工具の先端によって描かれた「井」字状のヘラ記号がみられる。焼成は良好であり、色調は灰色である。

268は土師器の小型丸底壺である。玄室の玄門側の床面上から出土した。口縁端部は一部残存するが、大部分は欠損している。口径7.4cm、残存高7.6cm、胴部径8.2cmを測る。胴部は丸みを呈し、口縁部はハの字状に開く。胴部下半に、長径1.3cm、短径0.4cmの焼成後穿孔がある。焼成は良好であり、色調は橙色である。口縁部内面にタテ方向のミガキ、肩部にヨコ方向のミガキ、底部外面にケズリがみられるほかはヨコ方向のナデが施されている。

269は廻の二重口縁部の破片と考えられる。石室内堆積土から出土した。復元された口径は14.2cm、残存高は1.9cmであり、内湾する。端部は上方を向いて面が形成されている。内面は回転ナデ調整であり、外面には波状文が施されているが、自然釉が濃く付着しており、波状文の条数は明瞭ではない。

270・271は廻もしくは壺の底部である。7トレンチから出土した。270は残存高3.5cmであり、平底状である。焼成が不良であり、灰白色を呈する。調整は回転によるナデ調整である。271は残存高4.5cmであり、焼成、色調ともに270と類似する。

272は小型壺の口縁部から肩部にかけての破片である。5・6トレンチから出土した。焼成や調整、文様から接合はしなかったものの同一個体の破片と判断し、図化を行っている。口径16.0cm、残存高6.5cm、頸部高5.0cmを測り、口縁部は広口状である。口縁端部は隅丸状におさめられており、頸部はにぶい回線によって区画され、上段に波状文が施文されている。焼成は良好であり、色調は灰色である。

273は中型壺の口縁部の破片である。口径22.8cm、残存高5.5cmであり、外反する。内外面ともに回転によるナデ調整が確認でき、頸部の中位には回線がある。口縁端部はナデによって面をもつ。焼成は良好であり、色調は灰色である。

274は焼成や胎土、頸部径などから271と同一個体の可能性が高い肩部の破片である。外面はタタキ成形ののちにカキメ調整が施され、格子タタキがうすく確認できる。内面には当て具痕がみられている。これらは3・9トレンチから出土した。

275は須恵器の大型壺である。9トレンチにおいて樹立埴輪よりも埴丘側に据えられた状態で出土した。口縁部や胴部の一部を欠損するほかはほぼ残存している。口径38.6cm、器高77.8cm、胴部径63.0cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部はやや丸みをもち、下部に突線を有する。

頸部は突線によって区画され、波状文を3段施す。胴部は外面に格子タタキ、内面に同心円文がみられる。焼成は良好であり、色調は灰色である。口縁部上部が回転ナデ調整であり、口縁部下部はナデ調整である。胴部以下はタタキによる成形である。

これらの須恵器が示す型式的特徴は、陶色窯跡群における編年のM T 15型式期からT K 10型式期に該当するものが中心的である。杯蓋の一部に、M T 85段階の特徴をもつものがみられるため、追葬があった可能性が考えられるが、前山A 58号墳が築造された年代が6世紀の第2四半期頃であったことがうかがえる。

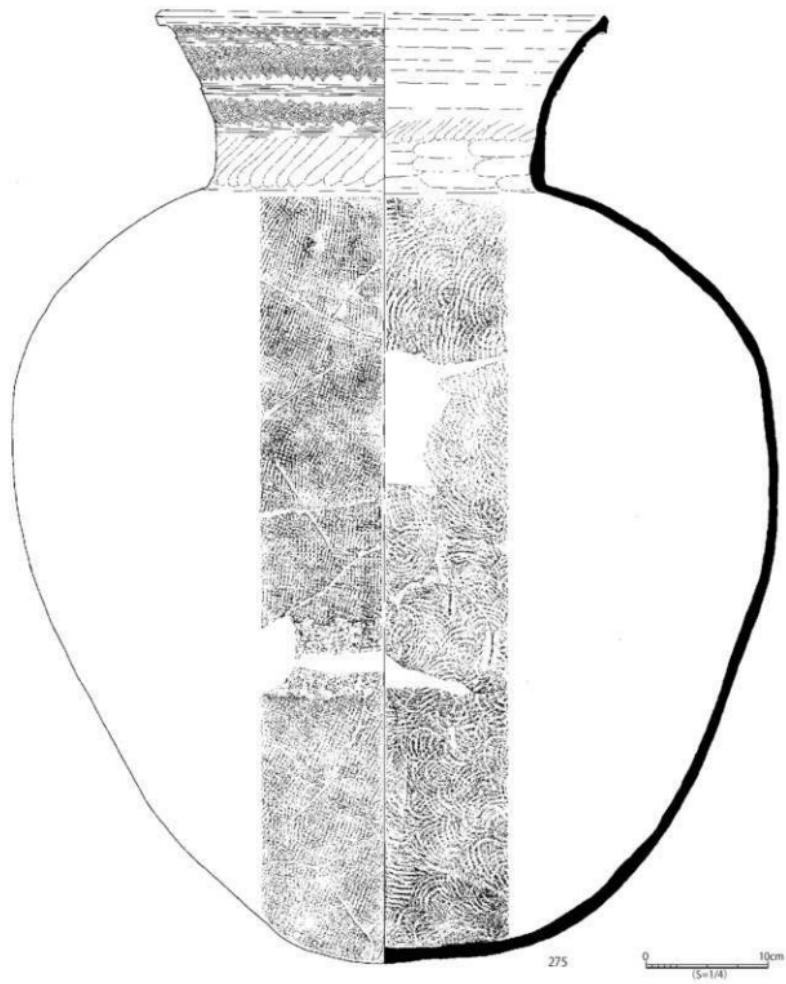


図 81 前山A 58号墳出土 土器類2 (S = 1 / 4)

5まとめ

かつて、前山A 58号墳は2基の円墳と考えられていたが、今回の発掘調査の結果から、全長19.6mの前方後円墳であることが明らかとなった。後円部は地形の制約を受けたためか、楕円形を呈しているが、その直径はおよそ14mであり、前方部の長さは6mである。ただし、前方部の墳頂部は後円部側に入り込む形となっており、墳頂部でみた場合の長さは7.2mである。前方部は1段であり、平坦な墳頂部を有する。後円部では埴輪を樹立したテラス面及び上部に続く墳丘斜面が検出され、前方部1段、後円部2段の築成であったことが分かったが、後円部1段目テラスは前方部の墳頂部には接続せず、前方部付近で収束することが特徴的である。前方部前端

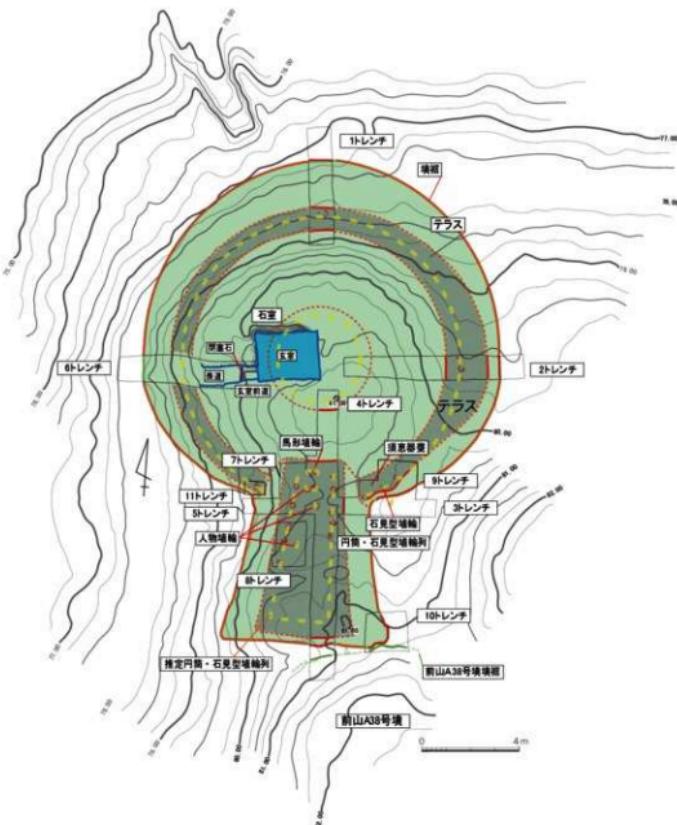


図 82 前山A 58号墳 墳丘復元図 (S = 1 / 200)

などでは、軟質岩盤を削り出すことにより成形されており、墳丘西側の5トレンチでは、地山上に盛土が施されて墳丘を構築していることが判明した。

埋葬施設である横穴式石室は、玄室が長さ2.5m、幅1.9mであり、壁面が高さ約1.5m残存していた。玄室の床面では、主軸に直交する方向に3分割された埋葬範囲が確認され、奥壁側には長軸1.7m、短軸0.8mの石障の一部が残存し、複数の埋葬があったことがうかがわれた。玄室前道は長さ0.4m、幅0.5mで、床面には大きな石材を置いて1段分高くしており、これは、右片袖傾向が著しい玄門部のあり方とも合わせて、初期の岩橋型横穴式石室の特徴である。羨道部は確認できた範囲において、幅0.7m、長さ1.7mを測る。羨道部においては、閉塞されたままの扉石が見つかったことが特筆される。扉石にはそれを支える結晶片岩の板石が斜めに立てかけられており、閉塞の状況が明らかとなった。

墳丘上からは、多数の樹立埴輪が検出され、特に、前方部墳頂においては、円筒埴輪や石見型埴輪が方形に並び、その内部に馬形埴輪や人物埴輪が樹立されていたことが判明した。さらに、円筒埴輪と石見型埴輪は底部形状の違いから、交互に配置されていたことも明らかとなった。また、墳丘東側のくびれ部分である3・9トレンチからは、後円部1段目テラスの樹立埴輪の内側において、須恵器の大甕が据え付けられていたことが分かった。

今回の発掘調査による出土遺物としては、石室からガラス小玉や土製丸玉などの装身具、鉄製品である馬具や鐵鎌、須恵器、土師器があるが、その多くは攪乱土からの出土である。墳丘上からは埴輪や須恵器が出土しているが、特に、埴輪は多数の出土が見られ、円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪のほか、人物埴輪、馬形埴輪、石見型埴輪がある。

古墳の築造時期については、出土した須恵器が陶邑窯跡群における編年のMT15～TK10型式期に属するもののが中心であることから、6世紀前半代と考えられる。

以上が、前山A58号墳の発掘調査成果のまとめである。その意義としては、これまで不明な点が多かった岩橋千塚古墳群の小型古墳における埴輪祭祀のあり方が明らかとなったことが挙げられる。岩橋千塚古墳群における横穴式石室導入期の様相は、古墳群の西部にある大型の前方後円墳を中心に検討されてきたが、今回、古墳群の東部にある初期の横穴式石室が採用された小型の前方後円墳において多数の埴輪を用いた祭祀が行われていたことが明瞭となったことは、古墳群内における階層性などの研究において有用な指標となるであろう。今後は、この調査において判明した基礎情報をもとに、古墳の保存・活用を図っていきたい。

参考文献

- 船村繁 1999『人物埴輪の研究』同成社
河内一浩 2000「紀伊における石見型埴輪の様相」『紀伊考古学研究』第3号 紀伊考古学研究会
河内一浩 2014「石見型埴輪の地域性—紀伊・花山古墳群出土埴輪からの予察—」『郵政考古紀要』第59号 大阪・郵政考古学会
川西宏之 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
辻川哲朗 1999「円筒埴輪の突堤設定技法の復元」『埴輪論叢』1 墓輪検討会
豊島直博 2003「後期古墳出土鐵鎌の地域成と階層性」『文化財と歴史学』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
藤井幸司 2007「小古墳にみる円筒埴輪生産の具体相」『埴輪論叢』1 墓輪検討会
藤井幸司 2012「地域の展開 近畿周辺」『古墳時代の考古学』2 同成社
和田一之輔 2006「石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相」『考古学研究』53-3 考古学研究会
和田一之輔 2011「埴輪の編年③形象埴輪の編年と画期」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2005『奈良山発掘調査報告Ⅰ—石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査—』

表6 前山A 58号墳出土装身具觀察表

No.	図版番号	器種	材質	最大径 (mm)	上面孔径 (mm)	下面孔径 (mm)	高さ (mm)	重量 (g)	色調	出土位置
1	図版53	小玉	ガラス	3.77	1.03	0.93	2.7	0.05	緑色透明	D4
2	図版53	小玉	ガラス	3.77	1.38	1.16	2.38	0.05	緑色透明	C1
3	図版53	小玉	ガラス	3.45	1.11	1.09	2.2	0.03	緑色透明	C1
4	図版53	小玉	ガラス	3.31	1.01	0.92	2.08	0.03	緑色透明	C1
5	図版53	小玉	ガラス	3.16	1.22	1.18	1.91	0.02	緑色透明	C1
6	図版53	小玉	ガラス	3.71	1.27	1.23	2.19	0.04	淡青色透明	C3
7	図版53	小玉	ガラス	3.44	1.31	1.22	2.32	0.03	淡青色透明	不明
8	図版53	小玉	ガラス	3.28	1.54	1.32	1.4	0.02	淡青色透明	C1
9	図版53	小玉	ガラス	4.18	1.16	1.13	2.69	0.06	緑色透明	C1
10	図版53	小玉	ガラス	3.79	1.23	1.15	2.28	0.04	緑色透明	C1
11	図版53	小玉	ガラス	3.96	1.27	1.17	2.46	0.04	緑色透明	C3
12	図版53	小玉	ガラス	3.46	1.42	1.36	1.67	0.03	青色透明	C1
13	図版53	小玉	ガラス	3.49	1.12	1.03	2.19	0.04	緑色透明	不明
14	図版53	小玉	ガラス	3.2	0.95	0.94	1.79	0.02	緑色透明	C?
15	図版53	小玉	ガラス	2.81	1.05	1.03	1.83	0.02	緑色透明	C1
16	図版53	小玉	ガラス	2.96	1.25	1.19	1.76	0.02	緑色透明	C1
17	図版53	小玉	ガラス	3.03	1.17	1.05	1.62	0.02	緑色透明	C1
18	図版53	小玉	ガラス	2.83	1.16	1.15	2.27	0.02	緑色透明	C1
19	図版53	小玉	ガラス	3.12	1.29	1.11	1.87	0.02	緑色透明	C1
20	図版53	小玉	ガラス	2.81	1.01	0.91	1.93	0.02	緑色透明	C1
21	図版53	小玉	ガラス	2.98	1.06	0.92	2.02	0.02	緑色透明	C1
22	図版53	小玉	ガラス	3.07	1.42	1.11	1.61	0.02	青色透明	C1
23	図版53	小玉	ガラス	2.99	1.32	1.21	2.23	0.03	緑色透明	C1
24	図版53	小玉	ガラス	2.85	1.04	0.9	1.63	0.02	緑色透明	不明
25	図版53	小玉	ガラス	2.89	0.77	0.81	1.77	0.01	緑色透明	不明
26	図版53	小玉	ガラス	2.58	1.66	1.26	1.62	0.02	緑色透明	B2
27	図版53	小玉	ガラス	2.4	1.17	1.15	1.82	0.01	緑色透明	C1
28	図版53	小玉	ガラス	2.67	0.96	0.94	1.47	0.02	緑色透明	C1
29	図版53	小玉	ガラス	2.78	1.29	1.27	2.37	0.02	緑色透明	C1
30	図版53	小玉	ガラス	2.83	1.39	1.14	1.72	0.02	緑色透明	C1
31	図版53	小玉	ガラス	2.33	1	0.97	1.6	0.01	緑色透明	C?
32	図版53	小玉	ガラス	2.77	1.37	1.27	1.24	0.02	青色透明	D1
33	図版53	小玉	ガラス	2.22	1.24	1.19	1.81	0.01	緑色透明	D1
34	図版53	小玉	ガラス	2.15	1.06	1.01	1.59	0.01	緑色透明	不明
35	図版53	小玉	ガラス	2.36	0.99	0.95	1.27	0.01	青色透明	不明
36	図版53	白玉	滑石	6.3	3.5	2.4	1.9	0.19	10B66/1青灰色	B1
37	図版53	白玉	滑石	6.7	3.1	2.9	1.5	0.18	10B66/1青灰色	D1
38	図版53	白玉	滑石	6.7	3	2.7	2.1	0.2	10B66/1青灰色	D3
39	図版53	白玉	滑石	6.7	4.3	2.7	2	0.25	10B7/1明綠	D?
40	図版53	丸玉	土製	8.1	1.6	1.6	5.9	0.38	Hue5Y1/2黒	C1
41	図版53	丸玉	土製	8.2	1.2	1.2	6.3	0.39	Hue2.5Y3/1黒褐	C1
42	図版53	丸玉	土製	9.1	1.4	1.4	5.7	0.51	Hue10R3/1黒褐-4/2灰黄褐	C1
43	図版53	丸玉	土製	8.9	1.3	1.3	7.2	0.55	Hue5Y3/1オリーブ	C2
44	図版53	丸玉	土製	9.1	1.8	1.6	6.7	0.49	Hue5Y3/1オリーブ黒	C2
45	図版53	丸玉	土製	8.7	1.5	1.5	6	0.43	Hue2.5Y3/1黒褐	D2
46	図版53	丸玉	土製	8	1.7	1.6	5.5	0.29	Hue2.5Y3/1黒褐	D3
47	図版53	丸玉	土製	8.4	1.7	1.7	7	0.5	Hue2.5Y4/1黄灰	不明
48	図版53	丸玉	土製	8.4	1.4	1.4	7.4	0.49	Hue2.5Y5/1黄灰	不明
49	図版53	丸玉	土製	7.1	1.6	1.6	6.5	0.3	Hue2.5Y3/2黑褐	C1
50	図版53	丸玉	土製	7.3	1.6	1.1	5.4	0.26	Hue2.5Y7/3浅黄	C3
51	図版53	丸玉	土製	8.3	1.5	-	6.2	0.3	Hue2.5Y3/2黒褐	C1
52	図版53	丸玉	土製	(7.1)	2.4	-	4.9	0.17	Hue2.5Y3/2黒褐	C1
53	図版53	丸玉	土製	-	(1.8)	(0.8)	5.3	0.14	Hue2.5Y3/1黒褐	C1
54	図版53	丸玉	土製	-	-	-	(5.0)	0.06	Hue2.5Y3/2黒褐	C1

表7 前山A 58号墳出土鉄製品観察表

No.	図版 番号	器種	法量 (破片のため現況での法量を記載)	備考	出土位置 (石室内グリッド)
55	図版53/ 54	環状鏡板付櫛	鏡板(右)：直径横8.3cm、縦7.0cm、厚さ0.65cmの楕円形。立開部幅2.0cm高さ1.5cm、厚さ0.35cm。鏡板(左)：直径8.5cm、厚さ0.55cm。箒(右)：長さ9.0cm厚さ3.6cm、脚金径2.3cm、箒先端幅2.8cm、箒(左)：長さ8.4cm、厚さ0.8cm、脚金径1.7cm、箒先端幅2.5cm、引手・長さ(9.7cm)厚さ0.7cm、引手蓋径2.3cm。	鏡板(右)は楕円形。鏡板(左)は鐵棒を二重に巻きつけた円形で立開部をもたない。修理の痕跡と考えられる。のみは二連式。引手蓋はくの字に曲がる。引手とはみの取り付き方法は不明。	B4
56	図版54	引手蓋	直径2.3cm、厚さ0.6cm。	55と同一個体。	B4
57	図版54	雲珠	幅4.1cm、高さ2.1cm、厚さ0.2cm	環状雲珠の鉢部。	B4
58	図版55	鉄刀	長さ2.6cm、幅2.8cm、厚さ1.0cm。		C3
59	図版55	鉄刀	長さ3.3cm、幅2.4cm、厚さ0.9cm		B3
60	図版55	鉄刀	長さ4.8cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm。		D4
61	図版55	鉄刀	長さ2.6cm、幅1.2cm、厚さ0.6cm。	刀部は欠損。	D3
62	図版55	鉄刀	長さ3.5cm、幅2.6cm、厚さ0.6cm。	刀部は欠損。	D4
63	図版55	鉄刀	長さ2.6cm、幅2.5cm、厚さ0.6cm。	中央に直径0.4cmの孔。表面に木質付着。	B1
64	図版55	鉄刀	長さ4.7cm、幅1.0cm、厚さ0.9cm。	表面に木質付着。	C1
65	図版55	鉄刀	長さ2.4cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm。	基部か。	C1
66	図版55	鉄刀	長さ4.1cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm。	表面に植物纖維を巻きつけた痕跡。	B1
67	図版55	鉄刀	長さ2.0cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm。	表面に植物纖維を巻きつけた痕跡。	B1
68	図版55	鉄刀	長さ2.2cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm。	刀部は欠損。	D
69	図版55	鉄織	長さ3.15cm、幅2.95cm、厚さ0.4cm。	平根系無類織。中央に直径0.2cmの円形の2つの透孔。	B4/玉石面にり層
70	図版55	鉄織	身部長4.15cm、幅2.8cm、厚さ0.2cm、頭部長5.6cm、幅0.6cm、厚さ0.4cm、茎部長5.6cm、幅0.2cm、厚さ0.2cm。	平根系織。身部中央に三角形の2つの透孔。	B3/B3/D4
71	図版55	鉄織	全長16.3cm、身部長4.8cm、幅1.05cm、厚さ0.3cm、頭部長6.4cm、幅0.7cm、厚さ0.45cm、茎部長5.35cm、幅0.4cm、厚さ0.4cm。	長頭櫛葉形織。茎部は木質残存。	B4/D1
72	図版55	鉄織	長さ3.4cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm。	長頭櫛葉形織。織身部。両丸造。	B4
73	図版55	鉄織	幅1.0cm、厚さ0.2cm、長さ1.2cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm。	織身部。2個体が重なっている。	D1
74	図版55	鉄織	身部長1.7cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、頭部長1.9cm、幅0.7cm、厚さ0.3cm。	身部～頭部。身部平面形態は小型の三角形。	C3
75	図版55	鉄織	身部長1.75cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、頭部長1.8cm、幅0.65cm、厚さ0.4cm。	身部～頭部。身部平面形は小型の三角形。	C3
76	図版55	鉄織	身部長0.6cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm、頭部長0.7cm、幅0.6cm、厚さ0.25cm。	身部～頭部。	D
77	図版55	鉄織	身部長1.1cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm、頭部長0.9cm、幅0.6cm、厚さ0.3cm。	身部～頭部。身部平面形は三角形か。	D1
78	図版55	鉄織	身部長1.5cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm。	織身部。片刃。鉄織又は刀子。	D
79	図版55	鉄織	身部長1.9cm、幅0.8cm、厚さ0.25cm。	織身部。片刃。鉄織又は刀子。	D4
80	図版55	鉄織	身部長2.0cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm。	織身部。片刃。鉄織又は刀子。別個体の一部が付着か。	D4

No.	図版番号	器種	法量 (破片のため現況での法量を記載)	備考	出土位置 (右裏内グリッド)
81	図版55	鉄鑓	頭部長5.1cm、幅0.8cm、厚さ0.3cm。 基部長1.2cm、幅0.7cm、厚さ0.2cm。	頭部～基部。頭部闊は台形状に広がり段をもつ。	B3
82	図版55	鉄鑓	頭部長1.3cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm。 基部長2.6cm、幅0.45cm、厚さ0.4cm。	頭部～基部。頭部闊は台形状に広がり段をもつ。	B4
83	図版55	鉄鑓	頭部長1.4cm、幅0.8cm、厚さ0.3cm。 基部長2.0cm、幅0.4cm、厚さ0.3cm。	頭部～基部。頭部闊は台形状に広がり段をもつ。 基部は木質および樹皮巻が残存。	D4
84	図版55	鉄鑓	頭部長2.0cm、幅0.7cm、厚さ0.5cm。 基部長0.9cm、幅0.6cm、厚さ0.3cm。	頭部～基部。頭部闊は台形状に広がり段をもつ。 基部は木質および樹皮巻が残存。	C3
85	図版55	鉄鑓	頭部長1.2cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm。 基部長1.4cm、幅0.4cm、厚さ0.2cm。	頭部～基部。頭部闊は台形に広がり段をもつ。 基部は樹皮巻残存。	C3
86	図版55	鉄鑓	頭部長0.7cm、幅0.8cm、厚さ0.6cm。 基部長0.4cm、幅0.6cm、厚さ0.4cm。	頭部～基部。頭部闊は台形に広がり段をもつ。 基部に木質および木質の下に植物纖維を巻きつけてある。	C3
87	図版55	鉄鑓	基部長2.0cm、幅0.3cm、厚さ0.3cm。	基部。表面に木質及び樹皮巻きが残存。	B2
88	図版55	鉄鑓	基部長1.4cm、幅0.2cm、厚さ0.2cm。	基部端。表面に植物纖維を巻きつけてある。	B4
89	図版55	鉄鑓	基部長13cm、幅0.3cm、厚さ0.2cm。	基部端。表面に植物纖維を巻きつけてある。	C2
90	図版55	鉄鑓	基部長1.4cm、幅0.2cm、厚さ0.2cm。	基部端。表面に植物纖維を巻きつけてある。	D4
91	図版55	鉄鑓	基部長1.5cm、幅0.25cm、厚さ0.1cm。	基部端。表面に植物纖維を巻きつけてある。	D
92	図版55	鉄鑓	基部長1.9cm、幅0.4cm、厚さ0.4cm。	基部。表面に木質残存。	C3
93	図版55	鉄鑓	基部長1.8cm、幅0.3cm、厚さ0.2cm。	基部。表面に木質残存。	D1
94	図版55	鉄鑓	基部長3.0cm、幅0.4cm、厚さ0.4cm	基部。表面に木質及び樹皮巻きが残存。	D4
95	図版54	刀子	刃部長1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm。 基部長3.6cm、幅0.6cm、厚さ0.35cm。	身部～基部。身部闊は両側で段をなす。基部は木質が残る。	C3/D
96	図版54	刀子	刃部長2.5cm、幅1.3cm、厚さ0.6cm。 基部長0.9cm、幅0.9cm、厚さ0.6cm。	身部～基部。身部闊は片開。	不明
97	図版54	刀子	基部長1.6cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm。	基部端。表面に有機質が残存。	C3
98	図版54	不明鉄製品	長さ1.6cm、幅0.2cm、厚さ0.3cm	断面方形で、表面に木質が残存	D
99	図版54	不明鉄製品	長さ3.9cm、幅0.4cm、厚さ0.4cm	断面方形で、表面に木質が残存	D
100	図版54	不明鉄製品	長さ2.3cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm。	形態は内側にむずかにカーブを描く。表面に布付着。	B4
101	図版54	不明鉄製品	長さ2.3cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm	形態は内側にむずかにカーブを描く。表面に布付着。	B4
102	図版54	不明鉄製品	長さ4.0cm、幅3.4cm、厚さ0.4cm。		C4
103	図版54	瓶	瓶頭径0.8cm、長さ0.5cm。		不明

表 8 前山 A 58 号墳出土埴輪観察表

NO.	図版 番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	備考
104	図版 56 / 57	馬形埴輪	7 トレ	—	・頭部へ胸部及び脚部の一部。尻尾は矢根 ・馬足は、面緊・胸緊・尻緊。面緊は幅 1.5cm の粘土帯をはりつけ「字鍵板を取り付 ける。胸緊は欠損しているが、胸部に馬跡と みられる識別表現あり。尻尾は幅 1.5cm の粘 土帯を貼り付け線刻を施す。雲珠・劍彫形杏 葉が取り付けた。前輪と後輪は相 似形、底なし。後輪で馬具を 2 点もち尻 緊につながる。底部は胴体に板を張り付け、 裏に補強用の突部をもつ。識別によって区画 を表現する。 脚は、下端部に半円形の透孔をもち縫を表 現。尻部は、尻尾が欠損し、尻尾から 3cm 下 方に透孔をもつ。股間から尻尾にかけてナデ に入り、ナデをつくる。	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (5mm 以下の片 岩、白色、褐色の 砂を含む。1mm 以 下の白色、黒色、 褐色、雲母の砂粒 を含む。)	良	4 つの脚 が原位置 で樹立状 態で出土
105	図版 58	馬形埴輪 (杏葉)	7 トレ	長さ 12.5cm	・頭部へ面部 ・径 0.9mm の円形浮文を一条の沈線でつなぐ ・裏面は貼り付け剥離痕 ・表面に径 1.5cm の円形の突起を 2 点貼り付 け	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (5mm 以下の片 岩を含む。1mm 以 下の白色、雲母を 含む。)	良	104 と接 合
106	図版 57	馬形埴輪 (鞍金具)	7 トレ	—	・鞍 (後輪) の金具 (左側)。尻緊につなが る	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (2mm 以下の片 岩を含む。1mm 以 下の白色、褐色 砂粒を含む。)	良	
107	図版 57	馬形埴輪 (銀板)	7 トレ 南括張区	厚さ 1.1 cm	・「手形鍵板 ・裏面 0.6 ~ 0.8mm の円形浮文を一条の沈線で つなぐ ・裏面は貼り付け剥離痕	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (1mm 以下の白 色、褐色砂粒を含 む。)	良	
108	図版 58	馬形埴輪	7 トレ	—	・粘土紐を捻って成形	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (3mm 以下の片 岩を含む。1mm 以 下の白色、褐色の 砂粒を含む。)	良	
109	図版 58	馬形埴輪 (雲珠)	7 トレ	鉢部径 5.4cm ~ 6cm、残存 高 2.4cm	・雲珠鉢部と脚部 1 脚残存。鉢部は粘土紐を巻 き上げた中空の半球形で、裏面にはがれた痕 跡がある。脚部には資金具部分に幅 5mm の粘 土紐ががれ落ちがある。	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (5mm 以下の片 岩を含む。1mm 以 下の白色、褐色砂 粒を含む。)	良	
110	図版 58	馬形埴輪	7 トレ	—	・粘土紐を捻りながら編む	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (3mm 以下の片 岩、白色、褐色砂 粒を含む。)	良	
111	図版 58	馬形埴輪 (雲珠脚部)	7 トレ	—	・馬形埴輪雲珠の脚部 ・幅 0.9cm の粘土紐で資金具を表現	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (4mm 以下の片 岩を含む。1mm 以 下の白色、褐色の 砂粒を含む。)	良	109 と同 一個体か
112	図版 58	馬形埴輪 (杏葉)	7 トレ	厚さ 0.8 cm	・上半部は、劍彫杏葉または「字鍵板」の一 部 ・円形の浮文を一条の沈線でつなぐ ・下半部裏面に径 2cm の円形の突起一点	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (2mm 以下の片 岩、白色砂粒、雲 母を含む。)	良	
113	図版 58	馬形埴輪 (杏葉)	7 トレ	厚さ 0.8 cm	・劍彫杏葉の下半部 ・径 0.9mm の円形浮文を一条の沈線でつなぐ ・裏面は貼り付けがはがれた痕跡	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (5mm 以下の片 岩、白色砂粒、雲 母を含む。)	良	
114	図版 58	馬形埴輪	2 トレ	—	・一条の沈線で施文 ・内面はナデ	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (5mm 以下の片 岩、白色砂粒を含 む。2mm 以下の白 色砂粒、雲母を含 む。)	良	馬形埴輪 の胎土と 同一
115	図版 58	馬形埴輪	2 トレ	—	・一条の沈線で施文 (馬跡の下半部分) ・外面タテハケ、内面ナデ	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (5mm 以下の片 岩、白色の繩を含 む。1mm 以下の白 色、褐色の砂粒を 含む。)	良	
116	図版 58	馬形埴輪	7 トレ	—	・尻蓋の一部か ・幅 2.1cm の帯に一条の沈線で施文	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (1mm 以下の白 色、褐色砂粒を含 む。)	良	
117	図版 58	馬形埴輪	7 トレ	—	・馬形埴輪の障泥部分か ・一条の沈線で施文	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (2mm 以下の片 岩を含む。1mm 以 下の白色、褐色の 砂粒を含む。)	良	
118	図版 58	馬形埴輪	7 トレ	—	・一条の沈線で縁周 ・馬形埴輪の障泥の一部か	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (2mm 以下の白 色、褐色の砂粒を 含む。)	良	馬形埴輪 の胎土と 同一
119	図版 58	馬形埴輪	7 トレ	—	・幅 1.9cm の帯	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (3mm 以下片岩 を含む。2mm 以下 の半透明砂粒を含 む。)	良	馬形埴輪 の胎土と 同一

NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	焼土	焼成	備考
120	図版58	馬形埴輪か 馬南東脚の中	7トレ	—	・径 0.9 cmの穿孔 2点、1点は貫通、1点は貫通しない	外・内 SYR5/4 にぶい赤褐色 断面 SYR5/3 にぶい赤褐色	密(3mm以下の片岩、白色、半透明 砂粒を含む。1mm 以下の褐色、黒色、 紫雲を含む。)	良	
121	図版9/60	人物埴輪 (頭部・男子)	9トレ	—	・男性人物の頭部 ・左右美豆良と発掘は剥離 ・頭部は幅1.8 cmのへこみを施す ・額から後頭部にかけて2条1対の沈線で施文 ・両目・口は切り抜き ・鼻は粘土を貼り付け、刺突により鼻孔を表現 ・目周辺に沈線による施文 ・首から胸郭にかけて2条1対の沈線で施文 ・背中部には施文なし ・左胸に外面上端から裏面下端に向かう穿孔	外・内) SYR6/6 棕色	密(3mm以下の片岩を含む。2mm 以下の褐色、白色、 半透明、褐色、黑色 の砂粒、紫雲を 多数含む。)	良	
122	図版60	人物埴輪 (頭部)	10トレ	—	・男性人物の頭部 ・頭頂部に幅2.2 cmのへこみを施す ・額部に2条の沈線で施文 ・両目は切り込み	外) 2.SYR6/8 棕 色 内) 2.SYR6/6 褐 色 断面 10YR7/4 に ぶい黄褐色	密(5mm以下の片 岩、白色を含む。 1mm以下の黒色砂 粒を含む。)	良	
123	図版60	人物埴輪 (JF)	8トレ	—	・耳は円形またはD字形の粘土を貼り付ける ・耳孔は刺突により表現、形状は分離形 ・後頭部周辺に沈線による施文	10YR6/4 にぶい 黄褐色 断面 10YR6/1 褐色	密(3mm以下の白 色、褐色の砂粒を 含む。)	良	
124	図版60	人物埴輪 (頭)	8トレ	—	・顔に2条1対の沈線で刺青を施文 ・両目・口は切り込み ・鼻は貼り付け、刺突により鼻孔を表現	外・内) 10YR6/4 にぶい 黄褐色	密(2mm以下の白 色、黒色の砂粒を 含む。)	良	
125	図版60	人物埴輪 (頭)	8トレ	—	・人物の顔部分が ・一条の沈線で山形に施文	外・内) 7.SYR7/4 にぶい 棕褐色～10YR7/4 にぶい褐色 断面) 10YR6/1 褐色	密(2mm以下の白 色、褐色の砂粒を 含む。)	良	126と同 一個体か
126	図版60	人物埴輪 (頭)	4トレ	—	・人物の顔部分が ・一条の沈線で山形に施文	7.SYR7/4 にぶい 棕褐色～10YR7/4 にぶい褐色 断面) 10YR4/1 褐色	密(2mm以下の白 色、褐色の砂粒を 含む。)	良	125と同 一個体か
127	図版61	人物埴輪 (美豆良)	8トレ	断面径 1.9 ～ 2.3cm	・指オサエによる成形 ・頭部からの剥離痕	外) SYR6/6 棕色	密(1mm以下の黑 色、褐色の砂粒を 含む。)	良	
128	図版61	人物埴輪 (美豆良)	8トレ	断面径 1.3 ～ 2.0cm	・指オサエによる成形 ・頭部からの剥離痕	外・内) SYR6/6 棕色	密(2mm以下の片 岩、1mm以下の黑 色、白色の砂粒を 含む。)	良	
129	図版61	人物埴輪 (美豆良)	4トレ	断面径 1.9 ～ 2.3 cm	・指オサエによる成形	外・内) SYR6/6 棕色	密(2mm以下の片 岩、1mm以下の黑 色、白色の砂粒を 含む。)	良	
130	図版61	人物埴輪 (美豆良)	石室	断面径 1.9 ～ 2.5 cm	・指オサエによる成形 ・頭部からの剥離痕	外) SYR6/6 棕色 断面) SYR6/1 褐 褐色	密(3mm以下の白 色、1mm以下の黑 色の砂粒を含む。)	良	
131	図版61	人物埴輪 (美豆良)	7トレ	断面径 2.0 ～ 2.4cm	・指オサエによる成形 ・頭部からの剥離痕	外) 10YR7/4 に ぶい黄褐色	密(2mm以下の砂 粒を含む。)	良	
132	図版61	人物埴輪 (美豆良)	4トレ	断面径 1.9 ～ 2.4 cm	・上端部付近に粘土の貼り付け ・頭部からの剥離痕	外・内) SYR6/4 にぶい褐色～ 10YR7/4 にぶい 黄褐色	密(2mm以下の白 色、黒色の砂粒を 含む。)	良	
133	図版61	人物埴輪 (美豆良)	石室	断面径 2.3 ～ 2.4cm	・上端部付近に粘土の剥離痕あり ・下半部は欠損	外・内) SYR6/6 棕褐色～10YR6/4 にぶい黄褐色 断面) 10YR6/3 にぶい黄褐色	密(7mmの大白色 砂粒、2mm以下の白 色、黒色の砂粒を 含む。)	良	
134	図版61	人物埴輪 (腕)	7トレ	—	・空中で、底元断面径 4.8 cmをはかる ・外面、内面ナダ	外) SYR6/6 棕色 断面) 10YR6/4 にぶい黄褐色	密(2mm以下の砂 粒を含む。)	良	

No.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	備考
135	図版61	人物埴輪(腕)	7トレス南埴張区	断面径3.4~3.5cm	・人物左手 ・中窓で、ゾケット状を呈する ・掌及び手首に粘土剥離痕跡あり ・5本の指を先端によって表現	外) 5YR6/6 棕色 断面) 10YR6/3 にぶい黄褐色	密(2mm以下の片岩、白色砂粒、雲母を含む。)	良	
136	図版61	人物埴輪(腕)	8トレ	—	・环をもつ人物左手 ・中窓で、ゾケット状を呈する ・掌に杯をもつ	外・内) 10YR7/4にぶい 黄褐色	密(2mm以下の砂粒を含む。)	良	
137	図版61	人物埴輪(腕)	7トレ	—	・中窓 ・外窓、内窓ナデ	外・内) 5YR6/6 棕褐色~5YR5/6 明赤褐色	密(5mm以下の片岩、白色砂を含む、1mm以下の黒色砂粒を含む。)	良	
138	図版61	人物埴輪(脚)	8トレ	—	・脚先 ・足裏は済曲し、剥離痕あり	外・内) 7.5YR6/6 棕色 断面) 2.5YR6/2 灰黄色	密(2mm以下の白色、半透明色砂粒を多数含む。)	良	
139	図版61	人物埴輪(胴部)	4+8トレ	—	・上端部に円形の透孔 ・一条の突筋を貼り付け ・外窓ナデ、内窓オサエ	外・内) 5YR6/6 棕色	密(5mm以下の片岩を含む、2mm以下の白色、黒色の砂粒、雲母を含む。)	良	
140	図版61	人物埴輪(胴部)か	8トレ	8.25×8cm	・外窓、板状工具によるナデ、内窓指ナデ	外・内) 10YR7/4にぶい 黄褐色 断面) 10YR6/1 褐灰色	密(3mm以下の石英が多量に含まれる。)	良	
141	図版61	人物埴輪(胴部)か	7トレス南埴張区	—	・外窓ナデ、内窓オサエ	外・内) 5YR5/4 にぶい赤褐色 断面) 5YR5/3 にぶい赤褐色	密(3mm以下の片岩、白色砂を含む、1mm以下の黒色砂粒を含む。)	良	
142	図版62	人物埴輪	8トレ	—	・外窓ナデ、内窓ナデ	外・内) 10YR7/4にぶい 黄褐色 断面) 10YR6/1 褐灰色~ 10YR3/1 黑褐色	密(3mm以下の砂粒が少量含まれる。)	良	
143	図版62	人物埴輪か	8トレ	—	・人物埴輪部分	外・内) 7.5YR6/4にぶい 棕褐色~10YR7/4 にぶい黄褐色 断面) 10YR6/1 褐灰色	密(7mm以下の砂粒が少量含まれる。)	良	
144	図版62	人物埴輪か	8トレ	—	・外窓に突帯あり、突帯断面は台形 ・突帯の下端から外に開く形状を呈する	外・内) 10YR7/4にぶい 黄褐色 断面) 10YR5/1 褐灰色	密(5mm以下の砂粒が少量含まれる。)	良	
145	図版62	人物埴輪	8トレ	—	・外窓に突帯あり、突帯断面は台形	外・内) 10YR7/4にぶい 黄褐色 断面) 10YR5/1 褐灰色	密(5mm以下の砂粒が少量含まれる。)	良	
146	図版62	人物埴輪	8トレ	—	・外窓、内窓ナデ	外・内) 10YR7/4にぶい 黄褐色 断面) 10YR5/1 褐灰色	密(2mm以下白色砂粒を含む。)	良	
147	図版62	人物埴輪	8トレ	—	・外窓に突帯あり、突帯断面は台形	外・内) 10YR7/4にぶい 黄褐色 断面) 10YR5/1 褐灰色	密(5mm以下の砂粒が少量含まれる。)	良	
148	図版62	人物埴輪	3トレ	—	・半円形を呈す ・平端部に何かに貼り付いていた痕跡	外) 10YR7/4に ぶい黄褐色 断面) 10YR5/1 褐灰色	密(2mm以下の白色砂粒を含む。)	良	
149	図版62	人物埴輪(基部)	7トレ 中央埴輪列1	底径21.2cm 残存高18.2cm	・底部径を最大にすぼまる形態 ・底部端より約1cmの高さに1段目の突帯 ・1段面突帯は低いM字、2段目は低い台形。 ・1段面に2個1対の円形透孔 ・外窓調整、右上がりのハケ、内窓は縦方向 のナデ ・底部端はナデ	外・内) 5YR6/4 にぶい黄褐色 断面) 10YR7/2 にぶい黄褐色	密(2cm大の片岩を含む、5mm以下の白色砂粒を多く含む。)	良	倒立抜法 により製作

NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	備考
150	図版62	人物埴輪 (基部)	4トレ 中央埴輪列②	底径 25.3cm 残存高 43cm	・底部径を最大にすぼまる形態 ・底部端より約1cmの高さに1段目の突帯 ・1段面、2段目、3段目は低い台形。 ・1段面、2段面に直交する位置に2個1対 の円形透孔 ・外表面は摩滅のため調整不明、内面はナナメ ナデ ・底部端はナデ幅 ・粘土紐は3cm幅 ・器高 39cm ~ 43cm の箇所で粘土の剥離痕跡 ・底部端より高さ 2cm の位置に突帯を貼り付 ける ・突帯断面は深いM字 ・外面ナナメナデ。 ・内面ナナメナナデ ・底部端はナデ	外・内) 7.5YR6/4にぶい 橙色 断面) 10YR7/3 にぶい黄褐色	密(7mm以下の片 岩を含む、5mm以 下の白色粒、半透 明の砂粒を含む、 1mm以下の褐色砂 粒を多く含む。)	良	倒立技法 により製 作
151	図版62	人物埴輪 (基部)	中央埴輪列 ③	底部径 22.9cm	・底部端より高さ 2cm の位置に突帯を貼り付 ける ・突帯断面は深いM字 ・外面ナナメナデ。 ・内面ナナメナナデ ・底部端はナデ	外・内) 10YR7/4にぶい 黄褐色 断面) 10YR5/1 褐灰色	密(2mm以下の白 色、褐色、雲母の 砂粒を多數含む。)	良	底部樹立 状態で出 土
152	図版63	石見型埴輪 後円部埴輪 列⑤		器高 127.6cm 形象部 77.7cm 底径 24.8cm	・形象部は3条一括の沈線で、分刻及び施文。 上辺にU字彫えぐり及び2個の角突起をもつ。 施文は上段面、下段面は弧文、上段面・ 下段面は側面文、基部は横方向の直線であるが、いだれの文様もかなり退化し崩れてい る。 ・背面上面には板補強用の粘土帯を貼り付け ている ・表面上方から背面下方への穿孔あり ・基部は底部端に接してと1段目の突帯。そ の上に2段目の突帯をぐらす。 ・2段目に側面方向に凹型の透孔を配置 ・形象部下端部～基部	外) 7.5YR7/6 橙 色～5YR6/4に ぶい橙色	密(5mm以下の白 色の羅、2mm以 下の片岩、白色、褐色、 雲母の砂粒を含む。)	良	底部樹立 状態で出 土 基部は倒 立技法
153	図版64	石見型埴輪 3・4・5・11 トレ 東埴輪列④		底径 28.1cm	・形象部は3条一括の沈線で施文 ・形象部は3条一括の沈線で施文 ・基部は底部端に接して1段目の突帯、その 上に2段の突帯をめぐらす。 ・最下段及び2段目の直交する位置に2孔1 対の透孔を配置する。 ・外表面はナナメナケ、内面は指オサエ・ナデ	外) 7.5YR7/6 橙 色～10YR7/2に ぶい黄褐色	密(4mmの大片岩 を含む、1mm以下 の砂粒を含む) (質)	硬質 (須質)	底部は樹 立状態で 出土 基部は倒 立技法
154	図版64	石見型埴輪 3・7・9トレ		—	・形象部(一段面の一部を欠く) ・上辺にU字彫えぐりと角突起をもつ ・1条または2条の沈線で施文 ・背面に板補強用の粘土帯を貼り付け	外) 2.5YR5.6 橙 色～5YR6.6 橙色	密(5mm以下の片 岩、白色砂粒を含 む、1mm以下に褐色 砂粒。雲母を含 む。)	良好	
155	図版65	石見型埴輪	6トレ	—	・形象部上端面左端 ・幅 1cm の角突起をもつ ・上端にU字彫えぐりをもつ ・3条一括の沈線による施文 ・外面上端から裏面下端への穿孔	外) 5YR6.6 橙色 内) 5YR6/4にぶい 橙色 断面) 10YR7/4 にぶい黄褐色	密(2mm以下の片 岩、白色の羅を含 む。)	良	
156	図版65	石見型埴輪	4トレ	—	・形象部上端面左端 ・U字彫えぐりをもつ ・幅 1.6 cm の角突起をもつ ・3条一括の沈線で施文	外) 7.5YR7/6 橙色 断面) 10YR7/2 にぶい橙色	密(1cmの大白 色の羅を含む、 1mm以下の白 色、褐色の砂 粒を含む。)	良好	
157	図版65	石見型埴輪	5トレ	—	・形象部上端面左端 ・3条一括の沈線で施文 ・外面上端から裏面下端への穿孔 ・U字彫えぐりをもつ ・裏面に粘土支えの帶をもつ ・外面ヨコハケ、内面ナデ	外) 10YR6/2 黄褐色 内) 5YR6/6 橙色 ～7.5YR6/4に ぶい橙色 断面) 10YR6/3 にぶい黄褐色	密(2mm以下の半 透明砂粒を含む。)	須恵器	
158	図版65	石見型埴輪	2トレ	—	・形象部上段面右端 ・3条一括の沈線で施文 ・外面上端から裏面下端への穿孔 ・ナデ	外) 7.5YR6/4に ぶい橙色	密(1mm以下の砂 粒を含む)	須恵質?	
159	図版65	石見型埴輪	4トレ	—	・形象部上段面右端 ・3条一括の沈線で施文 ・外面上端から裏面下端への穿孔 ・裏面に粘土支えの帶 ・外面ヨコハケ、内面指オサエ ・ハケは 10 本 /cm	外・内) 7.5YR6/4にぶい 橙色 断面) 10YR6/2 灰黄褐色	密(5mm以下の片 岩を含む、1mm以 下の白色砂粒を含 む。)	良好	
160	図版65	石見型埴輪	7トレ	—	・形象部上端 ・3条一括の沈線で施文 ・裏面、円筒部の上端に粘土支えの帯を貼り 付け ・外面ハケ、内面ナデ	外) 10YR6/2 黄褐色 内) 7.5YR6/4に ぶい橙色 断面) 10YR6/2 灰黄褐色	密(1mm以下の砂 粒を含む)	須恵器	
161	図版65	石見型埴輪	7トレ	—	・形象部上部左側 ・3条一括の沈線で施文 ・裏面、円筒部の上端に粘土支えの帯を貼り 付け ・外面ハケ、内面ナデ	外) 10YR6/2 黄褐色 内) 7.5YR7/6 橙 色 断面) 10YR6/1 褐灰色	密(1mm以下の砂 粒を含む)	須恵質?	

NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	備考
162	図版65	石見型埴輪	6トレス	—	・形象部上半部 ・3条一括の沈線による施文 ・裏面、円筒部の上端に粘土支えの帯を貼り付け	外) 5YR6/8 棕色 内) 7.5YR5/3 に ぶい褐色 断面) 10YR6/3 にぶい黄褐色	密 (3mm以下の白色 砂粒を含む)	良好	
163	図版66	石見型埴輪		—	・形象部上段部～下端まで ・3条一括の沈線で施文 ・横方向に一条の沈線で区割 ・板部貼付に痕には工具による線条痕多数 ・外面ナナメハケ、内面堆土ナデ	外・内) 7.5YR7/6 棕色	密 (1cmの大片岩、 1mm以下の白色、 黒色の砂粒を含む)	良好	
164	図版66	石見型埴輪	2トレス	—	・形象部 ・3条一括の沈線で施文 ・横方向に一条の沈線 ・外面上端から裏面下端への穿孔 ・円筒部側面に板部剥離跡 ・外面調整不規、内面指オサエ	外) 7.5YR7/8 黄 褐色 内) 10YR7/6 明 黄褐色 断面) 10YR7/2 にぶい黄褐色	密 (3mm以下の片 岩、1mm以下の白 色砂粒を含む)	良好	
165	図版66	石見型埴輪	4+8トレス	—	・形象部 ・3条一括の沈線で施文 ・横方向に一条の沈線 (削付跡か) ・外面上端から裏面下端への穿孔	外・内) 5YR6/6 褐色 断面) 10YR7/2 にぶい黄褐色	密 (5mm以下の片 岩、1cmの大白色 の磚、1mm以下 の黑色の砂粒 を含む)	良好	
166	図版66	石見型埴輪	9トレス	—	・形象部下段部 ・3条一括の沈線で施文 ・横方向に一条の沈線 ・円筒部側面にヒレ状の板の剥離跡 ・内面指オサエ	外・内) 7.5YR7/6 棕色	密 (5mm以下の片 岩、1mm以下の白 色砂粒を含む)	良好	
167	図版66	石見型埴輪	1トレス	—	・形象部 ・3条一括の沈線で施文 ・外面上端から裏面下端への穿孔 ・外面タクテー、内面指オサエ ・ヒレ状の板部との接合箇所には工具による 線条痕多数	外・内) 7.5YR7/6 棕色～ 10YR7/4 にぶい 黄褐色 断面) 2.5Y7/2 灰黄色	密 (1mm以下の白 色砂粒を含む)	質?	
168	図版67	石見型埴輪	4トレス	—	・形象部上段左端 ・3条一括の沈線で施文 ・外面上端から裏面下端に穿孔	外・内) 7.5YR7/6 棕色	密 (1cmの大片岩 を含む、3mm以 下的黒色砂を含む、 1mm以下 の白色砂を 含む)	良好	
169	図版67	石見型埴輪		—	・形象部下段面と下段帯の間、左端 ・3条一括の沈線で施文 ・外面上端から裏面下面穿孔 (ただし突き抜 け)	外) 7.5YR7/6 棕 色 内) 7.5YR8/6 淡 黄褐色 断面) 2.5Y7/2 灰黄色	密 (2mm以下の白 色、褐色の砂粒を 含む)	良好	
170	図版67	石見型埴輪	7トレス	—	・形象部右側板 ・3条一括の沈線で施文 ・外面上端から裏面下端への穿孔 ・外面ハケ、内面ナデ ・円筒部との接合部分に工具による多数の線 条痕	外・内) 7.5YR6/6 棕色 断面) 2.5Y6/1 灰白色	密 (2mm以下の片 岩、1mm以下の黑 色、白色の砂粒を 含む)	良好	
171	図版67	石見型埴輪	4トレス	—	・形象部右側板 ・3条一括の沈線で施文 ・外面上端から裏面下端への穿孔 ・外面ハケ、内面ナデ	外・内) 7.5YR7/6 棕色 断面) 2.5Y7/1 灰 白色	密 (2mm以下の片 岩、1mm以下の黑 色、白色の砂粒を 含む)	良好	
172	図版67	石見型埴輪	7トレス	—	・形象部左側 ・3条一括の沈線を施す ・外面上端から裏面下端への穿孔	外・内) 7.5YR7/6 棕色 断面) 10YR6/3 にぶい黄褐色	密 (1mm以下の黑 色、白色の砂粒を 含む)	良好	
173	図版67	石見型埴輪	1トレス	—	・形象部 ・3条一括の沈線で施文 ・下端部に粘土を貼り付け	外) 7.5YR7/6 棕 色 断面) 10YR7/3 にぶい黄褐色	密 (1cmの大片岩 を含む、1mm以 下的砂粒を多く含 む)	良好	
174	図版67	石見型埴輪	9トレス	—	・形象部下段左端 ・3条一括の沈線で施文 ・外面上端から裏面下端への穿孔 ・外面調整不規、内面ナデ	外・内) 7.5YR6/4 にぶい 棕褐色	密 (5mm以下の片 岩を含む、1mm以 下的黑色の砂粒、 雲母を含む)	良好	152と同 一個体か
175	図版67	石見型埴輪	4トレス	—	・形象部下段面右端 ・3条一括の沈線 ・外面ハケ、内面指オサエ、板状工具による ナデ ・ハケは 11本/cm と 6本/cm の 2種類か	外) 7.5YR6/6 棕 色 内) 7.5YR7/6 棕 色 断面) 10YR6/2 灰黄色	密 (3mm以下の片 岩、1mm以下の白 色、褐色の砂粒含 む)	良好	
176	図版67	石見型埴輪	3+4トレス	—	・形象部下段面右端 ・3条一括の沈線 ・外面ハケ、内面指オサエ ・ハケは 14本/cm	外・内) 7.5YR6/3 にぶい褐色 断面) 10YR6/2 灰黄色	密 (3mmの片岩、 1mm以下の白色、 褐色の砂粒を含む)	良好	
177	図版67	石見型埴輪	8トレス	—	・形象部下段面右端 ・2又は 3条一括の沈線で施文	外・内) 10YR7/4 にぶい 黄褐色	密 (5mm以下の半 透明感、3mm以 下的片岩、1mm以 下的白色の砂粒、 雲母を含む)	良好	

NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	備考
178	図版67	石見型埴輪	9トレ	—	・形象部下段面左端 ・3条一括の沈線で施文	外・内) 10YR6/6 ぶい 黄褐色 断面) 2.5Y6/2 灰黄色	密(3mm以下の片 岩を含む)	良好	
179	図版67	石見型埴輪	不明	—	・形象部 ・3条一括の沈線で施文	外・内) 7.5YR6/6 橙色 断面) 2.5Y6/2 灰黄色	密(1mm以下の黒 色、白色の砂粒を 含む)	良好	
180	図版67	石見型埴輪	3トレ	—	・形象部下端部中央 ・2条一括の沈線で施文 ・外面ナデ、ナナメハケ、内面指オサエ ・ハケは10本/cm	外・内) 2.5Y6/2 灰黄色 内) 7.5YR6/4 に ぶい橙色 断面) 2.5Y7/2 灰黄色	密(7mmの大白色 繊を含む)	須恵器	
181	図版67	石見型埴輪		—	・形象部下段面左端部 ・2条一括の沈線で施文	外・内) 7.5YR6/4 に ぶい 橙色	密(2mm以下の片 岩、白色の繊、1mm 以下の褐色、黒色 の砂粒を含む)	良好	
182	図版68	石見型埴輪	6トレ	—	・形象部 ・横方向の一一条の沈線(3分割型) ・施文なし	外・内) 7.5YR6/6 橙色 断面) 2.5Y6/2 灰黄色	密(1mmの大片岩 を含む、1mm以下 の白色繊を含む)	良好	
183	図版68	石見型埴輪 東埴輪列① 周辺	4トレ	—	・形象部 ・施文なし ・外面上端から裏面下端への穿孔 ・外表面は板状工具によるナデ、内面は指オサ エ、ナデ	外・内) SYR6/6 橙色 断面) 10YR6/1 褐色	密(7mm以下の片 岩を含む、5mm以 下の赤色酸化鉄を 含む)	良好	
184	図版68	石見型埴輪 (基部)	1トレ	底径 22.9cm	・底部端から高さ2cmの位置に突帯 ・突帯断面は低いM字 ・1段目で2孔1対の透孔	外) 5YR6/6 橙色 内) 5YR6/6 橙色 断面) 7.5 YR6/3 にぶい 褐色	密(1cmの大片岩、 7mm以下の褐色、 白色繊、1mm以下 の黒色の砂粒、雲 母を含む)	良好	倒立技法
185	図版68	石見型埴輪 (基部)	4トレ 東埴輪列②	底径 22.7cm	・底部端から高さ約2cmの位置に突帯 ・突帯間隔は約11cm ・1段目、2段目突帯断面は低いM字 ・1段目、2段目で直交する位置に2孔1対 の透孔、時計回りに穿孔。起点と終点で段を じる	外) 5YR6/6 橙色 内) 2.5YR6/6 橙 色 断面) 5YR6/2 灰 褐色	密(4mm以下の片 岩、白色の繊、1mm 以下の白色、褐色 の砂粒を含む)	良好	倒立技法
186	図版68	石見型埴輪 (基部)	8トレ 西埴輪列⑤	復元径 18.7cm	・2孔1対の透孔を直交方向に配置 ・突帯断面は低いM字	外) 2.5YR6/6 橙 色 内) 2.5YR5/6 橙 色 断面) 2.5YR5/2 赤 褐色	密(1cmの大片岩、 半透明の繊を含む、 1mm以下の白色、 褐色の砂粒を含む)	良好	187と同 一部倒立 技法
187	図版68	石見型埴輪 (基部)	8トレ 西埴輪列⑤	底径 22cm	・底部端から高さ1cmの位置に突帯 ・突帯断面は低いM字 ・1段目に透孔	外・内) 2.5 YR6/6 明褐色 断面) 2.5YR4/2 灰褐色	密(1cmの大片岩、 半透明の繊を含む、 1mm以下の白色、 褐色の砂粒を含む)	良好	186と同 一部倒立 技法
188	図版69	器種不明形 象埴輪	4トレ	—	・円筒部と張り付けた板部 ・3条1括の沈線と2点1括の刺突文を施す	外・内) 5YR6/4 にぶい 褐色	密(1cm以下の片 岩、白色、茶褐色 の繊を含む)	良好	
189	図版69	器種不明形 象埴輪	4トレ 表土の下	—	・2条一括の沈線と2個1対の刺突文 ・裏面に貼り付け剥離痕	外・内) 5YR6/4 にぶい 褐色	密(1mm以下の白 色、褐色の砂粒を 含む)	良好	
190	図版69	器種不明形 象埴輪	表接(拂土 中)	—	・端部 ・粘土を折りかえして成形 ・外面、内面ナデ	外・内) 2.5 Y 6/6 橙色 断面) 10YR6/3 にぶい 褐色	密(1mm以下の白 色、褐色の砂粒を 含む)	良好	
191	図版69	器種不明形 象埴輪	7トレ 馬北東脚内 部	—	・外面ハケ、内面ナデ ・上端に径1.3cmの穿孔	外・内) 2.5 Y 6/6 橙色 断面) 10YR6/3 にぶい 褐色	密(1cm以下の片 岩、白色、茶褐色 の繊を含む)	良好	馬形埴輪 の一部か
192	図版69	器種不明形 象埴輪	7トレ 馬北東脚内 部	—	・円筒状のものに貼り付いていた痕跡	外・内) 2.5 Y 6/6 橙色 断面) 10YR6/3 にぶい 褐色	密(7mm以下の片 岩、1mm以下の白 色、褐色の砂粒を 含む)	良好	馬形埴輪 の一部か
193	図版69	器種不明形 象埴輪	7トレ	—	・円筒状で上端で外反する、内形の透孔をも つ ・馬型埴輪の脚部から腹にあたる部分か	外・内) 5YR6/6 橙色	密(3mm以下の片 岩を含む、1mm以 下の白色、褐色の 砂粒を含む)	良好	馬形埴輪 の一部か
194	図版69	器種不明形 象埴輪	6トレ 表土	—	・端部にナデ ・外面に粘土剥離痕跡あり	外) 7.5YR6/4 に ぶい 褐色 内) 5YR5/4 にぶ い 赤褐色 断面) 7.5YR6/4 にぶい 赤褐色	密(7mmの大白色 の繊、3mm以下の 片岩、1mm以下の 白色、褐色の砂粒 を含む)	良好	

No.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	備考
195	図版69	器種不明形 象埴輪	7トレス	厚さ 0.4cm	・裏面羽彫痕 ・外面端部が外側に反る ・裏面は貼り付けの際の工具痕跡あり	外) 5YR6/6 棕色 内) 10YR6/4 に ぶい黄褐色	密 (2mm以下の片 岩を含む、1mm以 下の褐色砂粒を含む)	良好	馬形埴輪 の一部か
196	図版69	器種不明形 象埴輪	1トレス表土	厚さ 1.0cm		外) 5YR6/6 棕色 内) 5YR6/1 棕褐色	密 (1mm以下の白 色、褐色の砂粒を 含む)	良好	
197	図版69	器種不明形 象埴輪 (基 底部)	石室 玉王まじり 層	—	・底部端から高さ 1.5cm の位置に突帯 ・突帯断面はひくい山型 ・外面ナメハケ、内面板状工具によるナデ ・ハケは 8本/cm	外・内) 10YR8/4 浅黃褐色 断面) 2.5Y7/3 浅黄色	密 (5mm以下の白 色、5mm以下の片 岩、1mm以下の 褐色の砂粒を含む)	良好	198と同 一個体
198	図版69	器種不明形 象埴輪 (基 底部)	4トレス	—	・底部端から高さ 2cm の位置に突帯 ・突帯断面はひくい台形	外・内) 5YR7/6 棕色	密 (1mm以下の白 色、褐色の砂粒を 含む)	良好	197と同 一個体
199	図版69	器種不明形 象埴輪 (基 底部)	8トレス	—	・底部端から高さ 2cm の位置に突帯 ・突帯断面はひくい台形 ・調整不明	外・内) 10YR8/3 にぶい 黄褐色 断面) 7.5YR5/1 墨灰色	密 (1mm以下の白 色、褐色の砂粒を 含む)	良好	
200	図版69	器種不明形 象埴輪 (基 底部)	石室	—	・底部端から高さ 2cm の位置に突帯 ・突帯断面はひくい台形 ・外面右肩上がりのナメハケ、内面指オサ ・底部端はナデ	外・内) 7.5YR7/6 棕色	密 (5mm以下の片 岩を含む、1cm以 下の白色～半透明 の繊と1mmの白 色砂粒を含む)	良好	倒立技法
201	図版69	器種不明形 象埴輪 (基 底部)	4トレス	—	・底部端から高さ 1.5cm の位置に突帯 ・突帯断面はひくい台形 ・外面黒墨、内面指押さえ	外・内) 5YR6/6 棕色	密 (1mm以下の繊 を含む、3mm以 下の片岩、白色、黑 色砂粒を含む)	良	
202	図版69	器種不明形 象埴輪 (基 底部)	7トレス	—	・底部端に接して突帯を貼り付け ・突帯断面は低いM字 ・底部端はナデ	外) 7.5YR7/6 棕 色 内) 2.5Y6/2 浅 黄色	密 (1mm以下の白 色砂粒をわずかに 含む)	やや 不良	
203	図版69	器種不明形 象埴輪 (基 底部)	4トレス	復元底径 27.2cm 残存高 3.4cm	・底部端から1cmの高さに突帯 ・突帯は低い台形	外・内) 5YR7/6 棕色	密 (5mm以下の片 岩を含む、1mm以 下の白色、黑色 の砂粒、黒母を含む)	良好	実60と同 一
204	図版69	器種不明形 象埴輪 (基 底部)	3トレス	復元底径 28.6 cm	・底部端に接して突帯を貼り付け ・突帯断面は低いM字	外・内) 10YR7/4 にぶい 黄褐色	密 (1mm以下の黑 色砂粒を含む)	良好	
205	図版69	器種不明形 象埴輪 (基 底部)	石室	—	・底部端に接して突帯を貼り付け ・突帯断面はひくい台形	外) 7.5YR7/6 棕 色 内) 10YR8/4 浅 黄褐色	密 (1cm 大の片岩 を含む、1mm以 下の白色、褐色砂粒を 含む)	良好	
206	図版69	器種不明形 象埴輪 (基 底部)	4トレス	—	・底部端に接して突帯を貼り付け ・突帯断面はひくいM字 ・外面ナメハケ、内面指オサエ、端部付近 はヨコナデ	外) 7.5YR6/4 に ぶい棕色 内) 10YR5/2 黄 褐色 断面) 10YR5/1 墨灰色	密 (3mm以下の片 岩を含む)	良 (須 忠質)	
207	図版70	円筒埴輪	4トレス 東埴輪列①	底径 15.4 cm 器高 45.4 cm 口縁部径 26.1 cm	・3条4段 ・最下段突帯は断続ナデ技法による ・2・3段目突帯断面は低い台形 ・2・3段目に直交する位置に2孔一対の透孔 ・外面ナメハケ、内面指オサエ・タテナデ ・ハケはナメハケ ・般上段にペフ記号 (右斜め上の一条の直線) ・底部端、口縁部端はナデ	外・内) 2.5Y6/1 にぶい 黄色～2.5Y7/3 深い黄色 断面) 2.5Y7/2 灰黄色	密 (5mm以下の片 岩を含む、6mm大 の石英を含む、1 mm以下の砂粒を多 く含む)	良	底部樹立 状態で出 土
208	図版70	円筒埴輪	6トレス	底径 16.8 cm 高さ 45.4 cm 口縁部径 21.4 cm	・3条4段 ・最下段突帯は断続ナデ技法による ・2・3段目突帯断面は低い台形 ・外面磨減のため調整不明、内面指オサエ ・ナデ ・ハケは 10本/cm	外・内) 5YR5/6 明赤褐色 断面) 5YR5/2 浅 褐色	密 (1cm以下の片 岩を含む、3mm以 下の赤色酸化鉄を 含む、1mm以下の 砂粒を含む)	良	
209	図版70	円筒埴輪	4トレス	復元底径 15.5 cm	・最下段突帯は断続ナデ技法 ・底部端は端部処理を施し、粘土を削り取り 先端がとがる。外面には板状工具によるオサ エ ・外表面ナメハケ、内面紙方向のナデ ・ハケは 10本/cm	外) 10YR6/1 暗 灰色 内) 10YR6/2 黄 褐色 断面) 10YR6/2 灰黄色	密 (5mm以下の白 色、2mm以下の白 色、黒色砂粒を 多数含む)	良 (須 忠質)	
210	図版70	円筒埴輪	6トレス	復元径 18.2 cm	・最下段突帯は断続ナデ技法 ・外表面磨減のため調整不明、内面ナデ	外・内) 7.5Y7/4 にぶい棕色	密 (1cm以下の片 岩を含む、2mm以 下の白色、褐色、 半透明の砂粒を含 む)	良	

NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	粒度	焼成	備考
211	図版70	円筒埴輪	4トレ 東埴輪列⑤ 周辺	—	・最下段突端は断続ナデ技法 ・外面ナナメハケ、内面磨減のため調整不良 ・ハケは10本/cm	外) 2.5YR7/2 黄色～7.YR7/6 橙色 内) 5YR7/8 棕色	密(8mm以下の片岩を多く含む。3mm以下の白色砂粒を含む)	良	
212	図版70	円筒埴輪 (底部)	3トレ	底径 14.2 cm	・最下段突端は断続ナデ技法 ・底部端は端部処理の際の工具痕が多数残る ・外面板ナデ、指ナデ、内面ナデ	外) 7.YR7/4にぶい 橙色	密(5mm以下の片岩、白色砂粒を多く含む)	良	
213	図版70	円筒埴輪	5トレ	—	・最下段突端は断続ナデ技法 ・2段目に透孔 ・外面ナナメハケ、内面ナデ	外) 10YR5/1 褐色 内) 10YR5/2 黄褐色 断面) 10YR5/2 灰黃褐色	密(1cm以下の半透明鏡を含む、2mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	良(須恵器)	
214	図版71	円筒埴輪 (底部)	1トレ 後内部埴輪 列②	底径 17.2 cm	・底部端は端部処理を施し、外面に板状工具によるオサエ ・底部端は高さ19cmで突端を貼り付ける ・突端面は低い台形 ・外側タハケ、内面指オサエ ・円形の溝孔	外・内) 2.5YR6/6 棕色 断面) 2.5YR6/4 にぶい 橙色	密(3mm以下の片岩を含む、5mmの大半透明鏡を含む、3mm以下の白色織を含む)	良	
215	図版71	円筒埴輪 (底部)	表採	—	・底部端は端部処理を施し、表面が薄くなり 先端をとがらせている ・外面板状工具によるオサエ。内面ナナメナデ	外) 10YR5/1 褐色 内) 10YR5/2 黄褐色 断面) 10YR5/2 灰黃褐色	やや粗い(1cmの大半透明鏡を含む、1mm以下の白色砂粒を含む)	良(須恵器)	
216	図版71	円筒埴輪 (底部)	4トレ	—	・底部端は端部処理を施し、表面が薄くなり 先端がとがる ・外面は板状工具によるオサエ、内面は指オサエ	10YR7/4にぶい 黄褐色 内) 2.5YR6/3 にぶい 黑色	密(5mm以下の片岩を含む、1cm以下の白色、黒色砂粒を含む)	良好	
217	図版71	円筒埴輪	2トレ 後内部埴輪 列④	底径 17.6 cm	・最下段突端面低い山形 ・外面は調整不良、内面はナデ	外・内) 2.5YR6/6 棕色 断面) 2.5YR6/4 にぶい 橙色	密(5mm以下の片岩を含む、1mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	良	
218	図版71	円筒埴輪	2トレ	復元径 25.6cm	・突端断面は台形 ・外面ナナメハケ、内面ナデ	外) 2.5YR6/6 棕色 断面) 2.5YR6/4 にぶい 橙色	密(5mm以下の片岩を含む、1cm以下の白色、黒色砂粒を含む)	良	
219	図版71	円筒埴輪	6トレ	復元底径 17.6cm 復元高 10.2cm	・底部端は端部処理の工具痕あり ・外面、内面共に縱方向のナデ	外・内) 2.5YR5/6 明褐色 断面) 2.5YR6/1 にぶい 黄褐色	密(4mm以下の片岩を少量含む、1mm以下の白色織、赤褐色)	良好	
220	図版71	円筒埴輪	2トレ	復元径 17.6cm	・突端断面は台形 ・突端を貼り付ける際の強いナデ底が残る	外・内) 2.5YR6/6 棕色 断面) 2.5YR6/4 にぶい 橙色	質(7mmの片岩を含む、3mm以下の白色織を含む、1mm以下の白色砂粒、雲母を含む)	良好	
221	図版71	円筒埴輪 (底部)	4トレ	底径 19.4 cm	・底部は直重で傾らむ ・外面ハケ、内面指オサエ	外・内) 7.5YR6/6 棕色	密(5mm以下の片岩を含む)	良好	
222	図版71	円筒埴輪	2トレ	復元底径 15.8cm	・底部は直重で傾らむ ・底部端から高さ7cmの位置から外側粗いヨコハケ、内面粗いヨコハケ	外・内) 5YR5/4 にぶい 棕色 断面) 10YR6/3 にぶい 黄褐色	密(1cmの大半片岩を含む、5mm以下の赤色酸化鉄を含む)	良好	
223	図版71	円筒埴輪	1トレ表土	復元底径 15.3cm	・底部は直重で傾らむ ・外面はハケ後ナデ。内面ハケ後ナデ	外・内) 5YR5/4 にぶい 棕色	密(3mm以下の白色、黒色の砂粒、雲母を含む)	良好	
224	図版72	円筒埴輪	2トレ	復元径 23cm	・2、3段目突端面は低いM字 ・外面ナナメハケ、内面指オサエ ・ハケ10本/cm	外) 2.5YR6/6 棕色～5YR5/4に ぶい 棕色 内) 5YR6/8 棕色 ～5YR4/4にぶい 棕色	密(1cm以下の片岩、白色織を含む、1mm以下の白色、黒色砂粒を含む)	良	
225	図版72	円筒埴輪	3・4トレ	復元径 22cm	・2段目、3段目突端 ・突端断面は低いM字 ・最上段にヘラ記号(右斜め上の一条の直線) ・2・3段目に直交する位置に透孔配置 ・外面ナナメハケ、内面指オサエ ・内面に粘土接合痕が多く残る	外・内) 10YR6/4にぶい 黄褐色 断面) 2.5YR6/2 灰褐色	密(5mmを多く含む、5mm～1cmの白色砂粒を含む、1mm以下の白色砂粒多く含む)	やや軟質	
226	図版72	円筒埴輪	3・7トレ	復元径 24.8cm	・突端断面は低いM字 ・外面、内面共に摩滅著しい	外・内) 10YR7/4にぶい 黄褐色 断面) 2.5YR7/1 灰褐色	密(5mmを多く含む、5mm～1cmの白色砂粒を含む、1mm以下の白色砂粒多く含む)	やや軟質	225、240 と同一個体か
227	図版72	円筒埴輪	11トレ	復元径 24.4cm	・突端断面は低いM字 ・突端下部に貼り付けた際のナデ痕残る ・外面はナナメハケ、内面はハケ ・ハケは10本/cm	外) 5YR6/8 棕色 内) 10YR6/3に ぶい 黄褐色 断面) 5YR6/2 オリーブ色	密(7mmの大半の白色、3mmの片岩、1mm以下の白色砂粒を含む)	良(須恵器)	

No.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	備考
228	図版72	円筒埴輪	6トレ	復元径 23.7cm	・突帯は低い台形 ・突帯間隔は約13cm ・透孔は時計回りに孔を空け、始点と終点で メレを生じる ・外面、内面共に摩滅が著しい	外) SYR6/6 椿色 内) 10YR6/4に ぶい黄褐色 断面) 2.5Y7/2 灰黄色	密 (1cm以下の片 岩を多く含む。5mm 以下の半透明砂を含む。 1mm以下の白色砂を含む)	良好	
229	図版72	円筒埴輪	4トレ	復元径 23.7cm	・突帯断面は低いM字 ・外面はタテハケ、内面は指オサエ、ナデ ・ハケは12本/cm	外) 7.5YR6/3 にぶい褐色 10YR5/1 桃灰色 内) 2.5Y5/1 黄 色 断面) 10YR6/1 褐色 SYR5/3 にぶい黄褐色	密 (1cm程度の片 岩を含む。1mm以 下の白色砂が多く 含む)	良(須 恵器)	
230	図版72	円筒埴輪 後円部埴輪 30.8	3トレ	復元径 22 cm	・突帯断面は低いM字 ・直行する位置に透孔を配置 ・外面ナナメハケ、内面ナナデ ・ハケは14本/cm	2.5Y5/1 黄灰色 ~ 10YR6/3 にぶ い黄褐色 断面) 2.5Y6/1 黄灰色	密 (2mm以下の白 色の砂粒を含む)	良好	
231	図版72	円筒埴輪	3トレ	—	・突帯断面は長いM字 ・外面ハケ、内面指オサエ ・円形の透孔	外・内) 7.5YR6/4にぶい 椿色	密 (5mm以下の片 岩を含む。1mm以 下の白色、褐色砂 粒を含む) ぶ 青 (2mmの大白 色の砂粒を含む)	良好	
232	図版72	円筒埴輪	3トレ	—	・突帯断面は低いM字 ・外面ハケ、内面指ナナデ ・円形の透孔	外・内) 7.5YR6/4にぶい 椿色	密 (5mm以下の片 岩を含む。2mm以 下の片岩、半透明 白色の砂粒を含む)	良好	
233	図版72	円筒埴輪	11トレ	—	・突帯断面は低いM字 ・円形の透孔 ・外面摩滅、内面ナナデ	外・内) 7.5YR6/4にぶい 椿色	密 (5mm以下の片 岩を含む。2mm以 下の白色、褐色、 黒褐色を含む)	良好	
234	図版72	円筒埴輪	4トレ	—	・突帯断面は台形 ・円形透孔、始点と終点にメレを生じる ・外面ナナメハケ、内面摩滅	外) 2.5Y6/1 黄 色 内) 7.5YR6/8 椿 色	密 (1mm以下の白 色砂粒を含む)	須恵器	
235	図版72	円筒埴輪	3トレ	—	・突帯断面はゆるいM字 ・透孔は始点と終点にメレが生じる	外・内) 2.5Y6/1 黄 色	密 (2mm以下の白 色、半透明砂粒を 含む)	良(須 恵器)	
236	図版73	円筒埴輪	9トレ	復元口径 23.8cm	・口縁部 ・突帯断面は低いM字 ・外面ナナメハケ、内面指オサエ	外・内) 2.5Y6/2 灰黄色	密 (3mm以下の白 色の砂粒を含む)	須恵器	
237	図版73	円筒埴輪	11トレ	復元口径 30.8cm	・外面、内面指オサエ ・口縁部端ナナデ ・内面口縁部端ヨコナナデ	外・内) 10YR7/4にぶい 黄褐色	密 (5mm以下の片 岩を含む。2mm以 下の白色、黑色砂 粒を含む)	良好	
238	図版73	円筒埴輪	4トレ	復元口径 24.3cm	・最上段にヘラ記号 (右ナナメ上の一一条の直 線) ・突帯断面は低いM字 ・外面ナナメハケ、内面指オサエ ・口縁部端及び周辺はヨコナナデ	外・内) 2.5Y6/2 灰黄色	密 (2mm以下の白 色の砂粒を含む)	須恵器	
239	図版73	円筒埴輪	3・9トレ	復元口径 23cm	・口縁部 ・突帯断面は低いM字 ・外面ナナメハケ、内面指オサエ	外・内) 5Y6/2 灰オリーブ色	密 (2mm以下の白 色の砂粒を多數含 む)	須恵器	
240	図版73	円筒埴輪	4・7・9トレ	残存高 13.8cm	・口縁部端はヨコナナデ ・外面、摩滅が著しいがタテハケと思われる ・内面は指オサエ ・突帯断面は台形 (摩滅著しい)	外) 5YR6/6 椿色 内) 7.5YR6/4に ぶい椿色	密 (1mm以下の片 岩を含む。1mm以 下の白色、褐色砂 粒を多く含む) やや軟 質	Z26と同 一個体か	
241	図版73	円筒埴輪	3トレ	—	・口縁部 ・最上段にヘラ記号 (右斜め上の一一条の直線) ・突帯断面は台形 ・外面ナナメハケ、内面指オサエ	外) 5YR6/7 桃色 内) 7.5YR6/4に ぶい椿色	密 (5mm以下の片 岩を含む。2mm以 下の白色砂粒を含 む)	良好	
242	図版73	円筒埴輪	4トレ	—	・口縁部 ・外面ナナメハケ、内面ナナデ ・ハケは11本/cm	外・内) 2.5Y6/1 黄 色	密 (1mm以下の白 色砂粒を含む)	須恵器	
243	図版73 (口縁部)	円筒埴輪 (口縁部)	3・4・9ト レ	—	・施成時に大きくなりずむ ・最上段にヘラ記号 (右上がりのりの一条の直線) ・突帯断面は台形 ・外面ナナメハケ、内面ナナデ ・口縁部端ナナデ、内面口縁ヨコナナデ	外) 5YR6/1 灰色 内) 5Y6/2 灰 色 断面) 2.5Y6/1 灰黄色	密 (2mm以下の白 色砂粒を含む)	須恵質	
244	図版73	円筒埴輪	9トレ	—	・口縁部 ・施成時に大きくなりずむ ・外面ナナメハケ、内面ナナデ?	外) 5Y6/1 灰色 内) 5Y6/2 灰 色 リーフ色 断面) 5Y6/1 灰 色	密 (1mm以下の白 色砂粒を含む)	須恵器	

NO.	図版番号	器種	出土位置	法量	特徴	色調	胎土	焼成	備考
245	図版73	円筒埴輪	9トレ	—	・外面タテハケ、内面ナデ ・ハケ10本/cm ・焼成時に大きくひずむ	外・内) SYR5/1 灰色 断面) 2.5 Y 6/1灰黄色	密(7mm大の白色 繊、半透明繊を含む) 良(須 恵器)		
246	図版74	朝顔形埴輪	3・4・7・9 トレ	—	・焼成時に大きくひずみ口縁部が波打つ ・(口縁部) 外面ナナメハケ、内面ヨコハケ ・(頭部) 外面ヨコハケ、内面指オサエ ・突帯断面はM字	外) 10YR5/1 桃 灰色 内) 10YR5/2 灰 黄褐色 断面) 10YR5/2 灰黄褐色	密(7mm大の白色 繊、半透明繊を含む) 良(須 恵器)		
247	図版74	朝顔形埴輪	3トレ	—	・口縁部 ・焼成時に大きくひずむ ・外面磨滅著しく調整不明、内面ヨコハケ	外・内) 5YR7/8 棕色	密(5mm以下の片 岩、白色砂粒を含む) 良好		
248	図版74	朝顔形埴輪	1トレ 表土の下	—	・口縁部 ・外面ナデ、内面タテハケ	外・内) 7.5YR6/4 にぶい 棕色	密(5mm以下の片 岩を含む、2mm以 下の白色、褐色の 砂粒を含む) 良好		
249	図版74	朝顔形埴輪	1トレ	—	・外面ナナメハケ、内面磨滅のため調整不明 だがヨコハケか ・突帯断面は台形	外・内) 5YR6/6 棕色	密(1cm大の片岩、 1mm以下の白色、 褐色の砂粒を含む) 良好		
250	図版74	朝顔形埴輪	6トレ 復元口径 47.4 cm	—	・外面、内面ナナメハケ ・突帯はゆるいM字	外・内) 5YR6/6 棕色 断面) 2.5 Y 6/1 黄灰色	片岩と赤色陶化粒 が含まれる 良好		
251	図版74	朝顔形埴輪	1トレ	—	・突帯断面は山型 ・外面、内面は著しく磨滅	外・内) 5YR6/8 棕色 断面) 7.5YR6/2 灰褐色	密(5mm以下の片 岩を含む、2mm以 下の白色砂粒を含 む) 良好		
252	図版74	朝顔形埴輪	7トレ	—	・外面、内面磨滅	外・内) 7.5YR6/4 に ぶい 棕色	密(5mm以下の片 岩、白色繊を含む、 1mm以下の黒色砂 粒を含む) 良好		
253	図版74	朝顔形埴輪	5トレ	—	・口縁部 ・突帯断面はゆるやかなM字 ・外面ナナメハケ、内面ヨコハケ ・ハケは10本/cm	外) 5YR6/6 棕色 内) 10YR6/4 に ぶい 黄褐色 断面) 7.5Y 6/2 灰オリーブ色	密(5mm以下の片 岩を含む、1mm以 下の白色砂粒を含 む) 良好		
254	図版74	朝顔形埴輪	11トレ 1・2層	—	・口縁部～肩部 ・外面ナナメハケ、内面ヨコハケ ・突帯断面は台形	外) 5YR6/6 棕色 内) 10YR6/4 に ぶい 黄褐色 断面) 7.5Y 6/1 灰褐色	密(1mm以下の白 色、黑色砂粒を多 数含む) 良好		
255	図版74	朝顔形埴輪	2トレ	—	・口縁部 ・突帯断面は台形 ・外面ハケ、内面ナデ	外) 10YR7/4 に ぶい 黄褐色	密(1cm大の片岩 を含む、1mm以下 の白色砂粒を含む) 良好		
256	図版74	朝顔形埴輪(解剖部)	3トレ	—	・外面ヨコハケ、内面ナデ ・ハケは11本/cm	外) 5YR7/灰色 内) 2.5Y 5/1 黄 褐色 断面) 5Y 6/1 灰 色	密(1cm大の白色 繊を含む、1mm以 下の白色砂粒を含 む) 須恵器		
257	図版74	朝顔形埴輪	5トレ 表土	—	・口縁部～肩部 ・外面ナナメハケ、内面指オサエ ・ハケは11本/cm ・口縁部に板上工具の痕跡 ・突帯断面はゆるやかなM字	外) 5YR6/4 に ぶい 棕色 内) 2.5Y 6/2 灰 色	密(5mm以下の片 岩を含む、1mm以 下の白色砂粒を含 む) 良		
258	図版74	朝顔形埴輪	9トレ	—	・肩部分 ・外面ナナメハケ、内面指オサエ	外) 2.5Y 5/1 黄 褐色 内) 2.5Y 5/2 灰 色	密(2mm以下の白 色の砂粒を多数含 む) 須恵器		

表9 前山A 58号墳出土土器類観察表

NO.	団版番号	器質 器種	出土位 置	法量	形状	焼成	色調	胎土	調整
259	団版 75	須恵器 杯蓋	6トレ ンチ床 土下	口径 13.7cm 器高 4.7cm	天井部が平たく、横がいくつ突出する。口縁部は内面ぎみにのび、施部は面をもつ。ロクロの回転方向は右。残存率は 50%。	良好	外面 S16/1 灰色 内面 T15/6/1 灰色 断面 S17/1 灰白色	径 1mm 以下の 白色繊を 1% 以下含む	天井部外面 3 分の 2 を回転ヘラケズリナ るは 2~3 回転ナダ
260	団版 75	須恵器 杯蓋	6トレ ンチ床 面上	口径 13.7cm 器高 4.6cm	天井部が丸みを呈し、天井部と口縁部の間に凹部がいる。天井部下面に内面に凹円文。ロクロの回転方向は左。残存率は 70%。	良好	外面 S6/1 灰色 内面 S16/1 灰色 断面 T-5/6/4 にいわ橙色	径 1~2mm の 白色繊を 2% 含む	天井部外面 3 分の 1 を回転ヘラケズリナ るは 2~3 回転ナダ
261	団版 75	須恵器 杯蓋	6トレ ンチ床 面上	口径 14.0cm 器高 4.5cm	天井部が丸みを呈し、天井部と口縁部の間に凹部がいる。ロクロの回転方向は左。残存率は 90%。	良好	外面 S6/1 灰色 内面 S6/1 灰色 断面 T-5/6/1 赤灰色	径 2mm の白色 繊を 2% 含む	天井部外面 2 分の 1 を回転ヘラケズリナ るは 2~3 回転ナダ
262	団版 75	須恵器 杯蓋	9トレ ンチ・右 面	口径 13.1cm 器高 4.2cm	天井部が平たん口縁部は直進にさがる。施部は丸く、横はややくびる。ロクロの回転方向は左。残存率は 80%。	良好	外面 T-5/6/1 灰色 内面 S17/1 灰白色 断面 S16/1 灰色	径 1~2mm の 白色繊を 2% 含む	天井部外面 2 分の 1 を回転ヘラケズリナ るは 2~3 回転ナダ
263	団版 75	須恵器 杯蓋	右室底 入土	口径 14.0cm 器高 4.2cm	天井部から口縁部まで丸みを呈するが、内面に凹部がある。天井部と口縁部の端は不規則。ロクロの回転方向は右。残存率は 80%。	良好	外面 S15/1 灰色 内面 S17/1 灰白色 断面 S16/1 灰色	径 1~2mm の 白色繊を 1% 含む	天井部外面 2 分の 1 を回転ヘラケズリナ るは 2~3 回転ナダ
264	団版 75	須恵器 杯身	6トレ ンチ・左 面	口径 12.2cm 器高 5.1cm 受部径 14.6cm	底部が平底。立ち上がりは直進に近い。口縁端部に面をもつ。ロクロの回転方向は右。残存率は 90%。	良好	外面 S17/1 灰白色 内面 S17/1 灰白色 断面 S6/1 灰色	径 1mm 以下の 白色繊を 1% 以下含む	天井部外面 3 分の 1 を回転ヘラケズリナ るは 2~3 回転ナダ
265	団版 75	須恵器 杯身	6トレ ンチ床 面上	口径 12.8cm 器高 4.8cm 受部径 15.2cm	口縁部は内縮して立ち上がる。口縁端部は丸い。ロクロの回転方向は左。残存率は 90%。	良好	外面 S6/1 灰色 内面 S6/1 灰色 断面 X7/1 灰白色	径 1mm 以下の 白色繊を 1% 以下含む	天井部外面 3 分の 1 を回転ヘラケズリナ るは 2~3 回転ナダ
266	団版 75	須恵器 台付蓋差	右室底 入土	口径 8.8cm 器高 1.2cm つまみ高 0.9cm	天井部につまみを有する。口縁端部は面をもつ。天井部に柳葉列文。残存率は 90%。	良好	外面 S6/1 灰色 内面 S16/1 灰色 断面 T-5/6/1 灰色	径 1mm 以下の 白色繊を 1% 以下含む	天井部外面 3 分の 1 を回転ヘラケズリナ るは 2~3 回転ナダ
267	団版 75	須恵器 小型壺	右室底 入土	口径 12.0cm 残存高 12.3cm	口縁端部は玉縁状に丸い。タキキは斜子キ。肩部の外面に「井」字紋のヘラ記号。残存率は 50%。	良好	外面 NS/1 灰色 内面 NS/1 灰色 断面 T-5/5/1 灰色	径 2mm の白色 繊を 2% 含む	底部にタキキ痕。 は 2~3 回転ナダ。
268	団版 76	土師器 小型丸底器	右室床 面	口径 9.4cm 残存高 7.6cm 胴径深 8.2cm	胴部は丸みを呈し、口縁部はハの字状に開く。胴部は半円に、長径 1.3cm、短径 0.4cm の桃形側穿孔がある。残存率は 90%。	良好	外面 STB6/6 橙色 内面 STB6/6 橙色	径 1mm 以下の 黑色繊を 1% 以下含む	口縁部内面にタテ方 向のミカギ。肩部に ヨコ方向のミカギ。 底面外縁にケズリ。 それ以外はヨコ方向 のナダ。
269	団版 76	須恵器 甕口縁	右室底 入土	口径 14.2cm 残存高 1.9cm	口縁部と頸部の間に突巻がめぐる。口縁部に波状文がめぐる。自然釉が付着。残存率は 10%。	良好	外面 T-5/5/1 灰色 内面 2.5/6/1 黄褐色	径 2mm の白色 繊を 1% 以下 含む	回転ナダ
270	団版 76	須恵器 甕底部	7トレ ンチ	残存高 3.5cm	焼成が不良であり、摩滅が激しい。残存率は 20%。	不良	外面 2.5/8/2 灰白色 内面 2.5/8/2 灰白色	径 2mm の黑色 繊を 1% 以下 含む	回転ナダ
271	団版 76	須恵器 甕底部	7トレ ンチ	残存高 4.5cm	焼成が不良であり、摩滅が激しい。残存率は 20%。	不良	外面 2.5/8/2 灰白色 内面 2.5/8/2 灰白色	径 2mm の黑色 繊を 1% 以下 含む	回転ナダ
272	団版 76	須恵器 小型丸口縁器	5・6トレ ンチ・表土下	口径 16.0cm 残存高 6.5cm	口縁部は広口状に開く。口縁端部は丸みを呈し、直進に突巻がめぐる。底部にいぶし回転で直進。上段に波状文。残存率は 20%。	良好	外面 10/10/1 黄褐色 内面 10/10/1 黄褐色 断面 2.5/5/3 にいわ赤褐色	径 1mm 以下の 白色繊を 1% 以下含む	回転ナダ
273	団版 76	須恵器 中型壺 口縁部	3・9トレ ンチ	口径 22.8cm 残存高 5.8cm	口縁部は外反し。口縁端部はやや丸みをもつ。下部は直進。肩部は2次旋出によって区画され、波状文を3段階。胴部は外縁にタキキキ。内面に同心円文がなされる。残存率は 80%。	良好	外面 T-5/6/1 灰色 内面 NS/1 灰色 断面 2.5/9/6/2 赤褐色	径 1mm 以下の 白色繊を 1% 含む	回転ナダ
274	団版 76	須恵器 中型壺 肩部	9トレ ンチ	残存高 3.2cm	口縁部は外反し。口縁端部はやや丸みをもつ。下部は直進。肩部は2次旋出によって区画され、波状文を3段階。胴部は外縁にタキキキ。内面に同心円文がなされる。残存率は 80%。	良好	外面 T-5/6/1 灰色 内面 NS/1 灰色 断面 2.5/9/6/2 赤褐色	径 1mm 以下の 白色繊を 1% 含む	タキキのち、カキ目
275	団版 77	須恵器 大型壺	9トレ ンチ	口径 38.6cm 器高 27.8cm 胴径深 63.0cm	口縁部は外反し。口縁端部はやや丸みをもつ。下部は直進。肩部は2次旋出によって区画され、波状文を3段階。胴部は外縁にタキキキ。内面に同心円文がなされる。残存率は 80%。	良好	外面 NS/1 灰色 内面 M6/1 灰色 断面 10/8/5/4 赤褐色	径 1~5mm の 白色繊を 2% 含む	口縁部上部回転ナダ 口縁部下部ナダ 胴部タタキ成形

第6章 保存整備事業に伴う石室実測

1 事業の経過

和歌山県では平成17年度から、古墳の石室や盗掘坑を埋め戻し、墳丘を盛り直す古墳保存修景工事を行っている。整備委員会の指導を受け、石室を埋め戻す前に石室の図化や写真撮影、墳丘測量を行い、資料化を図っている。平成21年度から26年度までの6年間で、石室実測は16基、盗掘坑測量は15基実施しており、ここではその成果を公表する。作業は県立紀伊風土記の丘が担当した。墳丘の径は現状で墳丘裾部の認識できるものについて小数点第1位まで表記し、判然としないものについては整数値で示した。墳丘は著しい橢円形の古墳を除いて、平均的な位置で測っている。

(1) 平成21年度 石室簡易実測

平成21年度は、保存修景工事対象の古墳11基について石室・盗掘坑の簡易実測を行った。対象としたのは、前山B 72・B 120・B 125・B 148・B 160・B 204・B 136・B 201・BX 9・BX 100・BX 101号墳である。このうち石室簡易実測を行った古墳は4基で、盗掘坑の平面プランを記録した古墳は10基である。

(2) 平成22年度 石室簡易実測

平成22年度は、計5基の古墳の石室・盗掘坑を埋め戻した。対象とした古墳は、前山B地区で前山B 200・BX 100号墳の2基、大日山地区で大日山17・12・14号墳の3基である。

このうち石室実測を行った古墳は3基で、盗掘孔の平面プランを記録した古墳は2基である。

(3) 平成23年度 墳丘測量・石室実測

平成23年度は、前山B地区で計5基の古墳の石室・盗掘坑を埋め戻した。対象とした古墳は、前山B 175・B 164・B 170・B 172・B 240号墳である。このうち石室簡易実測を行った古墳は3基で、盗掘坑の平面プランを記録したのは2基である。

(4) 平成24年度 墳丘測量・石室実測

平成24年度は、前山B地区で3基、大日山地区で1基の古墳の石室・盗掘坑を埋め戻した。対象とした古墳は、前山B地区で前山B 241・B 174・B 176号墳、大日山地区で大日山15号墳である。このうち実測を行った古墳は4基で、盗掘坑の平面形を記録した古墳は1基である。

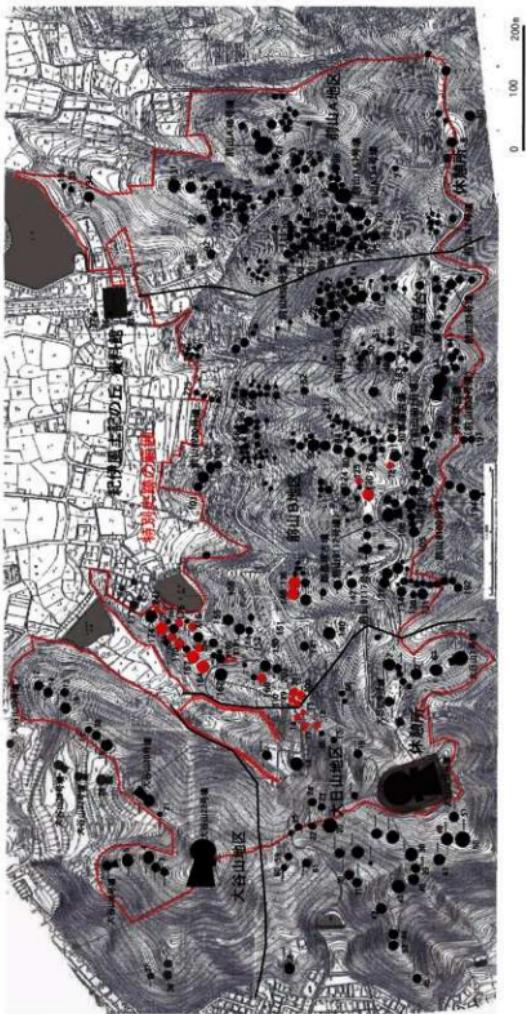
(5) 平成25年度 墳丘測量・石室実測

平成25年度は保存修景工事対象古墳2基のうち、前山BX 16号墳の石室簡易実測を行った。

(6) 平成26年度 墳丘測量・石室実測

平成26年度は保存修景工事対象古墳2基のうち、前山B 167号墳の石室簡易実測を行った。

図 83 石室実測対象古墳の位置



2 石室実測対象古墳の概要

1. 前山B 72号墳

位置：岩橋山塊山頂部付近の知事塚から北側に続く尾根上

墳丘：円墳（径約7m）

石室：不明（両袖式の横穴式石室の可能性）

方位：北西方向に開口

時期：不明

整備：平成21年度修景工事（盗掘坑埋戻し）

備考：墳丘中央部に2.8m×1.7m×深さ0.9mの盗掘坑

内容：盗掘坑内を清掃した結果、石材が2つ露出していた。ピンポールをさして埋まっている石材を確認したところ、露出している石材は北西方向に開口する石室の玄門部付近の石積みであると推測できた。

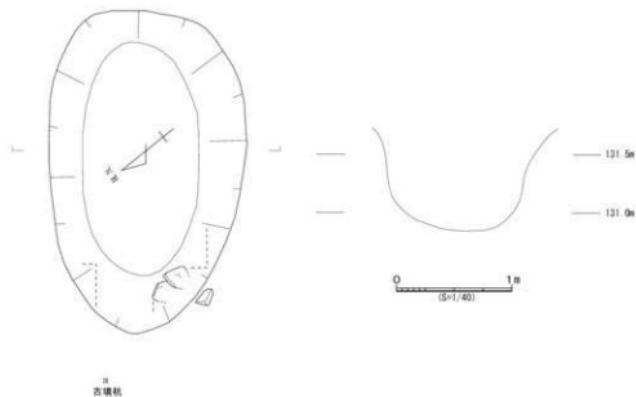


図 84 前山B 72号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

2. 前山 B 120 号墳

位置：岩橋山塊山頂部付近の郡長塚から北側に続く尾根上、前山 B 125 号墳南西側

墳丘：円墳（長径約 12 m × 短径約 9 m）

石室：玄室幅約 2 m の横穴式石室（両袖式）

方位：東方向に開口

時期：不明

整備：平成 21 年度修景工事（盜掘坑埋戻し）

備考：4.7 m × 3.15 m × 深さ 1.7 m の盜掘坑

内容：墳丘中央に盜掘坑があり、一部石材が露出していた。石材は玄室前道の天井石と両側壁上部と考えられる。一部玄室前道部内が空洞になっていた。玄室の天井石は全て取り去られている。玄室前道部幅は 0.55 m で、ピンポールで石材を確認したところ、玄室幅約 2 m の横穴式石室であると推測できる。

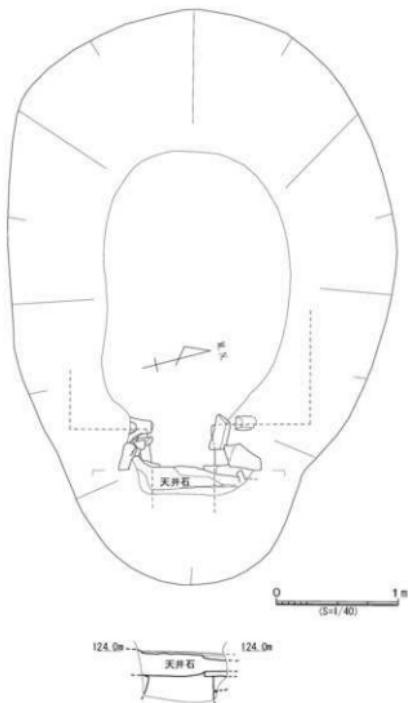


図 85 前山 B 120 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

3. 前山B 125号墳

位置：岩橋山塊山頂部付近の郡長塚から北側に続く尾根上、前山B 120号墳北東側
墳丘：円墳（長径約10m×短径約9m）

石室：横穴式石室

方位：東方向に開口

時期：不明

整備：平成21年度修景工事（石室埋戻し）

備考：奥壁・側壁とも大きく張り出して崩れる危険があり、奥壁・側壁の実測できず。

内容：奥壁部を除いて天井石がない状態で、奥壁及び片方の側壁（北側）の一部が残っている。天井石から下に1.7mほど石積みが確認できる。南側の側壁上部は残存しない（下部は埋まっている可能性がある）。玄室前道もしくは羨道部と思われる石材が一部見えるものの、構造は判然としなかった。

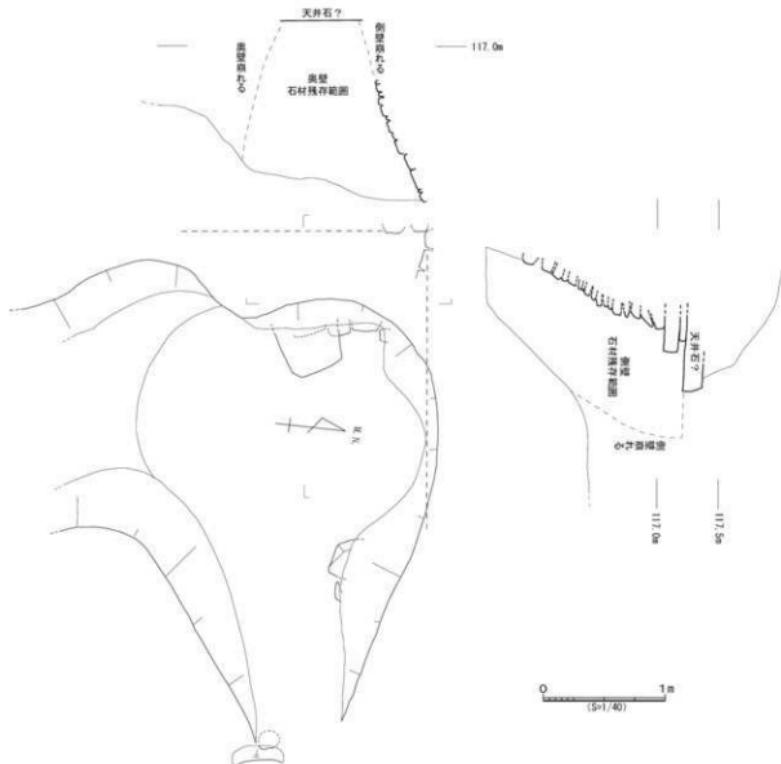


図86 前山B 125号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

4. 前山B 136号墳

位置：岩橋山塊山頂部の前山B 137号墳から北側に続く尾根の中腹、前山B 148号墳東側
墳丘：円墳（長径約8.5m×短径約6.5m）

石室：横穴式石室（片袖か片袖傾向の強い小型T字形石室）、長1.0m×幅1.65mの玄室
方位：南東方向に開口

時期：6世紀中葉

整備：平成21年度修景工事（石室埋戻し）

備考：玄室前面部分で土師器片、石室内表土から須恵器片5点（6世紀中葉）出土。

内容：天井石はないが、奥壁と両側壁が確認できる。玄室前面～羨道部は大きく崩れ、特に羨道部の大半は失われていると推測できる。石積みの大半が小口積みであるが、奥壁の下部に平積みした石材が確認できる。石積みは高さ最大0.7mほど残存している。現状の床面付近に川原石（玉石）が含まれることから、床面に川原石を敷いていたと推定でき、現状は石室床面付近まで露出している可能性がある（石室上部は大きく欠落）。

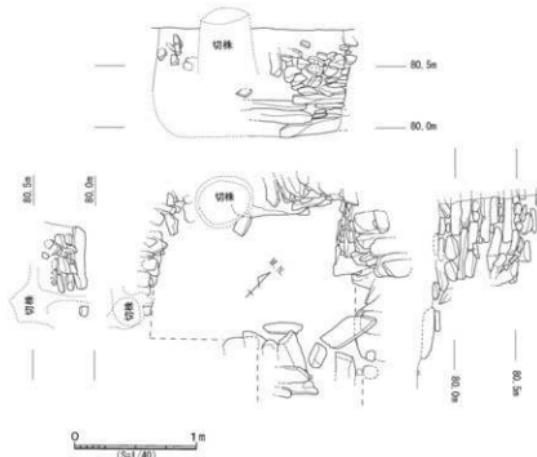


図87 前山B 136号墳 石室実測図（S=1/40）

5. 前山B 148号墳

位置：岩橋山塊山頂部の前山B 137号墳から北側に続く尾根の中腹、前山B 136号墳西側
墳丘：円墳（長径約14.5m×短径約10.5m）

石室：不明

方位：不明

時期：不明

整備：平成21年度修景工事（墳丘崩落部分埋戻し）

備考：現状では墳丘北側が大きく崩壊（幅2.8m×高さ3.0m×奥行き3.0m）。

内容：崩落箇所が盗掘坑であった可能性もあるが、石室に関わる石材は露出していない。

6. 前山B 241号墳

位置：大日山35号墳から北東の長尾池へのびる尾根根部（長尾池西側）、前山B 240号墳北側
墳丘：円墳（径約8m）

石室：横穴式石室（玄室幅1.8m）

方位：南西方向に開口

時期：不明

整備：平成24年度修景工事（石室埋戻し）

備考：土砂の流出が激しく、墳丘の南東部分は大きく崩れていた。

内容：墳頂部には盗掘坑があけられ、石室からは天井石が取り外されていた。奥壁と両側壁は一部残存しているものの、上部の土砂の崩落が激しく、内側に張り出していた。奥壁と西側側壁の一部は高さが0.8mほど露出していたが、東側側壁は大部分が崩落し、かろうじて、東側側壁の下部が残っていた。開口部側は完全に崩落または土砂で埋没してしまっており、袖部の位置や玄室の長さは不明である。石室及び墳丘からは遺物は出土しなかった。

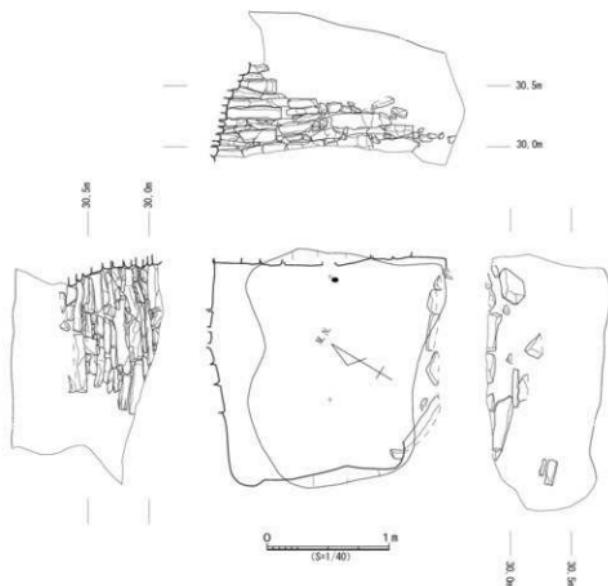


図88 前山B 241号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

7. 前山B 240号墳（BX 18号墳）

位置：大日山35号墳から北東の長尾池へのびる尾根根部（長尾池西側）、前山B 240号墳東側
墳丘：円墳（現状は径約6m残存、本来は約8m程度か）

石室：横穴式石室（玄室長約2.2m×幅2.0mの正方形に近いプラン）

方位：南東方向に開口か

時期：不明

整備：平成23年度修景工事（石室埋戻し）

備考：墳丘の南東側は園路により大きく削られ、墳丘東半部も削平を受けている。

内容：中央に壺掘坑があり、天井石は持ち去られ、羨道部は埋没している。石積みは北東側と南東側で大きく崩れて、内側に石材が落ち込んでいる。北西側と南西側では石積みが高さ約0.2～0.3m程度確認できる。比較的小さな石材を小口積みしており、北西側・南西側のどちらが奥壁になるとしても大きな石材を使用していないようである。現状では羨道部が南東側・北東側のどちらに取り付くか不明であるが、地形的にみておそらく南東側に開口すると推測できる。石室内の石積み上部を清掃中に土師器片が出土した。

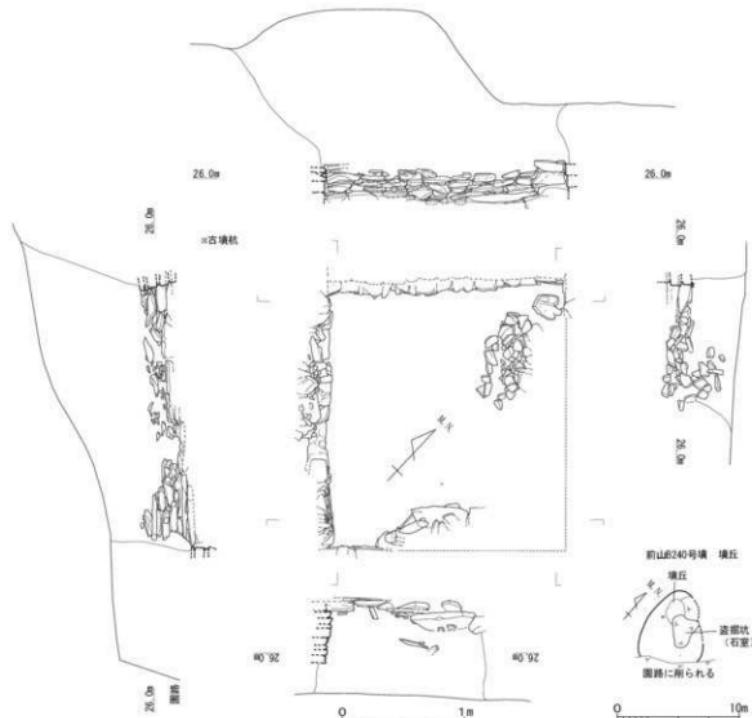


図89 前山B 240号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

8. 前山B 175号墳

位置：大日山35号墳から北東の長尾池へのびる尾根裾部（長尾池西側）、前山B 240号墳西側
墳丘：円墳（径約8m・短径約6m）

石室：竪穴式石室（長約2.0m×幅約0.5m）

方位：北東-南西

時期：不明

整備：平成23年度修景工事（石室埋戻し、墳丘崩落部分埋戻し）

備考：墳丘南東側裾部が大きく削られている。

内容：墳丘中央に小さな盗掘坑があり、天井石は取り去られている。石積みは、高さ0.1～0.2m程度確認したのみであるが竪穴式石室であることがわかった。比較的小な石材を小口積みで積み、石材の残存状況はよくない。おそらく上部の石積みは抜き去られていると考えられる。北側の壁面にある大きな石材は、取り除かれた天井石の可能性がある。石室及び墳丘から遺物は出土しなかった。

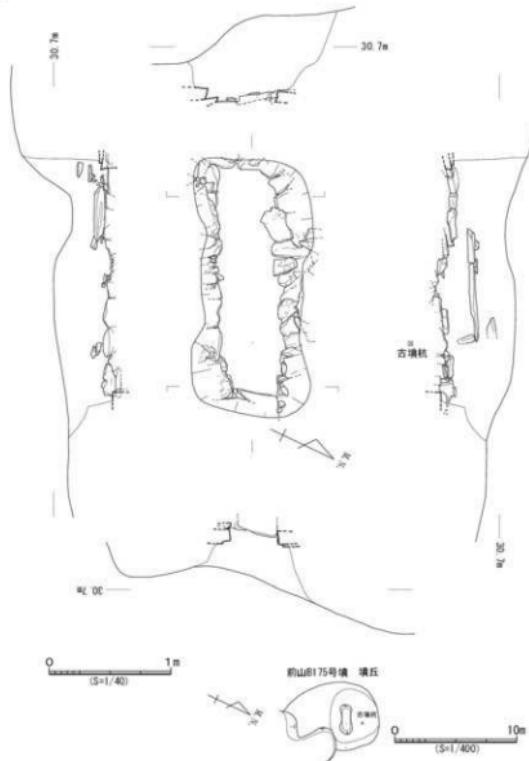


図90 前山B 175号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

9. 前山B 174号墳

位置：大日山35号墳から北東の長尾池へのびる尾根根部（長尾池西側）、前山B 175号墳西側
墳丘：円墳（径約15m）

石室：横穴式石室（玄室長1.8m×幅1.7m、羨道部幅0.6m、平面形がほぼ正方形プラン）

方位：南西方向に開口

時期：6世紀

整備：平成24年度修景工事（石室埋戻し）

備考：清掃時に埴輪片、須恵器片採集

内容：すでに天井石は取り去られ、石室の奥壁及び側壁が高さ0.5mほど露出していた。側壁と羨道部側の石積みの一部が大きく崩れていたものの、石積み下部において袖部を示す屈曲がみられ、玄室の平面形が判断できた。また、羨道部側の基底石部分では、0.6mの幅で石積みが見られない部分があり、土砂で埋まっているものの羨道部の取り付き部であると考えられる。

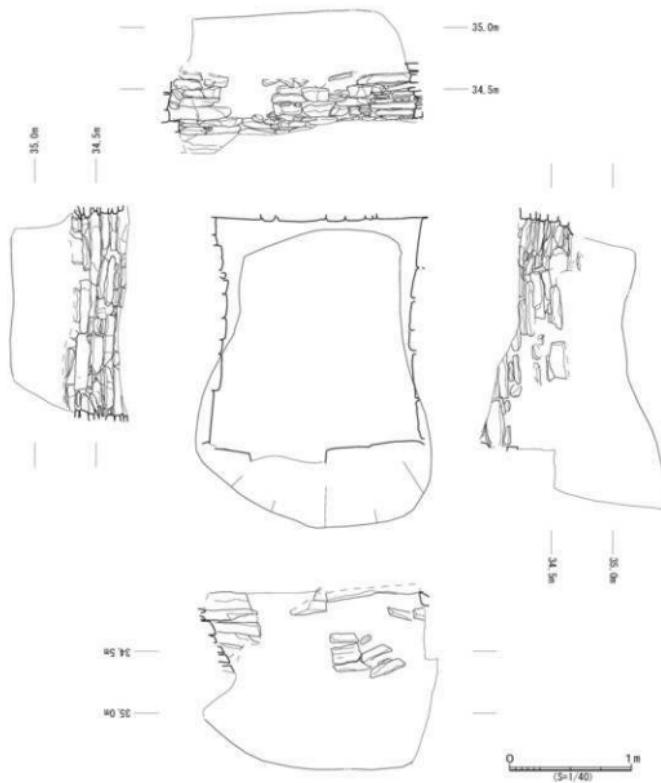


図91 前山B 174号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

10. 前山 B 176 号墳

位置：大日山 35 号墳から北東の長尾池へのびる尾根根部（長尾池西側）、前山 B 174 号墳南側
墳丘：円墳（径約 10 m）

石室：横穴式石室（玄室幅 2 m）

方位：南東方向に開口か

時期：6 世紀

整備：平成 24 年度修景工事（石室埋戻し）

備考：墳丘の南東側は園路によって一部が削られていた。

内容：すでに天井石が流失し、側壁及び羨道部側の石積みの大部分が崩落していたものの、奥壁部において高さ 0.9 m ほど露出していた。両側壁は奥壁側の長さ 0.4 m の部分が残存しており、羨道部においては、石積みが確認できず、正確な平面プランは不明であるが、天井部の崩落は奥壁より 2.6 m の範囲におさまることから、玄室長はそれよりも小さい値であったことが分かる。清掃時に 6 世紀代の須恵器、埴輪片を採集した。

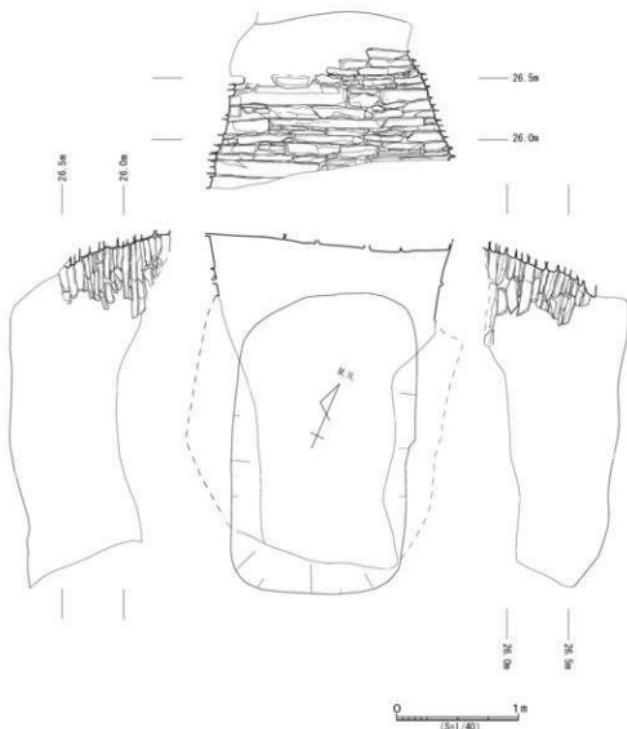


図 92 前山 B 176 号墳 石室実測図 ($S = 1 / 40$)

11. 前山B 172号墳

位置：大日山35号墳から北東へのびる尾根裾部（長尾池西側）、前山B 170・173号墳間
墳丘：円墳（長径約16m×短径約12m）

石室：小形の横穴式石室（玄室長2.0m×幅1.3m）、右片袖または右片袖傾向強い石室
方位：南東方向に開口

時期：6世紀中葉～後葉

整備：平成23年度修景工事（石室埋戻し）

備考：天井石は取り去られており、羨道部・玄室前道部は埋没している。

内容：中央に盃掘坑がある。南西側の壁で高さ約0.6mの石積みが確認できるが、各壁面とも石積み上部は崩れが大きい。全体的に小さな石材を使用しているが、奥壁及び袖部に比較的大きな石材を使用している。床面まで確認していないので、奥壁からみて左側に袖部があるかどうか不明であるが、現状では南東側に開口する右片袖の横穴式石室にみえる。墳頂部清掃時に埴輪片・須恵器壺片、石室内清掃時に墳丘からの崩落と考えられる円筒埴輪片・須恵器高杯片・須恵器杯片が出土した。また墳丘東側からは石室からかき出されたと思われる土から須恵器杯片が出土している（6世紀中葉～後葉）。

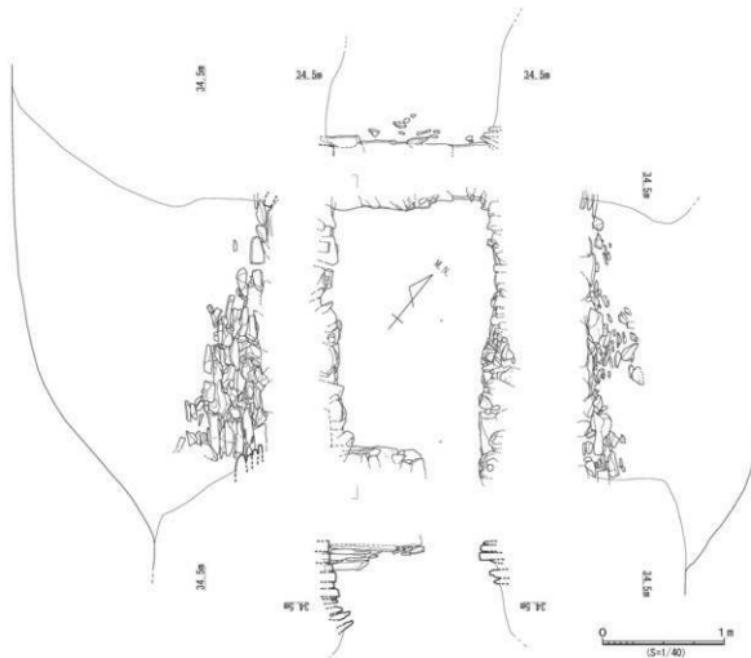


図93 前山B 172号墳 石室実測図 ($S = 1 / 40$)

12. 前山B 170号墳

位置：大日山35号墳から北東へのびる尾根据部（長尾池西側）、前山B 168・172号墳間

墳丘：円墳（径約15m）

石室：横穴式石室（玄室長2.5m×幅1.55m）、左片袖傾向の強い石室か

方位：南東方向に開口

時期：6世紀前葉

整備：平成23年度修景工事（石室埋戻し）

備考：盜掘坑の北側に浅い長さ約4mの凹みがあり、竪穴式石室あるいは箱式石棺の可能性あり

内容：中央に盜掘坑があり、石積みが残存している。天井石は取り去られている。墳頂部に円筒埴輪の底部が樹立していることから、墳頂部はほとんど削平されていないと推察できる。南西側及び北西側の壁は高さ0.9mの石積みが確認できるが、その他の部分は、崩れているか埋まっている。袖部の石積みの残存状態はよくないが、左片袖傾向の強い石室である可能性がある。採集した遺物には、円筒埴輪片・須恵器片（6世紀前葉）がある。

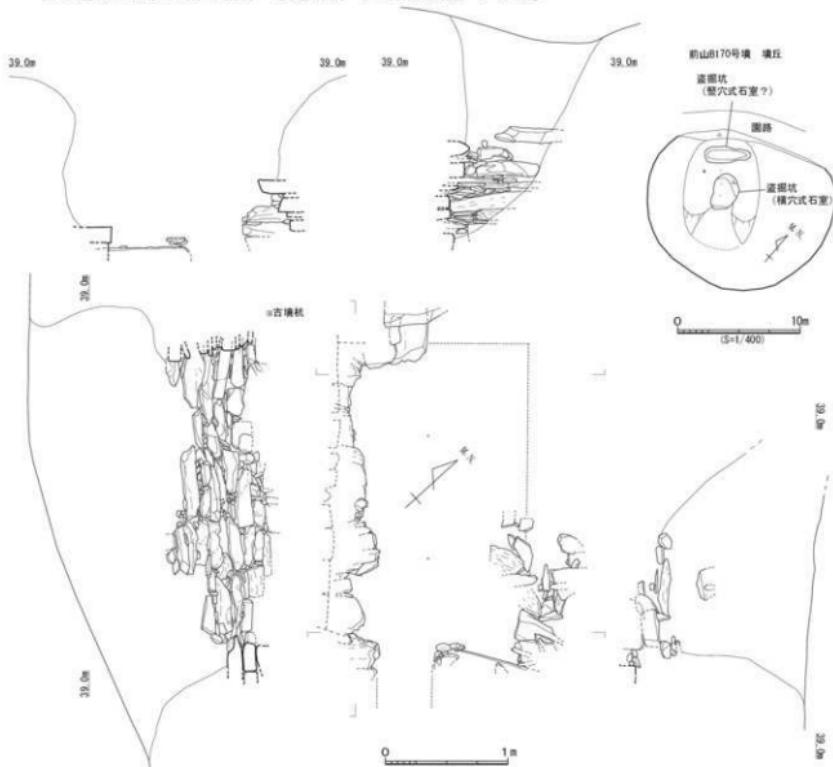


図94 前山B 170号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

13. 前山B X 16号墳

位置：大日山35号墳から北東の長尾池へのびる尾根根部（長尾池西側）、前山B 172号墳南側
墳丘：円墳（径9m）

石室：横穴式石室（玄室長2.42m×幅1.92m）、両袖式

方位：南東方向に開口

時期：6世紀後葉か

整備：平成25年度修景工事（石室埋戻し）

備考：古くに天井石が取り去られ、長年にわたって石室が露出していた。

内容：石室内には大量の土砂が流れ込んでおり、西側側壁の一部が内側へと崩れかけていた。玄門幅は1.12mであり、0.34mの両袖部と比較すると幅広である。現在、露出している部分における石室の残存高は奥壁部で1.0mであるが、本来の石室床面は1mほど下にあると考えられる。古墳の築造時期については、周辺から埴輪が採集されてないことや玄門部が中央に位置していること、玄門部幅が広いことなどから、6世紀後葉であると推定される。

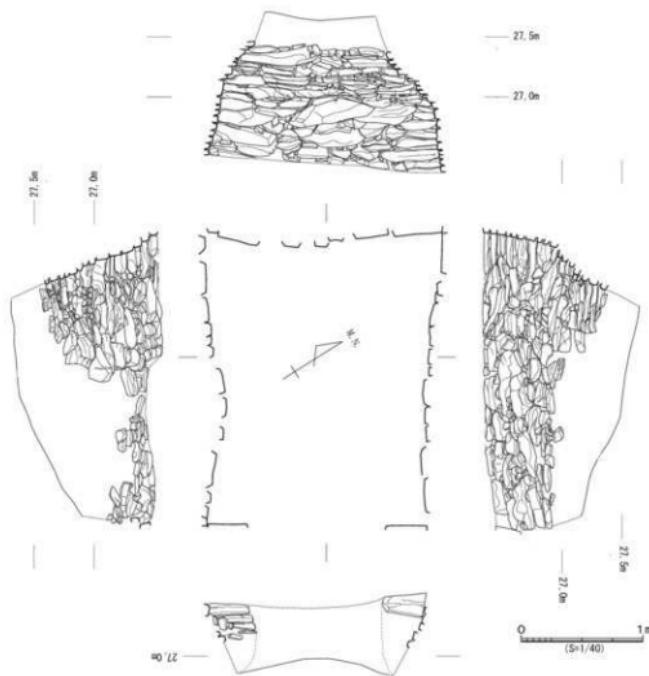


図95 前山B X 16号墳 石室実測図 ($S = 1/40$)

14. 前山 B 167 号墳

位置：大日山 35 号墳から北東の長尾池へのびる尾根根部（長尾池西側）、前山 B 164 号墳北東側
墳丘：円墳（造出付き円墳か）

石室：横穴式石室（玄室長 2.67 m × 幅 1.65 m）、右片袖式あるいは右片袖傾向の強い石室

方位：南東方向に開口

時期：6 世紀前葉か

整備：平成 26 年度修景工事（石室埋戻し）

備考：墳丘裾に円筒埴輪あり

内容：奥壁及び北東側壁は高さ約 1.4 m 残存している。南西側壁は崩落が大きい。玄室前道部分では天井石が残存しており、その下部の袖部には比較的大きな石材を積んでいる。北東側壁には明瞭な袖部が確認できなかったことから、片袖式あるいは片袖傾向の強い石室と推測できる。大谷山 6 号墳と類似する石室形態であることから、同時期である 6 世紀前葉に構築された可能性がある。墳丘裾部から埴輪片が採集できた。

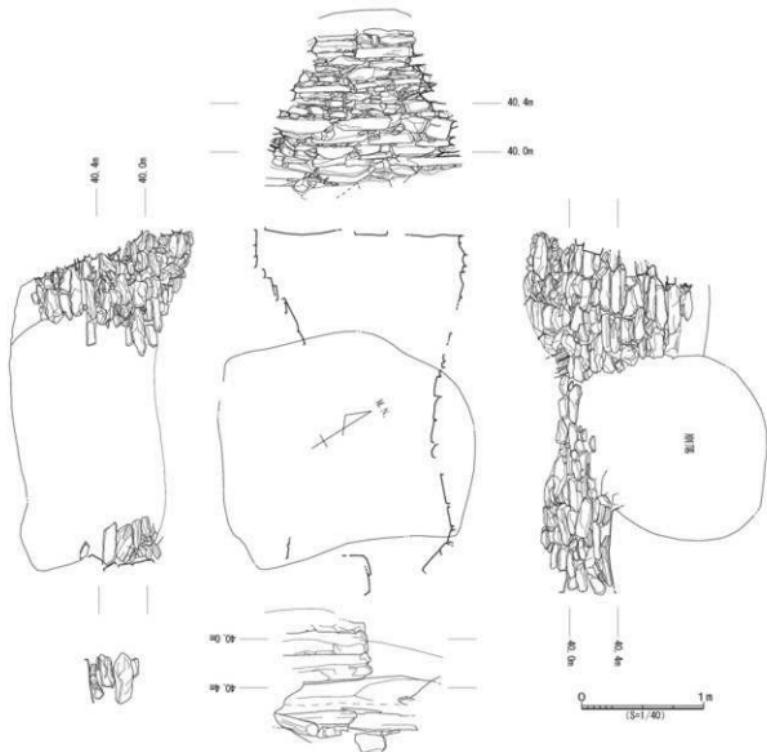


図 96 前山 B 167 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

15. 前山B 204号墳

位置：大日山35号墳から北東の長尾池へのびる尾根根部（長尾池西側）

墳丘：円墳（長径約9m×短径約6.5m）

石室：横穴式石室（両袖式か、玄室長約2.4m、玄室前道部長約0.7mを想定）

方位：南方向に開口

時期：不明

整備：平成21年度修景工事（石室埋戻し）

備考：奥壁部は高さ1.5m程度確認できたが、崩壊の可能性があり詳細な実測できず。

内容：天井石はないが、奥壁と東側の側壁及び玄室前道～羨道部の石積みが一部確認できる。西側の側壁は確認できず崩壊しているものと考えられる。南側に結晶片岩の一枚石の閉塞石上部が露出している。石室の各壁面とも大きく張り出したり、崩れたりしているので、石室構造は判然としない。閉塞石は位置的に玄室前道部と羨道部の間の閉塞の可能性が高い。南側でやや張り出す石積み部分を玄室前道部とすれば、玄室長さ約2.4m、玄室前道部長さ約0.7mが想定できる。玄室・玄室前道・羨道部の幅は不明であるが、閉塞石の位置からやや東側に寄る両袖式の石室と推定できる。残存する奥壁上部に大きな板石が積まれておらず、天井石もしくは石棚の石材と考えられる。閉塞石より南側で結晶片岩片が多数確認でき、墳丘構築時に墳丘内（もしくは墳丘上）に結晶片岩を置いた可能性がある。

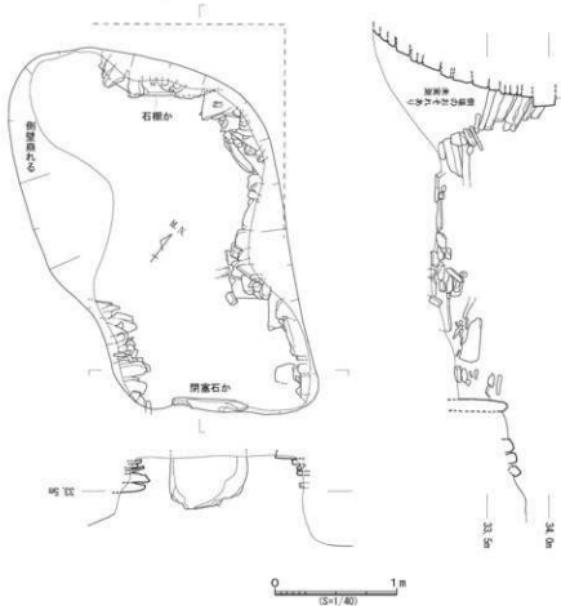


図97 前山B 204号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

16. 前山 B 164 号墳

位置：大日山 35 号墳から北東へのびる尾根据部（長尾池西側）、前山 B 162・167 号墳間

墳丘：円墳（長径約 18 m × 短径約 15 m）

石室：横穴式石室（玄室長約 2.0 m × 幅約 1.5 m）、左片袖傾向の強い石室か

方位：南東方向に開口

時期：6世紀前葉

整備：平成 23 年度修景工事（石室埋戻し）

備考：墳頂部を清掃時に埴輪片が多数出土（墳頂部はそれほど削平を受けていないと推測）

内容：中央に盗掘坑があり、一部石積みが確認できる状況であった。天井石は取り去られているが、奥壁は天井石付近まで残存していると思われ、現状では高さ約 1.2 m の石積みが確認できる。奥壁以外は石積みの崩れが大きく、一部南西側の壁を除いてほとんど石材が確認できなかつた。石積み南西部にコーナー部分の可能性がある石積みがある。この部分が玄室の南西側の袖部であるとすると、奥壁からみて左片袖傾向の強い石室となり、また検出した南西側の壁は玄室前道及び羨道部の壁ということになる。墳丘から土師質の円筒埴輪（一部須恵質含む）・器財埴輪片・須恵器片が出土し、石室内清掃時に 6 世紀前葉の須恵器片・土師器片が出土した。

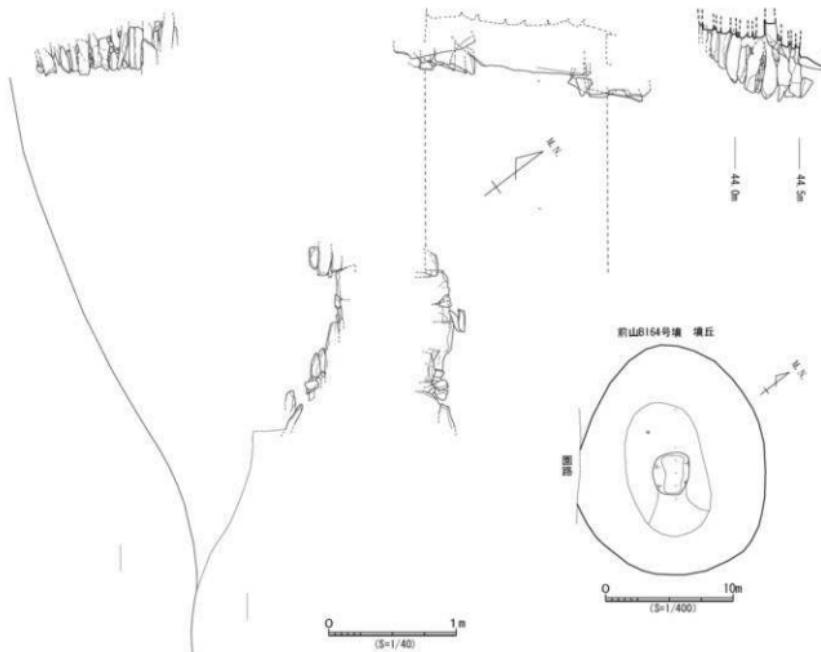


図 98 前山 B 164 号墳 石室実測図 ($S = 1 / 40$)

17. 前山 BX 100 号墳

位置：大日山 35 号墳から北東へのびる尾根裾部（長尾池南側）、前山 BX 101 号墳北側

墳丘：円墳（長径約 4 m × 短径約 3 m）

石室：竪穴式石室（長 1.8 m × 幅 0.9 m）

方位：北西—南東

時期：不明

整備：平成 21 年度修景工事（石室埋戻し）

備考：石室内から埴輪片数点出土（おそらく北東側の前山 B 162 号墳からの転落であろう）。

内容：天井石はないが、石積みが確認できる。高さは最大 0.4 m 残存している。石室外側（東側）に石材が散乱しており、盜掘時に破壊された石室の石材、もしくは墳丘構築時に墳丘内に置かれた石材の可能性がある。

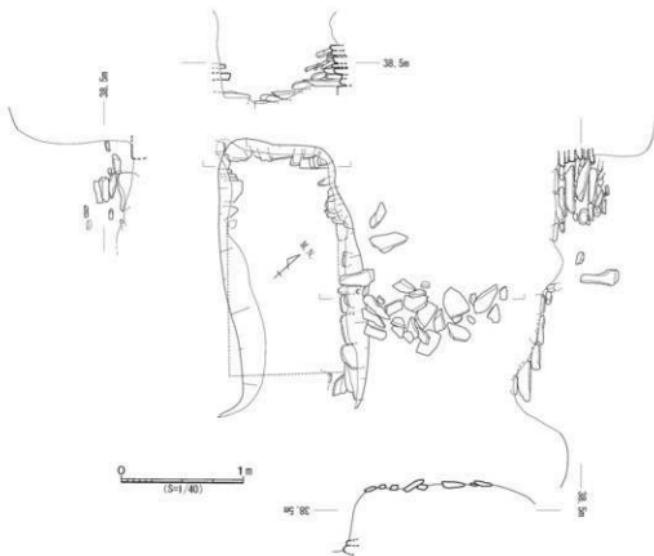


図 99 前山 BX 100 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

18. 前山 BX 101 号墳

位置：大日山 35 号墳から北東の長尾池へのびる尾根裾部（長尾池南西側）、前山 BX 100 号墳南側

墳丘：円墳（長径約 4 m × 短径約 3 m）

石室：小型の横穴式石室（玄室幅 1.4 m 程度）

方位：東方向に開口

時期：不明

整備：平成 21 年度修景工事（石室埋戻し）

備考：石室内から円筒埴輪片が 2 点出土（おそらく北東側の前山 B 162 号墳からの転落であろう）。

内容：玄室前道～羨道部が確認できなかったため玄室長さは不明であるが、現状で長さ 2.0 m の石積みが確認できる。石積みの残存する高さは最大 0.4 m である。奥壁付近で川原石（玉石）が含まれるため、本来川原石を敷いている可能性があり、現状ではかなり基底部付近まで石材が露出していると推測できる。

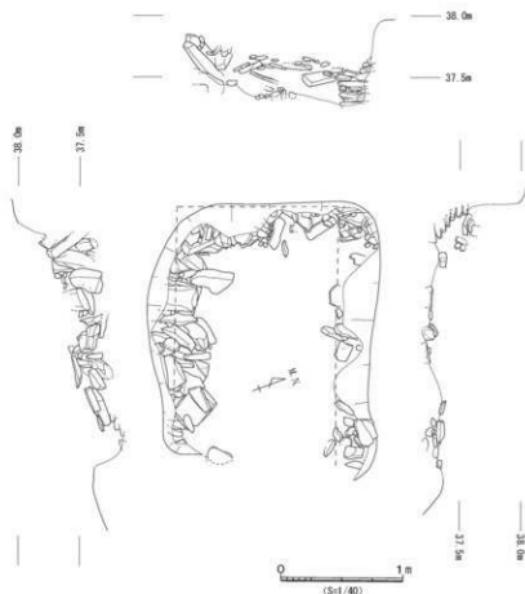


図 100 前山 BX 101 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

19. 前山B 160号墳

位置：大日山35号墳から北東の長尾池へのびる尾根の中腹

墳丘：円墳（長径約9m×短径約8m）

石室：不明

方位：不明

時期：不明

整備：平成21年度修景工事（盗掘坑埋戻し）

備考：盗掘坑がT字状に大きく開けられており、一部板石状の石材が散乱。

内容：現在石室は確認できない。散乱している石材は、積んでいる状態ではなく、盗掘時に壊された石材か。石材付近でわずかに川原石（玉石）が含まれることから、本来川原石を敷いていた石室であった可能性がある。

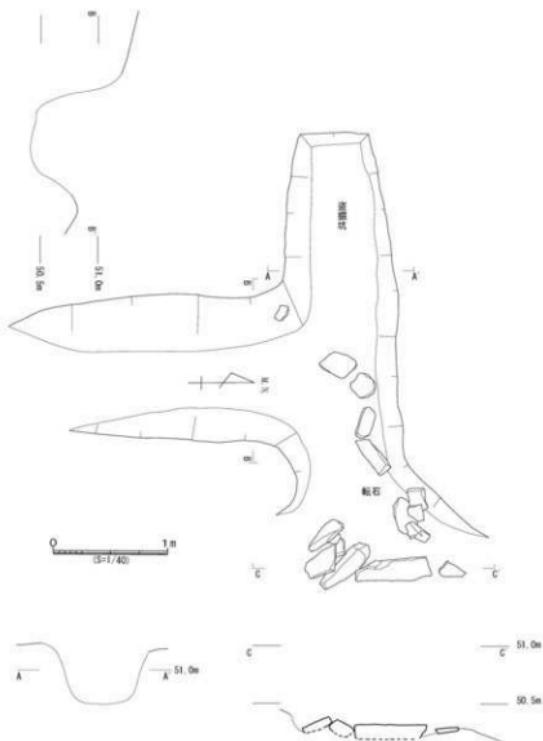


図101 前山B 160号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

20. 前山B 201号墳

位置：大日山 35 号墳から北東の長尾池へのびる尾根の中腹、前山B X 9号墳西側

墳丘：円墳（径約 7 m）

石室：横穴式石室（両袖式）

方位：南方向に開口

時期：6世紀

整備：平成 21 年度修景工事（石室埋戻し）

備考：落ち込んでいる石材付近で 6 世紀代の須恵器（瓶類体部・瓶類の蓋など）出土。

内容：天井石ではなく、石室（玄室）内に長さ 0.7 m ほどの石材が多数落ち込んでいる状態であった。玄室の北東隅と南西隅の一部石積みが残存しており（高さ 0.5 m 程度）、ほぼ中央に羨道をもつ両袖式の横穴式石室を想定できる。石室内には川原石（玉石）が含まれるため、本来川原石を敷いていた可能性がある。

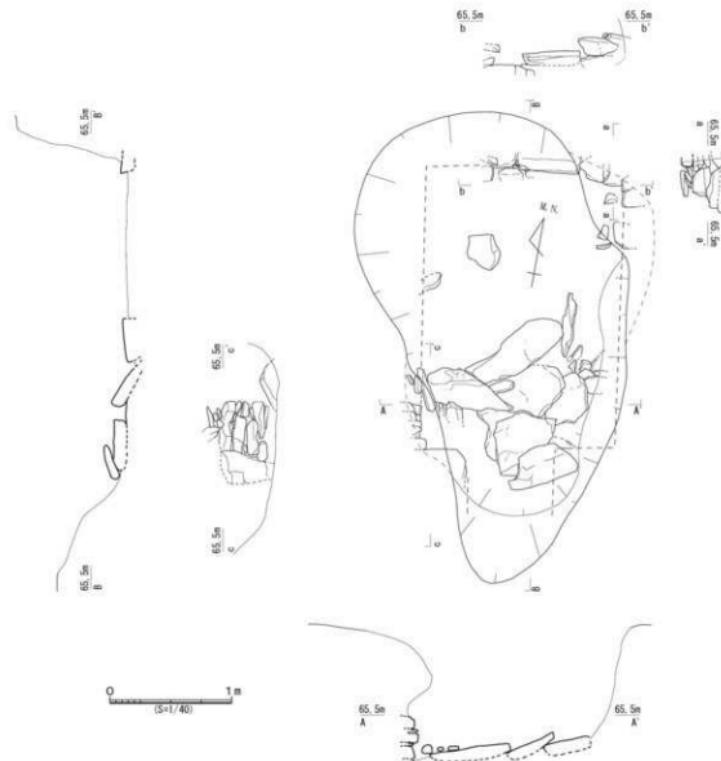


図 102 前山B 201号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

21. 前山B X 9号墳

位置：大日山35号墳から北東の長尾池へのびる尾根の中腹、前山B 201号墳東側・B 200号墳北側

墳丘：円墳（長径約6.5m×短径約6m）

石室：不明（横穴式石室か）

方位：南東方向に開口か

時期：不明

整備：平成21年度修景工事（盗掘坑埋戻し）

備考：盗掘坑内からは土師器細片1点及び断面方形の鉄釘状の鉄製品が出土。

内容：盗掘坑内に一部石材が見えるが、石室を構成している石材かどうか判別できなかった。盗掘坑の方向から南東側に開口する石室の可能性が高く、露出している石材は奥壁の一部である可能性がある。近現代の磁器が多数出土しており、そのうちの1点に「岐895」と書かれた化粧品瓶が含まれる。これは岐阜県で戦時中に作られた統制陶器の生産者表示番号（統制番号）と考えられる。

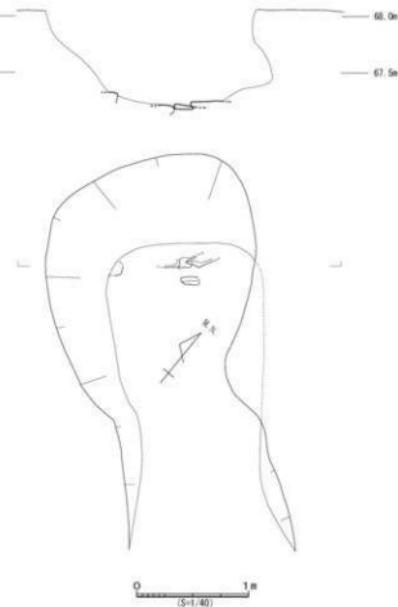


図103 前山B X 9号墳盜掘坑 (S = 1 / 40)

22. 前山 B 200 号墳

位置：大日山 35 号墳から北東へのびる尾根の中腹、前山 B X 10 号墳東側・B X 9 号墳南側

墳丘：円墳（径約 9 m）

石室：横穴式石室（左片袖傾向）

玄室長約 2.2 m、幅約 1.6 ~ 1.9 m、羨道（玄室前道？）幅約 1.0 m

方位：南東方向に開口

時期：不明

整備：平成 22 年度修景工事（石室埋戻し）

備考：中央に盗掘坑があり、天井石は取り去られている。

内容：石室北東側の石積みは 1 m ほど残存していることが確認できるが、他の部分は崩れが大きい。南東側に取り付く羨道部は埋没している。石積みは、面をもった石材を平積みしている。

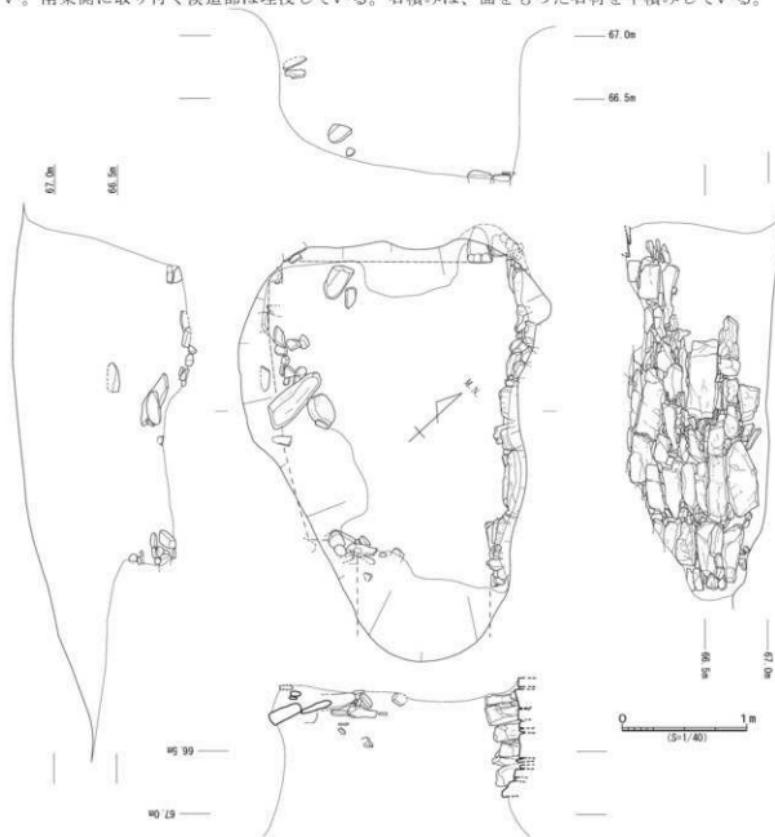


図 104 前山 B 200 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

23. 前山B X 10号墳

位置：大日山35号墳から北東の長尾池へのびる尾根の中腹、前山B 200号墳西側

墳丘：円墳（長径7.5m×短径6m）

石室：小型の横穴式石室（玄室の長軸約2.0m、短軸約1.5m）

方位：南もしくは西方向に開口

時期：不明

整備：平成22年度修景工事（石室埋戻し）

備考：中央に盃掘坑があり、天井石は取り去られている。

内容：東側側壁は約0.8m残存しているが、それ以外の石積みは大きく崩れている。石積みは、面をもった石材を平積みしているが、正方形に近い小さい石材多く使用している。羨道（玄室前道）部が確認できなかつたため、石室プランは確定できなかつた。南側に羨道部が取り付く石室、もしくは西側に羨道部があるT字形石室の可能性があり、前者ならば検出した南東部の石材は玄室前道基石となる。南東部の石材付近では小礫が多く、閉塞に使用した可能性もある。石室北壁付近で形象埴輪片が1点出土した。また、隣接する前山B X 9号墳と同様に、石室内からは昭和前半の陶磁器やガラス、鉄製品が廃棄されたような状態で多く出土した。

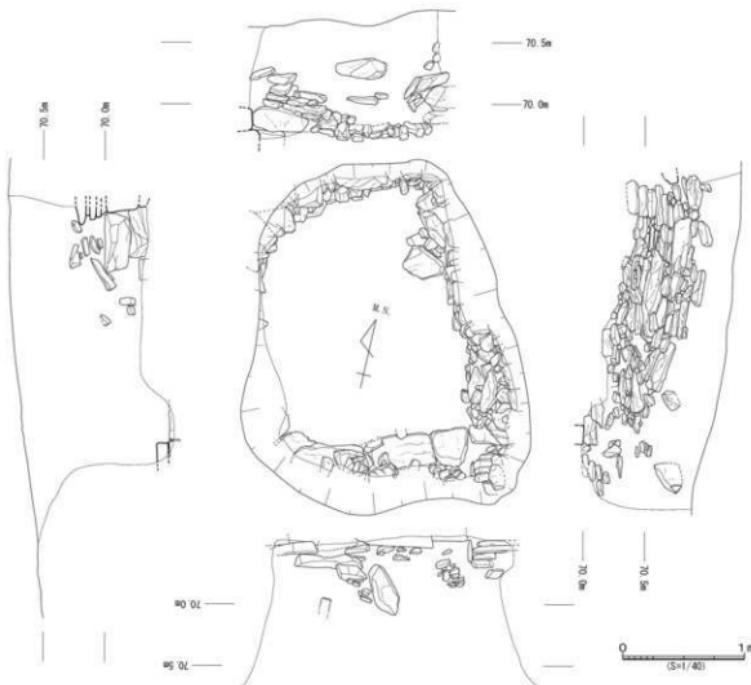


図105 前山B X 10号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

24. 大日山 12 号墳

位置：大日山 35 号墳から北東の長尾池へのびる尾根の中腹、大日山 17 号墳南側
墳丘：円墳（径約 7 m）

石室：小型の横穴式石室（玄室は一辺約 1.7 m 四方のほぼ正方形）

方位：南東方向に開口か

時期：6 世紀前葉

整備：平成 22 年度修景工事（石室埋戻し）

備考：中央に盜掘坑があり、墳丘西側裾部は園路により少し削られている。

内容：石室の各面とも崩れが大きく、石積みは約 0.8 m ほど残存している部分もあるが、石材が抜け落ちたり、張り出したりしている箇所が多い。全体的に小さな石材を使用している。天井石は取り去られており、羨道部は埋没している。墳丘南東側に石材が多く露出し、羨道部の石材の可能性があり、南東側の中央付近に羨道部が取り付くと想定できる。この石材周辺で多数の須恵器杯の破片が出土した。これらは墳丘上に置かれたものである可能性もあるが、同地点から石室内の敷石に使用したと推測できる玉石も多く認められることから、盜掘時に石室内からかき出された遺物であると推察できる。石積みの上半部付近で須恵器甕の体部片が 3 点出土した。出土遺物から 6 世紀前葉に築造されたと推測できる（一部追葬の可能性がある 6 世紀中葉の遺物含む）。

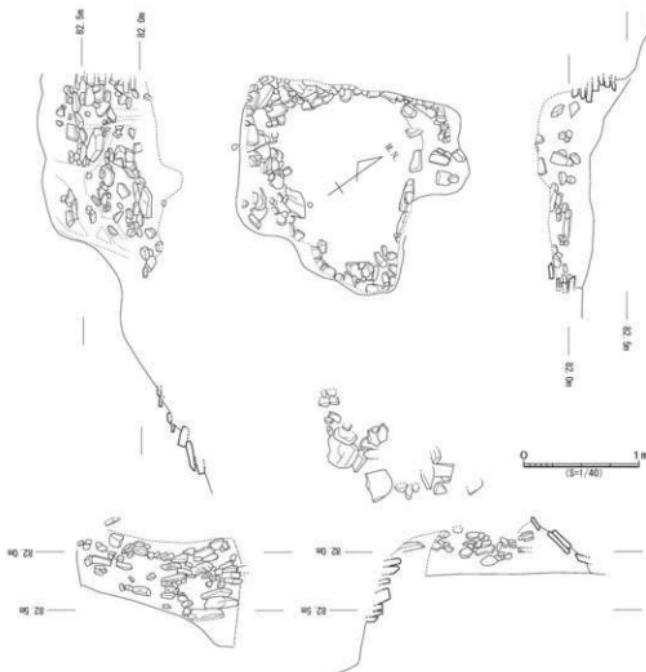


図 106 大日山 12 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

25. 大日山 14 号墳

位置：大日山 35 号墳から北東の長尾池へのびる尾根の中腹、大日山 15 号墳北西側

墳丘：円墳（径約 8 m）

石室：小型の横穴式石室（T 字形石室か）、玄室は長軸約 2.0 m、短軸約 1.3 m

方位：東方向に開口か

時期：6 世紀前葉

整備：平成 22 年度修景工事（石室埋戻し）

備考：墳丘南側裾部は園路により少し削られ、墳丘東側も若干掘り込まれている。

内容：墳丘中央やや南寄りに盃掘坑があり、天井石は取り去られている。石積みは、北側と西側は約 0.4m 残存している箇所があるが、全体的に大きく崩れている。墳丘東側には石材が集中して認められるので、羨道部の可能性が高く、東側に羨道部が取り付く T 字形石室であると推定できる。石材は比較的小さいものが多く使用しているため、平積みに見える箇所も小口積みに見え

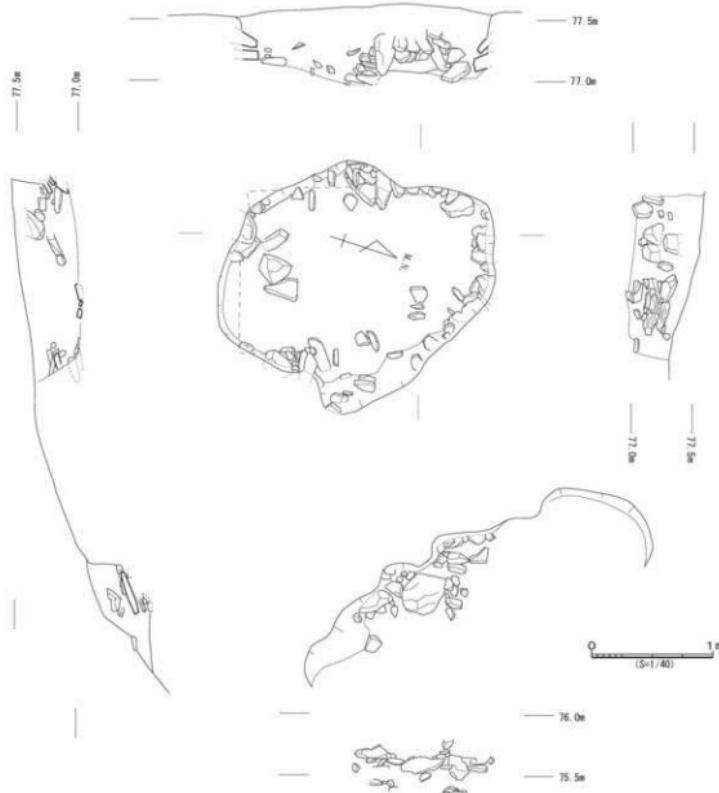


図 107 大日山 14 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

る箇所も存在する。墳丘上の平坦面の北西側には少し凹みがあり、石材の一部が露出していた。墳丘中央部の石室の石材に比べて大きい石材が確認できる。並べられたように検出できたので、石室がもう1基造られていた可能性がある。石材の並べ方から北東—南西に主軸をもつと考えられる。石室内と北西側の石材周辺で6世紀前葉と推定できる須恵器片がそれぞれ1点ずつ出土した。また、大日山14号墳と15号墳間の園路で多数の須恵器甕と少量の杯・高杯（6世紀中葉か）を表採した。

26. 大日山15号墳

位置：大日山35号墳から北東の長尾池へのびる尾根中腹、大日山14号墳南東側

墳丘：円墳（径約5m）

石室：堅穴式石室か（長1.7m）

方位：南—北

時期：不明

整備：平成24年度修景工事（石室埋戻し）

備考：墳頂部に長軸2m、短軸1.2mの楕円形の盗掘坑（そこから石室内に土砂が流入）

内容：天井石及び側壁の一部が露出していた。石室は南北方向に軸をとり、東側では側壁の板石積みが確認できたが、南北方向では板石の天井石があり、その下には空洞が確認された。形状は不明であるが、空洞奥にある側壁との内法を測ると、石室の長軸は1.7mであると考えられる。また、立地上、山側の西側には開口部があるとは考えにくく、山側にも壁面があると仮定すると堅穴式石室の可能性がある。清掃時において、遺物は出土しなかった。

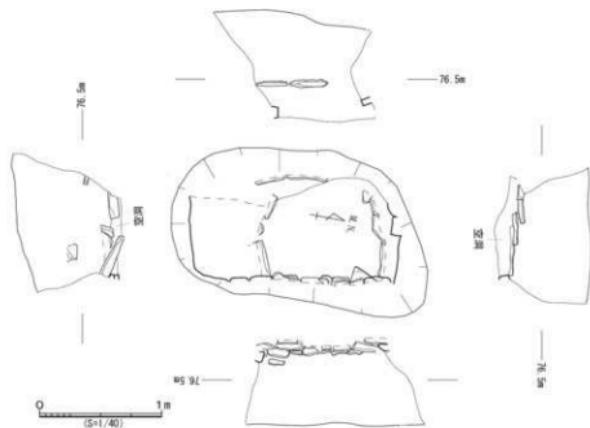


図108 大日山15号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

27. 大日山 17 号墳

位置：大日山 35 号墳から北東の長尾池へのびる尾根の中腹、大日山 14 号墳西側

墳丘：円墳（径約 10 m）

石室：横穴式石室、一辺約 2.1 ~ 2.2 m のほぼ正方形の玄室

方位：北西方向に開口か

時期：不明

整備：平成 22 年度修景工事（石室埋戻し）

備考：墳丘東側据部は園路により少し削られている。

内容：中央西寄りに盜掘坑があり、天井石は持ち去られ、羨道部は埋没している。石積みは崩れしており、現状では一部の石材しか確認できない。その北側に羨道部が取り付く可能性がある。

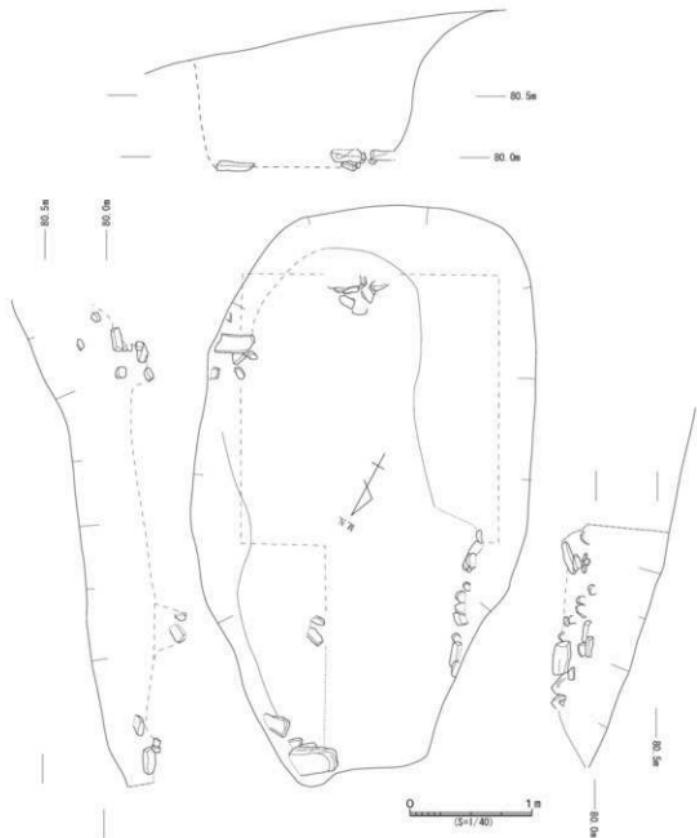


図 109 大日山 17 号墳 石室実測図 (S = 1 / 40)

第 II 部

保存整備編

第1章 説明板・案内標識の設置

1 説明板・案内標識の設置

(1) 業務の目的と事業経緯と経過

特別史跡岩橋千塚古墳群の説明板・案内標識は昭和46年の紀伊風土記の丘の開園時に設置され、その後、毀損・滅失したものを中心に補充をはかってきたが。その結果、30年以上の間に作られた形の異なる数種の説明板・案内標識が乱立する様相となっていた。

そこで、平成19年度から園内全域を対象とした説明板設置の全体計画を作成し、平成20年度から古墳群全域に説明板と案内標識を設置する業務を開始し、統一したデザインで設計し設置している。平成21年から平成26年度においては、古墳説明板15基、地区説明板9基、案内標識50基、保存公開施設の説明板1基を設置した。

(2) 古墳群の説明板・案内標識の設置

説明板は古墳群全体と地区説明板、古墳（遺構）説明板の3種を製作し、古墳群全体に配置することとした。このうち古墳群全体の説明板は平成20年度に設置し、平成21年度からは地区説明板と古墳（遺構）説明板を設置した。地区説明板は一定範囲の古墳のまとまりを対象に地図入りの説明板を作成し、古墳等説明板は石室公開古墳の説明の補助のほか、埋戻した古墳の説明、展望解説などを行うものである。古墳の入口に置くため、場所を取らず、見学の妨げにならない位置を選び倒れづらいものを製作した。

案内標識は約65万m²の敷地内に約430基の古墳が分布する当古墳群において、道に迷わず古墳を見学できるように便宜を圖るため設置している。案内標識はステンレス製でこげ茶色に白文字の表記を行い、園路・古墳見学路沿いにコンクリート基礎を埋め込み、ポールを立てて設置している。

説明板・案内標識の仕様については、図を参照していただきたい。

(3) 保存公開施設の説明板

保存公開施設の説明板として、平成26年度に大日山35号墳の東造出に設置した復元埴輪についての説明板を設置した。説明板はセラミック製で60cm四方の盤面に、古墳名と文章約200～300文字のほか、写真・図を入れて焼き付けている。説明板は台座となる黒御影石に貼り付けて据え置いた。説明板は露天で、寒暖差のある山中に設置するため、吸水率が低く、退色しにくく耐候性に優れた素材としてセラミック板を使用している。説明板の仕様については、図を参照していただきたい。

- 地区説明板設置所
- 古墳説明板 15箇所
- 防衛古墳説明版 1箇所
- ◆ 古墳等案内看板 53箇所

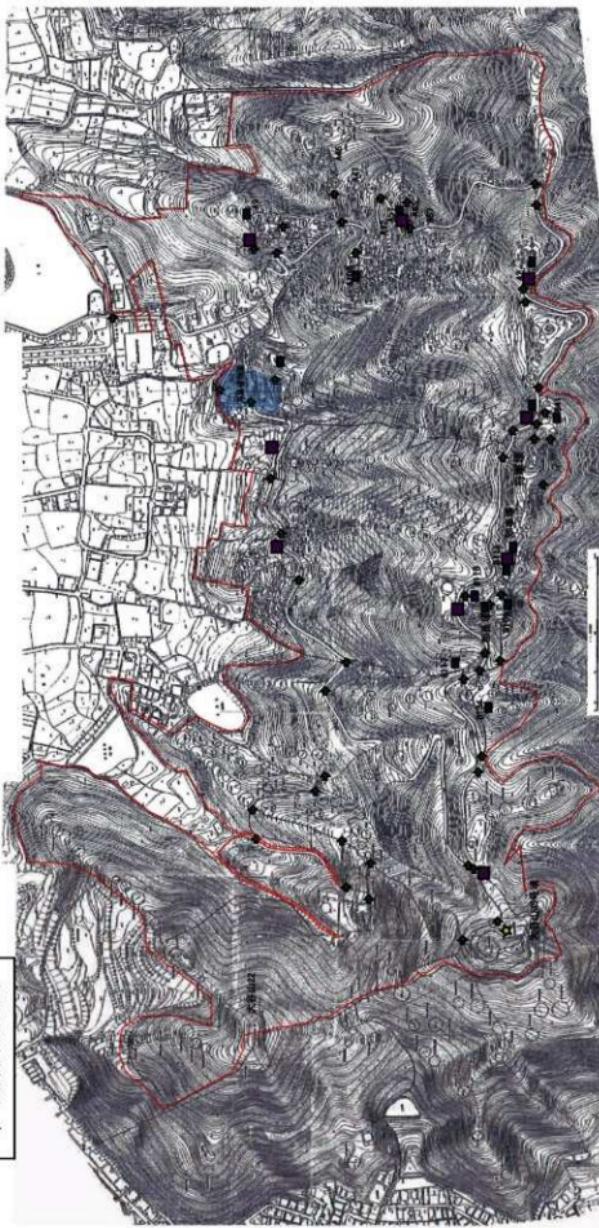
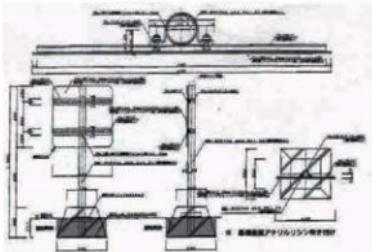


図 110 説明版・案内板の設置位置

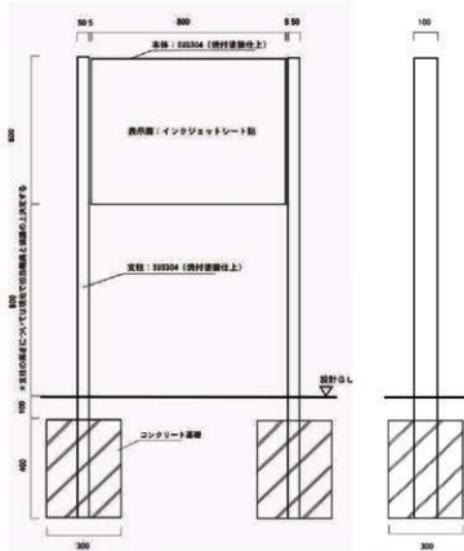
表 10 説明版・案内標識一覧

年度	No.	設置古墳名等	説明内容	全體規格 (mm)	板面規格 (mm)	期間	委託業者	実績金額	現状変更 (申請・許可・終了報告)
特別史跡岩橋千塚古墳群説明版（ステンレス製・立看板タイプ）									
古墳説明版									
21	1	岩橋千塚から南の眺望	井辺・寺内・山東地区の説明						
21	2	岩橋千塚から北の眺望							
21	3	前山B41号墳	横穴式石室						
21	4	知事塚古墳 (前山B67号墳)	横穴式石室 ・小型横穴式石室 ・竪穴式石室						
21	5	前山B11号墳	横穴式石室						
21	6	前山B109号墳	軋立貝形古墳 ・横穴式石室						
21	7	郡長塚古墳 (前山B112号墳)	横穴式石室						
21	8	前山B118号墳	横穴式石室	1500×600	600×600	H21.12.15 ～ H22.2.25	株式会社ムラカミ大 阪支店	1,837,300円	記風第62号 (H21.10.6) 21受付財第4号の257 (H21.11.20) 記風第21号 (H22.8)
21	9	前山B134号墳	横穴式石室 (T字形石室)						
21	10	前山B117号墳	軋立貝形古墳 ・横穴式石室						
22	11	前山A9号墳	竪穴式石室						
22	12	前山A65号墳	竪穴式石室2基						
22	13	万葉植物園展望台	展望台からの眺望						
22	14	前山A108号	竪穴式石室						
23	15	万葉植物園説明版							
						H22.12.22 ～ H23.3.11	株式会社 エイ・ア・ワイ	1,449,600円	記風第57号 (H22.11.30) 22受付財第4号の1729 (H23.1.21) 記風第42号 (H23.7.14)
						H22.12.22 ～ H23.3.30	株式会社 エイ・ア・ワイ 二	436,000円	記風第70号 (H23.2.16) 22受付財第4号の2075 (H23.3.18) 記風第78号 (H23.12.7)
							株式会社 エイ・ア・ワイ 二	1,183,313円	記風第43号 (H23.7.5) 23受付財第4号の7568 (H23.9.16) 記風第102号 (H25.1.16)

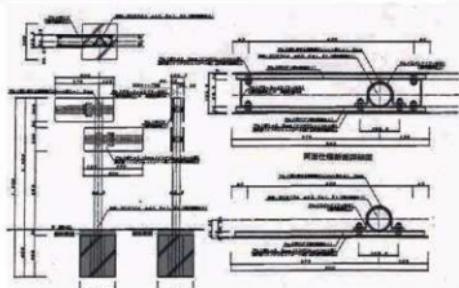
年度	No.	設置古墳名等	説明内容	全体規格 (mm)	板面規格 (mm)	期間	委託業者	実積金額	現状変更 (申請・許可・終了報告)
地区説明板									
23	1	花木園東部地区							
23	2	花木園地区の古墳							
23	3	前山A地区 前山A13号墳と 周辺の古墳							
23	4	前山A地区 前山A2号墳と 周辺の古墳							
23	5	前山B地区 移築古墳と 周辺の古墳		1900(地上部1400) ×910	600×800	H24. 1. 17 ～3. 31	株式会社 エイ・アイ・ワイエ ヌ	1,153,213円	紀風第43号 (H23. 7. 5) 23受庁財第4号の758 (H23. 9. 16) 紀風第102号 (H25. 1. 16)
23	6	前山B地区 郡長塚古墳と 周辺の古墳							
23	7	前山B地区 知事塚古墳と 周辺古墳							
25	8	大日山地区	地区内の 古墳の分布			H26. 3. 19 ～3. 30	株式会社 エイ・アイ・ワイエ ヌ	377,805円	紀風第89号 (H26. 1. 22) 25受庁財第4号の2026 (H26. 3. 18) 紀風第102号 (H26. 7. 31)
25	9	前山A地区							
年度	No.	設置古墳名等	説明内容	全体規格 (mm)	板面規格 (mm)	期間	委託業者	実積金額	現状変更 (申請・許可・終了報告)
室内標識									
21		15基				H21. 12. 15 ～2. 25	株式会社ムヤマ 大阪支店	1,837,300円	紀風第57号 (H22. 11. 30) 22受庁財第4号の1729 (H23. 1. 21) 紀風第42号 (H23. 7. 14)
22		21基				H22. 12. 22 ～ H23. 3. 31	株式会社ムヤマ 大阪支店	1,448,900円	紀風第43号 (H23. 7. 5) 23受庁財第4号の758 (H23. 9. 16) 紀風第102号 (H25. 1. 16)
22		6基		1500×500 ～900	200×500	H22. 12. 22 ～ H23. 3. 29	株式会社 エイ・アイ・ワイエ ヌ	300,300円	紀風第70号 (H23. 2. 16) 22受庁財第4号の2075 (H23. 3. 18) 紀風第78号 (H23. 12. 7)
22		5基				H22. 12. 22 ～ H23. 3. 30	株式会社 エイ・アイ・ワイエ ヌ	420,000円	
23		3基と標識板追加5 基				H22. 12. 22 ～ H23. 3. 31	株式会社 エイ・アイ・ワイエ ヌ	1,182,213円	紀風第43号 (H23. 7. 5) 23受庁財第4号の758 (H23. 9. 16) 紀風第102号 (H25. 1. 16)
保存公開施設設置古墳の説明板 (セラミック製・額置きタイプ)									
26	1基	大日山35号墳 東造出復元埴輪		810×810	600×600	～	岩尾磁器工業 株式会社	1,080,000円	紀風第146号 (H26. 11. 18) 26受庁財第4号の1657



古墳説明板仕様



地区説明板仕様



案内標識仕様

図 111 説明版・案内標識の仕様

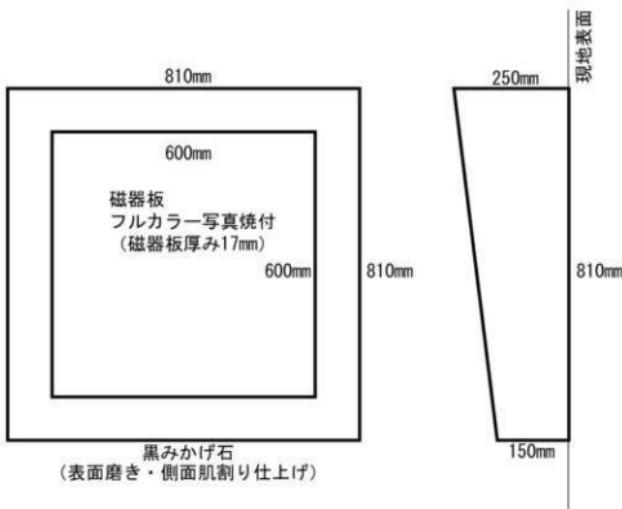


図 112 陶板の仕様及び見本

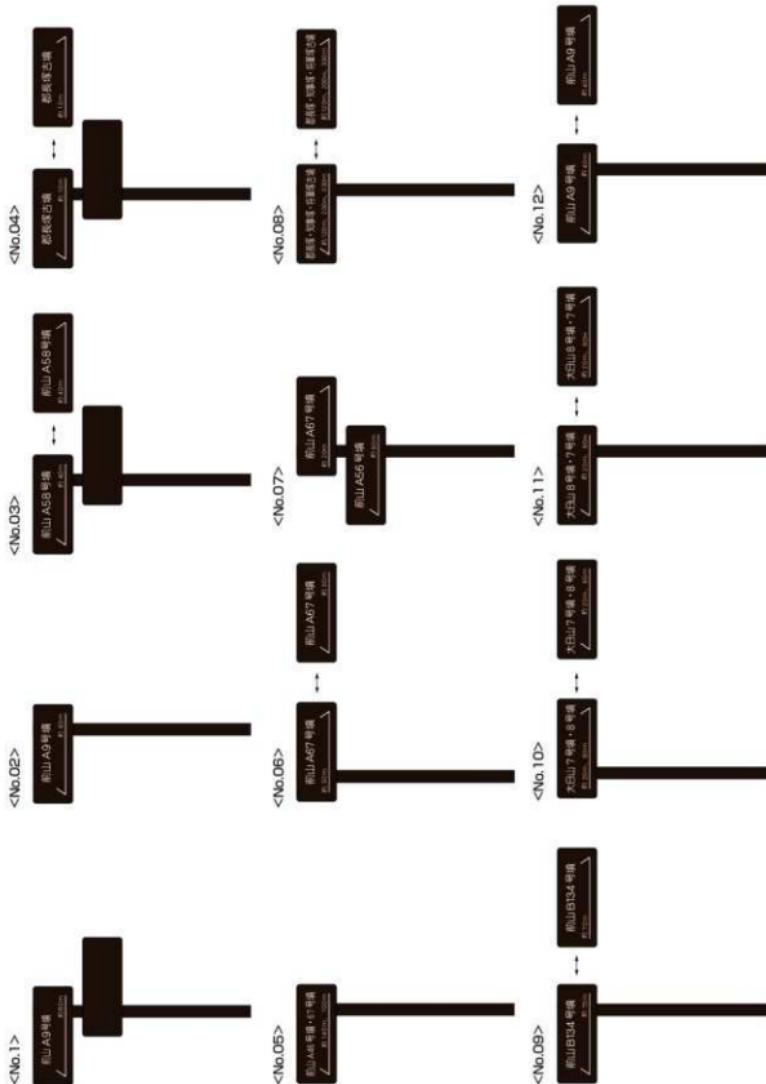


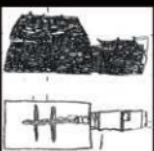
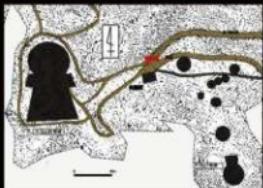
図 113 案内標識の例

大日山地区 大日山35号墳と周辺の古墳

大日山は、岩橋山塊の西端に位置する標高141m の山塊で、眼下には和歌山平野と紀淡海峡が広がります。山塊の頂上には、大日山35号墳が造られており、その周辺には小型の前方後円墳である大日山1号墳や円墳が尾根上に分布しています。

大日山35号墳は、盾形状の墓壇の上に二段築成の墳丘からなる、6世紀前半に造られた全長105m の県内最大規模の前方後円墳です。基壇及び墳丘の各段の平坦面には円筒埴輪がめぐり、さらに後円部と前方部の間に造られた突出部分には、円筒埴輪列で囲まれた空間に翼を広げた鳥形埴輪などの形象埴輪等が並へられていました。

後円部には西側に入口をもつ横穴式石室があり、石棚や石梁が設けられています。



大日山35号墳 横穴式石室

平成26年3月 和歌山県教育委員会

図 114 説明板の見本（大日山地区）



写真 4 地区説明版の設置状況（大日山地区）

第2章 石室保存・公開施設の設置

1 前山A 46号墳・將軍塚古墳（前山B 53号墳）

目的

昭和46（1971）年の開館以来、前山A 46号墳・將軍塚古墳は大型の岩橋型横穴式石室を自由に見学できる代表的な公開古墳であったが、石室内部は日中でも暗く、来園者による見学をより容易とするために、石室内を照らす照明施設を設置する。

業務内容

平成20年度に設置工事のための実施設計を行い、平成21年度にソーラーパネルを利用した照明施設を設置した。

平成20年度

業務名：平成20年度公開古墳照明施設等実施設計書作成業務

契約額：278,250円

業務期間：平成20年12月24日～平成21年2月20日

契約先：株式会社 空間文化開発機構

平成21年度

業務名：平成21年度公開古墳照明施設設置工事

契約額：2,909,881円

業務期間：平成22年1月23日～平成22年3月12日

契約先：株式会社 山本二三男電気商会

施設の仕様

ソーラー発電照明装置：前山A 46号墳では南東の墳丘外部に発電装置を設け、石室まで配線をし、石室内部に照明施設を設置した。將軍塚古墳では墳頂上の修景盛土上に発電装置を設置し、石室内に照明施設を設置した。石室入口部にあるスイッチを押すことで、2分間、石室の電灯が発光する。

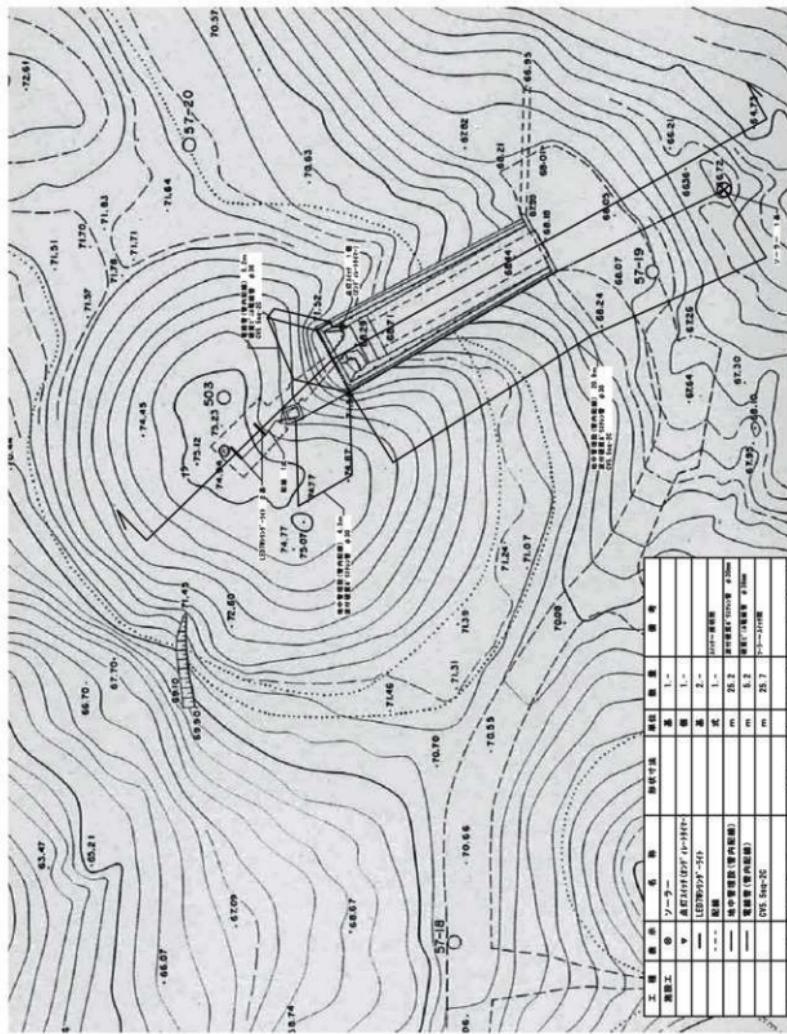


图 115 前山 A 46 号填 照明施設設置工事平面図

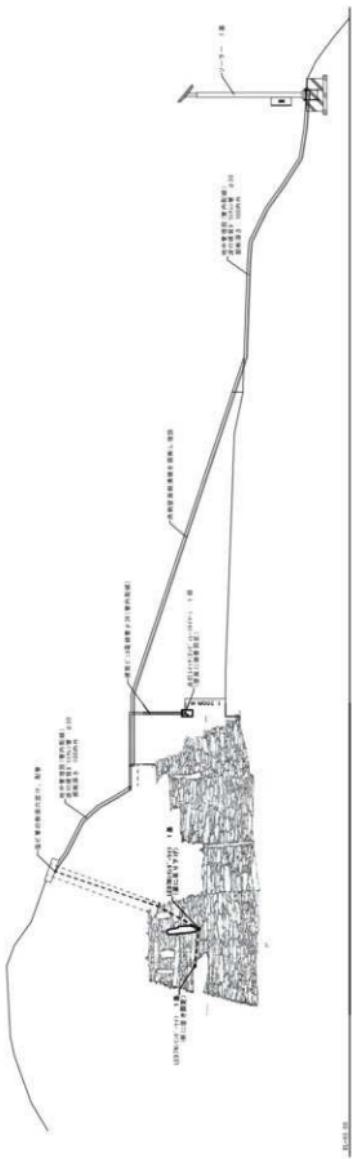


图 116 前山 A 46 号填 照明施設設置工事総断図

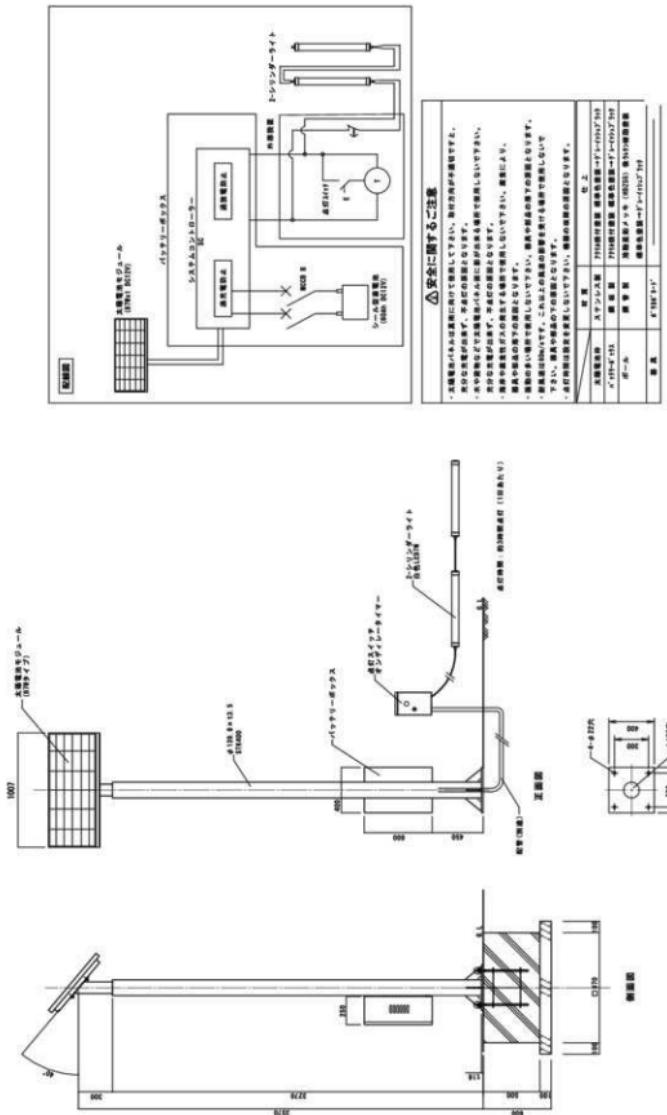
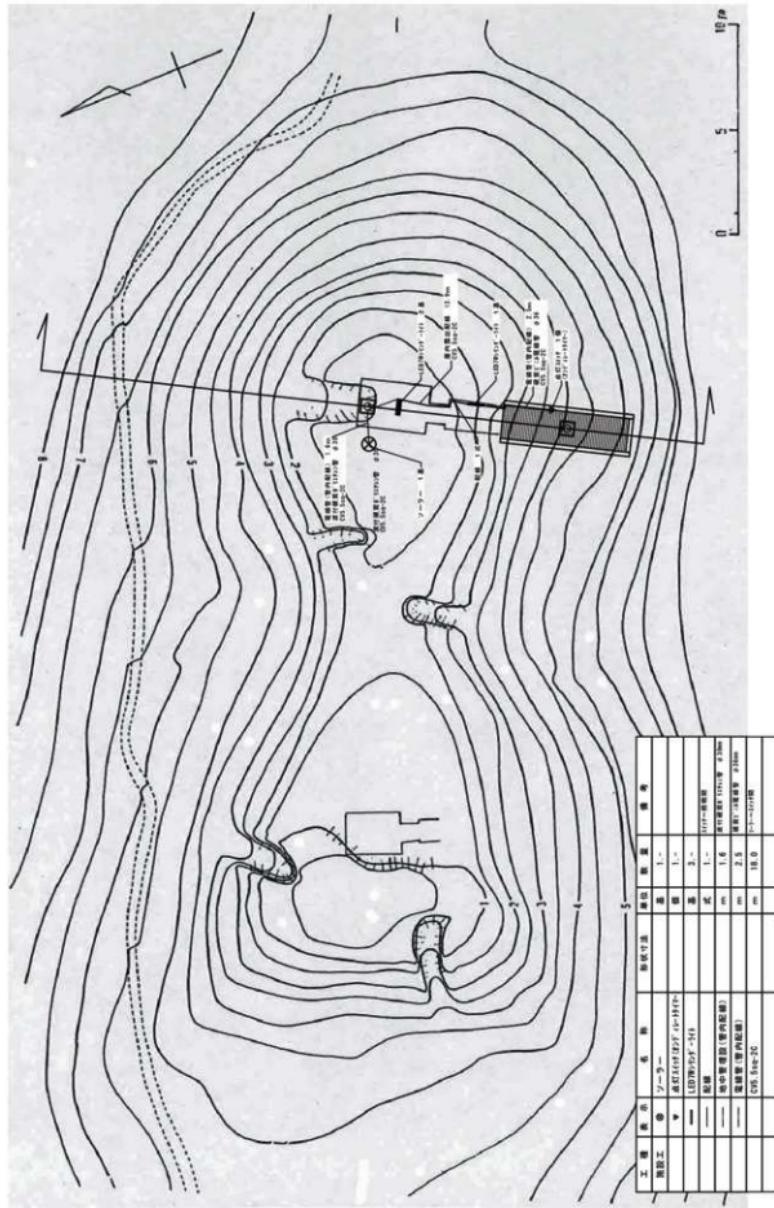


図 117 前山 A 46 号墳 照明工事 電気設備詳細図

図 118 将軍塚古墳 照明工事平面図



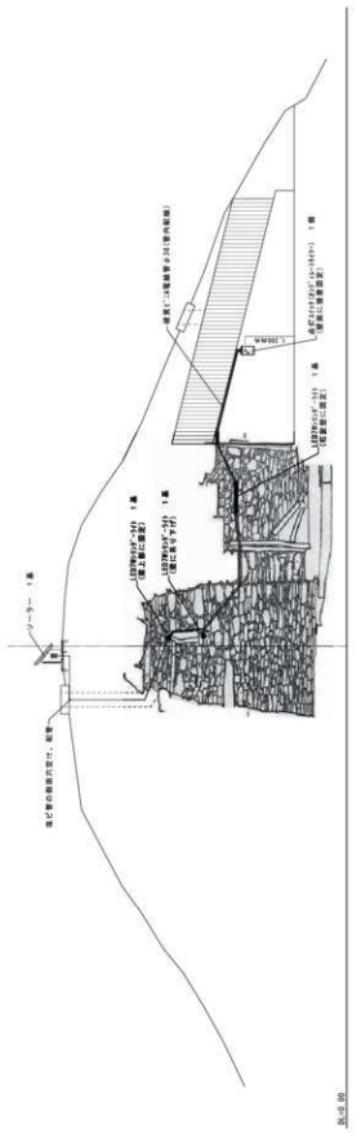
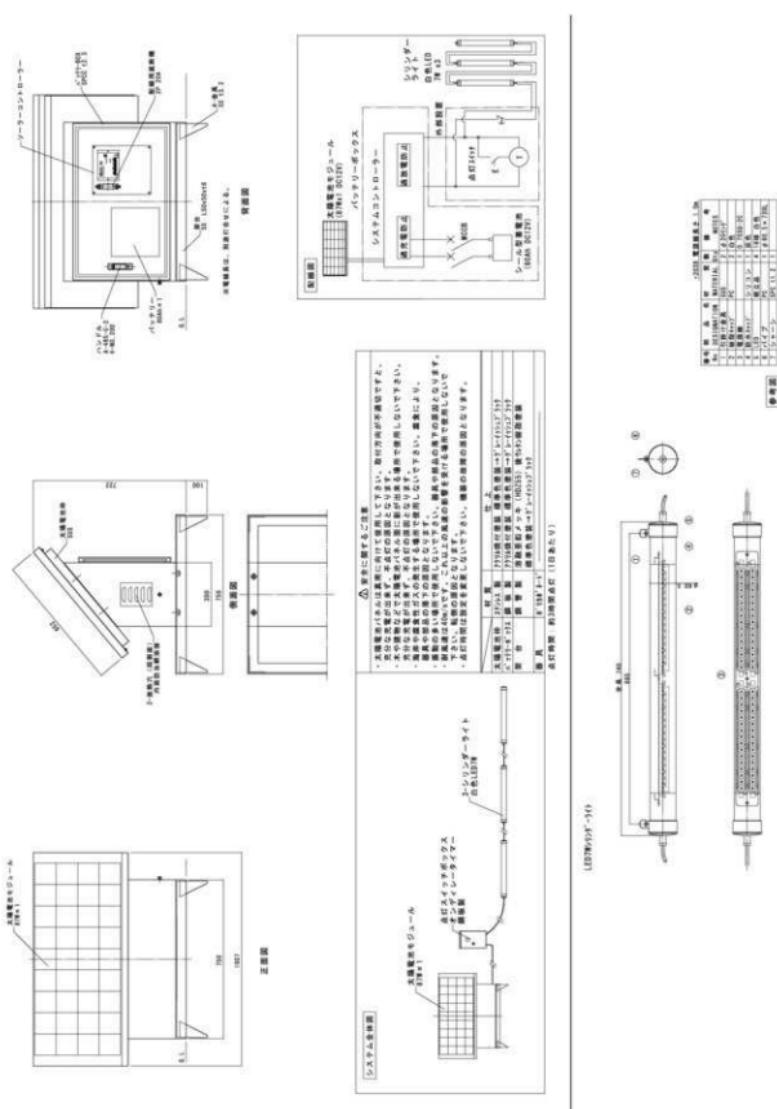


図119 将軍塚古墳 照明工事縦断図

図 120 将軍塚古墳 照明工事電気設備詳細図



2 前山A 13号墳

目的

前山A 13号墳は岩橋型横穴式石室を見学できる公開古墳の一つであり、見学者の便宜を図るために石室内を照らす照明施設を設置する。

業務内容

平成18年度及び20年度に石室・羨道部・排水溝の発掘調査を実施し、平成21年度に保存整備のための実施設計を行い、平成22年度にソーラーパネルを利用した照明装置を設置した。あわせて、古墳上にあった盜掘部の埋戻しも行った。

平成21年度

業務名：平成21年度公開古墳照明施設等実施設計書作成業務

契約額：172,200円

業務期間：平成21年12月1日～平成22年1月29日

契約先：株式会社 空間文化開発機構

平成22年度

業務名：平成22年度公開古墳照明施設設置工事

契約額：2,037,000円

業務期間：平成23年1月14日～平成23年3月18日

契約先：株式会社 山本二三男電気商会

施設の仕様

ソーラー発電照明装置：古墳東部の墳丘外部に発電装置を設け、石室まで配線をして照明器具を設置した。人感センサーのため、石室内部に見学者が近づくと、自動的に電灯が発光する。

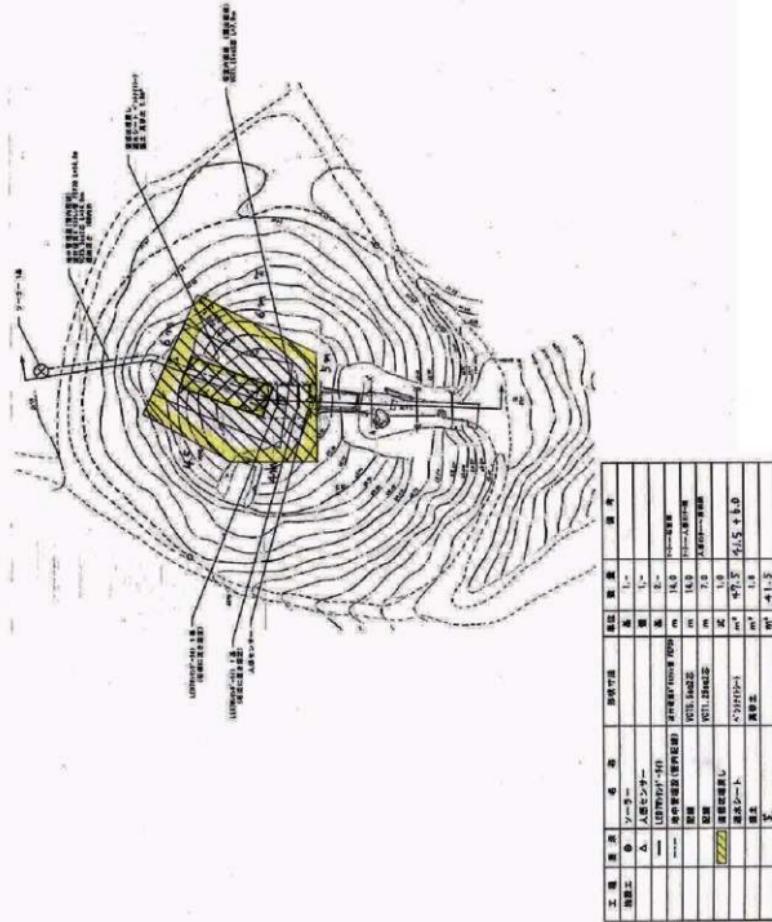
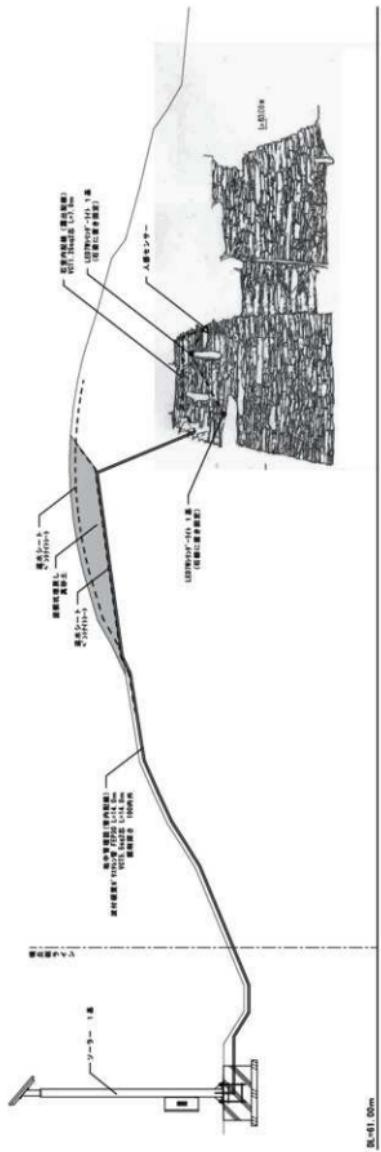


図 121 前山 A 13号墳 照明工事平面図

図 122 前山 A 13 号墳 照明工事縦断図



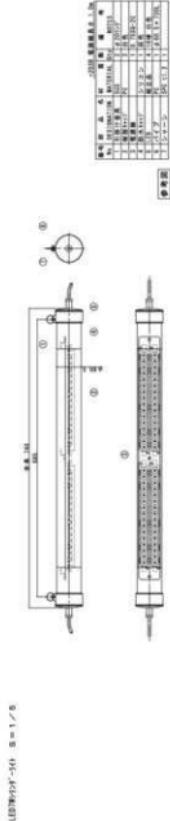
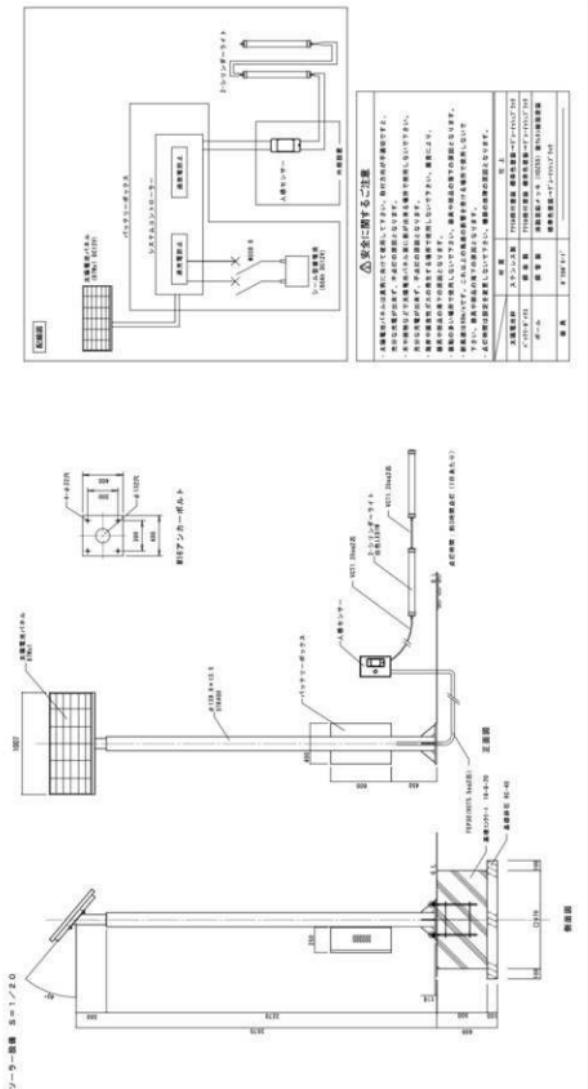


図 123 前山 A 13 号墳 照明工事 設備詳細図

第3章 古墳保存修景工事（石室・盜掘坑の埋戻しと墳丘盛土）

1 業務の目的と方法・経緯と経過

古墳保存修景工事は、崩壊の危機にある石室の保護や、墳丘を本来の姿に近い形に復旧し古墳群の景観を整える目的で古墳の主体部・盜掘坑の埋戻しを継続的に実施している事業である。

盜掘により天井石が失われた古墳は、石室の石組が見えるものと、盜掘坑しか見えないものがある。石室が見えるものについては、既に毀損しているものと、今後毀損が進む可能性が高いものを対象に石室の記録を残して埋戻しを行った。毀損が進むものの判断については、平成17年度以降、紀伊風土記の丘で順次踏査を進め対象を検討した。埋戻し対象としたものは、崩壊の進行している横穴式石室を中心としており、持ち送り構造が残るものや尾根の上方からの土圧により壁面が著しく膨らんだものを現地で確認して選定している。また、盜掘等により既に崩壊している石室・盜掘坑は、園路沿いにある古墳を優先的に埋め戻すとともに、工事の効率を考慮し地区ごとにまとまった古墳を選定し、墳丘形状を復元して表示している。石室の埋戻しには砂を用い、表面は真砂土を用い修景した。墳丘の復元には真砂土を用いた。

事業対象とする古墳については、埋戻し対象部分について、草刈・清掃を行ったうえで、図化・写真撮影を行い、現状の記録を残したうえで埋め戻した（第I部第6章参照）。土砂は舗装された園路をダンプトラックで運び、各古墳へは人力小車運搬で運んだ。石室の露出した部分は基本的に砂で埋戻し、盜掘坑及び墳丘盛土は真砂土で埋め戻した。

砂は石室保護のため塩分のないものあるいは脱塩処理したものを使い、填圧は人力で行った。墳丘盛土は周辺の古墳や、盜掘により散乱した土量を参考に、真砂土で盛り上げた。埋め戻した盛土には種子を埋め込んだネットをかぶせ、土の流失を防いだ。土工については、次の3つの内容に大別して実施した。

1. 石室埋戻し
2. 盜掘坑埋戻し
3. 墳丘盛土整形

各年度の事業対象古墳

平成21年度は、前山B地区で前山B 72・B 120・B 125・B 148・B 160・B 204・B 136・B 201・BX 9・BX 100・BX 101号墳の計11基の古墳の石室・盜掘坑を埋め戻した。

平成22年度は、前山B地区で前山B 200・BX 100号墳の2基、大日山地区で大日山17・12・14号墳の3基、計5基の古墳の石室・盜掘坑を埋め戻した。

平成23年度は、前山B地区で前山B 175・B 164・B 170・B 172・B 240号墳の計5基の古墳の石室・盜掘坑を埋め戻した。

平成24年度は、前山B地区の前山B 241・B 174・B 176号墳の3基、大日山地区で大日山15号墳の1基、計4基の古墳の石室・盜掘坑を埋め戻した。

平成25年度は、前山B地区で前山B X 16号墳の石室埋め戻しと前山A地区で前山A 17号墳の墳丘の盛土整形を行った。

平成26年度は、前山B地区で前山B 167の石室埋戻しと前山B 102号墳で墳丘の盛土整形を行った。各古墳の事業内容及び関連する作業の詳細については表を参照していただきたい。

表 11 各年度における修景工事対象古墳一覧

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
実績金額	5,840,100円	2,620,000円	2,278,500円	1,981,500円	1,661,250円	562,680円
委託業者	有限会社：丸善商店	有限会社：ヨガワ園芸	有限会社：ヨガワ園芸	庄司建設工業	庄司建設工業	有限会社：ヨガワ園芸
契約年月日	H22.2.12	H23.2.15	H24.2.15	H25.1.30	H26.2.28	H27.2.12
完成日	H22.3.18	H23.3.29	H24.3.31	H25.3.31	H26.3.27	H27.3.18
現状変更申請	記録番号9号 (H22.1.21)	記録番号66号 (H23.1.19)	記録番号90号 (H24.1.8)	記録第103号 (H25.1.16)	記録第125号 (H25.12.12)	記録第103号 (H26.7.31)
現状変更許可	21受付許可 4号 (H22.2.19)	23受付許可 1号 (H22.2.28)	23受付許可 7号 (H24.2.17)	24受付許可 9号 (H24.2.21)	25受付許可 1号 (H25.2.27)	26受付許可 15号 (H26.9.8)
酒井要更新報告	記録番号4号 (H23.1.6)	記録番号88号 (H24.1.9)	記録番号101号 (H25.1.16)	記録第78号 (H25.11.15)	記録第15号 (H26.6.21)	—
前山B地区	前山B地区	前山B地区	前山B地区	前山B地区	前山B地区	前山B地区
前山B72	盜掘坑	前山B260	石室	前山B175	盜掘坑・填丘	前山B16
前山B120	石室・盜掘坑	前山B110	石室	前山B164	石室	前山B16
前山B125	石室	大日山地区	—	前山B170	石室	前山A17
前山B148	盜掘坑	大日山17	盜掘坑	前山B172	石室	大日山地区
前山B160	盜掘坑	大日山12	石室・填丘	前山B241	石室・盜掘坑	前山B167
前山B204	石室・盜掘坑	大日山14	盜掘坑・填丘	前山B174	石室	前山B102
前山B236	盜掘坑	—	—	前山B176	石室	前山A17
前山B201	石室・盜掘坑	—	—	—	—	—
前山B39	盜掘坑	—	—	—	—	—
前山BX100	盜掘坑	—	—	—	—	—
前山BK101	盜掘坑	—	—	—	—	—
対象古墳(基)	計	11	計	5	計	2

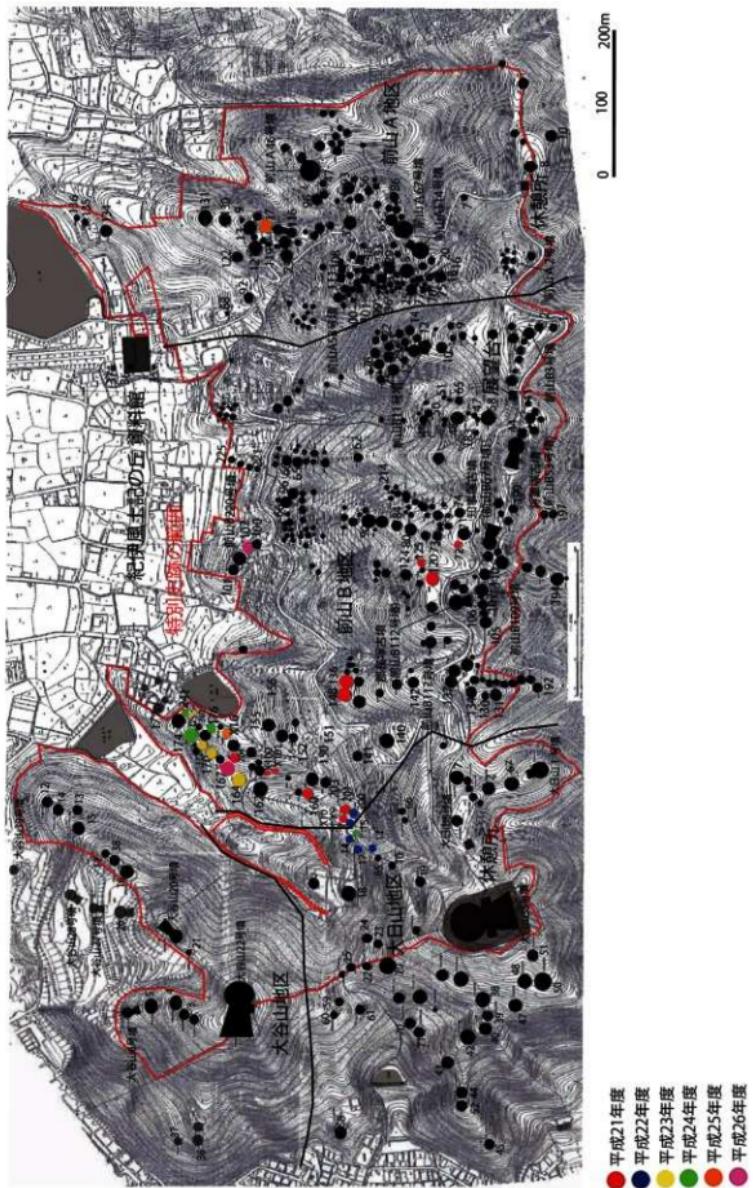


図124 保存修景対象古墳の位置

第4章 大日山35号墳の整備

1 復元整備の概要

(1) 大日山35号墳の整備概要

大日山35号墳は、発掘調査を平成15～18年度に実施し、発掘調査の成果に基づき、実施設計を作成し、墳丘を整備した。また、説明板設置や樹木伐採、東造出復元整備などを実施した。表12に整備事業一覧について掲載し、以下、整備の概要について述べる。

(2) 墳丘復元整備

墳丘復元整備のため、攪乱坑や盗掘坑を埋め戻し、古墳から崩れた土を切土し、盛土として転用するなどして、墳形を修景した。切土・盛土工事範囲では、芝などの根が大量に入る表土は盛土として利用できなかったため、一部土を購入して工事を実施した。発掘調査時の各調査区は、掘削土で埋め戻したが、円筒埴輪樹立箇所については、川砂などにより養生して埋め戻した。また、東造出（1トレンチ）・西造出（5トレンチ）は円筒埴輪や遺構面を養生して、その上に盛土を施し、削平・崩落箇所についても盛土を施して、造出を復元整備した。墳丘復元整備にあたって、墳丘上に張芝を施し、墳丘くびれ部を横断する形で模擬階段を設置した。墳丘へ登る既存園路の一部にも盛土を施し、模擬階段を設置した。造出付近には水除けの根切板を設置した。

(3) 石室保存修理

大日山35号墳の横穴式石室は、大きな崩落や毀損はなかったが、一部に破損や亀裂があったため、平成15年度に保存修理を実施した。石棚の一部が垂れ下がって、崩落する可能性があったため、繋縛・接着して復原した。また、袖部の石材が欠損していた部分については、近似石材を補充した。羨門上部の石材の亀裂箇所については、樹脂を充填した。

(4) 説明板製作・設置

大日山35号墳の周辺に計4基の説明板を設置した。設置箇所は、平成15年度に石室前1基・前方部南東隅1基、平成19年度に西造出1基、平成26年度に東造出1基である。いずれも白磁陶板（1枚の大きさは600mm×600mm）で、石室前・前方部南東隅は2枚、西造出・東造出は1枚使用している。台石は黒御影石製である。

(5) 樹木伐採

大日山35号墳の墳丘上及びその周辺の樹木を伐採した。まず、平成15年度の発掘調査前に調査区周辺のクヌギ・カシ・サクラなどの97本を伐採した。その後、平成19年度に墳丘整備にあたって、墳丘上の樹木225本を伐採した。

(6) 西造出の修復工事

平成24年6月21日の豪雨により、西造出西斜面の盛土部分について一部（3m四方程度）崩

表12 大日山35号墳整備工事一覧

平成15年度 大日山35号墳保存修理工事に伴う説明板製作設置業務委託		
契約業者・金額	(株)ステップス	2,751,000円
実施期間	平成15年11月12日～平成16年3月19日	
現状変更一申請：文第56号（平成15年4月17日）、許可：15委庁財第4号の88（平成15年5月23日）		
説明板2基設置（石室前・前方部南側）		
磁器板（フルカラー製版）	600×600×10mm	2枚使用
台石：白御影・上面磨き・側面削肌仕上げ・角面取り		
平成15年度 大日山35号墳内部石室保存修理業務委託		
契約業者・金額	中村石材工業(株)	892,500円
実施期間	平成15年11月12日～平成16年3月19日	
現状変更一申請：文第56号（平成15年4月17日）、許可：15委庁財第4号の88（平成15年5月23日）		
石室の石棚・表門部の破損石材の修理・復原と亀裂の樹脂注入		
石棚の垂れ下がった部分を繩替・接着		
袖部の石材欠損部に近似石材補充、表門上部の亀裂を樹脂充填		
平成15年度 大日山35号墳保存修理工事に伴う樹木伐採業務委託		
契約業者・金額	和海森林組合	2,677,500円
実施期間	平成15年6月13日～平成15年7月30日	
現状変更一申請：文第56号（平成15年4月17日）、許可：15委庁財第4号の88（平成15年5月23日）		
墳丘上のクヌギ・カシ・サクラ等 97本伐採		
平成17年度 大日山35号墳・前山A67号墳保存整備実施設計業務委託		
契約業者・金額	(株)空間文化開発機構	5,512,500円（前山A67号墳含む）
実施期間	平成18年2月21日～平成18年3月24日	
大日山35号墳の墳丘復元整備のための実施設計作成		
平成17年度 古墳保存修理工事		
契約業者・金額	(株)影山組	1,522,500円
実施期間	平成18年1月27日～平成18年3月12日	
現状変更一許可：17委庁財第4号の1677（平成18年2月17日）、終了報告：紀風第31号（平成18年5月17日）		
調査区（5・15・16トレンチ）の埋戻		
盛土78.4m ³ ・川砂37.8m ³ ・5トレンチ（西造出126m ³ ）は川砂による厚さ30cmの養生		
平成19年度 大日山35号墳保存修理工事		
契約業者・金額	(株)影山組	11,631,900円
実施期間	平成19年11月13日～平成20年3月28日	
現状変更一申請：文第33号(6)（平成19年8月14日）、許可：19委庁財第4号の923（平成19年9月5日）、終了報告：紀風第20号（平成20年4月30日）		
切土206.2m ³ 、盛土370.8m ³ 、購入土297.5m ³ 、盛土・切土整形752.0m ³		
既存園路盛土20.0m ³ 、堆積板58.0m ³ 、桜模様段階96段、張芝752.0m ³ 、墳丘上の樹木伐採225本		
平成19年度 大日山35号墳保存修理工事監理業務委託		
契約業者・金額	(株)空間文化開発機構	474,600円
実施期間	平成19年9月11日～平成20年3月28日	
大日山35号墳保存修理工事の監理業務		
平成19年度 大日山35号墳・前山A67号墳説明板製作設置委託		
契約業者・金額	岩尾磁器工業(株)	918,750円（前山A67号墳含む）
実施期間	平成19年10月10日～平成19年12月11日	
現状変更一申請：紀風第87号（平成19年8月1日）、許可：和教文第22号（平成19年8月1日）、終了報告：紀風第17号（平成20年4月30日）		
大日山35号墳西造出に説明板1基設置（白磁陶板：600×600mm・台石：黒御影石・700×700mm）		
平成23年度 大日山35号墳復元埴輪等製作委託		
契約業者・金額	(株)アコード	3,013,500円
実施期間	平成23年8月5日～平成24年3月31日	
大日山35号墳東造出の復元埴輪（翼を広げた鳥2体・蓋形5体・須恵器大甕）製作		
平成23年度 大日山35号墳復元埴輪等製作委託（その2）		
契約業者・金額	岩尾磁器工業(株)	2,310,000円
実施期間	平成23年11月1日～平成24年3月29日	
大日山35号墳東造出の復元埴輪（3分割焼成家形埴輪1棟・蓋形埴輪4本）製作		
平成25年度 大日山35号墳復元埴輪等製作委託		
契約業者・金額	岩尾磁器工業(株)	3,675,000円
実施期間	平成26年2月25日～平成26年3月28日	
大日山35号墳東造出の復元埴輪（馬形埴輪1体・大形埴輪1体・力士埴輪1体）製作		
平成26年度 大日山35号墳埴輪レプリカ・説明板製作設置業務委託		
契約業者・金額	岩尾磁器工業(株)	2,935,440円
実施期間	平成26年11月6日～平成27年3月6日	
現状変更一申請：紀風第146号（平成26年11月18日）、許可：26受庁財第4号の1657（平成27年1月16日）		
大日山35号墳東造出の復元埴輪などレプリカ（須恵器台）1点製作		
復元埴輪設置（イベント製作埴輪92本・業者委託製作埴輪17本）		
東造出に説明板（白磁陶板：600×600mm・台石：黒御影石・810×810mm）1基設置		
平成26年度 大日山35号墳復元整備工事		
契約業者・金額	(株)三田設備工業	567,000円
実施期間	平成27年1月14日～平成27年2月27日	
現状変更一申請：紀風第146号（平成26年11月18日）、許可：26受庁財第4号の1657（平成27年1月16日）		
大日山35号墳東造出の埴輪レプリカ基礎工事・西造出毀損部分の修復工事（埋戻・張芝）		

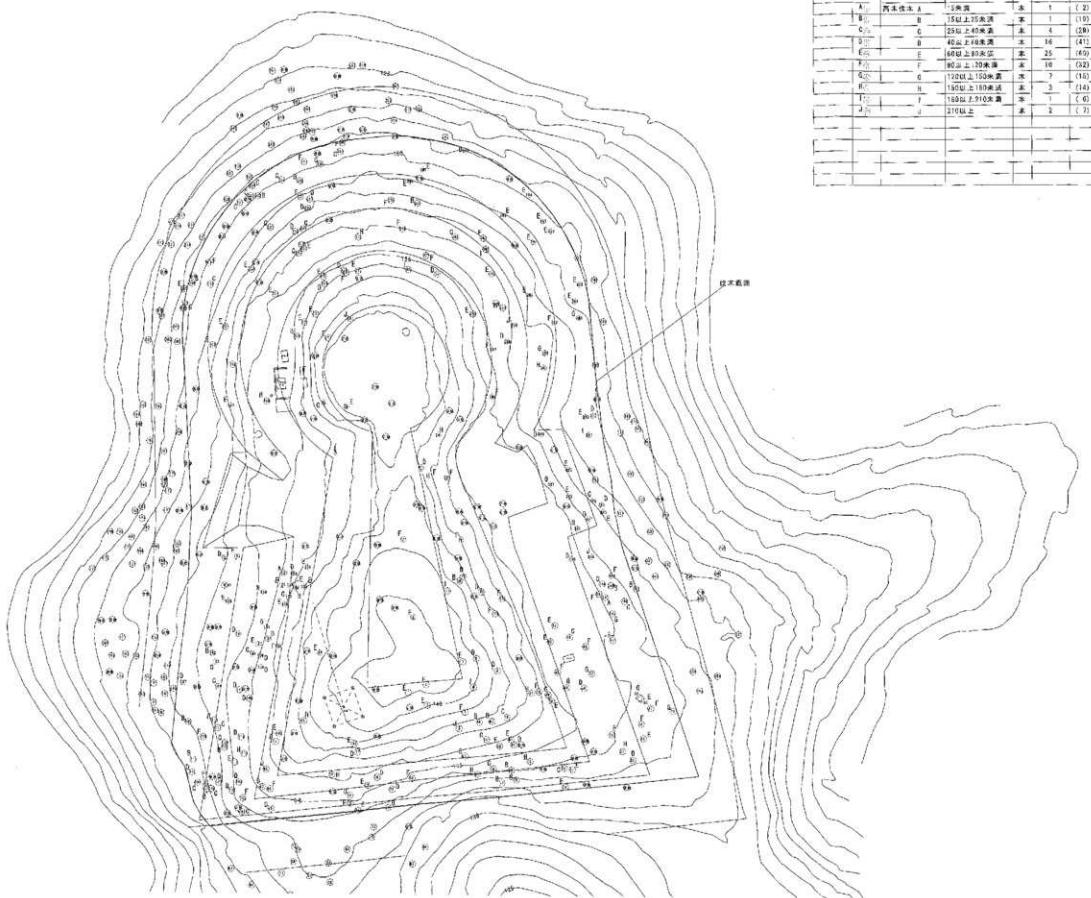
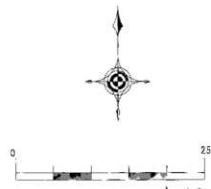


図 125 伐採木の位置

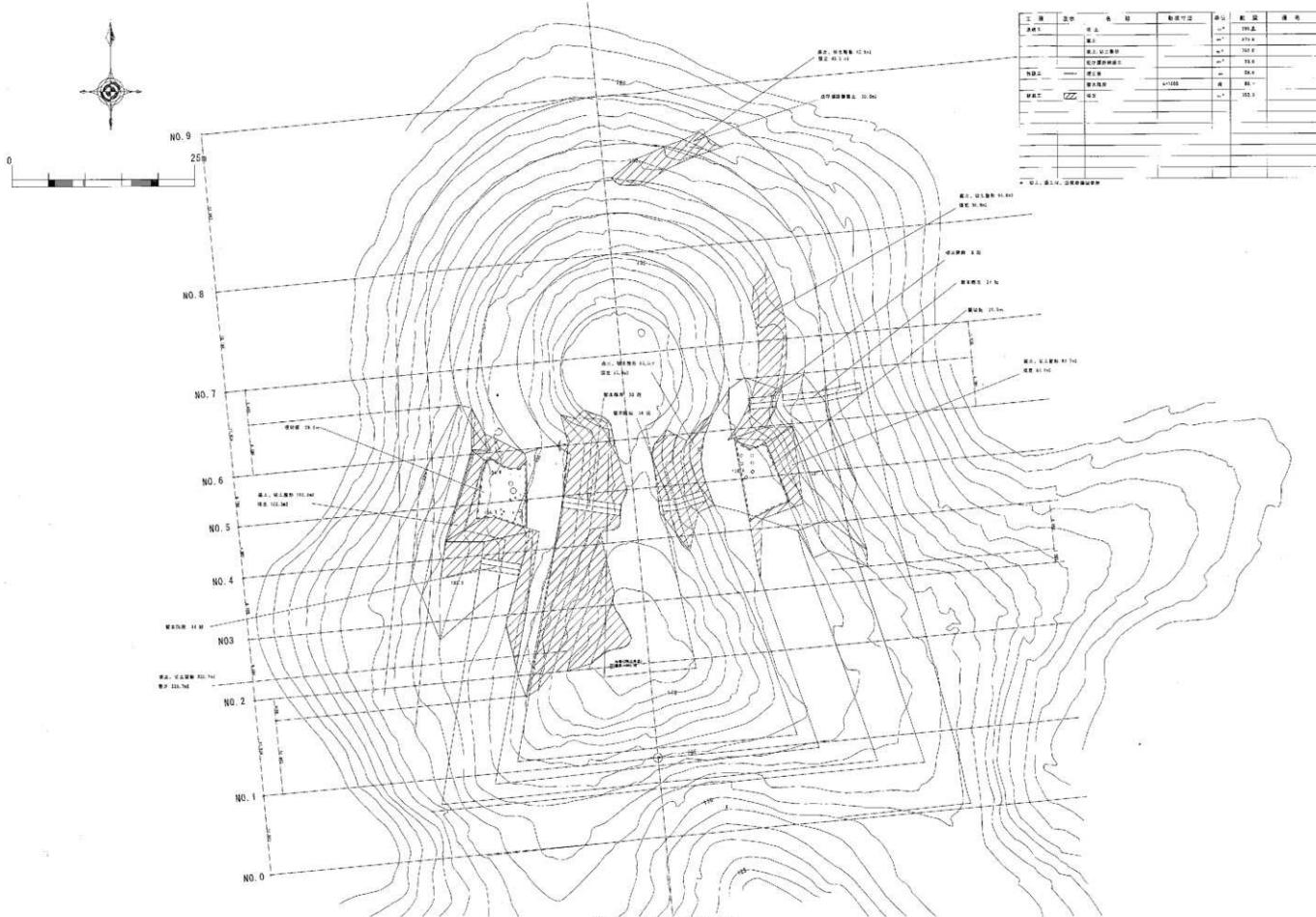


図 126 整備工事平面図

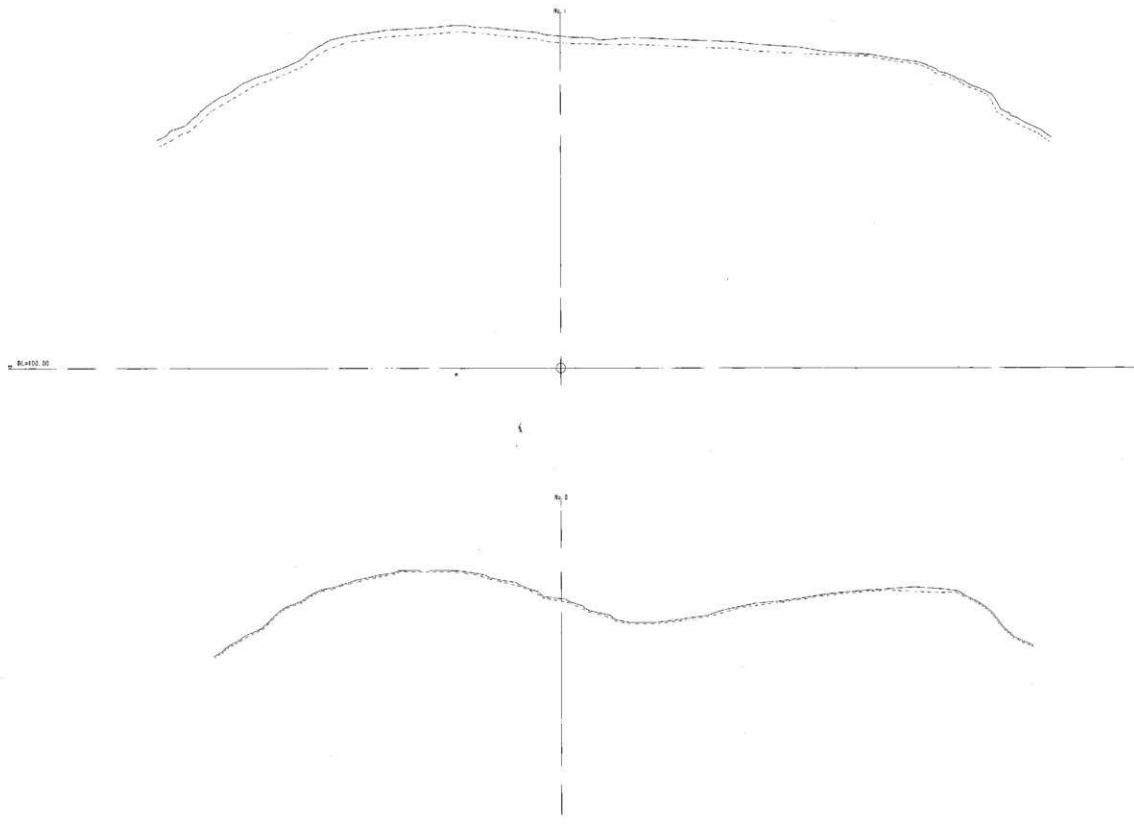


図 127 整備工事断面図 1

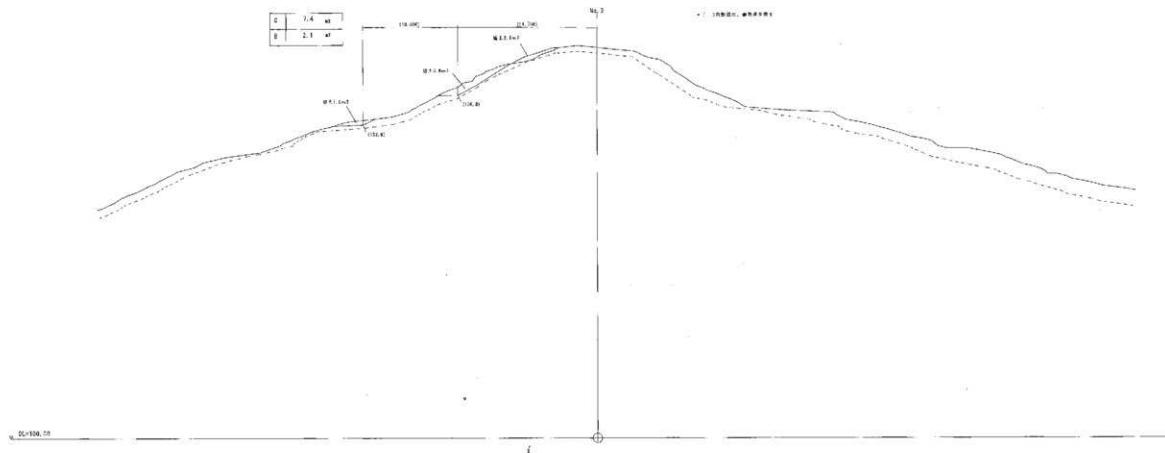


图 128 整备工事断面图 2

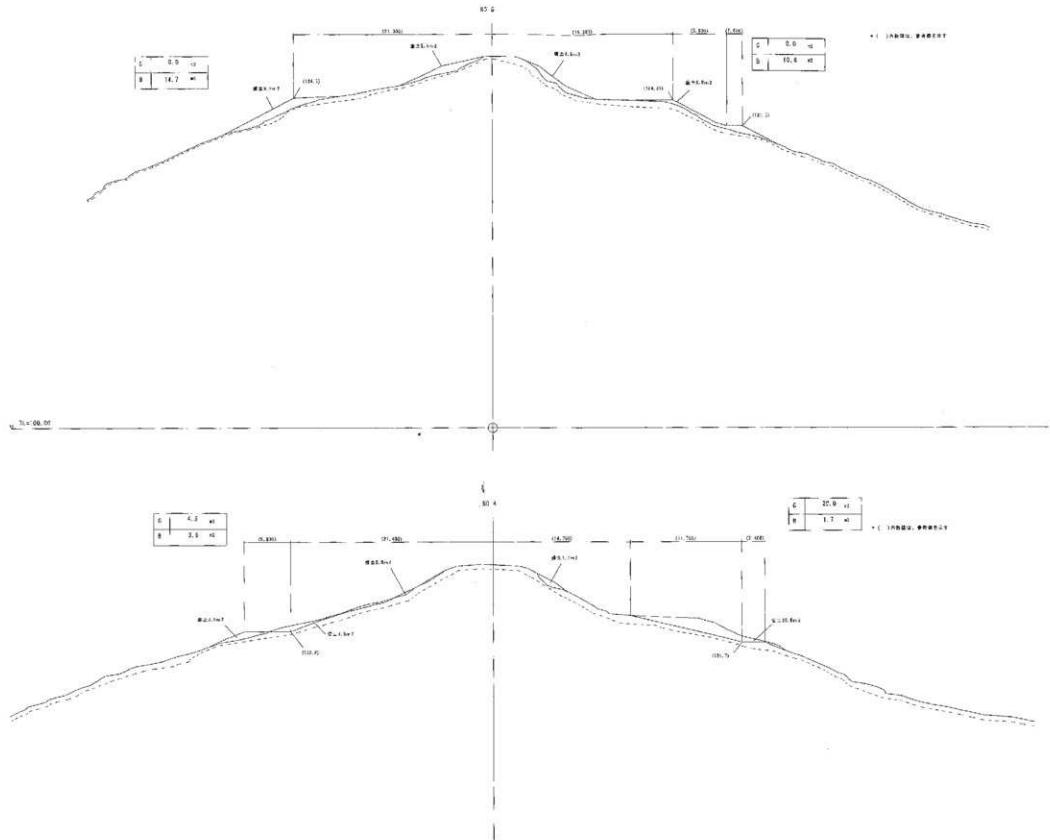


図 129 整備工事断面図 3

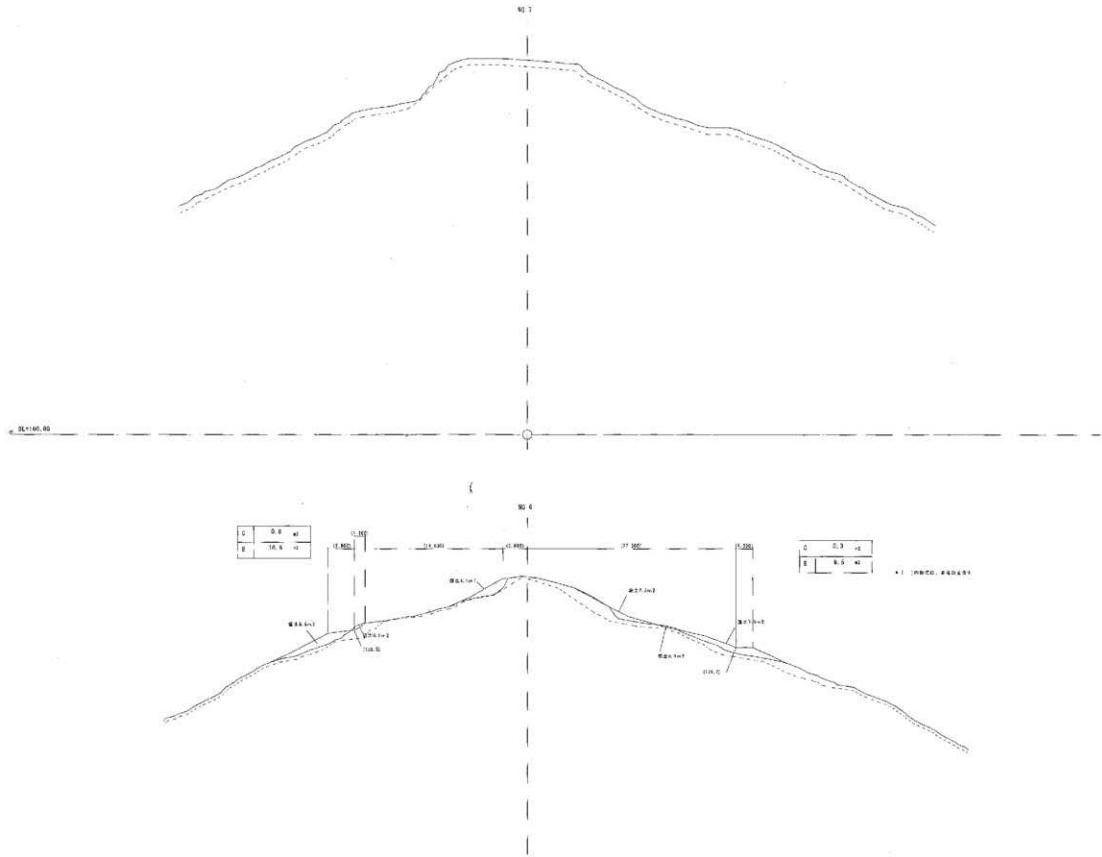


図 130 整備工事断面図 4

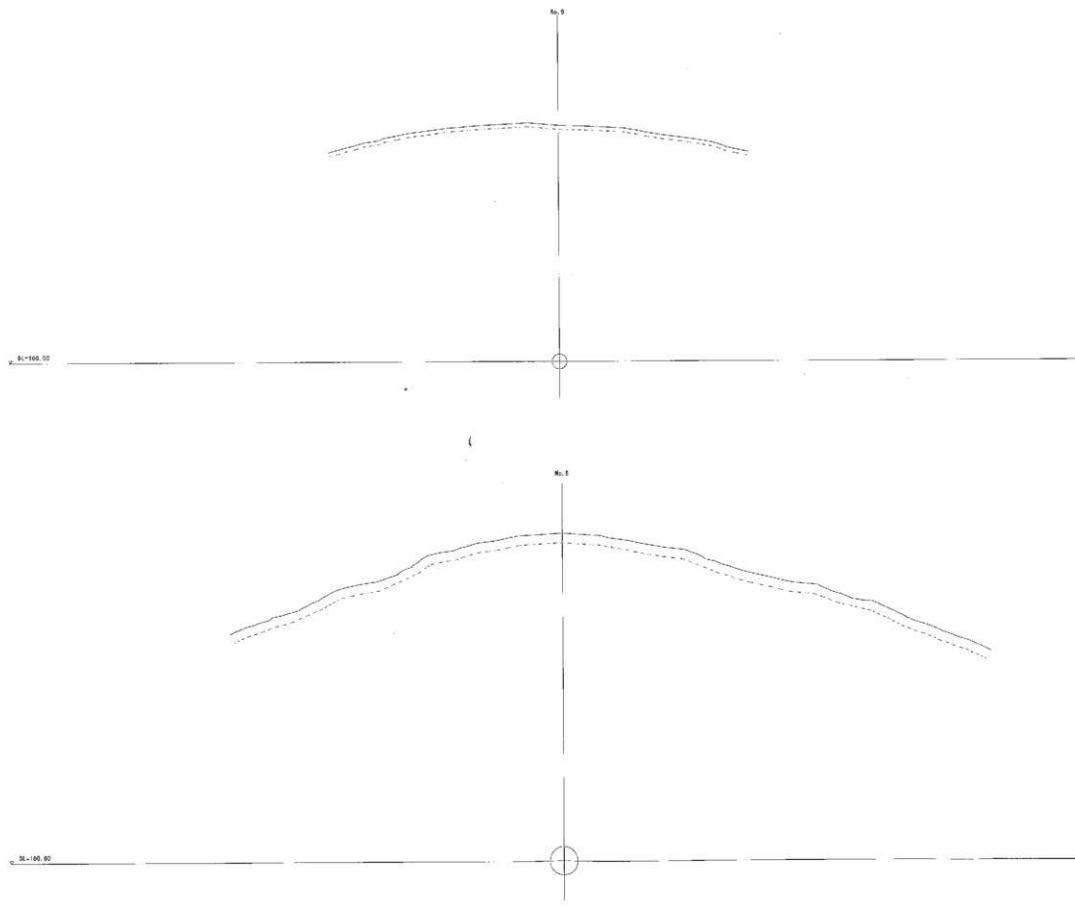


図 131 整備工事断面図 5

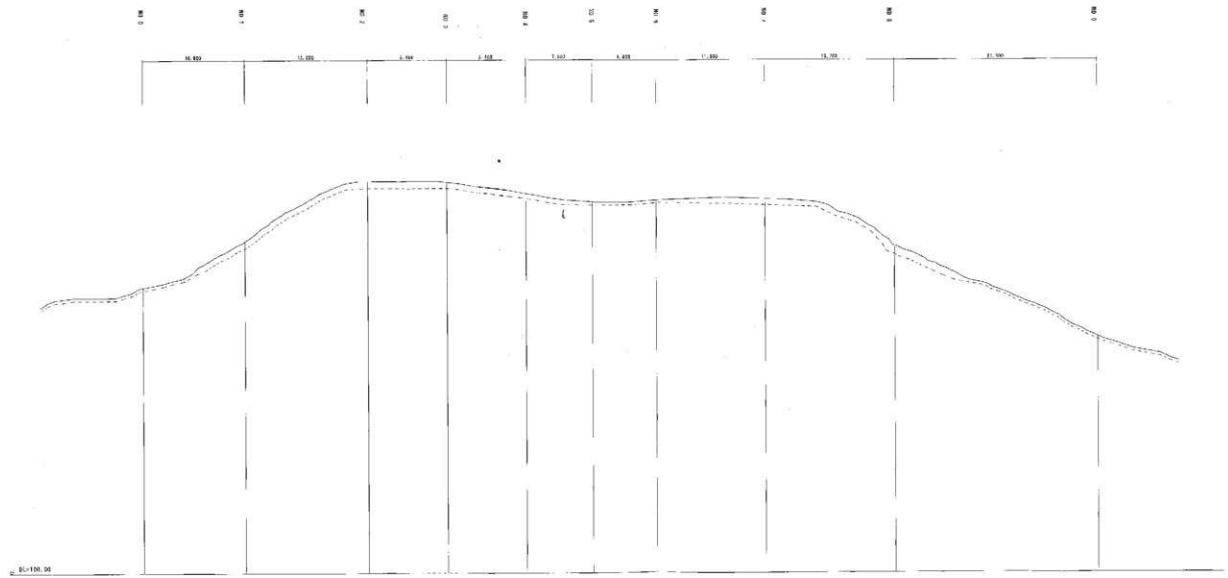


図132 整備工事断面図6

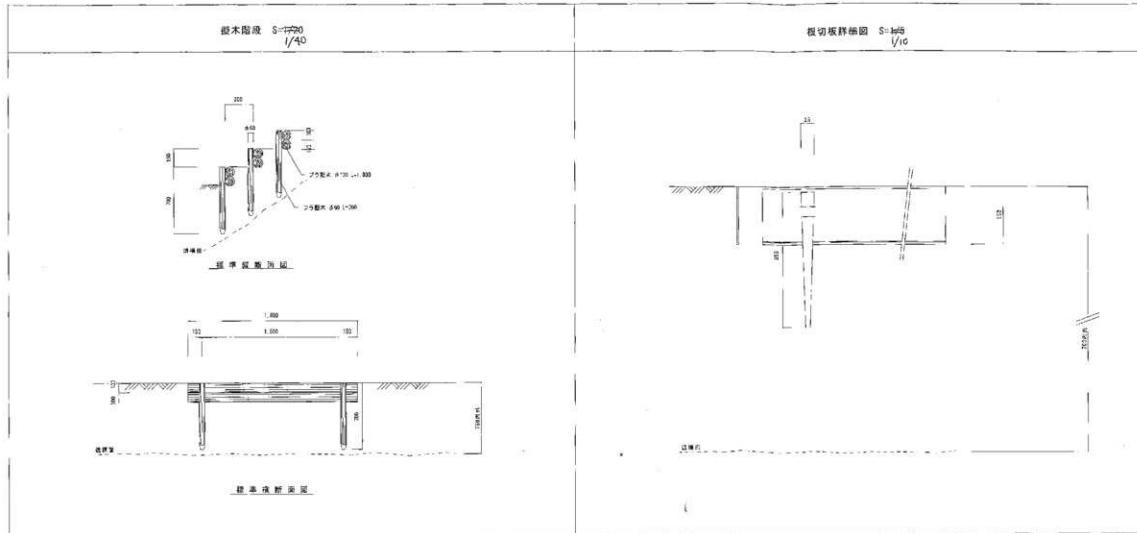


図 133 模擬階段・根切板詳細図

落した（平成 24 年 6 月 29 日付け紀風第 60 号毀損届出書提出）。崩落箇所は墳丘整備時の盛土部分であったため、遺構面の保存には影響がなかった。この崩落部分について、平成 26 年度に盛土及び張芝による修復工事を実施した。

（7）東造出復元整備

発掘調査の成果に基づいて、東造出に復元埴輪等を設置した。復元埴輪等レプリカは、キャリーなどで紀伊風土記の丘資料館から現地まで運搬した。復元埴輪等の設置にあたって、業者委託製作の復元埴輪等レプリカについては、コンクリート基礎工事を実施して、その上にボルト等で固定して設置した。市民参加による製作埴輪については、掘削した掘形に基部を埋めて設置した。基礎工事及び掘形掘削は、既に盛土を施している範囲に収まっている。

2 大日山 35 号墳東造出の復元埴輪等の製作・設置について

（1）復元埴輪等レプリカ製作・設置の概要

大日山 35 号墳の東造出・西造出では、円筒埴輪・朝顔形埴輪列によって方形に囲まれた内側から多量の形象埴輪が出土した。この発掘調査の成果に基づいて、埴輪樹立風景を視覚的に表現することによって、来訪者に当時の古墳の状況をより深く理解してもらうために、復元埴輪を設置することになった。検討段階では、東西の両造出とともに復元埴輪を設置することを想定していたが、東造出は来訪者がまずははじめに訪れる地点にあたり、古墳への導入・誘導において有益であると考えて、東造出の復元整備を優先することにした。西造出は、予算的な問題と西造出のメインともいいうべき両面人物埴輪や武人埴輪など体部が欠損している個体を復元することが困難であつたという問題があり、今回は西造出の復元埴輪設置は見送ることにした。

東造出では円筒埴輪以外の形象埴輪は基部が据えられた状態で出土したものはほとんどなく、正確な配列状況や向きが判明したものはなかった。ただし、比較的それぞれの個体はまとまって出土する傾向が強いことから、出土した地点は樹立位置に近いと判断して、配列状況を検討することにした。埴輪配列状況については、特別史跡岩橋千塚古墳群整備検討会議や和歌山県弥生・古墳時代研究会を開催するなどして、専門家の意見を踏まえて決定した。

復元埴輪レプリカの製作は、円筒埴輪や朝顔形埴輪などは紀伊風土記の丘において市民参加によるイベントで製作し、紀伊風土記の丘の電気窯で焼成をおこなった。市民参加によって製作したものは、円筒埴輪・朝顔形埴輪・水鳥形埴輪・牛形埴輪・猪形埴輪である。電気窯に入らない大型品や製作が難しい須恵器などは業者委託によって製作した。業者委託によって製作したものは、家形埴輪・翼を広げた鳥形埴輪・馬形埴輪・犬形埴輪・力士埴輪・蓋形埴輪・須恵器大甕、須恵器器台である。

（2）復元埴輪の樹立位置の検討

円筒埴輪列 東造出の発掘調査では、1段目テラス円筒埴輪列（西辺円筒埴輪列）の大半と北辺円筒埴輪列の半分程度、南辺円筒埴輪列の2個体分の樹立状況を確認できたのみで、東辺円筒埴輪列については完全に削平されていた。東造出・西造出ともに北辺円筒埴輪列には屈曲部が確認できた。この屈曲部は西造出では北辺円筒埴輪列のほぼ中央部に位置することから、東造出でも

中央部で屈曲していたと推定した。この屈曲部を中央とすると、東辺円筒埴輪列は1段目テラス円筒埴輪列から東に約6mの地点に復元できる。東辺円筒埴輪列のラインは西造出の状況から1段目テラス円筒埴輪列と平行であったと推測できる。

円筒埴輪・朝顔形埴輪 発掘調査で検出した円筒埴輪のうち、1段目テラス円筒埴輪列の27本中1本のみV群系（畿内型）円筒埴輪で（1段目テラス円筒埴輪1-9、1段目テラス円筒埴輪の検出土埴輪のうち北から9本目）、その他の北辺円筒埴輪列9本と南辺円筒埴輪列2本はIV群系（紀伊型）円筒埴輪（あるいは朝顔形埴輪）であった。東造出で出土した円筒埴輪は、大半がIV群系であったが、樹立位置が判明しない破片に少数のV群系が含まれていることから、他にもV群系が使用されていた可能性がある。朝顔形埴輪は、いずれもIV群系で、1段目テラス円筒埴輪列で4本、北辺円筒埴輪列で1本を検出している。

なお、西造出では、1段目テラス円筒埴輪列38本中1本がV群系円筒埴輪、1本がIV群系朝顔形埴輪、3本がV群系朝顔形埴輪で、それ以外はIV群系円筒埴輪であった。南辺円筒埴輪列では17本中3本がV群系円筒埴輪、2本がIV群系朝顔形埴輪、その他はIV群系円筒埴輪である。北辺円筒埴輪列は14本中1本がIV群系朝顔形埴輪で、他はIV群系円筒埴輪であった。西辺円筒埴輪列は7本中2本がV群系円筒埴輪で、それ以外はIV群系円筒埴輪であった。西造出では東造出同様に大半がIV群系円筒埴輪で、一部V群系円筒埴輪を含んでいる。朝顔形埴輪はIV群系・V群系とともに認められる。

東造出の円筒埴輪列中の朝顔形埴輪は、円筒埴輪4～5本に1本含まれていた。この結果から、1段目テラス円筒埴輪列に6本、北辺円筒埴輪列に3本、南辺円筒埴輪列に3本、東辺円筒埴輪列に4本の朝顔形埴輪を配置することにした。

蓋形埴輪 蓋形埴輪は、円筒埴輪列付近でまとまって出土することから、円筒埴輪上に置かれていたと判断した。出土地点は、1段目テラス円筒埴輪列に2箇所、北辺円筒埴輪列に1箇所あつた。北辺円筒埴輪列のものはほぼ中央部に位置する。1段目テラス円筒埴輪列では、間隔的に方形区画の交点付近にあったことが推測できる。このことから、蓋形埴輪は方形区画の四隅と北・南・東辺円筒埴輪列の中央部に1箇所ずつ、1段目テラス円筒埴輪列に2箇所配置することにした（計9本）。なお、朝顔形埴輪と隣り合う場合、接触することになるので、朝顔形埴輪の隣にならないよう配置案を作成した。

蓋形埴輪には立脚部の線刻を1条ずつ施すものと、3条同時に施すもの（3条一括沈線）の2種類がある。1条施文タイプは、1段目円筒埴輪1-12付近と北辺円筒埴輪9付近に1個体ずつ、3条施文タイプは、1段目円筒埴輪1-23付近で1個体を検出している。製作にあたっては、この2種類を異なる業者（岩尾磁器・アコード）に発注しており、配置においては検出状況を基にして設置した。出土していない箇所については、タイプ別に互い違いになるよう配置した。

3分割焼成の家形埴輪 3分割焼成の家形埴輪は、基部が据えられた状態で出土したわけでもなく、上屋根・下屋根ともにひっくり返されたように少し離れた地点で出土している。本来樹立していた地点は不明であるが、造出中央部の基部が出土した付近であると推測した。

翼を広げた鳥形埴輪 全景が復元できたのは2体あり（翼を広げた鳥形埴輪1-1、1-2）、据えられた状態では出土していないが、1段目テラス円筒埴輪列東側のほぼ同じ地点で出土している。そのうち1-1は頭部を北側に向けた状態で出土しており、この地点で頭部を東側に向けて樹立されていたと推察している。1-2についても同じ方向を向いていたと推測した。

水鳥形埴輪 東造出では水鳥形埴輪は3体出土している。水鳥形埴輪1-3のみ基部が据えられた状態で検出できたが、残り2体の樹立位置は不明である。水鳥形埴輪1-2については、基部が倒れた状態で出土しており、その地点が樹立位置であった可能性が高い。水鳥形埴輪1-1は、大半が1段目テラス円筒埴輪列の西側の埴丘側で出土している。ただし、頭部については、水鳥形埴輪1-2基部の北側から出土しており、本来はこの地点に配列されていたものが、人為的に埴丘側へ動かされた可能性もある。したがって、水鳥形埴輪1-1については、水鳥形埴輪1-2の北側に配置されていたと推測した。向きについては、水鳥形埴輪1-2基部の倒れた状態での向きが北側を向いていることから、水鳥形埴輪は翼を広げた鳥形埴輪と同様に北側を向いていたと判断した。

牛形埴輪・犬形埴輪・猪形埴輪 牛・犬・猪形埴輪は北辺円筒埴輪列付近でそれぞれまとめて出土している。正確な樹立位置や向きは不明である。東側から猪形埴輪、犬形埴輪、牛形埴輪の順番で出土している。獣犬である犬が猪を追いかける状況を想定して、犬より猪の方が前方である可能性が高く、猪・犬・牛の順番に東向きに樹立されていたと推測した。ただし、これらの動物形埴輪は、水鳥形埴輪や翼を広げた鳥形埴輪と同様に北を向いていた可能性も否定はできない。

馬形埴輪 馬形埴輪は、東造出の東斜面から基壇テラスにかけて転落した状態で出土した。したがって、本来の樹立位置は不明であるが、方形区画内に樹立されていたとすると、東辺円筒埴輪列付近（東造出北東隅）に樹立されていた可能性が高いと推測した。向きについては、出土状況では頭部を南に向けた状態であったが、配置にあたっては他の四足動物と同様に東向きにすることとし、馬形埴輪を先頭に猪形埴輪、犬形埴輪、牛形埴輪が1方向を向いた配列とした。

力士埴輪 力士埴輪1-1は3分割焼成の家形埴輪の西側で倒れた状態で出土した。基部は欠損しているが、おそらくこの付近が樹立位置であろう。倒れた状態では東側を向いていたが、向きを正確に判断することは難しい。水鳥形埴輪同様に北側を向いていたか、盛装男子が西側を向いた状態で倒れていたので同様に西側を向いていた可能性もある。復元埴輪設置にあたっては、盛装男子が西側を向いていたと推測して、同様に西側を向く配置とした。

須恵器大甕・器台 須恵器大甕は東造出北東部で据えられた状態で出土した。この付近で他にも須恵器器台が複数個体出土しており、須恵器配置エリアであったことがうかがえる。配置にあたっては、須恵器器台を1点復元して、大甕付近に設置した。

その他の埴輪 大刀形埴輪の破片が東造出北西隅で出土しており、この付近に樹立されていた可能性が高い。鞍形埴輪は、馬形埴輪同様に東造出東斜面から基壇テラスにかけて転落した状態で出土している。馬形埴輪と同じく東造出北東隅付近が樹立位置であったと推測できる。巫女埴輪は東造出中央部東側で複数個体がまとめて出土している。おそらく中央部の家形埴輪付近に樹立されていたものが流されてきたものであろう。家形埴輪1-4（寄棟造）は、東造出南東部分でまとまって出土している。東造出では南半分がほぼ削平された状態で埴輪の出土も少数であった。家形埴輪1-4は東造出南半の中央部付近に樹立されていた可能性がある。この他、力士埴輪や翼を広げた鳥形埴輪、家形埴輪はもう1個体以上の破片が出土している。これらの埴輪については全体を復元できておらず、復元埴輪を製作できなかつたため、今回の復元埴輪の配置には含めていない。

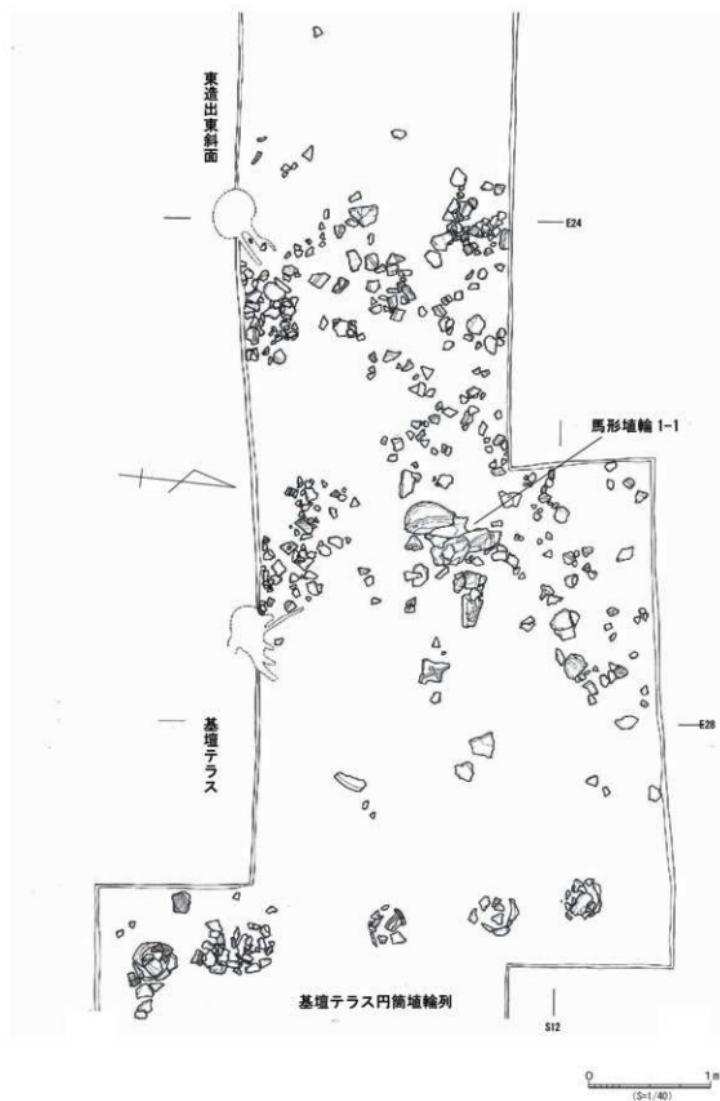


図 134 1 トレンチ 基壇テラス円筒埴輪・馬形埴輪出土状況 (S = 1 / 40)

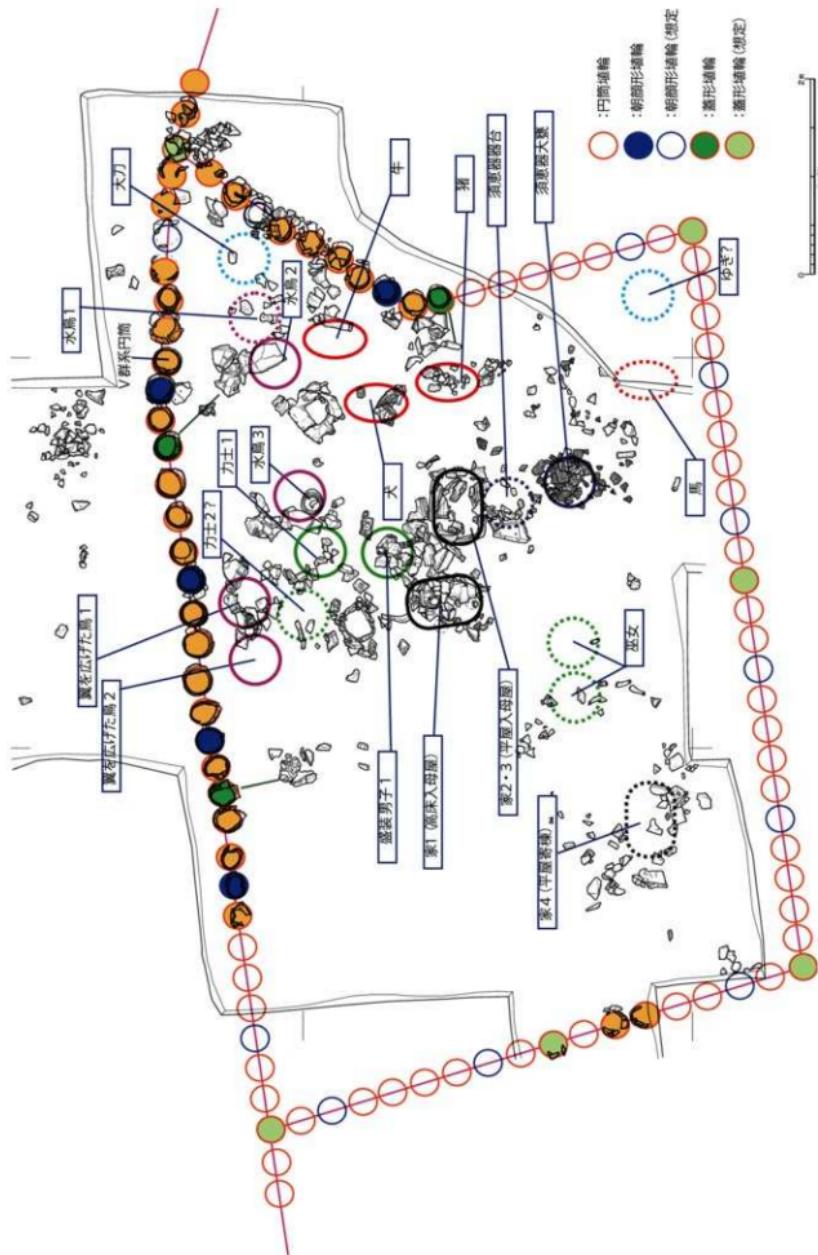


図 135 大日山 35 号墳 東造出 墓輪配列案

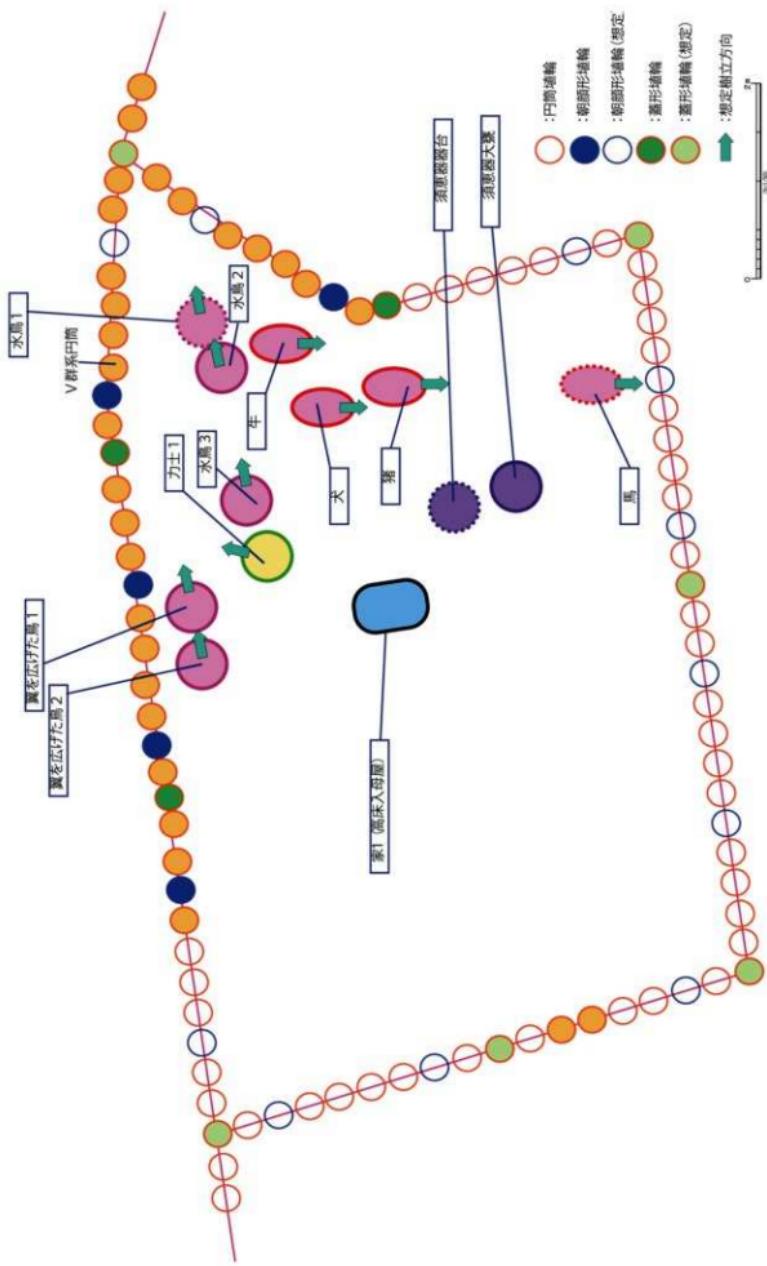


図 136 大日山 35号墳 東造出 復元埴輪配置図

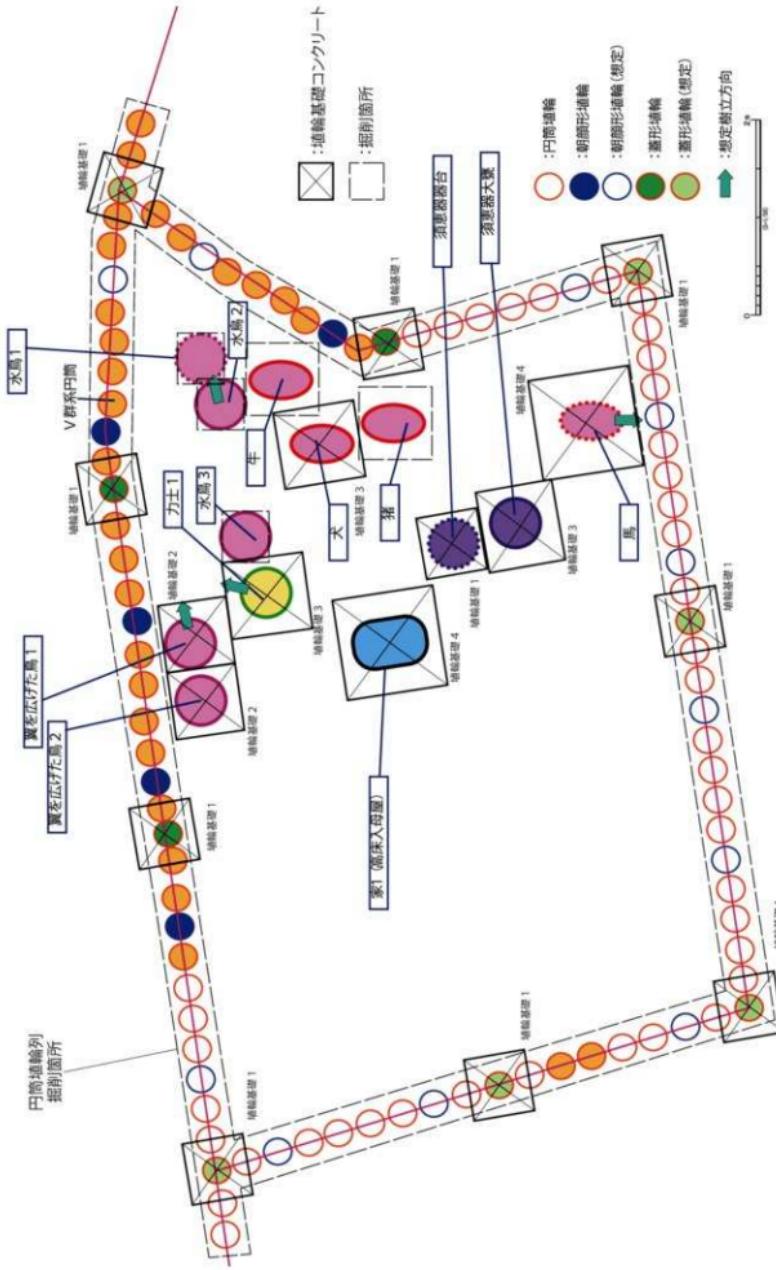


図 137 大日山 35号墳 東造出 復元埴輪設置基礎配置図



埴輪基礎 1 (蓋形埴輪・須恵器器台)



埴輪基礎 2 (翼を広げた鳥形埴輪 2 点)



埴輪基礎 3 (犬形埴輪・力士埴輪・須恵器大甕)



埴輪基礎 4 (家形埴輪・馬形埴輪)

図 138 墓輪レプリカ基礎の仕様

3 復元埴輪の形態の検討

(1) 3分割焼成の家形埴輪

3分割焼成の家形埴輪はほぼ全体が復元できているが、一部千木の上部は欠損している。本体部分は実物同様に3分割で復元し、形態や文様も忠実に再現した。欠損している千木部分は、別に出土している千木の大きさや形態を参考に復元した。

(2) 翼を広げた鳥形埴輪

全体を復元できた翼を広げた鳥形埴輪1-1と1-2を復元製作した。両者はほぼ同形・同大であるが、1-1とは違って、1-2の翼の上面には補強突帯の痕跡が確認できるので、復元埴輪でも補強突帯を貼り付けた。

(3) 馬形埴輪

東造出東斜面から基壇テラスで横座り用の水平板が取り付けられた馬形埴輪が出土した。この馬形埴輪は、頭部から上半部が接合できたものの、全体を復元することができなかった。ただし、前脚部や尻部などが出土しており、高さ・全長などは復元可能である。西造出では2頭の馬形埴輪が全体復元できているので、これを参考に全長や馬具などを復元した。頭部も西造出の馬形埴輪を参考したが、これらとは違う面繫や「字」鏡板の破片が出土しているので、この面繫や鏡板を基にして頭部を復元した。現状では面繫や手綱に文様は確認できないが、竹管文が施された破片があるため、面繫には竹管文を施した。尻繫の文様は確認できなかったため、胸繫などと同じ文様とした。

(4) 犬形埴輪

犬形埴輪は、頭部から前脚部にかけて残存するもので、後脚部は復元できていない。全体を復元するにあたって、全長は牛形埴輪と同じ大きさに設定した。尻尾は欠損しているため、星神車塚古墳（高槻市）の犬形埴輪を参考とした。

(5) 力士埴輪

頭部及び基部が欠損している個体である。全長や全体のプロポーション、脚部から基部の形態は井辺八幡山古墳や今城塚古墳（高槻市）の力士埴輪を基に復元した。頭部は、半月状のまげ部分と考えられる破片が出土しているので、これを参考に頭部を復元した。顔部分は大谷山22号墳や今城塚古墳などの力士埴輪を参考にした。



図139 馬形埴輪部材 (S = 1 / 4)

(6) 蓋形埴輪

蓋形埴輪は、1条ずつ沈線を施すタイプと3条一括沈線で施すタイプの2種類が確認できる。今回の復元でも2種類の蓋形埴輪を復元した。蓋形埴輪は円筒埴輪の上に設置されていた可能性が高いので、復元埴輪では円筒埴輪上の蓋形埴輪を接着して設置した。

(7) 須恵器大甕・器台

大甕はほぼ完形の個体なので、大きさや文様などを再現した。底部には水抜き穴を設けた。器台は、東造出には全体を復元できた個体はないので、石室内出土の器台を参考に復元した。

(8) 水鳥形埴輪

水鳥形埴輪は3体出土しているが、形態はほぼ同じものである。しかし、基部の透孔の位置が水鳥形埴輪1-1と1-2・1-3では異なるので、1体ごとに透孔の位置を変えて製作した。

(9) 猪形埴輪

猪形埴輪は、頭部から背部にかけて残存する個体である。全長や高さは先に復元製作した牛形埴輪や犬形埴輪に合わせて製作した。欠損しているたてがみ部分は星神車塚古墳などの猪形埴輪を参考として復元した。

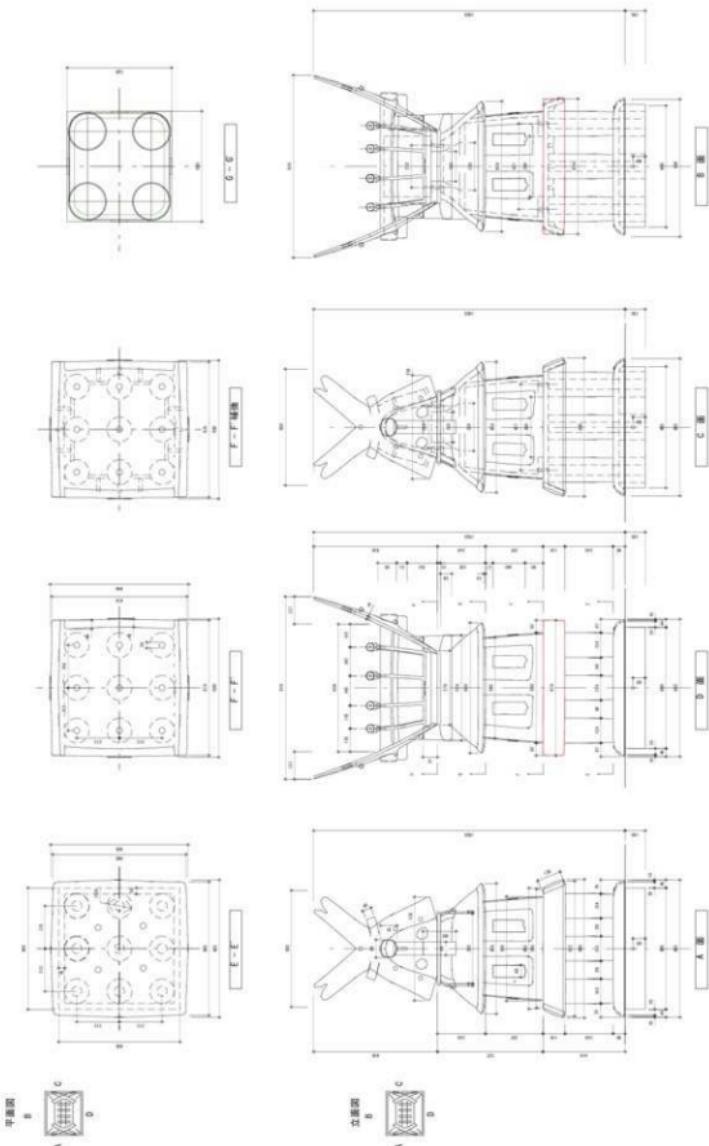
(10) 円筒埴輪

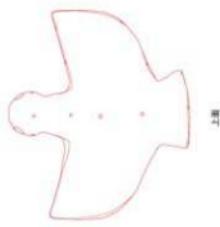
円筒埴輪はIV群系（紀伊型）とV群系（畿内型）の2種類が出土している。イベント製作を開始した当初は、先に復元できていたV群系を中心に製作していたが、整理作業が進むにつれて東造出ではIV群系が多く使用されていたことがわかつてきたので、途中からIV群系を中心に製作することにした。V群系は、4条5段に復元でき、透孔は下から2・4段目に施されていた。タテハケ1次調整のみで、高さは約63cmである。IV群系は全体が接合できた個体がないが、各個体を検討した結果、5条6段に復元でき、高さもV群系とほぼ同じ65cm程度と想定できる。IV群系には透孔の位置が異なるタイプがあり、全てが5条6段であったとすると、下から3・4段目に施されるタイプ、4・5段目に施されるタイプ、下から2・3段目に施されるタイプが確認できる。復元にあたっては、下から3・4段目に透孔があるタイプをモデルに製作することにした。口径が広がる約37cmのものから、あまり広がらない約30cmくらいのものまであるが、復元製作では約35cm程度を目標に製作していった。タテハケ1次調整後、突帯を貼り付けて、横ハケを施す。

(11) 朝顔形埴輪

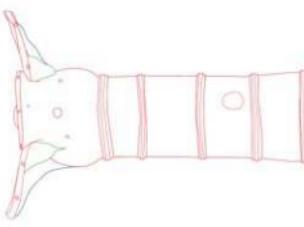
朝顔形埴輪もIV群系（紀伊型）とV群系（畿内型）の2種類が確認できる。東造出では紀伊型しか確認できなかったので、復元ではIV群系をモデルに製作した。V群系は全体を復元できた個体があるが、IV群系では全体を復元できたものはない。IV群系円筒埴輪の大きさを参考にして、円筒埴輪の口縁部の位置で、朝顔形埴輪の肩部がはじまるような形態で復元した。高さは約86cmに想定できる。

図 140 家形車輪レブリカ設計図

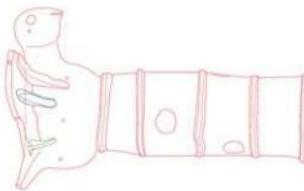




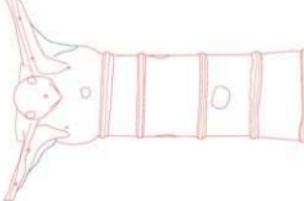
滑空鳥A



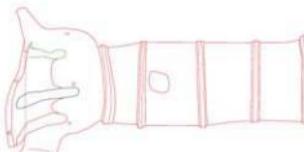
滑空鳥A



0 20 40cm

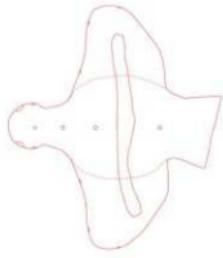


滑空鳥A

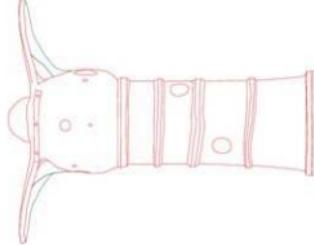


0 20 40cm

図 141 翼全広げた鳥形埴輪レプリカ 1 設計図



0 20 40cm



0 20 40cm

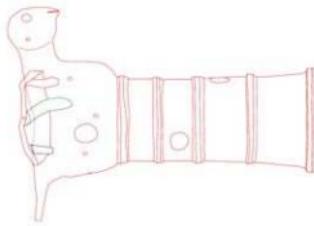
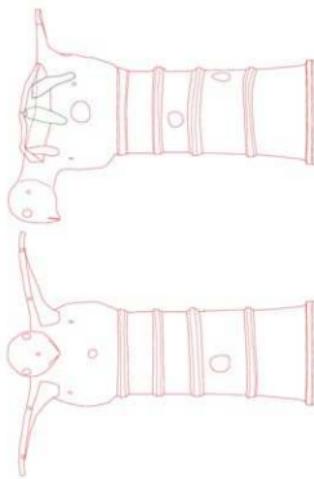
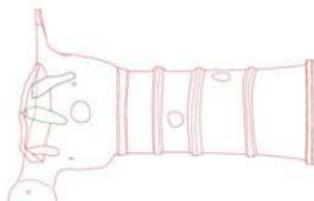


図142 翼を広げた鳥形埴輪レプリカ2段計図



0 20 40cm



滑空鳥B

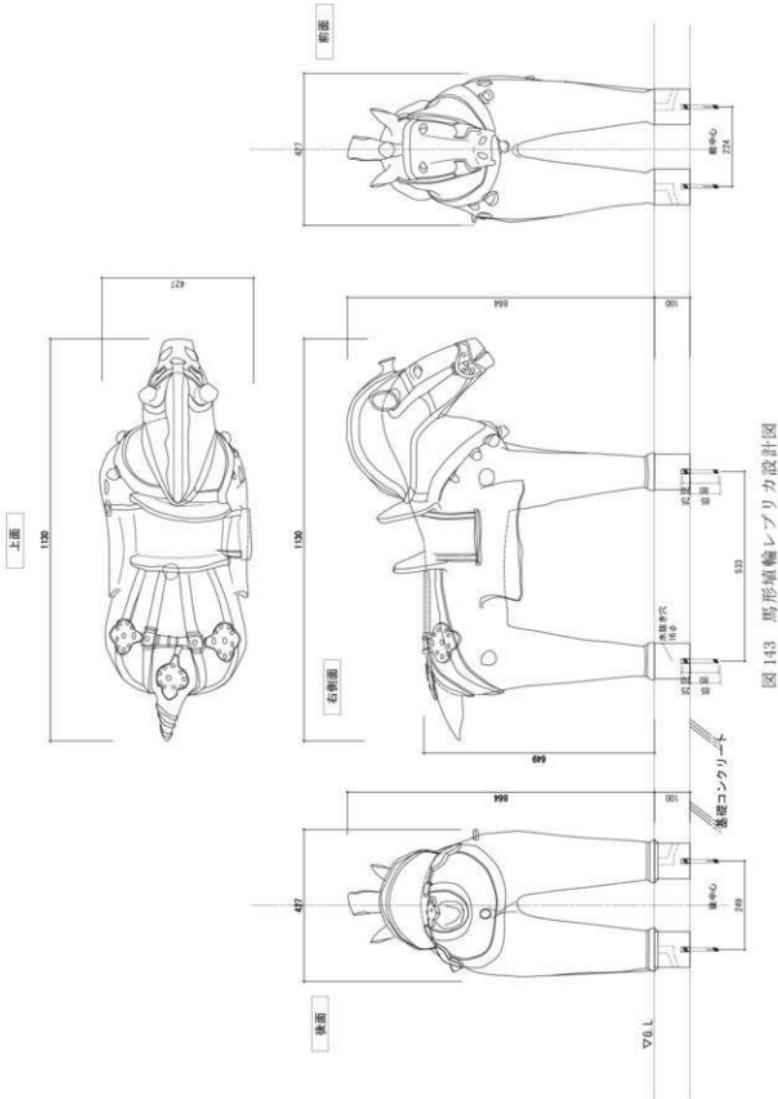


図143 馬形埴輪レプリカ設計図

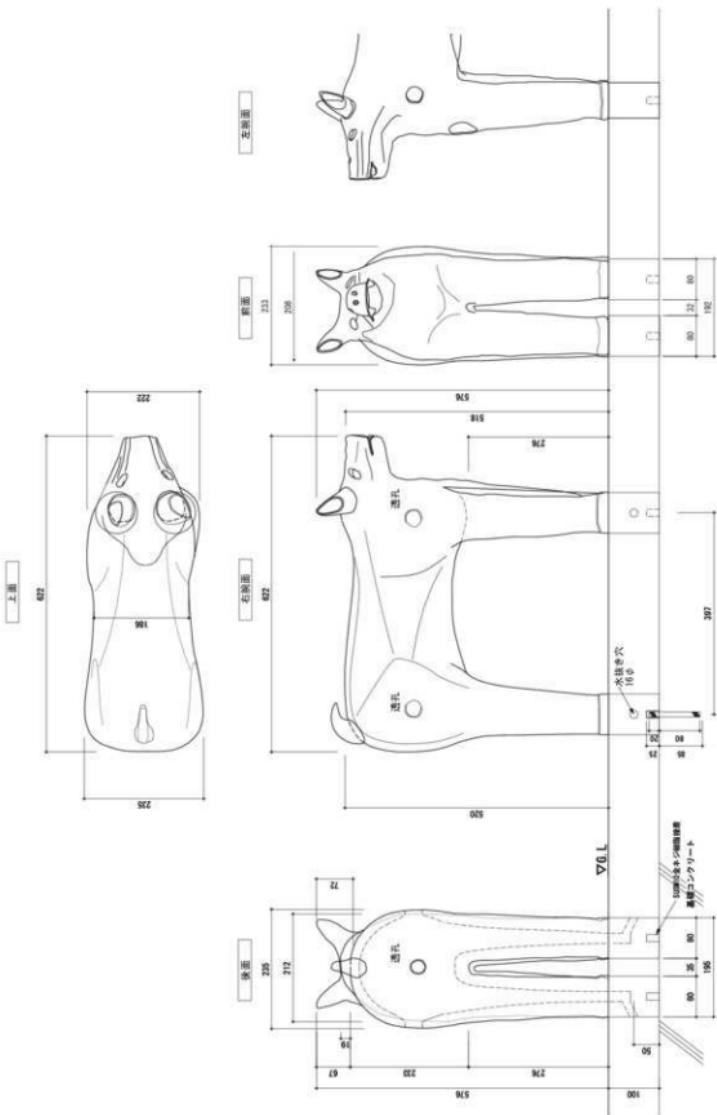


図 144 大形車輪レブリカ設計図

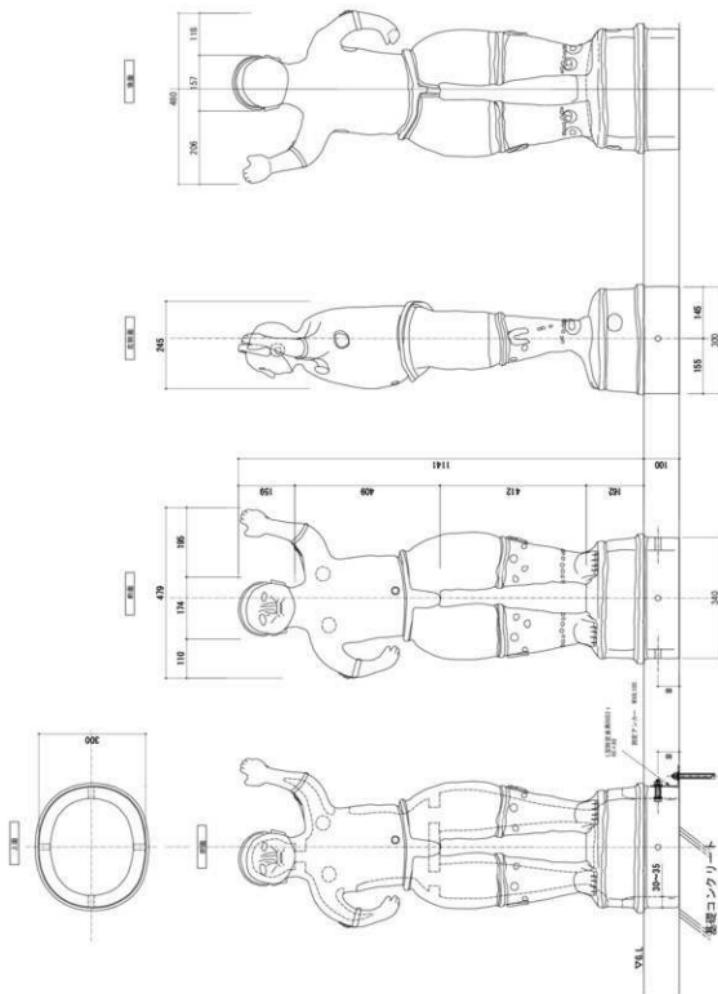
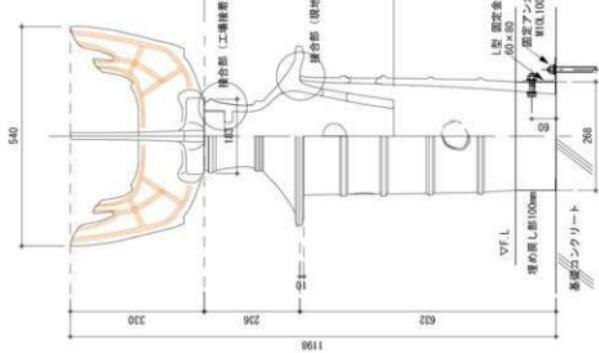
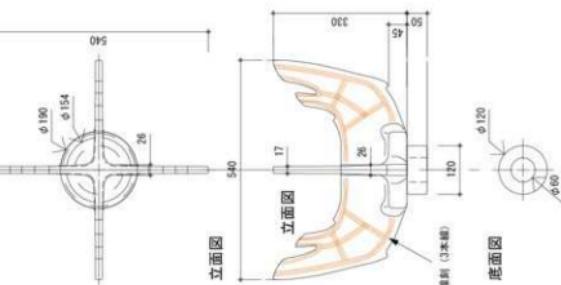


図 145 力士植輪レブリカ設計図

蓋形埴輪、円筒埴輪 配置図
立面図



蓋形埴輪(立ち飾り部)
上面図
立面図



蓋形埴輪(器台部)
上面図
立面図

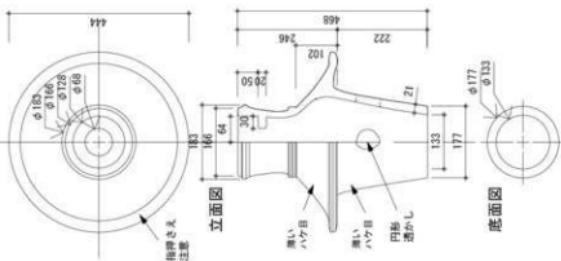
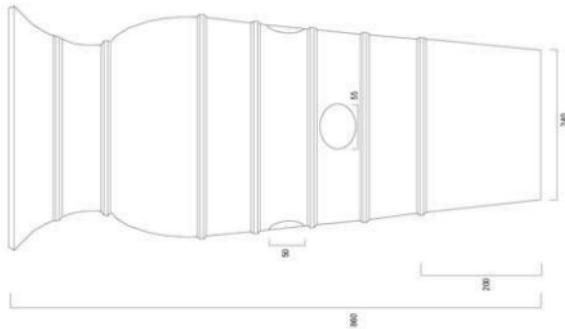
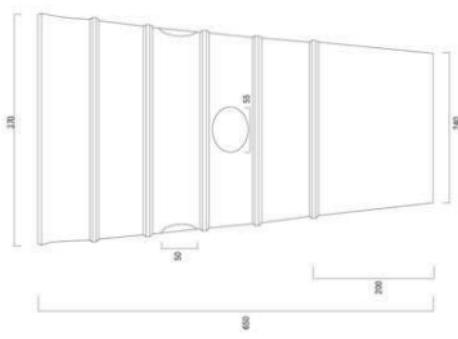


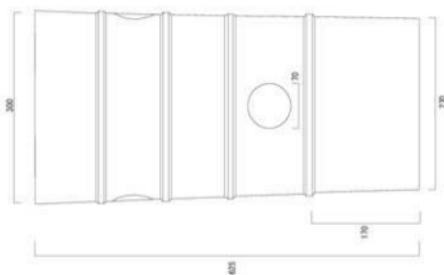
図 146 蓋形埴輪レプリカ 1 設計図



IV群系（紀伊型）朝顔形埴輪



IV群系（紀伊型）円筒埴輪



V群系（籠内型）円筒埴輪

図 147 円筒・朝顔形埴輪レプリカ設計図

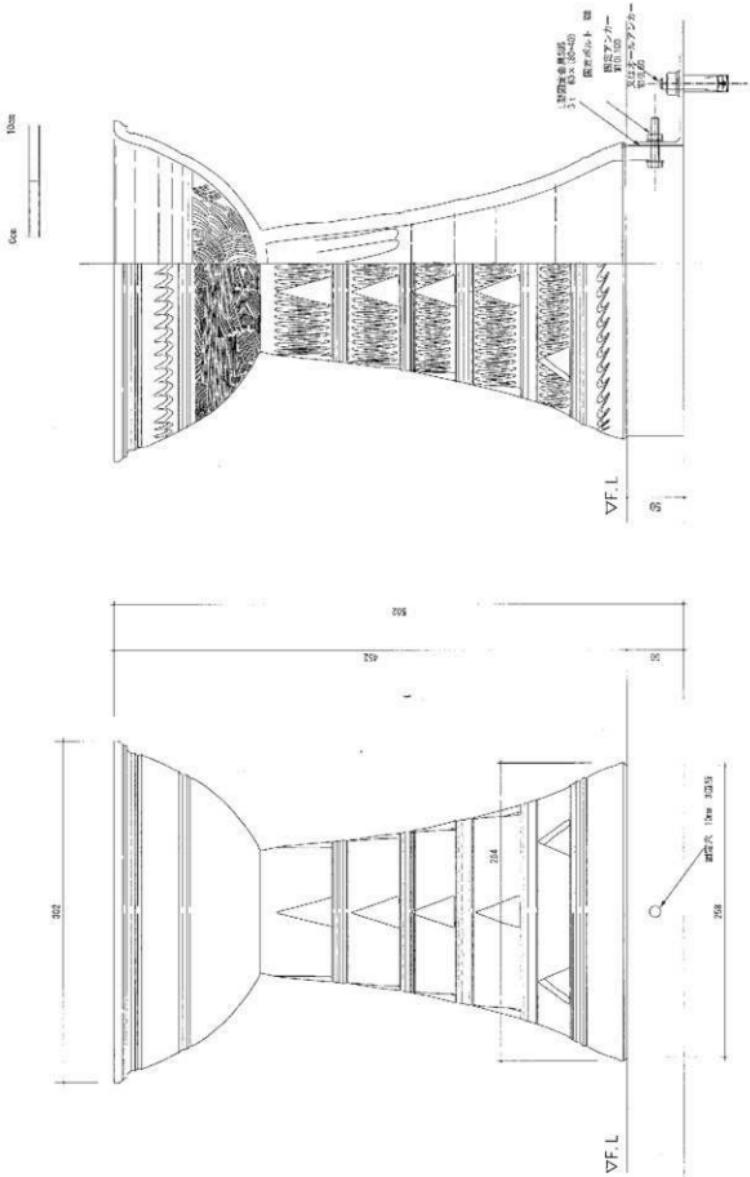


図 148 須恵器器台レプリカ設計図

4 復元埴輪の製作・設置

(1) 市民参加（イベント）による復元埴輪製作

紀伊風土記の丘では、大日山35号墳の復元に市民が参加し、ともに整備していくことを目的として、イベント「大日山35号墳の実物大埴輪を作ろう」を開催してきた。市民が製作した埴輪を現地に設置するため、大日山35号墳の復元埴輪を作製した。このイベントは、平成20年2月7日に第1回を開催して、平成26年9月6日の第23回まで実施した。参加者は、一般参加者124名、職員16名で（練習用1/2サイズ円筒埴輪製作者含む）。実物大埴輪製作者は、一般参加者61名・職員10名）、製作後、紀伊風土記の丘の電気釜で焼成した。製作本数は、円筒埴輪93本・朝顔形埴輪23本・蓋形埴輪2本・水鳥形埴輪4体・牛形埴輪1体・猪形埴輪1体の合計124個である。

(2) 市民参加（イベント）による製作埴輪の設置

市民参加によって製作した埴輪のうち、計92本を設置した（残りはストックとして保存）。その内訳は、円筒埴輪71本、朝顔形埴輪16本、水鳥形埴輪3本、牛形埴輪1本、猪形埴輪1本である。いずれも深さ約10cm程度の掘形を掘削して、基部・脚部を埋める形で設置した。設置にあたっては、平成27年3月7日に埴輪製作参加者による「埴輪設置式」を開催し、製作者自ら設置した。埴輪設置式参加者は37名であった。

円筒埴輪・朝顔形埴輪については、発掘調査・整理の成果に基づき、IV群系（紀伊型）・V群系（畿内型）の2種類を製作した。樹立地点が判明しているV群系（畿内型）円筒埴輪1本、IV群系（紀伊型）円筒埴輪29本、IV群系（紀伊型）朝顔形埴輪5本については、種類別にその地点に設置した。その他の箇所については、復元想定の本数に基づいて設置していった。1段目テラス円筒埴輪列は、方形区画から南側・北側にも続いていくことから、そのことがわかるように方形区画の南側・北側にそれぞれ2本ずつ配置した。

(3) 業者委託による製作埴輪の設置

業者による製作埴輪は、計17個を設置した。その内訳は、3分割焼成の家形埴輪1棟、翼を広げた鳥形埴輪2体、馬形埴輪1体、犬形埴輪1体、力士形埴輪1体、蓋形埴輪9本、須恵器大甕1個、須恵器器台1個である。コンクリート基礎の規模は、埴輪基礎1（蓋形埴輪、須恵器器台）が500×500mm、埴輪基礎2（翼を広げた鳥形埴輪）が600×600mm、埴輪基礎3（犬形埴輪、力士形埴輪、須恵器大甕）が800×700mm、埴輪基礎4（3分割焼成の家形埴輪、馬形埴輪）が1000×900mmで、いずれも厚さ80mmである。コンクリート基礎下部には厚さ50mmの基礎砕石を敷いている。コンクリート基礎は上部の盛土が100mmになるように掘削して施工した。復元埴輪等レプリカは、コンクリート基礎に設置して、ボルト・L字金具等で固定し、基部・脚部は約10cm埋め戻した。

(4) 東造出「埴輪の祭壇」オープニングセレモニー

平成27年3月7日に埴輪製作者による「埴輪設置式」を開催した。

平成27年3月8日にはオープニングセレモニーを開催し、東造出の復元整備が完成した。

第5章 総括（平成21～26年度整備事業の成果と今後の課題）

今回の整備の成果

和歌山県教育委員会は、我が国有数の古墳群である特別史跡岩橋千塚古墳群の保存と活用をはかるべく昭和43年から岩橋千塚古墳群の整備を開始し、昭和46年に和歌山県立紀伊風土記の丘を設置した。当初からの整備方針は、園路を散策しながら古墳の現状を見学してもらうもので、園路の設置や説明板等の設置、古墳の公開施設の設置などを実施してきた。しかし、開園以来44年が経過している（2015年現在）なかで、古墳そのものに対する保存措置は立ち遅れており、本格的な発掘調査も昭和38～42年の関西大学による調査以来実施されていなかった。

そこで、和歌山県教育委員会は、特別史跡岩橋千塚古墳群の保存措置を図るとともに、学術的価値をより分かりやすい形で来訪者に理解してもらうことを目的に、平成15年度より保存整備事業に着手した。

事業では、古墳群を理解するうえでポイントとなる古墳の学術的価値を解明する発掘調査と発掘調査の成果を現地で学習できる整備を実施した。このほか、古墳群の保存措置としては、保存上危険な状態にある石室や盗掘坑の埋戻しを行うとともに、土が流出し墳丘の形状が分かりにくい古墳の修景及び盛土を行った。

また、古墳説明板や地区説明板、案内標識などを新たに設置し、古墳群の情報を分かりやすく来訪者に伝えた。

平成21～26年度では、前山A46号墳、将軍塚古墳（前山B53号墳）、前山A13号墳で石室公開のための整備を行った。前山A46号墳、将軍塚古墳（前山B53号墳）、前山A13号墳は開館以来、自由に見学できる代表的な公開古墳であったが、石室内部は日中でも暗かったため石室内にソーラーパネルを利用した照明施設を設置した。

大日山35号墳では、平成15～18年度に実施した発掘調査の結果、墳丘の規模及び構造が判明した。この成果をもとに、墳丘上の樹木の伐採を行うとともに、墳丘から崩れた土の切土及び削平箇所の盛土を施し、築造当時の墳丘の姿を復元した。また、墳丘上に模擬階段を設置し、周辺に説明板を設置するなどの整備もあわせて実施した。

さらに、発掘調査では墳丘上に円筒埴輪・朝顔形埴輪がめぐり、東西造出ではそれらの埴輪列に囲まれた範囲から多量の形象埴輪が樹立していたことが明らかとなった。そこで、埴輪の樹立風景を視覚的に表現することで、来訪者に築造当時の古墳の状況をより深く理解してもらうことを目的として、復元埴輪や須恵器を設置した。

復元埴輪及び須恵器は大型品や製作が困難なものは専門業者に委託することにより製作したが、円筒埴輪や朝顔形埴輪、水鳥形埴輪、牛形埴輪、猪形埴輪については市民参加によって製作した。さらに、製作した埴輪を現地に設置するイベントを開催するなど、市民参加型の整備を進めた。

大日山35号墳の発掘調査ならびに復元整備は、当古墳が県内最大級の前方後円墳であることを学術的に明らかにしたとともに、巨大な墳丘の顕在化と復元埴輪の樹立や説明板の設置によって視覚的も来訪者に理解しやすいものとなった。さらに、樹木伐採による新たな展望地点の創出

など、これまで来訪者の少なかった大日山方面の新たな導線を生み出す事ができた。

今後の課題

岩橋千塚古墳群内の古墳は近代以降の盗掘等で天井石が失われ、石室が露出したものが多く、風雨による経年劣化は緊急の課題であり、石室の保存修景工事や樹木伐採は今後も最優先事項として対応していく必要がある。

また、近年は集中豪雨による土砂の流出や猪による墳丘への被害など、保存上危険をきたす新たな問題も浮上している。豪雨被害については、園内の排水計画を見直す必要から平成22年度より用水路調査を実施しているが、排水路工事に着手している箇所は現段階では一部であり、早急に対応する必要がある。猪による墳丘の擾乱被害は園内各所で発生しているが、現時点では抜本的な解決には至っていない。この問題には周辺の環境も含めた取り組みが必要となり、関係機関の協力を得ながら早急に進めていく必要がある。

これに加えて、来訪者に古墳の価値や魅力を理解してもらうためにも、サイン計画や見学ポイントの充実などの取組みをより一層進めていく必要がある。

今後は、これらの課題を長期ビジョンの中に位置づけて具現化していきたい。

写真図版

写真図版 1

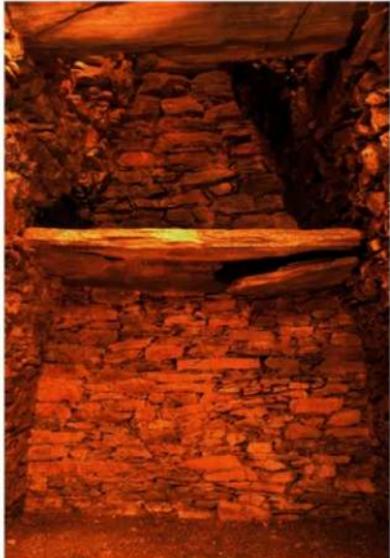


1. 大日山35号墳 石室入口付近（北西から）



2. 大日山35号墳 玄室調査前（玄門側から）

写真図版 2



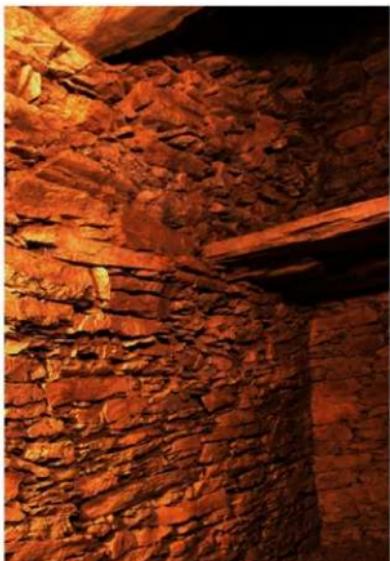
1. 玄室 石棚と奥壁（玄門側から）



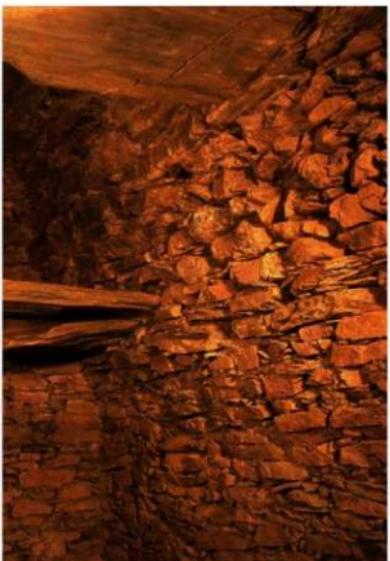
2. 玄室 奥壁上部（玄門側から）



3. 玄室 天井石（奥壁側から）

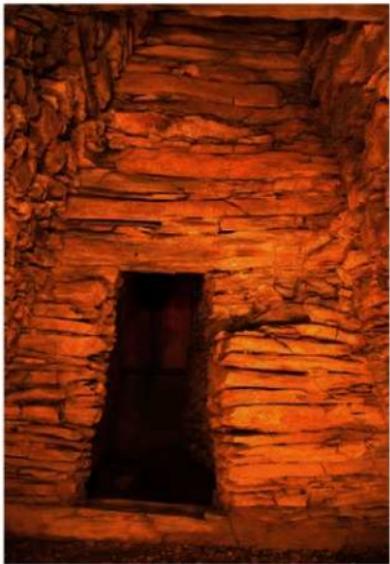


4. 玄室 北側壁（玄門側から）



5. 玄室 南側壁（玄門側から）

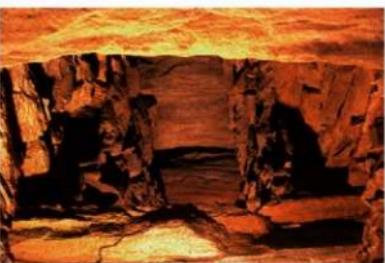
写真図版 3



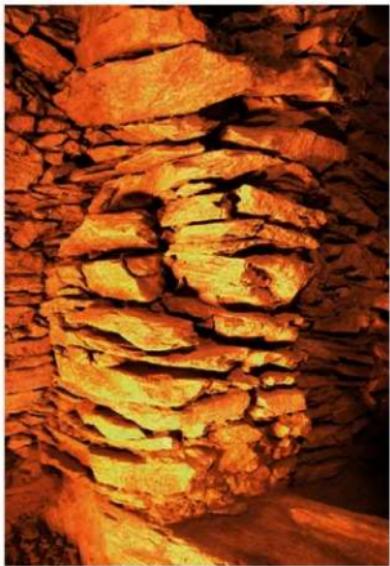
1. 玄室 玄門部（奥壁側から）



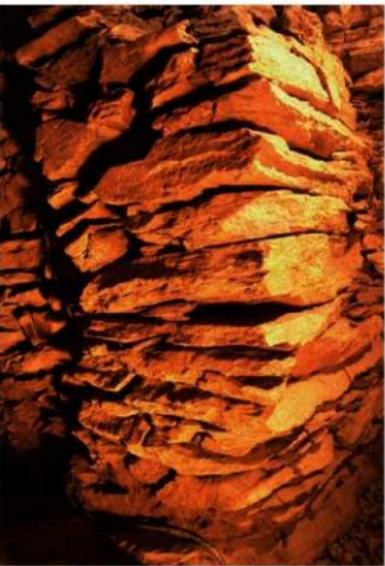
2. 玄室 前壁（奥壁側から）



3. 玄室 天井石（前壁側から）



4. 玄室 袖部南側（北側壁側から）



5. 玄室 袖部北側（南側壁側から）

写真図版4

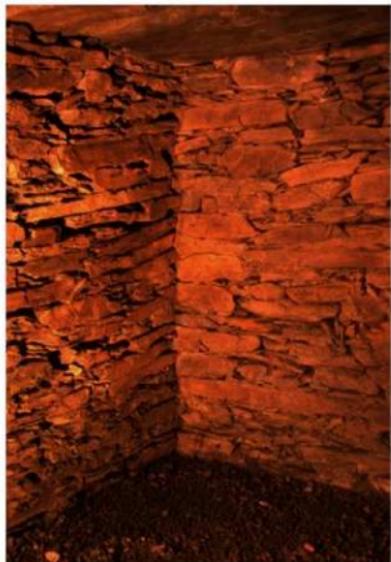


1. 玄室 石棚上部（玄門側から）

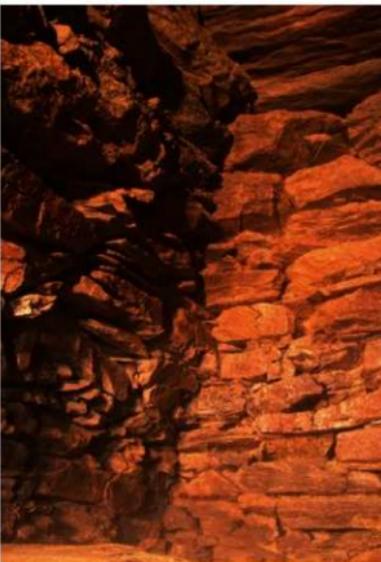


2. 玄室 石梁（奥壁側から）

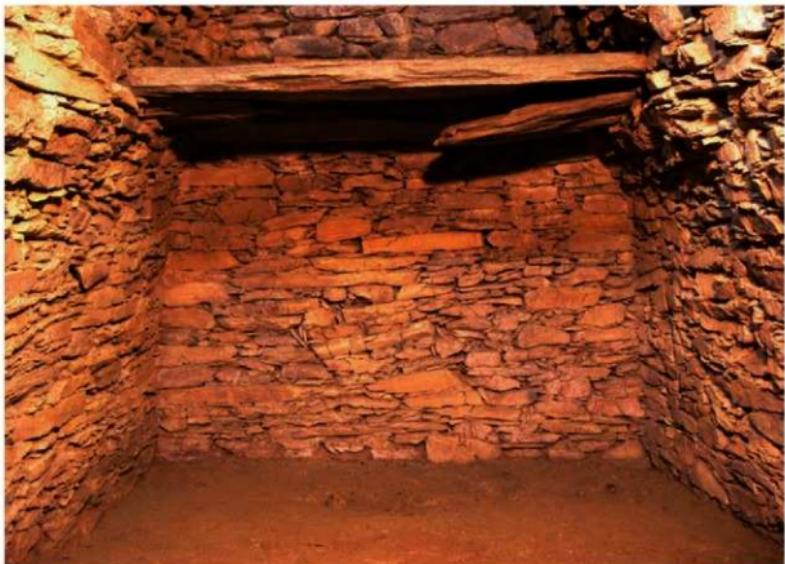
3. 玄室 南西隅下半（奥壁側から）



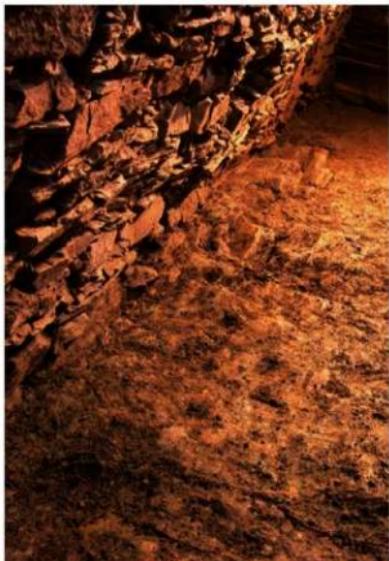
4. 玄室 北東隅下半（玄門側から）



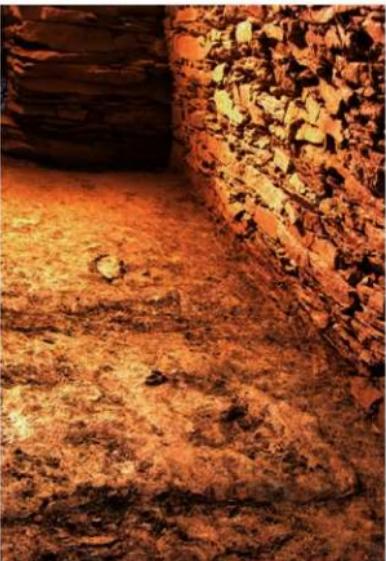
5. 玄室 北東隅上半（玄門側から）



1. 玉石除去後 奥壁側床面（玄門側から）



2. 玉石除去後 南側壁床面（奥壁側から）



3. 玉石除去後 北側壁床面（奥壁側から）

写真図版6



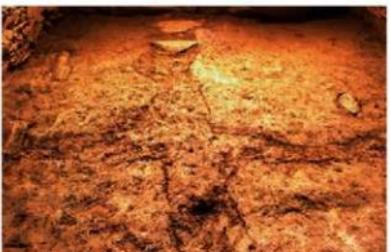
1. 玄室 西セクション土層（東から）



2. 玄室 東セクション土層（西から）



3. 玄室 東セクション西側排水溝検出状況（西から）



4. 玄室 排水溝検出状況（奥壁から）



5. 玄室 排水溝・蓋石検出状況（玄門側から）



6. 玄室 排水溝検出状況（玄門側から）



7. 玄室 排水溝検出状況（北西隅から）



8. 玄室 排水溝先端検出状況（東から）

写真図版 7



1. 玄室 排水溝セクション①(西から)



2. 玄室 排水溝セクション②(北から)



3. 玄室 排水溝セクション③(南から)



4. 玄室 排水溝セクション④(東から)



5. 玄室 排水溝蓋石除去状況(東から)



6. 玄室 玄門基石下排水溝状況(東から)



7. 玄室 西セクション南半(東から)



8. 玄室 西セクション北半(東から)

写真図版 8



1. 玄室 排水溝完掘状況（奥壁側から）



2. 玄室 排水溝完掘状況（玄門側から）



1. 羨道部 挖削前（奥壁側から）



2. 羨道部 第2・3層遺物出土状況（東から）



3. 羨道部 第2・3層遺物出土状況（西から）



4. 羨道部 第2・3層遺物出土状況（東から）



5. 羨道部 東西セクション1～3層（北東から）



6. 羨道部 東西セクション1～3層③地区（北から）



7. 羨道部 東西セクション1～3層④地区（北から）



8. 羨道部 東西セクション1・2層⑤地区（北から）

写真図版 10



1. 羨道部 東西セクション遠景（東から）

2. 羨道部 東西セクション4層以下
②・③地区（北東から）3. 羨道部 東西セクション4層以下
④・⑤地区（北東から）4. 羨道部 東西セクション4層以下
③～⑤地区（北東から）

5. 羨道部 排水溝蓋石検出状況（西から）



6. 羨道部 排水溝蓋石除去状況（西から）



7. 羨道部 南北セクション排水溝完掘（西から）



8. 羨道部 南北セクション排水溝完掘近景（西から）

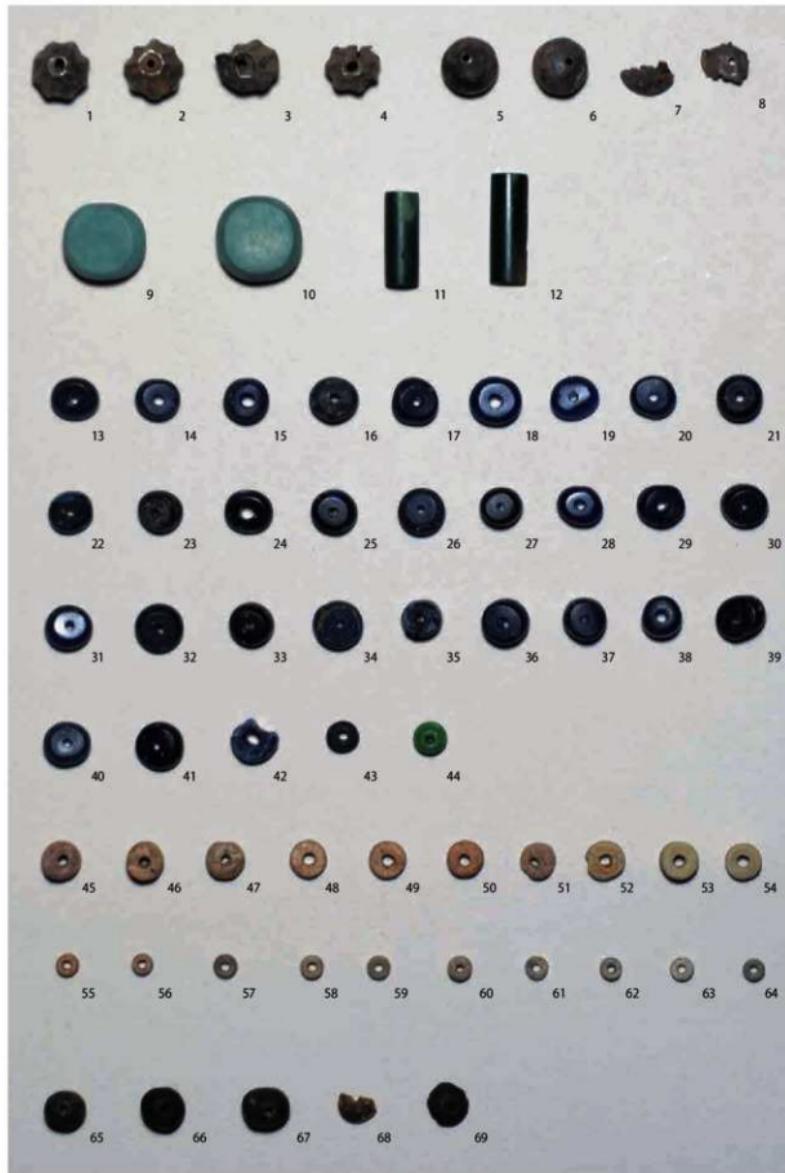


1. 玄門～狭道部南側壁（玄室から）



2. 玄門～狭道部北側壁（玄室から）

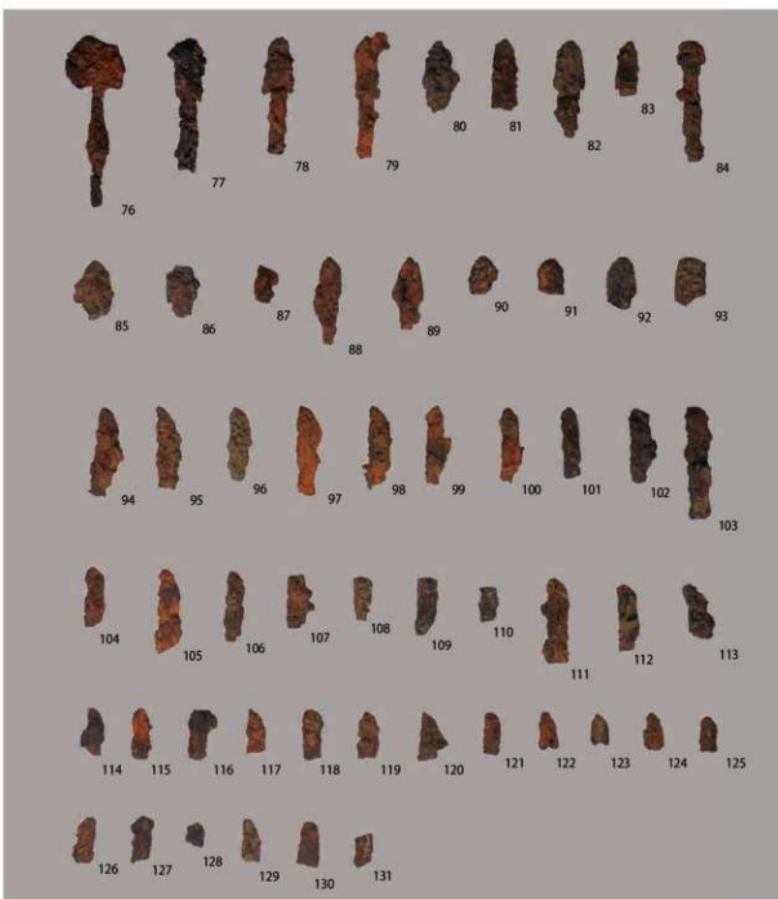
写真図版 12



大日山35号墳 石室出土装身具



1. 大日山 35号墳 石室出土鉄刀

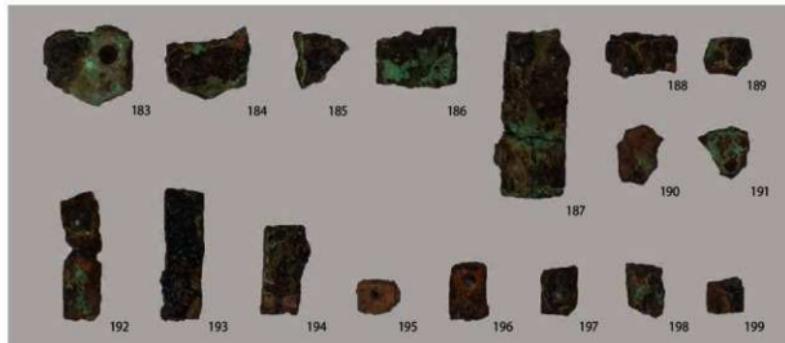


2. 大日山 35号墳 石室出土鉄鎚 1

写真図版 14



1. 大日山35号墳 石室出土鐵錐2



2. 大日山35号墳 石室出土胡錐



大日山35号墳 石室出土馬具

写真図版 16

大日山 35 号墳



大日山 35 号墳 石室出土馬具 2

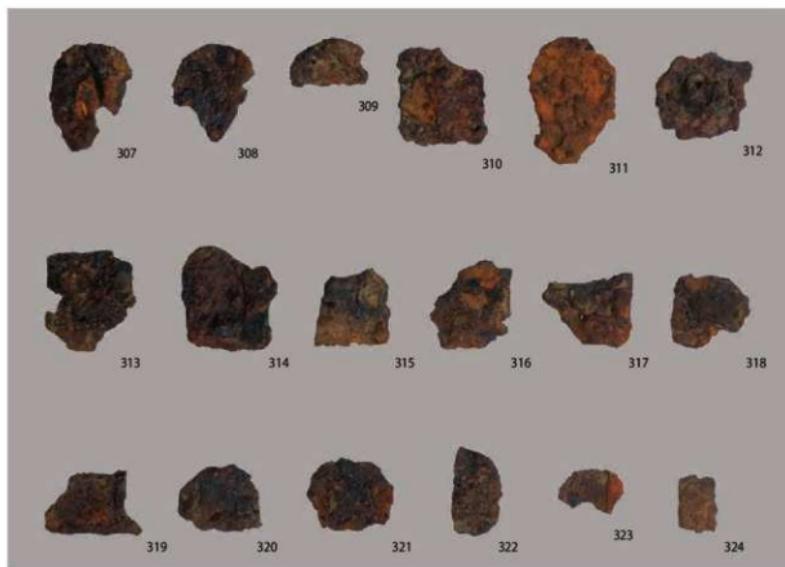


大日山35号墳 石室出土馬具 3

写真図版 18



1. 大日山35号墳 石室出土小札1



2. 大日山35号墳 石室出土小札2



1. 大日山 35 号墳 石室出土小札 3



2. 大日山 35 号墳 石室出土 鉄製品 その他

写真図版 20

大日山35号墳



347



347



348



349



350



351



352



353

1. 大日山35号墳 石室出土須恵器 1



354



356



355



357



358



359



360



361



362



362



362



363

1. 大日山35号墳 石室出土須恵器2



1. 大日山35号墳 石室出土須恵器3



1. 前山 A13 号墳 調査前 墳丘（南から）



2. 前山 A13 号墳 調査前 石室前面（西から）



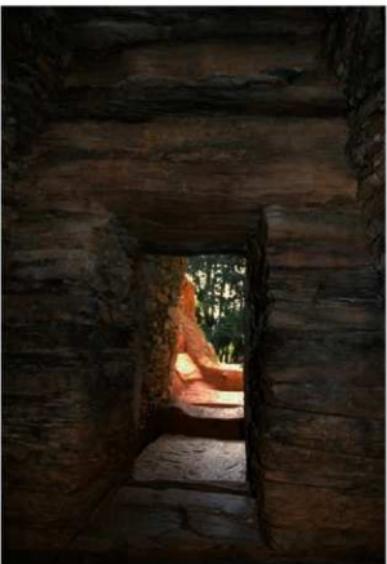
1. 前山 A13 号墳 調査前 羨道部（西から）



2. 前山 A13 号墳 調査前 玄室（西から）



1. 玄室奥壁（玄門側から）



2. 玄門部・前壁（奥壁側から）

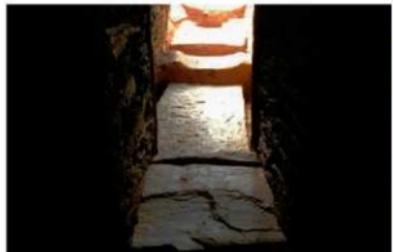


3. 玄室右側壁（玄門側から）



4. 玄室左側壁（玄門側から）

写真図版 26



1. 玄室前道及び羨道部（玄室側から）



3. 玄門立石下部（北側）



2. 玄室前道（羨道部側から）



4. 玄門立石下部（南側）



5. 羨道部 屏石と仕切石（前庭部側から）



6. 転倒した屏石棟出状況



1. 前山 A13 号墳 玄室内排水溝 掘出状況（玄門側から）



2. 前山 A13 号墳 玄室内排水溝 掘削写真（玄門側から）



1. 玄室内排水溝（奥壁側）



3. 玄室内排水溝（玄門側）



2. 玄室内排水溝（奥壁側）細部



4. 玄室内排水溝（玄門側）細部



5. 玄門部仕切石の下を通る排水溝（西から）



6. 玄門部仕切石の下を通る排水溝細部



7. 前底部排水溝上面検出途中（石室側から）



1. 前庭部排水溝 梱出状況（東から）



2. 前庭部排水溝 蓋石検出状況（西から）



3. 前庭部排水溝 蓋石検出状況（東から）



4. 前庭部排水溝 玉石充填状況（東から）



1. 前庭部調査区 北壁土層断面（南から）



2. 前庭部調査区 西端部土層断面（東から）



3. 前庭部調査区 中央部土層断面（西から）



4. 前庭部調査区 東側断面（東から）



1. 填丘外調査区 排水溝上面検出状況（東から）



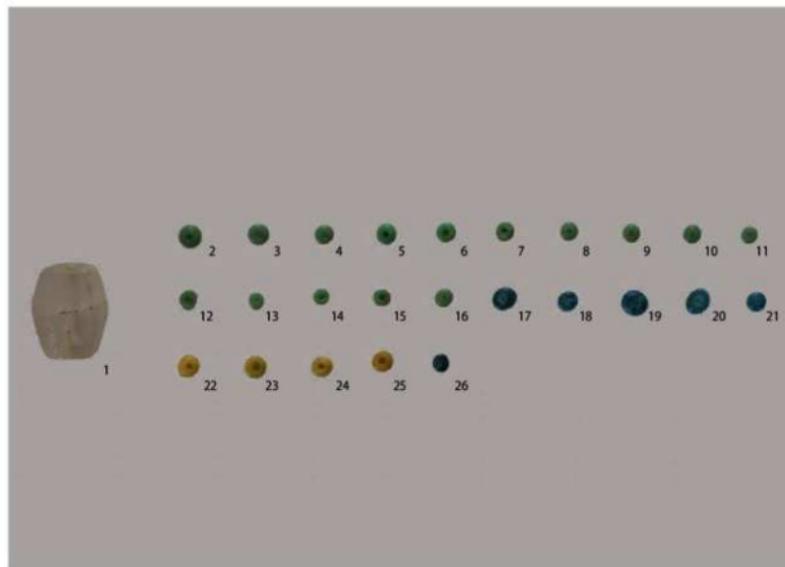
3. 填丘外調査区 排水溝上面検出状況（西から）

2. 填丘外調査区 排水溝上面検出状況（南から）



4. 填丘外調査区 排水溝上面検出状況（上から）

写真図版 32



1. 前山A13号墳 装身具（玉類）



2. 前山A13号墳 須恵器



1. 前山 A58 号墳 墳丘 調査前（東から）



2. 前山 A58 号墳 石室 調査前（西から）



1. 玄室 奥壁及び床面（西から）



2. 玄室 玄門及び床面（東から）



1. 玄室 南側壁及び床面（北から）



2. 玄室 北側壁及び床面（南から）

写真図版 36



1. 奥壁上部堆積の土層断面（西から）



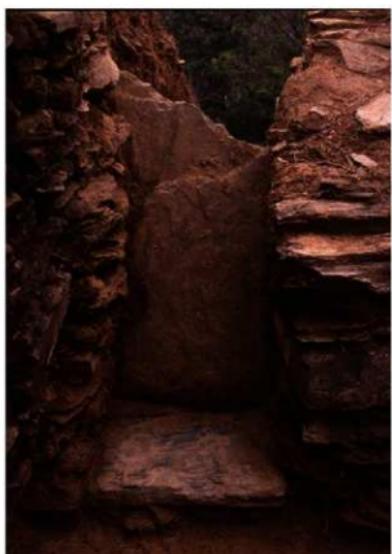
2. 南側壁上部堆積の土層断面（北から）



3. 北側壁上部堆積の土層断面（南から）



4. 玄門及び上部堆積の土層（東から）



5. 玄室前道及び屏石（東から）



7. 玄室前道樋石 近影（北東から）



1. 6 トレンチ 羨道上敷石検出状況（西から）



2. 6 トレンチ 羨道上埴輪検出状況（西から）

3. 6 トレンチ 全景（西から）



4. 6 トレンチ 玄門及び閉塞石（西から）



5. 6 トレンチ 南壁土層断面（北西から）



6. 6 トレンチ 羨道上堆積土層断面（北から）



1. 1トレンチ 後円部1段目斜面・テラス 全景（北西から）



2. 1トレンチ 後円部1段目テラス及び樹立埴輪
(北東から)



3. 1トレンチ 樹立埴輪（北から）



4. 1トレンチ 上半東壁土層断面（北西から）



5. 1トレンチ 2段目斜面複部（北から）



1. 2トレンチ 後円部 1段目裾～2段目斜面
(東から)



2. 2トレンチ 後円部 1段目テラス (北東から)



3. 2トレンチ 1段目テラス 埴輪列 (北から)



4. 2トレンチ 樹立埴輪 (東から)



5. 2トレンチ 樹立埴輪 (南から)



6. 2トレンチ 南壁土層断面 (北から)



7. 2トレンチ 1段目裾部の地山面 (東から)

写真図版 40



1. 3トレンチ 前方部裾～斜面（東から）



2. 3トレンチ 北壁土層断面（南西から）



3. 3トレンチ 南壁土層断面（北東から）



4. 4トレンチ 前方部から後内部をのぞむ（南から）



5. 4トレンチ 前方部端と隣接古墳の立ちあがり（北から）



6. 4トレンチ 前方部前端側西壁土層断面（北東から）



1. 3・4・7 トレンチ 前方部頂～後円部斜面（南東から）



2. 4・7 トレンチ 前方部頂（北東から）



3. 4・7 トレンチ 樹立埴輪検出状況（北から）



4. 4 トレンチ 中央西壁土層断面（東から）

写真図版 42



1. 4トレンチ 東埴輪列1 検出状況（東から）



2. 4トレンチ 東埴輪列1 断割り（北西から）



3. 東埴輪列1 取り上げ後内部土層1



4. 東埴輪列1 取り上げ後内部土層2



5. 4トレンチ 東埴輪列2 検出状況（東から）



6. 8トレンチ 東埴輪列2 半截状況（西から）



7. 4トレンチ 東埴輪列3 検出状況（東から）



8. 4トレンチ 東埴輪列3 基部検出状況（西から）



1. 4 トレンチ 東埴輪列 4 検出状況（西から）



2. 4 トレンチ 東埴輪列 4 基部検出状況（西から）



3. 4 トレンチ 東埴輪列 5 検出状況（西から）



4. 4 トレンチ 東埴輪列 5 基部検出状況（西から）



5. 7 トレンチ 中央埴輪列 1 検出状況（西から）



6. 7 トレンチ 中央埴輪列 1 半裁状況（西から）



7. 7 トレンチ 中央埴輪列 1 及び人物埴輪輪
検出状況（南から）



8. 7 トレンチ 人物埴輪 輪 検出状況（西から）

写真図版 44



1. 7トレンチ 中央埴輪列2 検出状況（西から）



2. 7トレンチ 中央埴輪列2 半截状況（西から）



3. 7トレンチ 西埴輪列1 検出状況（北から）



4. 7トレンチ 西埴輪列1 基部検出状況（北から）



5. 4・7トレンチ 馬形埴輪 検出状況（北から）



6. 馬形埴輪 検出状況（東から）



7. 馬形埴輪 取り上げ前（東から）



1. 8 トレンチ 全景 前方部西側の樹立埴輪（東から）



2. 8 トレンチ 南壁土層断面（北西から）

前山 A
58 号墳

写真図版 46



1. 8トレンチ 中央埴輪列3 検出状況（東から）



2. 8トレンチ 中央埴輪列3 半裁状況（東から）



3. 8トレンチ 西埴輪列3 検出状況



4. 8トレンチ 西埴輪列3 基部確認



5. 8トレンチ 西埴輪列4 検出状況（東から）



6. 8トレンチ 西埴輪列4 断続ナデ突堤（南から）



7. 8トレンチ 西埴輪列5 検出状況（東から）



8. 8トレンチ 西埴輪列5 据方検出状況（東から）



1. 10 トレンチ全景 前方部南東端（東から）



2. 10 トレンチ 南壁土層断面（北から）



3. 10 トレンチ 塗輪出土状況（北から）



4. 10 トレンチ 東壁土層断面（西から）

写真図版 48



1. 5トレンチ 全景 前方部西側斜面（西方）



2. 5トレンチ 西埴輪列2 検出状況（北から）



3. 5トレンチ 西埴輪列2 基部検出状況（西から）



4. 11トレンチ 後円部1段目テラス検出状況
(西から)



5. 11・5トレンチ 塗丘西側クビレ部（西から）



6. 11トレンチ 北壁土層断面（南から）



1. 3 トレンチ 全景 後円部 1段目テラス及び樹立埴輪検出状況（南から）



2. 3 トレンチ 石見型埴輪出土状況 1（西から）



3. 3 トレンチ 石見型埴輪出土状況 2（北から）



4. 3 トレンチ 石見型埴輪出土状況 3（北から）

写真図版 50



1. 3トレンチ 樹立埴輪 後内部⑥検出状況（東から）



2. 3トレンチ 樹立埴輪 後内部⑥取り上げ写真
(南東から)



3. 3トレンチ 樹立埴輪 後内部⑥検出状況（南から）



4. 3トレンチ 樹立埴輪 後内部⑥と後内部⑦取り上げ写真
(南から)



5. 3トレンチ 樹立埴輪 後内部⑧（南から）



6. 3トレンチ 樹立埴輪 後内部⑧（南から）



6. 3トレンチ 樹立埴輪 後内部⑧（南から）



7. 3トレンチ 樹立埴輪 後内部⑧（西から）



1. 9トレンチ 墳丘東側クビレ部 須恵器壺検出状況 1（南東から）



2. 9トレンチ 須恵器壺検出状況 2（南から）



3. 9トレンチ 須恵器壺検出状況 3（南から）



4. 9トレンチ 須恵器壺検出状況 4（南から）



5. 9トレンチ 須恵器壺付坑半截（南から）

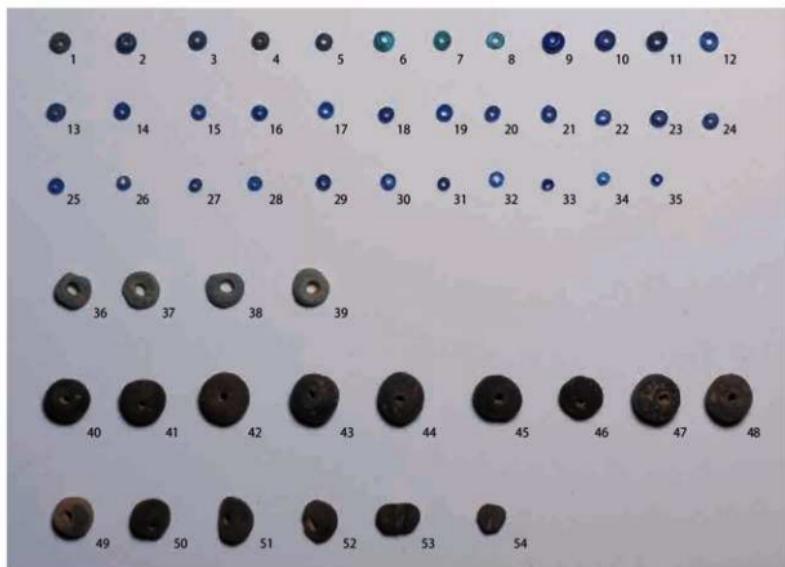
写真図版 52



1. 前山 A58 号墳全景（南東から）



2. 前山 A58 号墳全景 前方部頂の埴輪列（西から）



1. 前山 A58 号墳 出土装身具

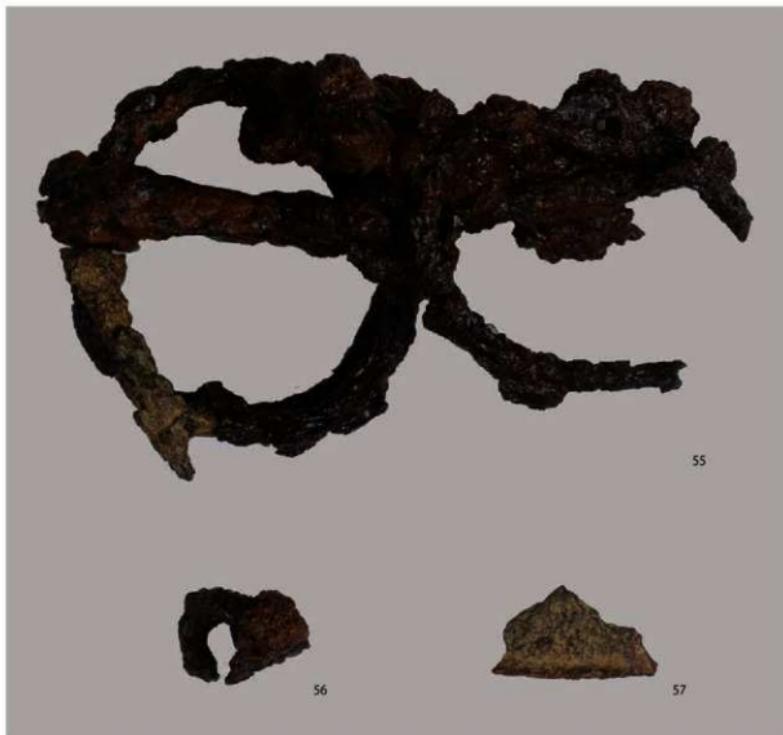
前山 A
58 号墳



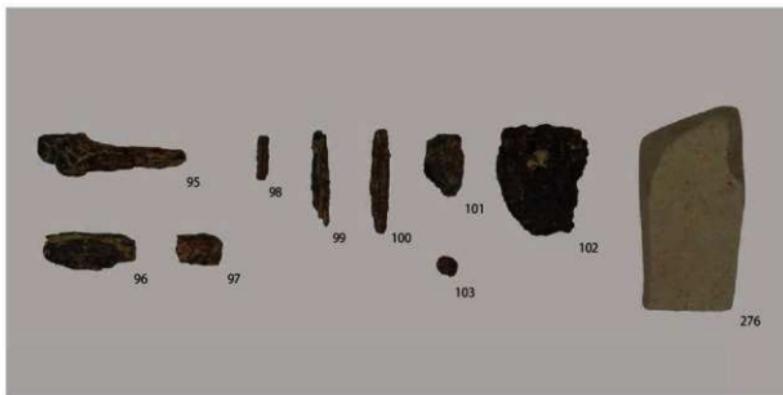
55

2. 前山 A58 号墳 出土馬具 桁

写真図版 54

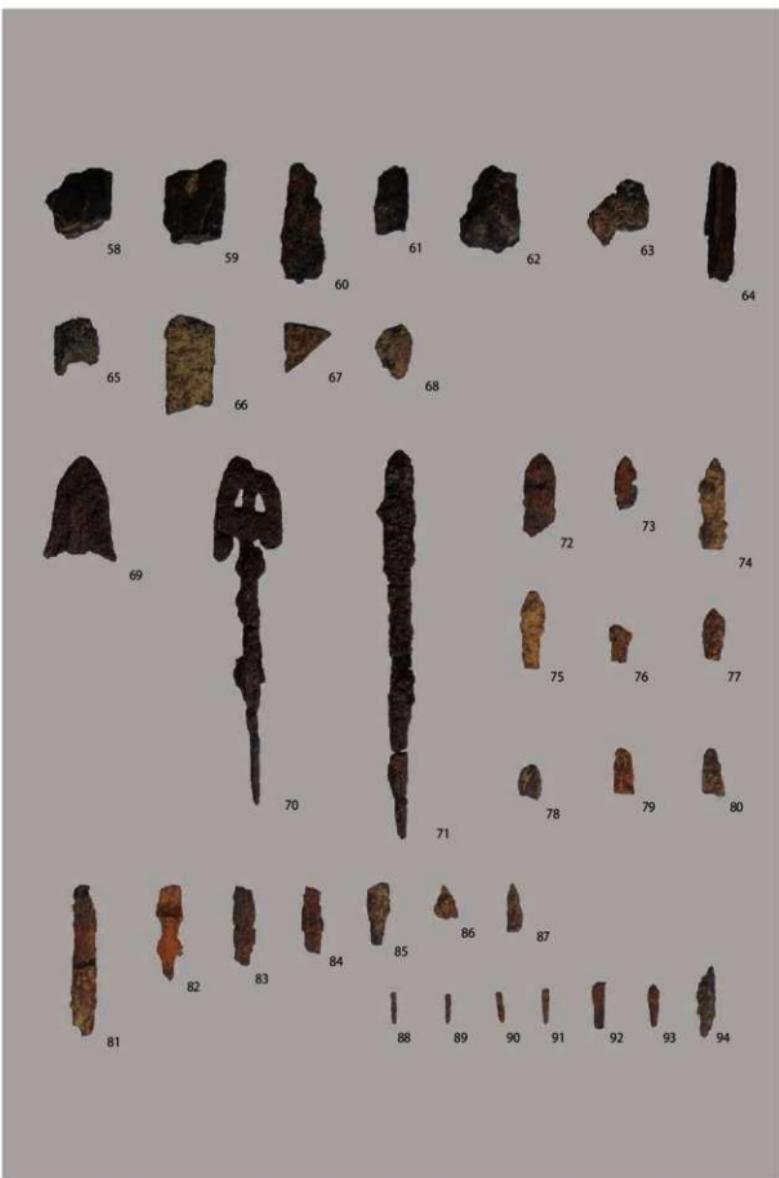


1. 前山 A58 号墳 出土馬具 帶



2. 前山 A58 号墳 出土不明鉄製品

前山 A
58 号填



前山 A58 号填 出土铁器



1. 前山 A58 号墳 出土馬形埴輪 左側面



2. 前山 A58 号墳 出土馬形埴輪 右側面



1. 前山 A58 号墳 出土馬形埴輪 正面



2. 前山 A58 号墳 出土馬形埴輪 背面

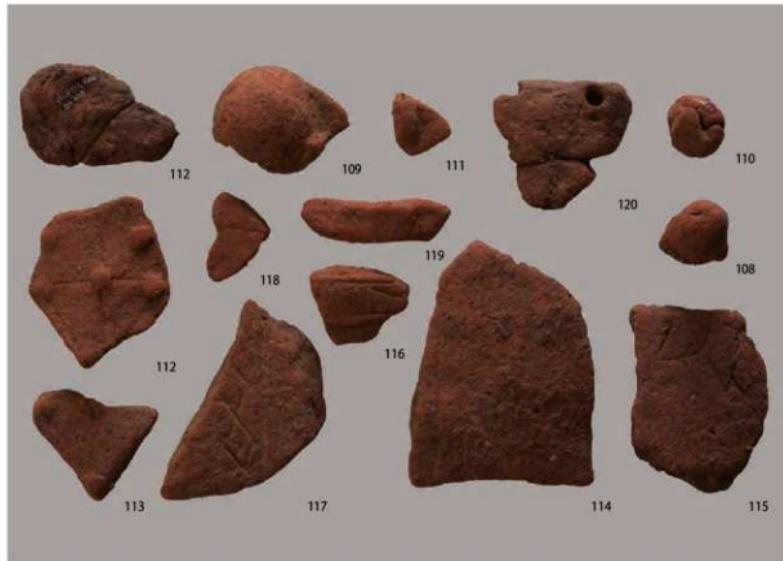


3. 前山 A58 号墳 出土馬形埴輪 T 字形鏡板

写真図版 58



1. 前山A58号墳 馬形埴輪 部品 杏葉



2. 前山A58号墳 馬形埴輪 部品 各種

前山 A
58 号填



121 正面



121 背面



121 侧面 1



121 侧面 2



122



121



122



122



123



124

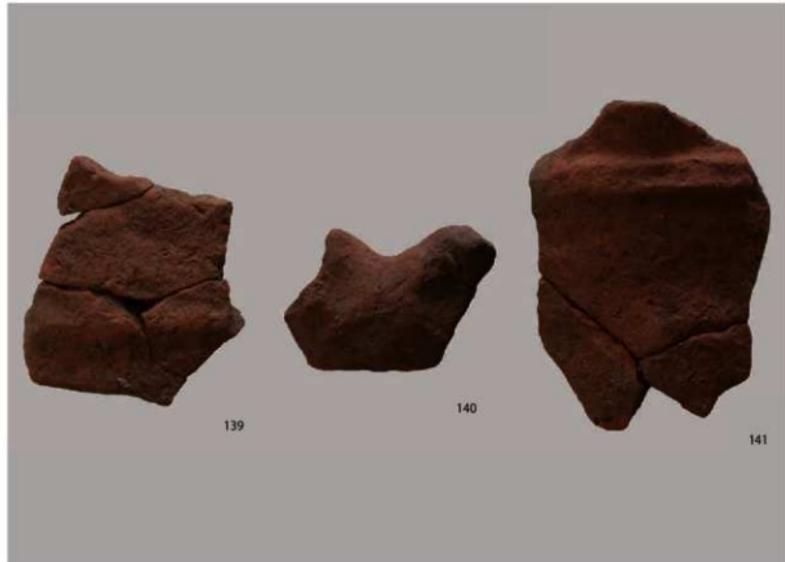


125

126



1. 前山 A58 号墳 人物埴輪 部品



2. 前山 A58 号墳 人物埴輪 部品

写真図版 62



1. 前山 A58 号墳出土 人物埴輪部品



2. 前山 A58 号墳出土 人物埴輪底部



152

前山 A58 号墳 出土石見型埴輪 1



152

前山 A
58 号墳

写真図版 64



154



154

1. 前山 A58 号墳 石見形埴輪 2

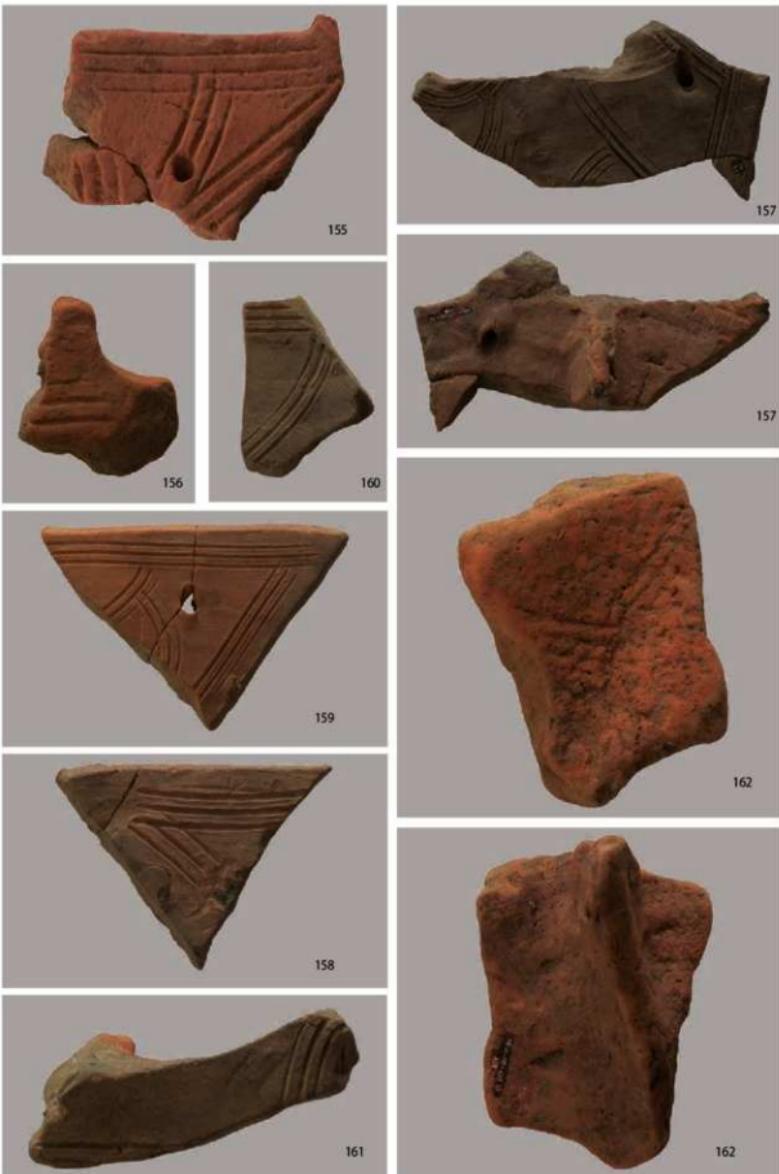


153



153

2. 前山 A58 号墳 石見形埴輪 3



前山 A58 号墳

前山 A58 号墳 石見型埴輪 腹部 1



前山 A 58 号墳 石見型埴輪 盾部 2



前山 A
58 号墳

前山 A58 号墳 石見型埴輪 盾部 3

写真図版 68

前山 A 58 号墳



182



186



182



187



184



182

183



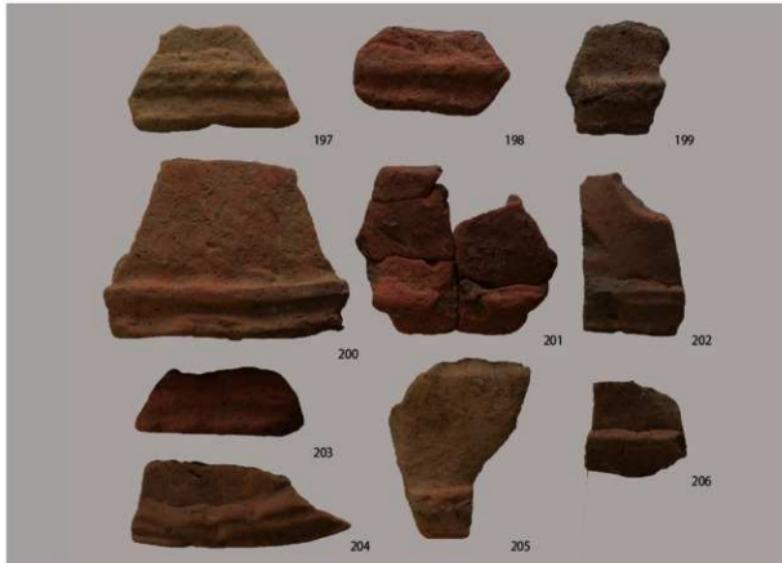
185

前山 A 58 号墳出土 石見型埴輪（無文）及び石見型埴輪底部

前山 A
58 号填



1. 前山 A 58 号填 形象埴輪 不明品



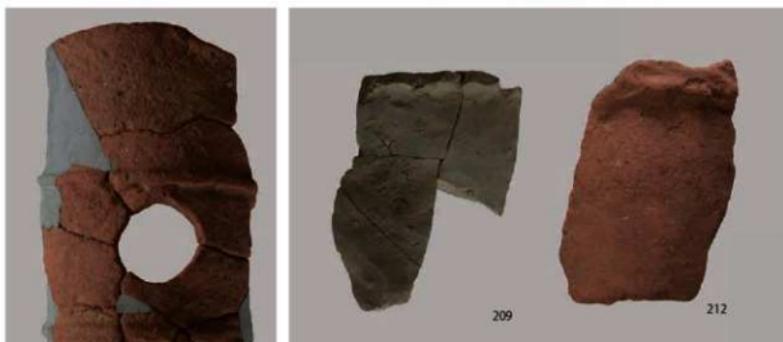
2. 前山 A 58 号填 形象埴輪 底部

写真図版 70



207

207



209

212



210

211

213

前山 A58 号墳 断続ナデ技法の最下段突帯をもつ円筒埴輪



214



217



222



215

218

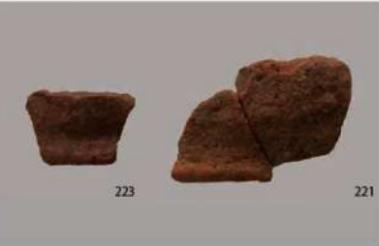


220

223



219



221

224

写真図版 72





236



237



238



239



240



241



242



243



244

245

前山 A58 号墳 円筒埴輪 口縁部



前山 A 58 号墳出土 朝顔形埴輪



269



264



260



265



261



267



262



266



263

写真図版 76



前山 A58 号墳

前山 A58 号墳 土器 2



前山 A58 号填

275

前山 A58 号填 土器 3



1. 前山B72号墳（南から）



1. 前山B120号墳（西から）



1. 前山B125号墳（東から）



2. 前山B136号墳（南東から）



1. 前山B241号墳（南から）



2. 前山B241号墳（西から）



1. 前山B240号墳（南東から）



2. 前山B240号墳（北東から）



1. 前山B175号墳（北から）



2. 前山B175号墳（東から）



1. 前山B174号墳（南東から）



2. 前山B174号墳（北東から）

写真図版 84



1. 前山B176号墳（南から）



2. 前山B176号墳（北から）



1. 前山B172号墳（南東から）



2. 前山B172号墳（北西から）

写真図版 86



1. 前山B170号墳（東から）



2. 前山B170号墳（北東から）



1. 前山B X16号墳（東から）



2. 前山B X16号墳左袖部（西から）



1. 前山B X 16号墳右袖部（西から）



2. 前山B 167号墳（東から）



1. 前山B167号墳（東から）



2. 前山B167号墳（西から）



1. 前山B204号墳（南東から）



2. 前山B204号墳（北西から）



1. 前山B164号墳（東から）



2. 前山B164号墳（北から）



1. 前山B X100号墳（南から）



2. 前山B X101号墳（東から）



1. 前山B160号墳（西から）



2. 前山B160号墳（南から）



1. 前山B201号墳（北から）



2. 前山BX9号墳（北西から）



1. 前山B200号墳（南西から）



2. 前山BX10号墳（南西から）



1. 大日山 12 号墳（東から）



2. 大日山 14 号墳（東から）



1. 大日山 15 号墳（西から）



2. 大日山 17 号墳（東から）



1. 前山B72号墳 修景完了写真



2. 前山B125号墳 修景完了写真



1. 前山B136号墳 修景完了写真



2. 前山B148号墳 修景完了写真



1. 前山B241号墳 修景完了写真



2. 前山B240号墳 修景完了写真



1. 前山B175号墳 修景完了写真



2. 前山B174号墳 修景完了写真

写真図版 102



1. 前山B176号墳 修景完了写真



2. 前山B172号墳 修景完了写真



1. 前山B170号墳 修景完了写真



2. 前山B X16号墳 修景完了写真



1. 前山B167号墳 修景完了写真



2. 前山B164号墳 修景完了写真



1. 前山B X100号墳 修景完了写真



2. 前山B X101号墳 修景完了写真



1. 前山B160号墳 修景完了写真



2. 前山BX9号墳 修景完了写真



1. 前山B200号墳 修景完了写真



2. 前山BX10号墳 修景完了写真



1. 大日山 12号墳 修景完了写真



2. 大日山 15号墳 修景完了写真



1. 前山 A17 号填 修景完了写真



2. 前山 B102 号填 修景完了写真

写真図版 110



1. 将軍塚古墳 墳頂部へのソーラーパネル設置状況（南東から）



2. 将軍塚古墳 照明施設スイッチ設置状況（葬道部入口から）



1. 将軍塚古墳 石室内 照明施設設置状況（奥壁側から）



2. 将軍塚古墳 石室内 照明施設設置状況（玄門側から）

写真図版 112



1. 前山 A13号墳 ソーラーパネル基礎設置工事風景（南から）



2. 前山 A13号墳 ソーラーパネル設置状況（西から）



1. 前山 A13 号墳 盗掘坑埋め戻し状況（南から）



2. 前山 A13 号墳 遮水シート設置状況（東から）

写真図版 114



1. 前山 A13 号墳 張芝敷設状況（南から）



2. 前山 A13 号墳 照明施設・人感センサー設置状況（玄門側から）



1. 前山 A46 号填 填丘外 ソーラーパネル設置場所（南から）



2. 前山 A46 号填 填丘外 ソーラーパネル設置状況（北から）



1. 前山 A46 号墳 照明施設スイッチ設置状況（南から）



2. 前山 A46 号墳 照明施設設置状況（玄門側から）



1. 古墳説明版設置状況（前山 A67 号墳北側）



2. 室内標識設置状況 1



3. 室内標識設置状況 2



1. 大日山 35 号墳 墳丘整備状況（南東から）



2. 大日山 35 号墳 墳丘整備状況（前方部上から西造出をのぞむ）



1. 大日山 35 号墳 東造出 復元埴輪等設置状況 1 (南東から)



2. 大日山 35 号墳 東造出 復元埴輪等設置状況 2 (北西から)

写真図版 120



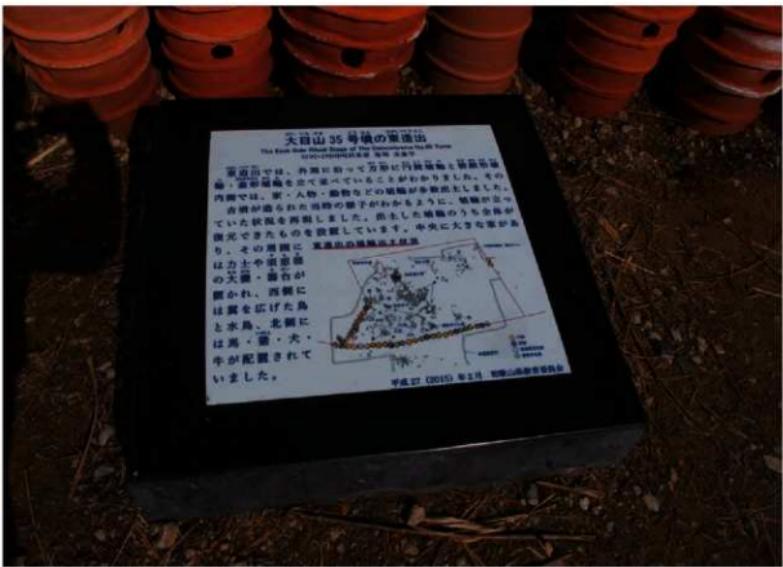
1. 大日山 35 号墳 東造出 復元埴輪等設置状況 3 (南西から)



2. 大日山 35 号墳 東造出 復元埴輪等設置状況 4 (北西から)



1. 大日山 35 号墳 東造出 復元埴輪設置状況（東から）



2. 大日山 35 号墳 東造出 説明版設置状況（西から）

写真図版 122



1. 大日山 35 号墳 墳輪レプリカ製作イベントのようす



2. 大日山 35 号墳 東造出 墳輪レプリカ製作による設置式のようす（西から）

抄 錄

特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 3
一大日山35号墳・前山A13号墳・前山A58号墳発掘調査報告書一

発行日 平成27年3月31日
発 行 和歌山県教育委員会
和歌山市小松原通1丁目1
編 集 和歌山県立紀伊風土記の丘
和歌山市岩橋1411
印 刷 有限会社阪口印刷所
和歌山市中之島1497